

**玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）  
九景川遺跡（V区）**

**2017年6月**

**島根県教育委員会**







**玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）  
九景川遺跡（V区）**

**2017年6月**

**島根県教育委員会**





遺跡上空から神西湖を望む（東から）



左側 調査後の玉泉寺裏遺跡、右側 調査前の九景川遺跡（北から）

図絵 2



九景川遺跡出土須恵器、石器、耳環



九景川遺跡出土弥生土器、土師器

# 序

現在、一般国道9号の出雲市知井宮町～湖陵町三部間は、現道では通過交通と、生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに、一般国道の代替路線がなく、交通事故等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上及び生活圏域の連携を促進することを目的として、出雲・湖陵道路を平成20年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は、平成26年度に実施した出雲市東神西町御崎谷地内外に所在する玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）及び九景川遺跡（V区）の発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、弥生時代後期、古墳時代後期の集落跡が発見された他、弥生時代から中世にかけて多くの遺物が出土し、当時の人々の生活を考える上で貴重な成果となりました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成29年6月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長 鈴木 祥弘

# 序

本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成 26 年度に実施した一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

本報告書で報告する玉泉寺裏遺跡（VI 区・VII 区）では、弥生時代後期の建物跡が発見され、弥生時代から奈良時代にかけての様々な遺物が出土しました。また、九景川遺跡（V 区）では古墳時代後期の集落跡が発見されたほか、弥生時代から中世にかけての遺物が出土しました。当時の出雲平野西部には『出雲国風土記』に記載される「神門水海」が広がっており、両遺跡の立地する南岸部では、縄文時代後期から中世にかけての重要な遺跡が多数発見されています。当時の集落の様子を知る上で重要な資料であるとともに、「神門水海」南岸部の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本報告書が、この地域の歴史を解明していくための基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、出雲市、東神西地区の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 6 月

島根県教育委員会

教育長 鴨木 朗

# 例 言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が平成26（2014）年度に実施した一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。

2. 本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。

平成26（2014）年度 玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）（出雲市東神西町字御崎谷1471外）  
九景川遺跡（V区）（出雲市東神西町字井ノ内233外）

平成28（2016）年度 整理等作業・報告書作成

## 3. 調査組織

調査主体 島根県教育委員会

平成26（2014）年度事務局 江廣耕史（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）

調査担当者 大庭俊次（調査第一課長）、勝部智明（調査第一係長）、人見麻生（同課主事）、川原和人（同課嘱託職員）、片寄雪美（同課臨時職員）

平成28（2016）年度事務局 萩 雅人（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）

調査担当者 守岡正司（調査第二課長）、勝部智明（調査第三係長）、人見麻生（同課主任主事）、糸賀伸文（同課臨時職員）、高木優子（同課臨時職員）

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、掘削、測量等）については、島根県教育委員会が株式会社トーワエンジニアリングへ委託した。

5. 現地調査及び整理作業において、以下の方々から御指導いただいた。（肩書きは当時）

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）、花谷 浩（出雲市文化環境部文化財課学芸調整官）

6. 採図の中の北は、測量法による第Ⅲ平面直角座標系X軸方向を指し、座標系のXY座標は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。

7. 本書で使用した第1図・第4図は、国土地理院発行の1/25,000電子地形図を使用して作成した。

8. 本調査に伴って実施した自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。その成果は第5章に掲載した。

9. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は人見が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浮遊写真は、各調査員・臨時職員・整理作業員のほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て行った。

10. 本書の執筆は第1章～第4章、第6章は人見が行い、第5章は渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）が行った。

11. 本書の編集は人見が行った。

12. 註は各章ごとに連番を振り当該項下に配置し、参考文献は各章末にまとめて示したが、第3章・第4章・第6章は第6章末にまとめて掲げた。写真、挿図及び表の番号は第5章を除いて全体の通し番号により表示した。
13. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33番地）にて保管している。

## 凡例

本書で用いた土器の分類及び編年観は下記の論文・報告書に依拠している。

### 1. 弥生土器、土師器

松本岩雄 1992「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社

鹿島町教育委員会 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』

松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器様相一大東式の再検討」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会

島根県教育委員会 2008『九景川遺跡 一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』

### 2. 須恵器

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

大谷晃二 1997「出雲地方の須恵器編年表」『第7回山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓—その型式・変遷・地域性—』山陰横穴墓研究会

岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡－9 総括編－ 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書22』

# 本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	
1. 事業計画の概要	1
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整	1
3. 法的手続き	1
第2節 発掘調査の経過	
1. 玉泉寺裏遺跡	3
2. 九景川遺跡	4
第3節 整理作業の経過	
1. 遺物整理作業の工程	6
2. 遺構整理作業と報告書作成	6
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 過去調査区の概要	12
第3章 玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）の調査成果	
第1節 調査の方法	
1. 発掘調査区とグリッドの設定	15
2. 表土の掘削と遺構の検出	15
3. 遺構掘削	16
4. 記録の作成	16
5. 自然科学分析	16
第2節 VI区の調査	
1. 調査区の概略と基本層序	17
2. 検出遺構とその遺物	19
3. 遺構外出土遺物	24
第3節 VII区の調査	
1. 調査区の概略と基本層序	24
2. 検出遺構とその遺物	27
3. 遺構外出土遺物	38
第4章 九景川遺跡（V区）の調査成果	
第1節 調査の方法	43

1. 発掘調査区とグリッドの設定 .....	43
2. 表土の掘削と遺構の検出 .....	43
3. 遺構掘削 .....	45
4. 記録の作成 .....	45
5. 自然科学分析 .....	45
第2節 V区の調査	
1. 調査区の概略と基本層序 .....	45
2. 検出遺構とその遺物 .....	48
3. 遺構外出土遺物 .....	88
第5章 自然科学分析	
第1節 九景川遺跡・玉泉寺裏遺跡発掘調査に伴うAMS年代測定 .....	105
第6章 総括	
第1節 先行研究 .....	109
第2節 遺跡の変遷 .....	109
第3節 まとめ .....	116

# 挿図目次

第1図	事業地内遺跡位置図 (S= 1 : 25,000) .....	2
第2図	遺跡の位置 .....	7
第3図	神門水海位置図 (S= 1 : 200,000) .....	8
第4図	周辺の遺跡 (S= 1 : 100,000) .....	9
第5図	玉泉寺裏遺跡VI・VII区及び九景川遺跡V区 調査区位置図 (S= 1 : 1,000) .....	12
第6図	平成17(2005)年度調査区及び平成26(2014)年度調査区位置図 (S= 1 : 2,000) .....	13
第7図	玉泉寺裏遺跡VI・VII区 地区割り図 (S= 1 : 500) .....	15
第8図	玉泉寺裏遺跡VI・VII区 調査区平面図 (S= 1 : 500) .....	16
第9図	玉泉寺裏遺跡VI区 調査区平面図 (S= 1 : 200) .....	17
第10図	玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1実測図 (S= 1 : 60) .....	18
第11図	玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1ピット土層断面図 (S= 1 : 40) .....	19
第12図	玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1遺物出土状況図 (S= 1 : 40) .....	20
第13図	玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1出土遺物実測図 (S= 1 : 3、1 : 4) .....	20
第14図	玉泉寺裏遺跡VI区 加工段2実測図 (S= 1 : 60) .....	21
第15図	玉泉寺裏遺跡VI区 SK01、SK02実測図 (S= 1 : 40) .....	23
第16図	玉泉寺裏遺跡VI区 Pit05、Pit06、Pit09実測図 (S= 1 : 40) .....	23
第17図	玉泉寺裏遺跡VI区 出土遺物実測図 (S= 1 : 3) .....	24
第18図	玉泉寺裏遺跡VII区 調査区平面図 (S= 1 : 200) .....	25
第19図	玉泉寺裏遺跡VII区 土層断面図 (S= 1 : 200) .....	26
第20図	玉泉寺裏遺跡VII区 S101遺構実測図 (1) (S= 1 : 40、1 : 60) .....	27
第21図	玉泉寺裏遺跡VII区 S101遺構実測図 (2) (S= 1 : 40) .....	28
第22図	玉泉寺裏遺跡VII区 S101ピット土層断面図 (S= 1 : 40) .....	29
第23図	玉泉寺裏遺跡VII区 S101遺物出土状況 (S= 1 : 40) .....	30
第24図	玉泉寺裏遺跡VII区 S101出土遺物実測図 (1) (S= 1 : 3) .....	31
第25図	玉泉寺裏遺跡VII区 S101出土遺物実測図 (2) (S= 1 : 6) .....	31
第26図	玉泉寺裏遺跡VII区 SD01遺構実測図 (S= 1 : 60) .....	32
第27図	玉泉寺裏遺跡VII区 SD01出土遺物実測図 (S= 1 : 3、1 : 4) .....	32
第28図	玉泉寺裏遺跡VII区 SD02、周辺ピット実測図 (S= 1 : 40、1 : 60) .....	33
第29図	玉泉寺裏遺跡VII区 SK06実測図 (S= 1 : 40) .....	34
第30図	玉泉寺裏遺跡VII区 SK08、SK12実測図 (S= 1 : 40) .....	34
第31図	玉泉寺裏遺跡VII区 SK09実測図 (S= 1 : 40) .....	34
第32図	玉泉寺裏遺跡VII区 SK10、周辺ピット実測図 (S= 1 : 40) .....	35
第33図	玉泉寺裏遺跡VII区 SK11、SK13実測図 (S= 1 : 40) .....	36
第34図	玉泉寺裏遺跡VII区 SK07、Pit91実測図 (S= 1 : 40) .....	36
第35図	玉泉寺裏遺跡VII区 包含層出土遺物実測図 (1) (S= 1 : 3) .....	38
第36図	玉泉寺裏遺跡VII区 包含層出土遺物実測図 (2) (S= 1 : 3、1 : 4) .....	40

第37図	玉泉寺裏遺跡VII区	包含層出土遺物実測図(3)(S=2:3、1:3、1:4).....	41
第38図	九景川遺跡V区	調査区グリッド割り図(S=1:500).....	43
第39図	九景川遺跡V区	調査区平面図(S=1:300).....	44
第40図	九景川遺跡V区	縦断土層断面図(S=1:100).....	46
第41図	九景川遺跡V区	横断土層断面図(S=1:100).....	47
第42図	九景川遺跡V区	集石遺構実測図(S=1:40).....	49
第43図	九景川遺跡V区	集石遺構出土遺物実測図(S=1:3).....	49
第44図	九景川遺跡V区	SIO1実測図(S=1:40).....	50
第45図	九景川遺跡V区	加工段1・2、加工段10、加工段11実測図(S=1:60).....	52
第46図	九景川遺跡V区	加工段1・2、加工段10、加工段11土層断面図(S=1:60).....	53
第47図	九景川遺跡V区	加工段1・2検出焼土溜まり、ピット土層断面図(S=1:60).....	54
第48図	九景川遺跡V区	加工段1・2、加工段10遺物出土状況(S=1:100).....	55
第49図	九景川遺跡V区	加工段1・2出土遺物実測図(1)(S=1:3).....	56
第50図	九景川遺跡V区	加工段1・2出土遺物実測図(2)(S=1:3、1:4).....	57
第51図	九景川遺跡V区	加工段1・2出土遺物実測図(3)(S=1:3).....	59
第52図	九景川遺跡V区	加工段1・2出土遺物実測図(4)(S=1:3、1:4).....	60
第53図	九景川遺跡V区	加工段10出土遺物実測図(S=1:3、1:4).....	61
第54図	九景川遺跡V区	加工段3上面実測図(S=1:60).....	62
第55図	九景川遺跡V区	加工段3床面実測図(S=1:60).....	63
第56図	九景川遺跡V区	加工段3検出ピット土層断面図(S=1:60).....	64
第57図	九景川遺跡V区	加工段3出土遺物実測図(1)(S=1:3、1:4).....	66
第58図	九景川遺跡V区	加工段3出土遺物実測図(2)(S=2:3、1:3、1:4).....	67
第59図	九景川遺跡V区	加工段3出土遺物実測図(3)(S=1:6).....	68
第60図	九景川遺跡V区	加工段5実測図(S=1:60、1:100).....	69
第61図	九景川遺跡V区	加工段5出土遺物実測図(S=1:3).....	69
第62図	九景川遺跡V区	加工段4、加工段6実測図(S=1:60).....	70
第63図	九景川遺跡V区	加工段4、加工段6検出ピット土層断面図(S=1:60).....	71
第64図	九景川遺跡V区	加工段4出土遺物実測図(S=1:3、1:4).....	72
第65図	九景川遺跡V区	加工段6出土遺物実測図(1)(S=2:3、1:3、1:4).....	72
第66図	九景川遺跡V区	加工段6出土遺物実測図(2)(S=1:4).....	73
第67図	九景川遺跡V区	加工段7実測図(S=1:60、1:100).....	75
第68図	九景川遺跡V区	加工段7出土遺物実測図(S=1:4).....	75
第69図	九景川遺跡V区	加工段8実測図(S=1:60).....	76
第70図	九景川遺跡V区	加工段8出土遺物実測図(S=1:3、1:4).....	76
第71図	九景川遺跡V区	加工段9実測図(S=1:60).....	78
第72図	九景川遺跡V区	加工段9出土遺物実測図(S=1:3、1:4).....	79
第73図	九景川遺跡V区	SDO1実測図(S=1:60).....	80
第74図	九景川遺跡V区	SDO1出土遺物実測図(S=1:3).....	81

第 75 図	九景川遺跡V区	SD02 実測図 (S= 1 : 40) .....	82
第 76 図	九景川遺跡V区	SD02 出土遺物実測図 (S= 1 : 3) .....	82
第 77 図	九景川遺跡V区	SD04 実測図 (S= 1 : 40) .....	84
第 78 図	九景川遺跡V区	SD04 出土遺物実測図 (S= 1 : 3) .....	84
第 79 図	九景川遺跡V区	SD03、周辺ピット実測図 (S= 1 : 40) .....	85
第 80 図	九景川遺跡V区	Pit25、Pit26 実測図 (S= 1 : 40) .....	86
第 81 図	九景川遺跡V区	Pit25、Pit26 出土遺物実測図 (S= 1 : 3、1 : 4) .....	86
第 82 図	九景川遺跡V区	SX01 出土遺物実測図 (S= 1 : 3) .....	86
第 83 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (1) (S= 1 : 3) .....	89
第 84 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (2) (S= 1 : 3) .....	90
第 85 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (3) (S= 1 : 3) .....	91
第 86 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (4) (S= 1 : 3、1 : 4) .....	92
第 87 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (5) (S= 1 : 3) .....	94
第 88 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (6) (S= 1 : 3) .....	96
第 89 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (7) (S= 1 : 3、1 : 4) .....	98
第 90 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (8) (S= 2 : 3、1 : 3、1 : 4) .....	100
第 91 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (9) (S= 1 : 3、1 : 4) .....	102
第 92 図	九景川遺跡V区	包含層出土遺物実測図 (10) (S= 2 : 3、1 : 3) .....	103
第 93 図	九景川遺跡V区	出土遺物実測図 (S= 1 : 3) .....	103
第 94 図	玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡	弥生時代の様相 (S= 1 : 2,000) .....	111
第 95 図	玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡	古墳時代前期～中期の様相 (S= 1 : 2,000) .....	112
第 96 図	玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡	古墳時代後期の様相 (S= 1 : 2,000) .....	113
第 97 図	玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡	奈良時代～平安時代初頭の様相 (S= 1 : 2,000) .....	114
第 98 図	玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡	平安時代末～鎌倉時代の様相 (S= 1 : 2,000) .....	115

## 表目次

第1表	周辺の遺跡一覧 .....	9
第2表	出雲インター線事業地内遺跡の調査一覧 .....	13
第3表	玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡検出遺構一覧 .....	110
第4表	玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）、九景川遺跡（V区）出土土器観察表 .....	119
第5表	玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）、九景川遺跡（V区）出土石器、玉作関係遺物観察表	132
第6表	玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）、九景川遺跡（V区）出土金属器観察表 .....	132

# 本文写真目次

口絵1 上 遺跡上空から神西湖を望む（東から）	写真6 玉泉寺裏遺跡VII区 谷部完掘状況 (丘陵をのぼる赤道)
下 左側 調査後の玉泉寺裏遺跡、 右側 調査前の九景川遺跡（北から）	写真7 九景川遺跡V区 伐採状況
口絵2 上 九景川遺跡出土須恵器、石器、耳環 下 九景川遺跡出土弥生土器、土師器	写真8 九景川遺跡V区 斜面部包含層掘削 写真9 九景川遺跡V区 碧玉製勾玉出土状況
写真1 玉泉寺裏遺跡VI区 伐採状況	写真10 九景川遺跡V区 加工段3掘削風景
写真2 玉泉寺裏遺跡VI区 表土掘削	写真11 九景川遺跡V区 谷部包含層掘削
写真3 玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1掘削	写真12 九景川遺跡V区 SX01検出状況
写真4 玉泉寺裏遺跡VII区 包含層掘削	写真13 九景川遺跡V区 調査指導風景
写真5 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01検出状況	写真14 九景川遺跡V区 雪に埋もれた調査区

# 写真図版目次

図版1 調査区上空より神西湖を西に望む	図版6 VII区平坦面（北東から）
VI区全景（上が東）	VII区北東部斜面（北東から）
図版2 VI区近景（東から）	図版7 VII区南壁土層（北から）上：A3グリッド部分 中：A4グリッド部分 下：A5グリッド部分
加工段1 調査状況（北から）	図版8 VII区西壁土層B2グリッド部分（南西から） VII区西壁土層C2グリッド部分（南西から）
図版3 加工段1東西断面（北から）	図版9 VII区縦断面土層堆積状況D7グリッド部分（南東から） VII区横断面土層堆積状況D7グリッド部分（北東から）
左上：加工段1東西断面（南から）	図版10 SI01調査状況（南東から） 同遺物出土状況（南西から）
右上：加工段1-Pit08検出状況（北から）	図版11 左上：加工段3断面（東から） 右上：SI01-Pit01断面（東から） 左下：SI01東西断面東部分（北西から） 右下：同西部（北西から）
左下：加工段1-Pit08断面と遺物出土状況（東から）	左上：SI01南北断面北部分（南西から） 右上：同南部分（南西から） 左下：SI01壁際溝南東部断面（南から） 右下：SI01-Pit09断面（北東から）
右下：加工段1完掘状況（北から）	
図版4 加工段2東西断面（北から）	
左上：加工段2東西断面西部（北から）	
右上：同東部（北から）	
左下：加工段2南北断面南部（東から）	
右下：同北部（西から）	
図版5 左上：SK01・02断面（北から）	
右上：Pit09断面（東から）	
左下：Pit05-1・2断面（東から）	
右下：Pit06断面（北から）	
VII区全景（上が南）	

図版 12

- 左上：SK06 調査状況（北東から）
- 右上：同完掘状況（北東から）
- 左下：SK08 断面（南東から）
- 右下：同完掘状況（北西から）
- 左上：SK09 調査状況（北東から）
- 右上：同完掘状況（北東から）
- 左下：SK12-Pit33 断面（北西から）
- 右下：SK14 断面（南東から）

図版 13

- 左上：SK10 断面（南から）
- 右上：同完掘状況（北から）
- 左下：SK11 東西断面（北から）
- 右下：同完掘状況（北から）
- 左上：SK13 断面（東から）
- 右上：同完掘状況（北東から）
- 左下：Pit91 断面（北東から）
- 右下：Pit92 断面（北東から）

図版 14

- 玉泉寺裏遺跡VI区・VII区出土遺物（1）

図版 15

- 玉泉寺裏遺跡VI区・VII区出土遺物（2）

図版 16

- 玉泉寺裏遺跡VI区・VII区出土遺物（3）

図版 17

- 玉泉寺裏遺跡VI区・VII区出土遺物（4）

図版 18

- 調査区遠景（西から）
- 調査区遠景（東から）

図版 19

- 調査区全景（北から）
- 調査区近景（南西から）

図版 20

- 調査区縦断面上土層堆積状況B6グリッド部分（南から）
- 調査区縦断面上土層堆積状況C2グリッド部分（南から）

図版 21

- 調査区横断面上土層堆積状況C2グリッド部分（南から）
- 調査区横断面上土層堆積状況E3～D2 グリッド部分（東から）

図版 22

- 集石遺構 左上：完掘状況（南から）
- 右上：同（北東から）、下：南北断面（北西から）
- SI01 調査状況（北西から）

図版 23

- 左上：SI01 東西断面西部分（南から）
- 右上：同東部分（南から）
- 左下：SI01-Pit02 断面（北から）
- 右下：SI01-Pit05（北から）
- SI01 完掘状況（北西から）

図版 24

- 加工段 1・2 調査状況（北から）
- 加工段 10・11 調査状況（北から）
- 加工段 1・2 遺物出土状況（北から）

図版 25

- 上：調査区縦断面の加工段 1・2、11 部分（北から）
- 下：加工段 1・2、10 東西断面（北から）
- 左上：加工段 1・2、10 東西断面（南西から）
- 右：加工段 1・2-SD01 調査状況（北東から）
- 左下：加工段 1・2-SD01 調査風景（北西から）

図版 26

- 加工段 3 検出状況（西から）
- 左上：C2 グリッド包含層勾玉出土状況
- 右上：加工段 3-Pit07 断面（南西から）
- 左下：加工段 3-Pit17 断面（西から）
- 右下：加工段 3 調査風景（南東から）

図版 27

- 加工段 3 東西断面と遺物出土状況（北から）
- 同南北断面と遺物出土状況（南東から）
- 上：南部分、下：北部分

図版 28

- 左上：加工段 3-Pit22 断面（南東から）
- 右上：加工段 3-Pit24 断面（西から）
- 左下：加工段 3-Pit21 断面（南西から）
- 右下：加工段 3-Pit24 完掘状況（南西から）
- 加工段 6 断面（南から）

図版 29

- 左上：加工段 6 遺物出土状況（南から）
- 右：加工段 6 溝検出状況（北から）
- 左下：加工段 6 溝断面（北から）

加工段 6 完掘状況（南から）	図版 43
図版 30	九景川遺跡V区出土遺物（9）
加工段 8 溝検出状況（南から）	図版 44
加工段 9 調査状況（西から）	九景川遺跡V区出土遺物（10）
図版 31	図版 45
加工段 9 土層堆積状況（西から）	九景川遺跡V区出土遺物（11）
SD01 調査状況（南から）	図版 46
図版 32	九景川遺跡V区出土遺物（12）
左上・左下：SD01 断面（南西から）	図版 47
右：SD01 遺物出土状況（南西から）	九景川遺跡V区出土遺物（13）
SD02 調査状況（南西から）	図版 47
図版 33	九景川遺跡V区出土遺物（14）
上：SD02・SD02-Pit01 遺物出土状況（北東から）	図版 49
左下：SD02-Pit01 断面（北東から）	九景川遺跡V区出土遺物（15）
右下：SD02-Pit01 完掘状況（北西から）	図版 50
左：SD04 遺物出土状況（南から）	九景川遺跡V区出土遺物（16）
右上：SD04 炉跡調査状況（西から）	図版 51
右下：SD04 炉跡完掘状況（北から）	九景川遺跡V区出土遺物（17）
図版 34	図版 52
SD04 完掘状況（南から）	九景川遺跡V区出土遺物（18）
左上：Pit25 断面（南西から）	図版 53
右上：Pit26 断面（北から）	九景川遺跡V区出土遺物（19）
左下：C2 グリッド包含層耳環出土状況	図版 54
右下：D3 グリッド包含層土師器甕出土状況	九景川遺跡V区出土遺物（20）
図版 35	図版 55
九景川遺跡V区出土遺物（1）	九景川遺跡V区出土遺物（21）
図版 36	図版 56
九景川遺跡V区出土遺物（2）	九景川遺跡V区出土遺物（22）
図版 37	図版 57
九景川遺跡V区出土遺物（3）	九景川遺跡V区出土遺物（23）
図版 38	図版 58
九景川遺跡V区出土遺物（4）	九景川遺跡V区出土遺物（24）
図版 39	図版 59
九景川遺跡V区出土遺物（5）	九景川遺跡V区出土遺物（25）
図版 40	図版 60
九景川遺跡V区出土遺物（6）	九景川遺跡V区出土遺物（26）
図版 41	図版 61
九景川遺跡V区出土遺物（7）	九景川遺跡V区出土遺物（27）
図版 42	図版 62
九景川遺跡V区出土遺物（8）	九景川遺跡V区出土遺物（28）

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

### 1. 事業計画の概要

一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離750kmの、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。出雲市周辺においては、県中西部方面から出雲市中心部への流入部付近で交通混雑が発生しており、交通事故の多発や地域経済活動への悪影響が懸念されている。

こうした状況のもと、現道の渋滞対策や交通危険箇所を解消し、一般国道のバイパスとして高速道路の連続性をできるだけ早く確保するために、国土交通省により出雲湖陵道路の事業化が図られ、平成18（2006）年3月に出雲仁摩線として都市計画決定された。一般国道9号（出雲湖陵道路）は、出雲市知井宮町の山陰自動車道出雲インターチェンジを起点として、同市湖陵町三部の湖陵インターチェンジ（仮称）までを結ぶ延長4.4kmの自動車専用道路として、平成20（2008）年度に事業が着手された。

### 2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

計画策定の段階での重要遺跡の存否照会によって、尼子十旗に数えられる神西城跡がルート上にあることが判明した。島根県教育委員会と国土交通省は協議を重ね、トンネル工法に変更することで現地保存することが決まった。事業化に際しては、国土交通省から島根県教育委員会に対して事業予定地内における埋蔵文化財の有無について照会が行われた。これを受け島根県教育委員会では出雲市教育委員会の協力のもと、平成22（2010）年3月に分布調査を実施し、周知の遺跡に加えて試掘調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘確認調査が必要な旨を平成22（2010）年5月25日付け島教文財第233号で回答した。その後も工事用道路や調整池整備等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。

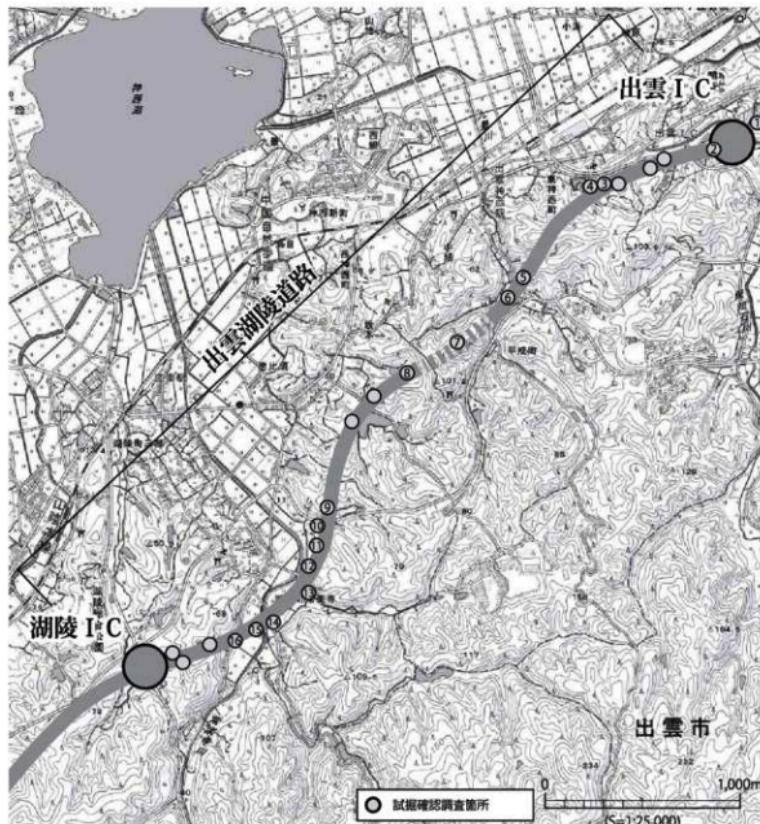
島根県教育委員会は国土交通省と協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成22（2010）年度から国庫補助事業により実施し、以後、予定地内の各埋蔵文化財の調査・取り扱いについて具体的な検討が行われた。玉泉寺裏遺跡、九景川遺跡は平成25（2013）年7～8月に試掘調査を実施し、本発掘調査が必要な範囲等を定めている。

### 3. 法的手続き

玉泉寺裏遺跡、九景川遺跡は平成26（2014）年2月19日付け国中整松工第91号で、文化財保護法第94条第1項の規定による通知がそれぞれ国土交通省から文化庁長官あて提出された。それに対して島根県教育委員会は、試掘調査の結果を踏まえ、平成26（2014）年2月26日付け島教文財第15号の77でそれぞれ記録作成のための発掘調査の実施を勧告している。

各遺跡は埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなり、国土交通省と工程上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第99条第1項の規定による通知は、平成26（2014）年5月21日付け島教理第119号、平成26（2014）年9月8日付け島教理第245号でそれぞれ埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。

現地調査終了後、遺跡の取り扱いについては記録保存とすることとし、平成27（2015）年2月16日付けで松江国道事務所長あて終了報告を提出した。



No.	遺跡名	所在地	種別	本発掘調査
1	浅柄Ⅲ遺跡	出雲市知井宮町	集落跡	平成 28 年度
2	柳／内II遺跡	出雲市知井宮町	古墳	(平成 24 年度試掘調査のみ)
3	玉泉寺裏遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
4	九重川遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
5	中上II遺跡	出雲市東神西町	集落跡	
6	鏡II遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26・27 年度
7	神凸城跡	出雲市東神西町	城跡	(工法変更)
8	坂本谷遺跡	出雲市西神西町	集落跡	平成 27 年度
9	のの子谷横穴墓群	出雲市湖陵町	古墳・横穴墓	平成 27 年度
10	板高池遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	(平成 26 年度試掘調査のみ)
11	常楽寺柿木田古墳群	出雲市湖陵町	古墳	(一部工法変更)
12	柿木田家下遺跡	出雲市湖陵町	散布地	
13	奥ノ谷遺跡	出雲市湖陵町	散布地	
14	御領田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡・貝塚	
15	大河原遺跡	出雲市湖陵町	散布地	(平成 27 年度試掘調査のみ)
16	京田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	平成 27 年度～

第1図 事業地内遺跡位置図 (S=1:25,000)

## 第2節 発掘調査の経過

### 1. 玉泉寺裏遺跡

#### 発掘作業の工程

発掘作業は平成26(2014)年5月28日～9月5日にかけて実施した。バックホウによるVI区表土掘削から着手し、表土から10cm～20cm程度で赤褐色の地山を確認した。遺構は、試掘トレンチで確認していくとおり東側斜面と北側緩斜面でそれぞれ加工段を検出した。

6月18日から、人力によるVI区包含層掘削を開始した。東側斜面の加工段1は土層の観察から2時期あることがわかったが、平面プランでの切り合いを検出できなかった。新段階の床面でピット状のプランを検出し掘削したところ、中から弥生時代後期後葉の高杯が出土した。脚部を欠くが環部を上にして埋まっており、人為的に埋められたと想像される。加工段2は遺物はほとんど出土せず、床面からは多くのピットを検出したものの建物は復元できなかつた。VI区全体でも遺物はほとんど出土せず、後世の削平あるいは自然環境の影響で包含層は失われたと推定される。

6月2日には、VI区と併行してVII区の表土掘削を開始した。VII区平坦面は橙色系の山土を主体とする造成土が50cm～1.5m堆積していた。試掘トレンチではその下層に褐色系の包含層が確認されており、重機掘削はこの面で停止した。なお、調査区北側平坦面の20m四方の範囲は、10cm程度で地山が露出し、遺構・遺物は検出されなかったため、表土掘削のみで調査を終了した。

6月24日、VII区の包含層掘削に入った。VII区は東西に長いため、西側の平坦部の遺構掘削と、東側の斜面部の包含層掘削を同時進行して作業の効率化を図った。平坦面の南北にはそれぞれマウンドがあり古墳の可能性が考えられていたが、近代の開発でマウンド間の谷を埋めるように盛土したことが判明した。平坦部の北西側では、SI01が検出された。直徑30cm以上の台石や複合口縁をもつ甕が露出してお



写真1 玉泉寺裏遺跡VI区 伐採状況



写真2 玉泉寺裏遺跡VI区 表土掘削



写真3 玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1掘削



写真4 玉泉寺裏遺跡VII区 包含層掘削

り、遺構と思われた。調査を進めた結果、わずかな残存状況ではあったが平面プラン隅丸方形の竪穴建物跡であることがわかった。その他に平坦部で検出された遺構は、AMS年代測定で時期の特定ができるSK06（11世紀中頃～13世紀前半）、SK10（5世紀前半～6世紀中頃）などの土坑14基、溝状遺構2条、多数のピットである。

斜面部の掘削は縦断・横断ベルトを設置し、土層を観察しながら掘り下げた。包含層は3面存在していたが、遺物は弥生時代後期～古墳時代中期の土器、8世紀代の須恵器が混在した状態で出土した。地山に掘り込まれた多数のピットを検出したが、遺物はごく小片が出土するのみで建物は復元できなかった。

8月27日、一部遺構の掘削を残してラジコンヘリによる空撮を終えた。9月5日の完了検査当日まで作業を行い、同日午後すべての調査を終了した。

## 2. 九景川遺跡

### 発掘作業の工程

発掘調査は、平成26（2014）年9月30日～12月25日にかけて実施した。作業は、バックホウを使用して調査区東側斜面部の表土掘削から開始した。斜面部は調査前から段丘状になっており、後世にかなりの削平を受けているものの、試掘トレーニチで遺物を確認した平坦面を中心に、包含層や遺構が残存していると想定された。今回調査したV区西側の谷部は平成17（2005）年度調査のII区へと続く谷底平野で、調査前まで耕作や建物設置のためにかなりの造成が行われていた。II区では自然河道を検出し、水辺の祭祀に関わる遺物が多く出土しているため、今回調査区の谷部でもその延長の検出が期待された。

斜面部の表土は10cm～30cm程度の堆積で、暗黒褐色系の包含層上面で表土掘削を停止した。谷部では試掘トレーニチの結果を踏まえ地表面から1.0m～1.5mを掘削し、10月17日に包含層上面で表土掘削を停止した。谷部のすぐ西側には調整池が建設されており、表土掘削時から湧水に悩まされることになった。この間、台風の影響もあり作業は中断されることが多かった。



写真5 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01検出状況



写真6 玉泉寺裏遺跡VII区 谷部完掘状況  
(丘陵をのぼる赤道)



写真7 九景川遺跡V区 伐採状況

10月23日から、人力での包含層掘削を開始した。調査区に縦断・横断ベルトを設定し、包含層上面での遺構の検出と同時に、包含層を除去していった。斜面部の包含層は土色で細分できるものの、土器はあまり含まれない。包含層上面で集石遺構、SD04を検出し、岩盤層である地山上面では、加工段6基、溝状遺構2条、竪穴建物跡1棟、ピット多数を検出した。なかでも、加工段3の覆土上面では、花仙山産碧玉製の勾玉未成品<sup>(1)</sup>が出土した。重機掘削時に既に露出していたとみられるため加工段3に伴うものかは不明であったが、工房跡の可能性を考慮し慎重な調査をすることとした。

谷部の包含層掘削と併行して、11月6日から斜面部の遺構掘削に着手した。それぞれの遺構でサブトレンチを設定して土層を確認後、面的に掘り下げたが、残存状況が悪いものが多く、遺構の判別は困難を伴った。そのため、遺物の取り上げは遺構床面での出土品以外は層位的に行うことができず、遺構の整理作業に影響を受けることになった。

加工段1・2では焼土溜りや炉跡、刃傷痕のある砥石が多数検出された。床面付近で出土した須恵器から古墳時代後期～終末期の遺構とみられ、小規模ながら金属製品の加工を行っていたと推定される。

11月18日、出雲市立佐田中学校から発掘体験に2名が参加し、谷部の包含層掘削と出土遺物の水洗を体験した。小雨の降る中ではあったが、生徒は熱心に土を掘り、水洗後に何の破片かがわかると、感心した様子であった。

12月10日に、花谷浩氏に現地及び出土遺物の調査指導をいただいた。古墳時代中期から後期、奈良時代後半の集落が存在した可能性や、近隣の古墳や古代山陰道との関連も含めての検討を指摘された。同日午後には、田中義昭氏にも調査指導をいただいている。

一方、谷部では包含層掘削が続いていた。12月5日、D3グリッドで貝層を検出した。明確なプランはなかったが、土師器高杯などが近接して出土しており、SX01として貝層を持ち帰った。現場終了に向けて作業が進む中、12月13日から山陰を大寒波が襲い、当遺跡が所在する出雲市も吹雪となった。12月16日に予定していた空撮は悪天候のため19日に変更となり、当日は調



写真8 九景川遺跡V区 斜面部包含層掘削



写真9 九景川遺跡V区 碧玉製勾玉出土状況



写真10 九景川遺跡V区 加工段3掘削風景

(1) 岡山県古代吉備文化財センター米田克彦氏のご教示による。

査区全体に積もった雪を2時間かけて雪かきした後写真撮影を行った。

谷部の南側斜面ではピットを多数検出したが、規則的な配置はみられず遺物も出土しなかった。谷部西側の最低部では遺構は検出されず、遺物もほとんど含まれないことから、平成17（2005）年度Ⅱ区検出の自然河道は今回調査区V区には延びていないことがわかった。12月25日、発掘調査は終了した。



写真11 九景川遺跡V区 谷部包含層掘削

### 第3節 整理作業の経過

#### 1. 遺物整理作業の工程

遺物整理作業は、調査中から出土遺物の水洗作業を優先して実施したが、九景川遺跡出土遺物は調査終了後にも未水洗が残る状況であった。調査終了後と翌平成27（2015）年度に入ってから、埋蔵文化財調査センターで注記・接合・復元まで実施した。接合・復元は分類作業と並行して行い、実測を伴う遺物の選択は遺構出土品を優先した。実測作業は、平成27（2015）～平成28（2016）年度に実施した。遺構出土を優先して行い、包含層出土の土器は残存状況と時期区分の可能なものを選択した。



写真12 九景川遺跡V区 SX01 検出状況

#### 2. 遺構整理作業と報告書作成

遺構の整理作業は、平成27（2015）年4月から開始した。調査後におおまかな整理一覧表を作成しており、ここに更に遺物の分類を加えて遺構の時期や性格について考察を重ね、翌年2月にはほぼ終了した。平成28（2016）年度は一部残っていた遺物の実測、挿図作成、遺物写真撮影、図版作成、原稿執筆を行った。



写真13 九景川遺跡V区 調査指導風景



写真14 九景川遺跡V区 雪に埋もれた調査区

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本報告書に掲載している玉泉寺裏遺跡（1）、九景川遺跡（2）は、出雲市東神西町に所在する。遺跡は出雲平野南西部の丘陵上あるいは丘陵に挟まれた谷間に位置し、玉泉寺裏遺跡のある標高32mの頂部からは、北東に広がる出雲平野、北方の北山山系、西に神西湖と日本海を眼下に納めることができる。

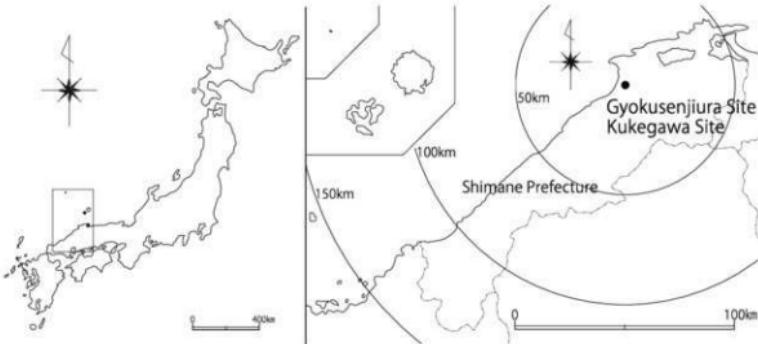
出雲平野は、中国山地と北山山麓に南北を挟まれ、斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された県下最大の平野であり、その規模は日本海から宍道湖西岸まで東西約20kmにわたる。『出雲國風土記』によると、現在の出雲平野南西部から神西湖一帯はかつて神門水海として水域が広がっていた。約6000年前の縄文海進時には島根半島と中国山地の間は完全に海域化していたが、やがて海退期になると、沖積低地や三角州が成長し、出雲平野の原形をつくりあげた。當時西流していた斐伊川の最下流域に、汽水域として神門水海が形成されていたのである。現在の神西湖はその南岸に当たる。神門水海は斐伊川と神戸川による砂礫運搬によって次第に埋められていった。ついで、常楽寺川や十間川、九景川などによる上流河川の流入の堆積作用もその要因になろう。

中世以降も河川堆積による水域の陸地化は進んでいたが、江戸時代前期の大洪水によって斐伊川は向きを変え現在のように東流するようになった。この変化以降、下流域の宍道湖西岸に近世たら製鉄に伴う鉄穴流しの廃砂による土砂堆積が進む。これにより出雲平野は更に拡大し、現在の地形となった。

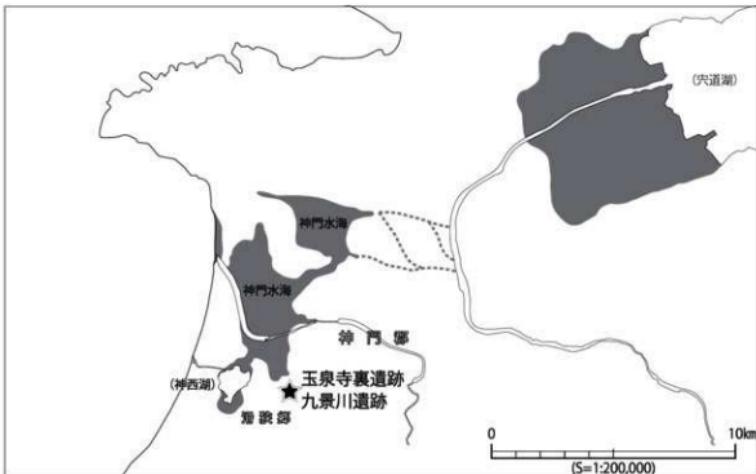
### 第2節 歴史的環境

#### 縄文時代

出雲平野における遺跡の初見は、縄文時代早期末の菱根遺跡（3）や上長浜貝塚（4）である。菱根遺跡は北山南麓に位置し、上長浜貝塚は大社湾沿いの古砂丘上に立地する。後者は中世の大規模な貝塚が形成され、その下層から菱根式に近い織維土器が出土する。また、両遺跡では隠岐



第2図 遺跡の位置

第3図 神門水海位置図 ( $S=1:200,000$ )

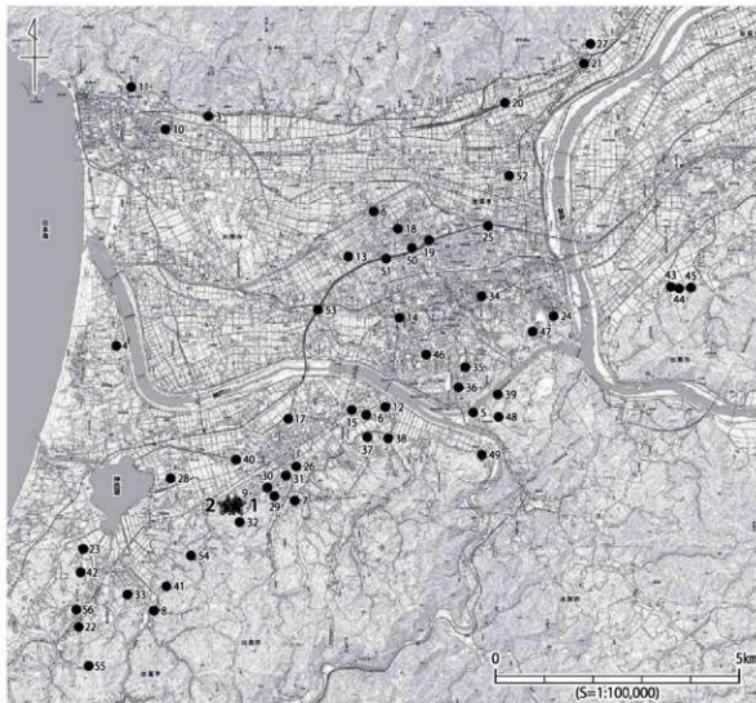
産黒曜石製の石鏃が確認され、海を渡った交流があったと推測される。

後期から晩期になると、斐伊川・神戸川流域に遺跡の増加が認められる。神戸川の自然堤防上には三田谷I遺跡(5)、平野中央部には矢野遺跡(6)が営まれ、前者では後期の丸木舟や晩期のドングリ貯蔵穴が検出された。当遺跡周辺に目を向けると、保知石遺跡(7)では晩期後半の突帯文土器や扁平打製石斧が確認され、神西湖南岸の御飯田遺跡(8)では、出雲平野部では例のない後期の竪穴建物跡が検出された。御崎谷遺跡(9)や九景川遺跡でも遺構は確認されていないが土器などが出土しており、周辺一帯で集落が形成されていたことが窺える。

### 弥生時代

弥生時代になると、出雲平野全域に集落が形成される。前期は、特に平野西部の神戸川下流域や大社湾沿いの砂丘上から裾部に多くの遺跡が確認され、縄文時代から続く原山遺跡(10)、出雲大社境内遺跡(11)、矢野遺跡があげられる。原山遺跡からは北部九州に多くみられる配石墓とともに朝鮮半島系土器が出土し、当地の弥生墓制成立を考える上で注目される。保知石遺跡や九景川遺跡では前期土器は散見されるものの、明確な集落としては把握できない。中期になると遺跡は急増する。神戸川の西岸には古志本郷遺跡(12)、白枝荒神遺跡(13)、天神遺跡(14)、下古志遺跡(15)、田畠遺跡(16)、知井宮多聞院遺跡(17)、小山遺跡(18)などが知られ、大規模集落が出現し始める。後期には、平野中央部・北部の姫原西遺跡(19)、山持遺跡(20)、青木遺跡(21)など新たな遺跡が加わる。神門海水海南岸の地域では、高畦遺跡(22)で竪穴建物跡を、西安原遺跡(23)で木道跡を検出するなど遺構はわずかな検出にとどまるものの、複数の遺跡から同時期の遺物がまとまって出土しており、平野中央部・北部の開発と同時に多くの集落が形成された。

墳墓遺跡では、平野南側の丘陵上に最大級の四隅突出型墳丘墓である西谷3号墓をはじめとする西谷墳墓群(24)が出現し、平野低地部の中野美保遺跡(25)や青木遺跡でも中小規模の四隅

第4図 周辺の遺跡 ( $S=1:100,000$ )

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	玉泉寺裏遺跡	15	下古志遺跡	29	浅柄II古墳	43	後谷V遺跡
2	九景川遺跡	16	田畠遺跡	30	間谷東古墳	44	稻城遺跡
3	菱根遺跡	17	知井宮多聞院遺跡	31	浅柄北古墳	45	小野遺跡
4	上長浜貝塚	18	小山遺跡	32	北光寺古墳	46	神門寺境内廃寺
5	三田谷I遺跡	19	姫原西遺跡	33	雲部3号墳	47	長者原廃寺
6	矢野遺跡	20	山持遺跡	34	今市大念寺古墳	48	光明寺3号墳
7	保知石遺跡	21	青木遺跡	35	上塙治地藏山古墳	49	小坂古墳
8	御領田遺跡	22	高畦遺跡	36	上塙治地藏山古墳	50	戻小路西遺跡
9	御崎谷遺跡	23	西安原遺跡	37	妙蓮寺山古墳	51	渡橋沖遺跡
10	原山遺跡	24	西谷墳墓群	38	放れ山古墳	52	萩杵古墓
11	出雲大社境内遺跡	25	中野美保遺跡	39	上塙治横穴墓群	53	余小路遺跡
12	古志本郷遺跡	26	浅柄遺跡	40	神門横穴墓群	54	神西城跡
13	白枝荒神遺跡	27	大寺1号墳	41	のの子谷横穴墓群	55	要害山城跡
14	天神遺跡	28	山地古墳	42	八幡宮横穴墓群	56	姉谷城跡

突出型墳丘墓や方形貼石墓が築造される。神門水海南岸では、玉泉寺裏遺跡で弥生時代終末～古墳時代初頭の土壙墓が検出されているが、平野中央部・北部のような四隅突出型墳丘墓は今のところ確認されていない。

### 古墳時代

弥生時代から古墳時代を通して、多少の変動はありつつも集落は營まれ続ける。前期後半～中期中葉になると、浅柄遺跡（26）で建物跡が検出され、御崎谷遺跡からは中期を中心とする多量の遺物が出土した。九景川遺跡の集落跡と合わせ、当時のこの地域では、ある程度の規模の集落が營まれていたと考えられる。

墳墓遺跡は、前期末～中期初頭には、大寺1号墳（27）、山地古墳（28）、浅柄Ⅱ古墳（29）、間谷東古墳（30）、浅柄北古墳（31）など、平野周辺部の丘陵上に古墳が出現する。北山山麓に造られた大寺1号墳は竪穴式石室をもち、削竹形木棺が置かれていたと推定される。一方、入海となっている神門水海東岸にある山地古墳は、礫床敷きの箱形木棺に、筒形銅器・鏡等の副葬品を有する。浅柄Ⅱ古墳は粘土櫛と礫櫛をもち、間谷東古墳は奥才型木棺と称される棺内礫敷組合式木棺の埋葬施設を備える。この奥才型は北部九州から北近畿に分布が限定されることからも、当地域の地理的特性を生かした海上交易を中心とした広域的な地域間交流が想像される。

古墳時代中期中葉には北光寺古墳（32）が築造される。御崎谷遺跡のすぐ南丘陵上に築かれ、この時期では出雲部最大規模の前方後円墳である。また、南岸地域では雲部3号墳（33）が知られている。

古墳時代後期になると、神戸川下流域に集中して大型古墳が築造される。今市大念寺古墳（34）や上塩冶築山古墳（35）、上塩冶地藏山古墳（36）といった有力首長層の存在を窺わせる巨大古墳が現れる。神戸川左岸地域には、妙蓮寺山古墳（37）や放れ山古墳（38）などで構成される神門古墳群が存在し、出雲平野の最高首長に次ぐ位置付けとして評価される。これらの古墳の存在は、神戸川下流域一帯を中心とした、出雲西部一帯における支配秩序の形成を意味している。そして、後期後葉頃から平野南部の低丘陵には横穴墓が造られ始める。上塩治横穴墓群（39）、神門横穴墓群（40）は突出した規模を誇り、副葬品から被葬者層は地域の豪族・有力農民層と理解されている。また神門横穴墓群と時期を同じくして浅柄北古墳にも横穴墓が造られ、前期古墳である1号墳を後背墳丘として造墓された可能性が指摘される。入海南岸地域では、のの子谷横穴墓群（41）、八幡宮横穴墓群（42）などが知られている。

### 奈良・平安時代

奈良時代の律令制下では、出雲平野は出雲郡と神門郡からなり、当地域は神門郡滑狭郷に属する。官衙関連遺跡としては、後谷V遺跡（43）周辺は出雲郡家に比定されている。後谷V遺跡からは焼失した倉庫跡が検出され、その東に位置する呪符木簡が出土した稲城遺跡（44）や、瓦や鶴尾、木簡の出土した小野遺跡（45）が一連の郡家遺跡と考えられる。神門郡家は、古志本郷遺跡に比定され、二時期の郡庁跡が確認されている。神門郡内には他にも、大型総柱建物や墨書・綠釉陶器などが検出された天神遺跡、官衙関連遺物が多数出土した三田谷I遺跡などがあり、郡家の出先機関と推定されている。寺院跡については、朝山郷新造院に推定される神門寺境内廃寺（46）や、礎石などを検出した長者原廃寺（47）が存在する。神門寺境内廃寺は、瓦類の編年から7世紀後半に遡り、同じ瓦当文を持つ遺跡が岡山郡にまで及ぶことは、出雲西部の中心的寺院であった可

能性を示唆している。また、備後北部を中心として分布するいわゆる水切瓦が出土することから、出雲国への仏教伝播ルートを考える上で重要な要素となっている。

この時代の墳墓としては、出雲西部に火葬墓が集中して分布する。光明寺3号墓（48）は初期の火葬墓と考えられ、配石を伴う方形マウンドに火葬骨の入った石櫃が納められる。横穴式石室を再利用したと考えられる小坂古墳（49）では、石櫃と西日本では希有な蕨手刀が出土している。

集落遺跡は、奈良時代～平安時代初期の建物跡や遺物が多数確認された九景川遺跡、多数の掘立柱建物跡が検出された浅柄遺跡があげられる。出雲平野南縁部には古代山陰道の存在が想定されており、交通の要衝地として発展していったことを物語っている。

### 中世

中世の集落遺跡としては、藏小路西遺跡（50）、渡橋沖遺跡（51）があげられる。藏小路西遺跡は、大溝に区画された建物群や12～15世紀の陶器器類が出土し、古代有力豪族勝部氏の系譜を引くといわれる朝山氏か、出雲国守護職にあった佐々木氏（塙治氏）の居館跡と推定されている。渡橋沖遺跡からは総柱建物跡やミニチュア五輪塔が確認されている。墳墓遺跡としては、青磁を副葬する荻籽古墓（52）や、木棺墓が検出された姫原西遺跡、余小路遺跡（53）、藏小路西遺跡など、多数確認されている。神門水海周辺では、その地域特性を生かした貝塚が形成されていて、上長浜貝塚、九景川遺跡、御領田遺跡などで確認されている。中世の貝塚は全国的に少なく、特に上長浜貝塚の規模は全国屈指である。土師質土器や瓦質土器と共にヤマトシジミの貝殻や魚骨、漁撈具のほか、鹿角加工品やイノシシも出土しており、漁撈だけでなく狩猟にも從事していた可能性が指摘されている。

室町時代～鎌倉時代になり、出雲平野に多数の山城・居館が築かれ始める。神門水海周辺では、神西城（54）、要害山城（55）、姉谷城（56）などが挙げられる。

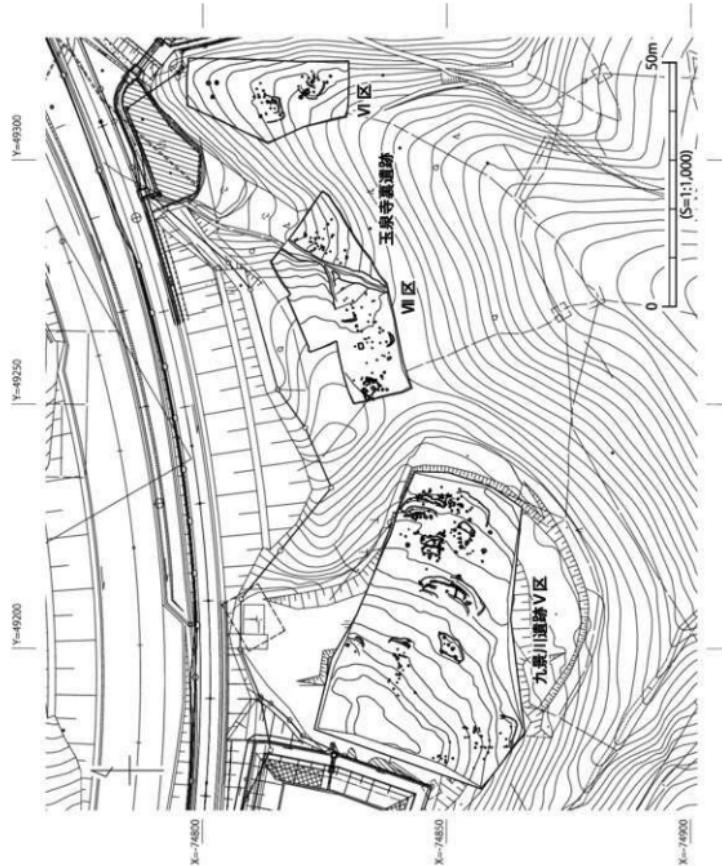
以上、出雲平野中央部から神門水海周辺までを俯瞰して、その歴史的環境を述べてきた。本書掲載遺跡の位置する平野南西部に関しては、古墳時代前期末～中期初頭の古墳出現から中世初期の貝塚形成まで、陸域と水域の接する特異な地理的環境の中で人々が生活を営んだ痕跡を辿ることができる。

### 第3節 過去調査区の概要

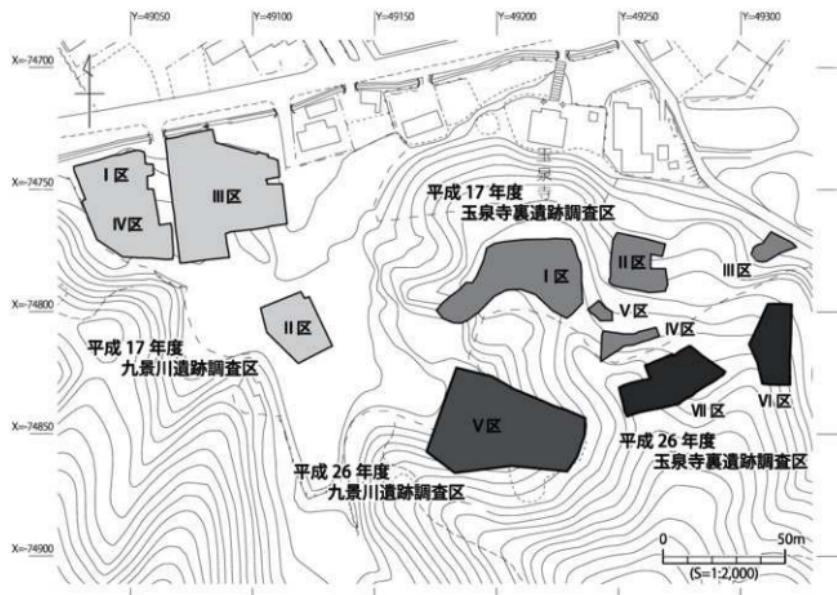
玉泉寺裏遺跡と九景川遺跡は、平成15（2003）～平成18（2006）年度に実施された一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査において、報告書が刊行されている。第6図はそれぞれの遺跡の過去調査区と、今回調査区との位置関係を示している。以下、過去調査の概要と今回調査区の位置について述べる。

#### 玉泉寺裏遺跡

玉泉寺裏遺跡は約1,825m<sup>2</sup>を対象として、遺跡の立地する低丘陵上及び斜面部分にⅥ区～Ⅷ区を設定して調査が実施された。調査主体は出雲市教育委員会である。調査の結果、弥生時代終末～古墳時代前期の土壙墓、古墳時代中期の竪穴建物跡、土坑や溝状遺構、ピット群を検出し、弥



第5図 玉泉寺裏遺跡VI・VII区及び九景川遺跡V区 調査区位置図 (S= 1 : 1,000)

第6図 平成17（2005）年度調査区及び平成26（2014）年度調査区位置図 ( $S=1:2,000$ )

第2表 出雲インター線事業地内遺跡の調査一覧

調査年度	遺跡名	調査主体	報告書 刊行年	遺跡の内容	出土遺物
H15 (2003)	浜井場2号墳	出雲市 教委	2005	古墳時代中期の小規模な古墳1基（木棺直葬）、2段彌りの墓坑に石列区画溝と想定される落ち込み	直刀、刀子、鉄簇
H17 (2005)	玉泉寺裏遺跡	出雲市 教委	2008	弥生時代終～古墳時代前期の土壙墓、丘陵頂部に立地する古墳時代中期の發穴住居、古代の集落など	弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器
H17 (2005)	九景川遺跡	島根県 教委	2008	縄文時代～中世の集落遺跡、古墳時代中期・8～9世紀の建物跡を多数検出。古墳時代中期の自然河道における祭祀遺構、鍾倉時代の小規模貝塚など	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、貝塚、錢貨
H18 (2006)	御崎谷遺跡	出雲市 教委 島根県 教委	2009	縄文時代～古代の集落遺跡、加工段や掘立柱建物跡を検出。古墳時代前期～中期を中心とする多量の土器、須恵器、土師器、外來系須恵器が出土	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、木製品
H18 (2006)	間谷東遺跡	島根県 教委	2009	溝状遺構1条、古墳時代前期～中世の土器が出土	土師器、須恵器、土師質土器
H18 (2006)	浜井場4号墳	出雲市 教委	2008	遺構の検出なし	なし
H18 (2006)	間谷東古墳			夷才型木棺を有する古墳時代前期末～中期初頭の小規模古墳	刀子
H19 (2007)	淺柄北古墳			第一主体部は不明。土器棺を伴う前期古墳1基、古墳下方の斜面から横穴墓8穴検出	土師器、須恵器、土器棺
H19 (2007)	間谷西II遺跡	島根県 教委	2009	古墳時代前期の加工段2様、自然流路から古墳時代～中世の土器出土	土師器、須恵器、土師質土器、木製品
H19 (2007)	間谷西古墳群			古墳3基は埋葬施設の検出なし。縄文時代～古代の遺物が少量出土	縄文土器、石器

生時代後期～古墳時代前期にかけての遺物が多く出土している。隣接する九景川遺跡、御崎谷遺跡とともに、一定の規模の集落が存在していた可能性が指摘された。平成20（2008）年3月に報告書が刊行されている。

平成26（2014）年度調査区は、調査当初1区、2区として設定した。位置は、1区がⅢ区からつながる南の丘陵尾根、2区はⅣ区南丘陵平坦面から北東へ降る斜面である。今回の報告書作成にあたって過去調査との整合性をとるために、1区はVI区、2区はVII区として報告することとした。  
**九景川遺跡**

九景川遺跡は出雲平野の南麓裾、丘陵に挟まれた谷間に位置する。調査は、島根県教育委員会によって平成17（2005）年4月～平成18（2006）年1月に実施された。I区～IV区が設定され、調査区面積の合計は3,590m<sup>2</sup>である。縄文時代～近世に至る集落遺跡で、古墳時代中期、奈良時代～平安時代、鎌倉時代の3時期に大規模な建物群を検出している。古墳時代中期前半の竪穴建物跡、掘立柱建物跡群とともに集落を縱貫する小河川における祭祀遺構が発見された。また、Ⅲ区を中心として奈良～平安時代初期の掘立柱建物跡が確認され、8世紀後葉以降の開発により成長した有力農民の居住した集落であった可能性が指摘されている。報告書は平成20（2008）年3月に刊行された。

平成26（2014）年度調査区は、Ⅱ区から50mほど南東に位置していて、谷部と段丘状になつた斜面部にかけて設定した。調査当初は調査区名を付与していなかったが、過去調査との整合性をとるためV区として報告する。

#### 引用・参考文献

- 出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として』  
湖陵町誌編纂委員会 2000『湖陵町誌』  
湖陵町教育委員会 2000『湖陵町遺跡地図』  
島根県教育委員会 2005『畠ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・延田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡 山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』  
島根県教育委員会 2008『九景川遺跡 一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』  
島根県教育委員会 2008『玉泉寺裏遺跡 浜井場4号墳 間谷東古墳 一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』  
島根県教育委員会 2009『御崎谷遺跡 間谷東遺跡 浅柄北古墳 間谷西Ⅱ遺跡 間谷西古墳群 一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』  
島根県古代文化センター 2012『出雲国風土記の研究Ⅳ 神門水海南辺の研究（資料編） 島根県古代文化センター調査研究報告書46』  
島根県古代文化センター 2014『解説出雲国風土記』  
島根県古代文化センター 2015『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究 島根県古代文化センター調査研究集第15集』

## 第3章 玉泉寺裏遺跡(VI区・VII区)の調査成果

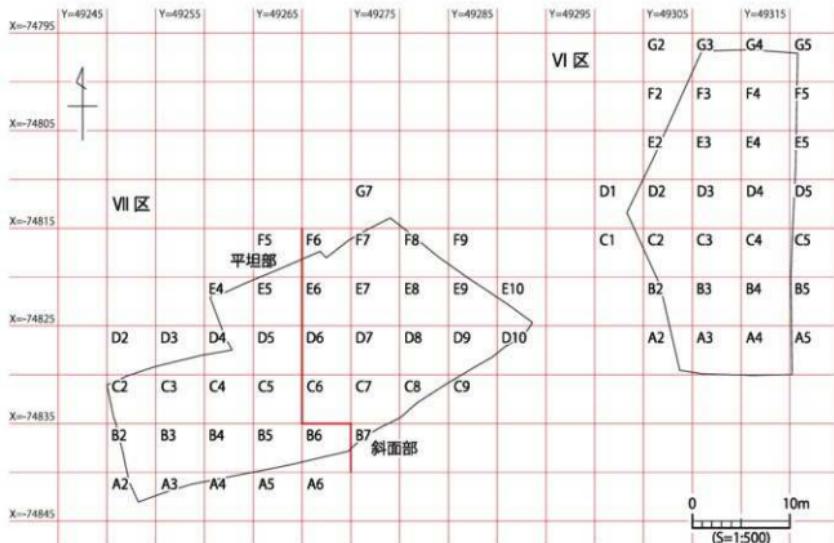
### 第1節 調査の方法

#### 1. 発掘調査区とグリッドの設定(第7図、第8図)

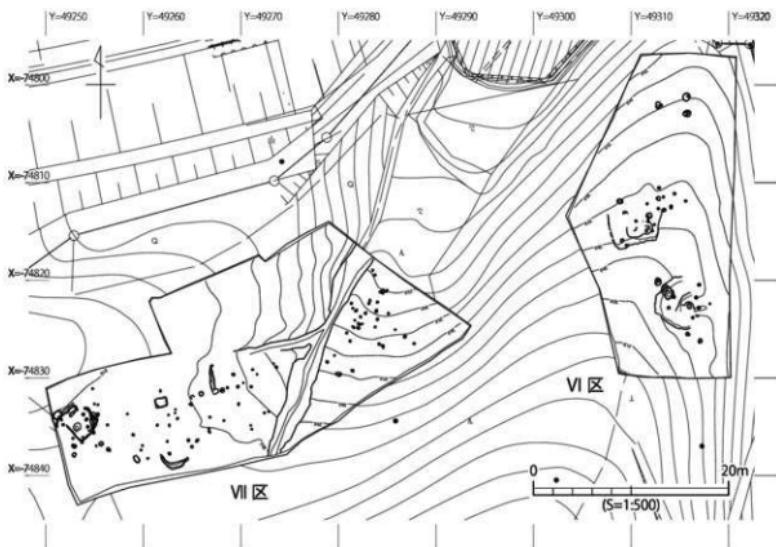
調査は、東側の低丘陵尾根部をVI区、西側の平坦部から斜面部をVII区として設定した。調査にあたり、世界測地系の第III座標系に基づき座標軸を合わせた5m四方のグリッドを設定した。VI区はX=-74835、Y=49300、VII区はX=-74850、Y=49245を原点とし、北に向けてアルファベット順、東に向かってアラビア数字順に呼称した。それぞれの区画は各交点の南西隅をもってグリッド名称とし、遺構等に伴わない遺物はこのグリッドで取り上げを行った。

#### 2. 表土の掘削と遺構の検出

調査地の現況はVI区・VII区とともに雑木林であり、VII区には谷底部から丘陵に上る赤道が継続している。平成25(2013)年の試掘確認調査の結果に基づきバックホウで表土を除去した。包含層上面まで重機で掘削し、包含層は人力掘削で掘り下げながら精査・記録を行った。VI区では地表直下で明赤褐色の地山となったが、VII区では近代と思われる造成土が複数面盛土され、その下層の包含層上面で表土掘削を停止した。表土掘削後はスコップ・鍬によって人力で掘り下げたが、土器が集中する場合は草削り・移植ゴテで掘り下げた。遺構検出は草削り・鋤簾によって精査したが、平面的にある程度の輪郭を確認した後に、サブトレーナによって断面を確認した上で遺構掘削を行う場合が多かった。



第7図 玉泉寺裏遺跡VI・VII区 地区割り図 (S=1:500)

第8図 玉泉寺裏遺跡VI・VII区 調査区平面図 ( $S=1:500$ )

### 3. 遺構掘削

遺構の埋土掘削は、土層観察用のベルトを設定するか遺構を半裁して掘削し、写真撮影後、必要に応じて土層断面図を作成した。遺構内から出土した遺物については一部は出土状況を記録し、その他は出土地点を記録して取り上げた。

### 4. 記録の作成

遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。また、報告書掲載が見込まれる遺物等は遺跡調査システムで出土位置を記録した後に取り上げを行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるもののは $6 \times 7$ 判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）及びデジタルカメラによる撮影を行い、それ以外は35mmフィルムカメラ（モノクロネガ・カラーポジフィルム）及びデジタルカメラで撮影した。

### 5. 自然科学分析

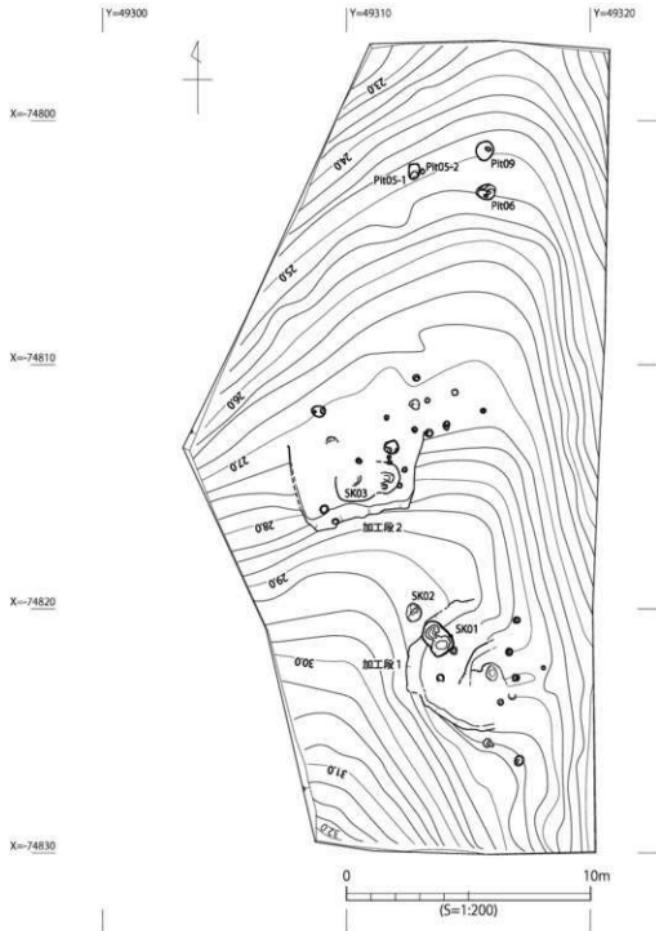
自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託してAMS（放射性炭素 $^{14}\text{C}$ ）年代測定を行った。試料は、発掘調査中に位置を記録して取り上げ、調査終了後に選択した。（第5章参照）

## 第2節 VI区の調査

### 1. 調査区の概略と基本層序

#### 発掘作業と検出遺構（第9図）

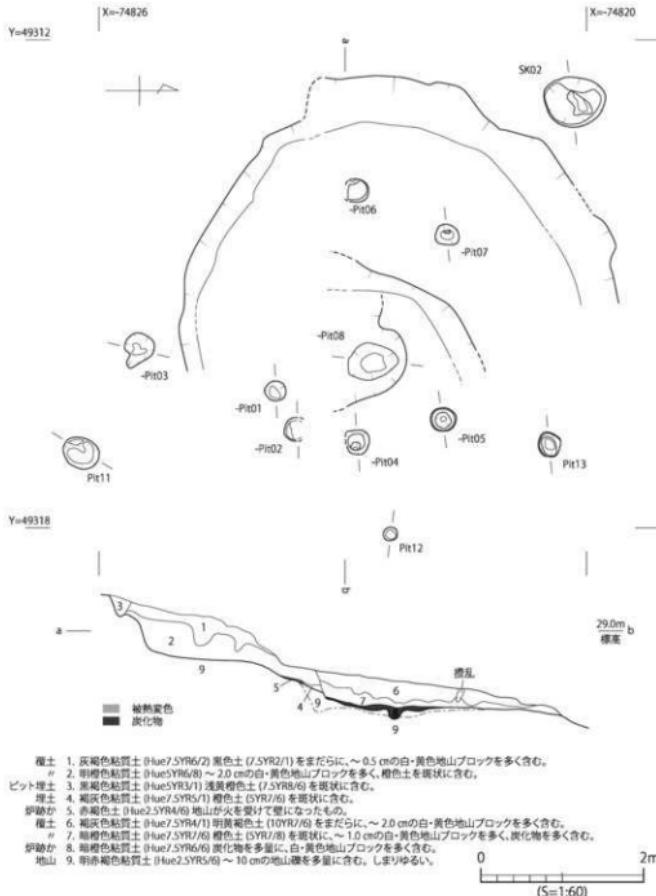
VI区は、雑木伐採後表土を重機によって除去した後、人力により抜根・掘削・精査を行った。調査面積は 501 m<sup>2</sup>である。弥生時代後期の竪穴建物跡 1 棟と、古墳時代後期から奈良時代の遺物を確認した。その他時期不明の柱穴や土坑を検出している。



第9図 玉泉寺裏遺跡VI区 調査区平面図 (S= 1 : 200)

## 基本層序

土層は、地表から腐葉土まじりの灰褐色粘質土が10～20cm堆積し、明赤褐色の地山に達する。当初は調査区の縦断・横断に土層観察用ベルトを設定したが、遺構検出部分以外は表土のみの堆積であったため調査区全体の土層断面図は作成していない。



第10図 玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1実測図 (S=1:60)

## 2. 検出遺構とその遺物

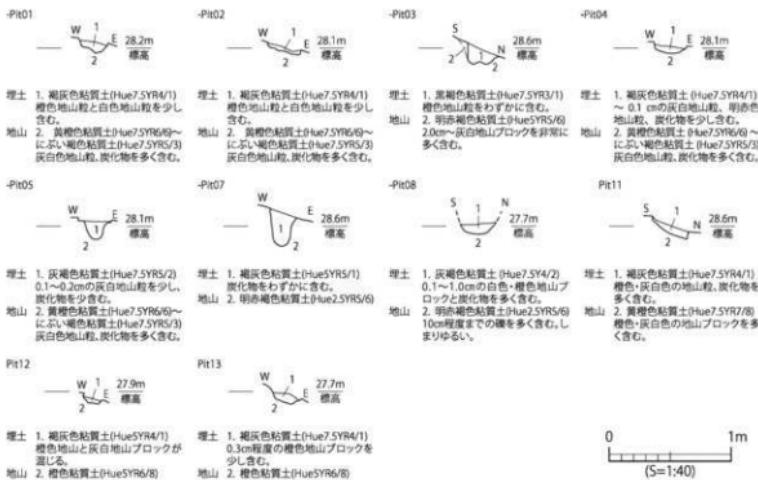
### 加工段1（第10図～第13図）

#### 規模と形態

VI区南側の尾根筋から東向きの斜面で検出した遺構である。試掘調査のトレンド7は遺構の南半分にかかっていて、遺構の埋土とおもわれる土層の掘削時には弥生土器小片が出土している。遺構の縦断ベルトで土層観察した結果掘り直されていることが推測されたが、平面ではその切り合いを検出できなかった。新段階に伴うピットから弥生時代後期後葉の高环が出土したほかは、遺物はほとんど出土していない。古段階の埋土は下層は紀元前1世紀初頭から1世紀前半と判明していることから、弥生時代中期から後期につくられた加工段がある時期に掘り直され、弥生時代後期後葉には廃絶したと考えられる。

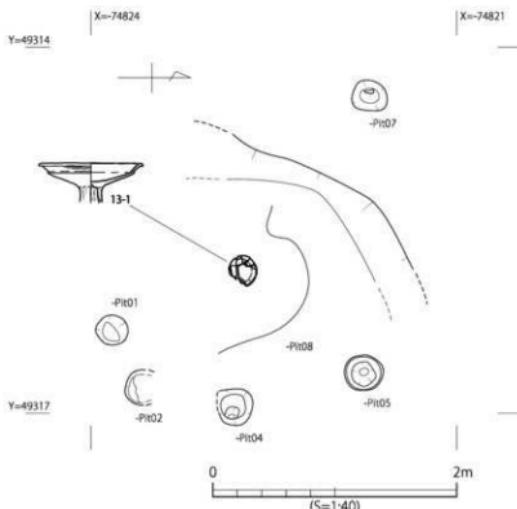
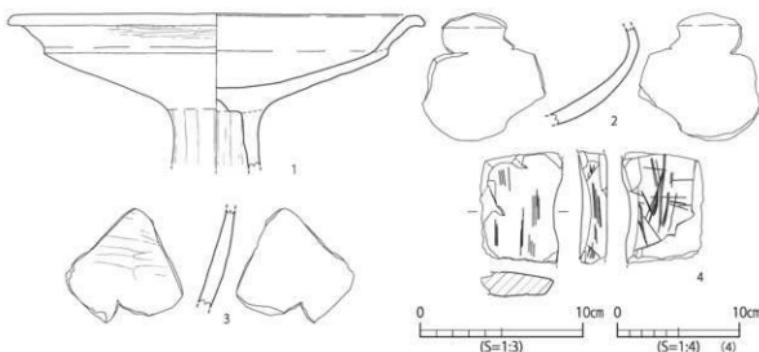
新段階の平面プランは半円形で、標高28.4mで検出した。規模は南北1.5m、東西2.1m、深さ約1.0mを測る。壁際溝は検出していない。古段階の2層から掘り込まれており、上層から6層褐灰色、7層暗橙色粘質土である。6層からは須恵器小片が出土しており、後述する古段階1層と同様に古墳時代の攪乱土と考えられる。8層は地山を2段に掘り込むPit08の埋土で、プランは不整椭円形で焼土と炭化物を多量に含む。南北72cm、東西125cm、深さ15cm前後を測る。弥生時代後期後葉の高环の坏部が上を向いた状態で検出された。脚底部は欠損している。検出状況から人為的に埋められたと推測され、炉跡の可能性がある。他に小規模なピットを検出しているが、埋土は褐灰色粘質土でしまりはゆるく、遺物は出土していない。

古段階の平面プランは半円形で、規模は南北5.35m、東西2.8m、深さ約60cmを測る。北西



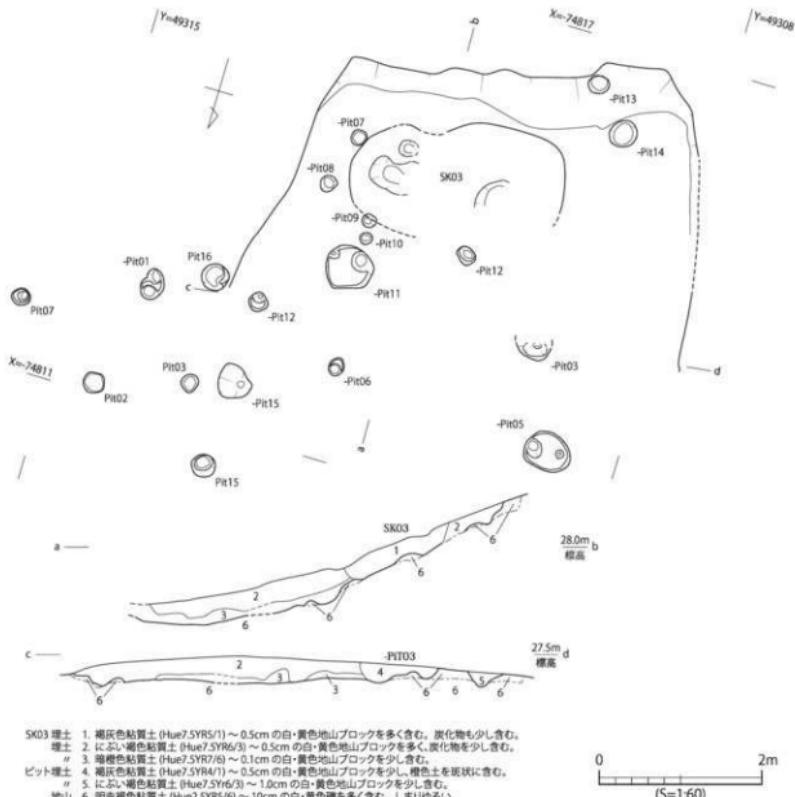
第11図 玉泉寺遺跡VI区 加工段1ピット土層断面図 (S= 1 : 40)

側の一部はSK01に切られている。壁際溝は付帯せず、床面で数基のピットを検出しているが遺物は出土していない。上層から1層灰褐色～2層明るい茶色の粘質土で、5層は被熱により硬化し赤褐色を呈していることから、炉跡の一部とみられるものの残存状況はわずかであり詳細は不明である。AMS年代測定の結果、1層は4世紀末から6世紀前半、2層は紀元前1世紀初頭から1世紀前半という数値が得られている。このことから、1層は古墳時代前期末から後期墳に堆積した擾乱土とみられ、2層は新段階の掘削時に埋められたと考えられる。

第12図 玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1遺物出土状況図 ( $S=1:40$ )第13図 玉泉寺裏遺跡VI区 加工段1出土遺物実測図 ( $S=1:3$ 、 $1:4$ )

## 出土遺物（第13図）

第13図1・2は弥生土器である。1は高環で、环部が2段に造られ口縁端部は平らに外反する。口径は25.6cmを測り、环部はほぼ完形で出土した。風化しているが环部内外面ヨコミガキ、脚部タテミガキが施される。脚部内面には絞り痕が観察され、円盤充填法により接合されている。草田3期に位置付けられる。2は小片のため器種が不明確だが鉢の可能性がある。3は土師器の高環である。环部の一部とみられ、風化著しいが外面にわずかにミガキと丹塗りが観察される。古墳時代中期か。4は凝灰岩製とみられる砥石で、断面は現状長方形を呈す。1面は細かい刃傷痕が観察されることから仕上げ用、2面は荒研ぎ用と考えられる。



第14図 玉泉寺裏遺跡VI区 加工段2実測図 (S= 1 : 60)

### 遺構の性格と年代

遺物がほとんど出土していないため詳細は不明だが、Pit08 から出土した弥生時代後期後葉の高環は人為的に埋められたと考えられ、埋土からも加工段に伴う炉跡と推定される。新段階の加工段はこの時期に廃絶したと考えられよう。古段階の加工段は AMS 年代測定の結果から少なくとも弥生時代後期には埋没している。検出できたピットは浅く小さく、建物は復元できなかったが、弥生時代後期の住居跡と考えられる。

### 加工段2（第14図）

#### 規模と形態

VII区中央部分から北側にかけての斜面で検出した遺構である。試掘トレンチ 12 は遺構の北東側に接した平坦面にあたり、土器片や地山面でピットを検出している。遺構平面プランは南側の斜面上方から掘り込まれ、現状方形である。規模は南北 3.4 m、東西 5.5 m、深さ 30cm を測る。南側の中央付近では SK03 が掘り込まれ、後世の攪乱と考えられる。

土層は 2 層にぶい褐色、3 層暗橙色粘質土が堆積する。2 層上面から掘り込まれるピットは SK03 と同時期と考えられるが、遺物は出土していない。2 層中からは奈良時代から平安時代頃とみられる須恵器小片が出土しているものの、器種は不明である。また 3 層下面の地山を掘り込むピットを検出するものの、規模は小さく建物の復元はできなかった。

#### 出土遺物

土師器や須恵器坏が出土しているが、小片のため図化しておらず時期は不明である。

### 遺構の時期と性格

遺物はほとんど出土しておらず、詳細は不明である。

### SK01（第15図）

#### 規模と形態

加工段 1 の北東部分で検出した。古段階の平面プランを切って掘り込まれている。南北 1.45 m、東西 1.0 m、深さ 30cm を測る。埋土は単層で、黄橙色の地山ブロックと炭化物を多く含む灰褐色粘質土が堆積する。北西には SK02 が隣接している。遺物は小片であり器種や時期は不明である。

### 遺構の時期と性格

遺物は小片しか出土しておらず、遺構の詳細は不明である。

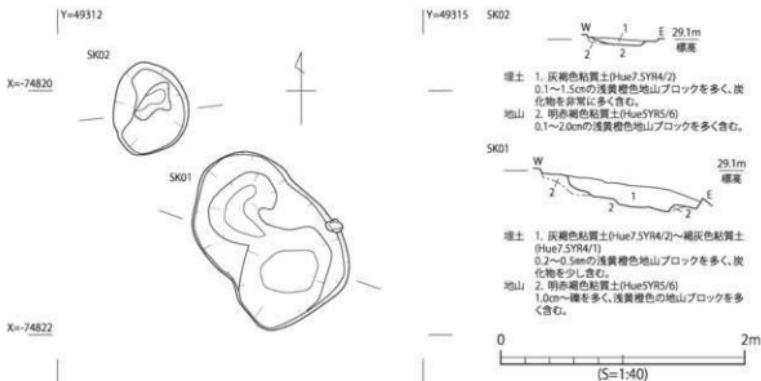
### SK02（第15図）

#### 規模と形態

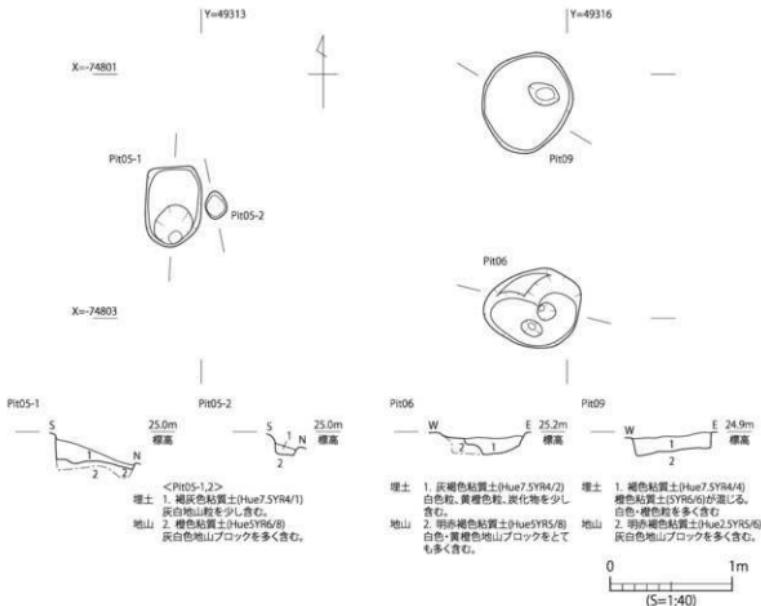
SK01 北西の平坦面に位置し、南北 75cm、東西 62cm、深さ 7cm を測る。埋土は SK01 同様单層で、褐色粘質土である。遺物は出土していない。

### 遺構の時期と性格

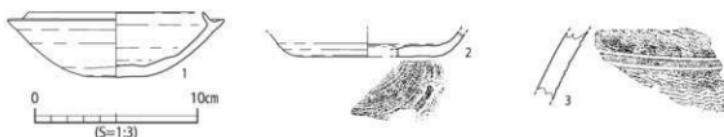
詳細は不明である。



第15図 玉泉寺裏遺跡VI区 SK01、SK02 実測図 (S= 1 : 40)



第16図 玉泉寺裏遺跡VI区 Pit05、Pit06、Pit09 実測図 (S= 1 : 40)

第17図 玉泉寺裏遺跡VI区 出土遺物実測図 ( $S=1:3$ )

## Pit05、Pit06、Pit09（第16図）

## 規模と形態

いずれもVI区北側の緩やかな斜面で検出した。規模は南北22cm～85cm、東西19cm～80cm、深さ10cm～16cmを測る。地山を掘り込み、灰褐色から褐色粘質土が堆積している。遺物は出土していない。

## 遺構の時期と性格

詳細は不明である。

## 3. 遺構外出土遺物

VI区から出土した遺物はごくわずかで、図化できたものは3点のみである。1はG4、2はC4グリッドで出土した。古墳時代後期後半から奈良時代にかけての遺物とみられるが、いずれも表土からの出土である。

## 須恵器（第17図）

第17図1～3はVI区表土から出土した須恵器である。1は壊身である。復元口径は10.8cmで、口縁部の立ち上がりは0.7cmと低く内傾する。外底面は回転ヘラケズリと回転ナデが観察されるが、自然釉がかかり不明瞭である。大谷4期に属する。2は皿底部で、底外面に回転糸切り痕がみられる。3は頸部の小片である。沈線2条、波状文2段以上が施され、波状文はゆるく崩れている。

## 第3節 VII区の調査

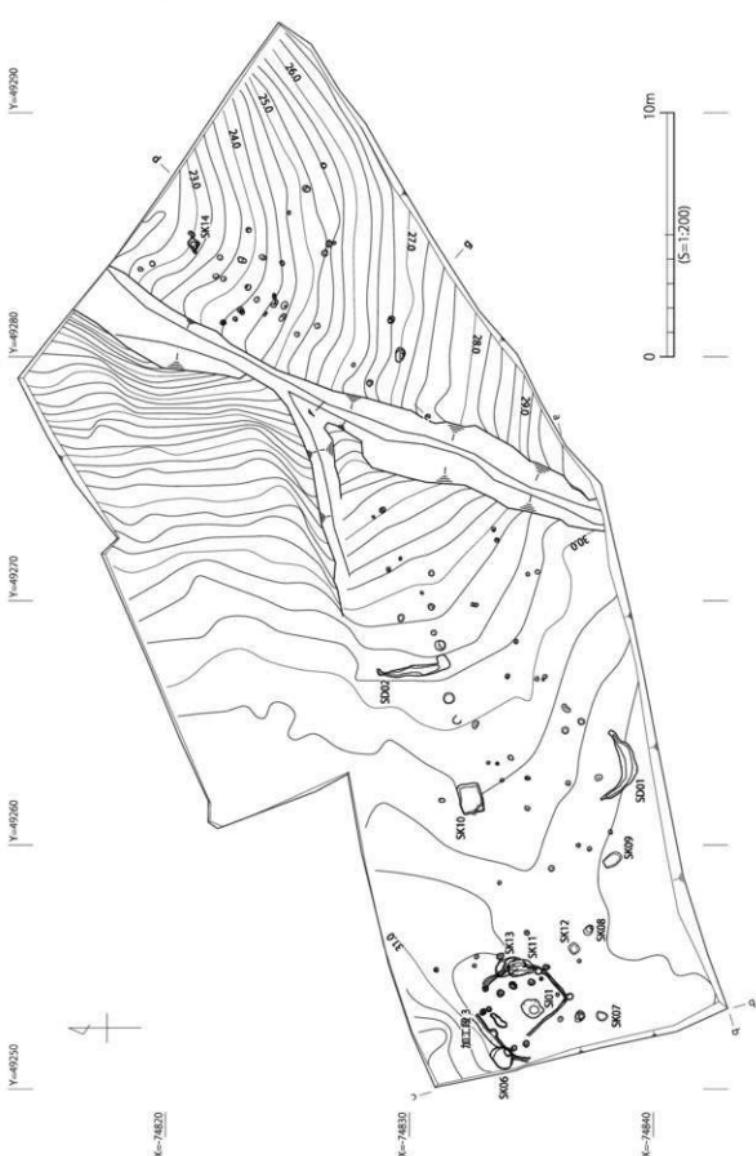
## 1. 調査区の概略と基本層序

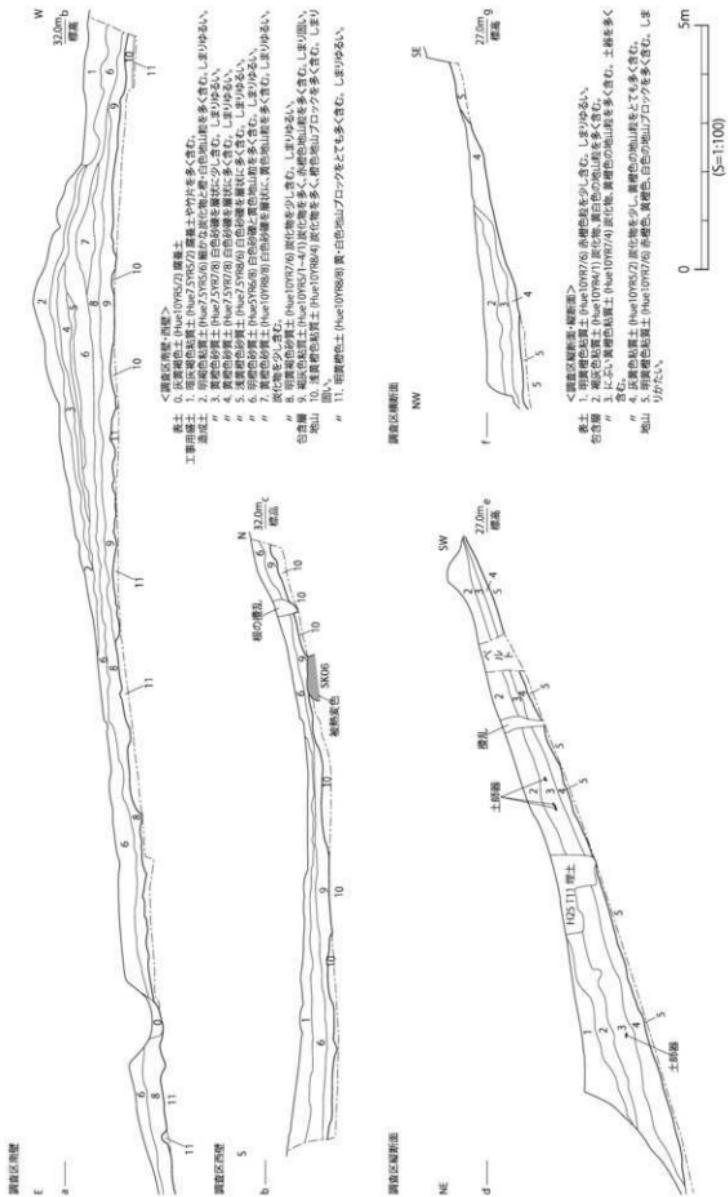
## 発掘作業と検出遺構（第18図）

VII区は、丘陵頂部の平坦部から谷間の斜面部かけて設定した。西側の平坦面からバックホウで表土掘削を行い、斜面部は降りながら作業を行った。調査区中央の北側平坦面と東に降る急斜面では、表土10cm程度で地山を検出した。遺構も確認されなかつことから、重機掘削のみで調査を終了している。西側平坦部とそこから降る斜面部は、重機掘削後に人力で抜根、掘削、精査を行った。調査面積は740m<sup>2</sup>である。弥生時代後期後葉の竪穴建物跡1棟と、古墳時代後期以降の土坑1基、平安時代の土坑1基を確認した。その他時期不明の溝状遺構、土坑、多数のピットを検出している。

## 基本層序（第19図）

VII区は東西に長く、平坦部と斜面部それぞれに分割して土層観察ベルトを設定した。平坦部は、調査区の南壁・西壁と縦断・横断ベルトで土層を確認した。縦断・横断ベルトは包含層掘削時に確認用として利用し、地山検出後撤去した。

第18図 玉泉寺裏遺跡VII区 調査区平面図 ( $S=1:200$ )



第19図 玉泉寺裏遺跡VII区 土層断面図 (S= 1 : 200)

平坦部は、標高 30.5 m の 9 層より上層は、近世以降の造成土とみられ、黄橙色系の山土を主体として 16cm ~ 166cm 盛土されたと考えられる。平坦部の南北にはマウンドが確認されており古墳と考えられていたが、試掘調査結果から古墳の可能性は否定されていた。9 層は褐灰色粘質土で、3cm ~ 35cm 堆積する。AMS 年代測定で 11 世紀末から 13 世紀の年代を得た SK06 を覆って堆積しているため、少なくとも中世以降の包含層と推測される。VII 区平坦部の SK06 以外の遺構は、9 層を除去後の地山（10 層）上面で検出している。9 層からは土師器、須恵器などが出土しているが、斜面部に比べると出土数は極端に少ない。

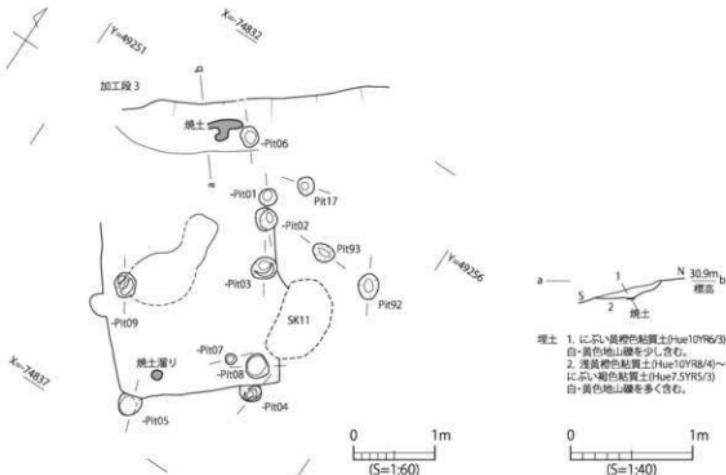
斜面部は、包含層が厚く堆積していた。縦断・横断ベルトで土層を確認している。2 層褐灰色粘質土（平坦部 9 層に相当）より下層に 2 面の包含層を検出した。3 層はにぶい黄橙色粘質土で土器を多く含み、4 層は地山に近い灰黄色粘質土で炭化物を含む。2 ~ 4 層からは弥生時代から平安時代までの土器が混在し、時期差は確認できなかった。5 層地山上面で検出した遺構は小規模なビットのみで、数は多いものの斜面に掘り込まれ規則的な配置は認められず、建物の復元は想定し難い。出土遺物は丘陵頂部や平坦面に位置する遺構から流れ込んだものと考えられる。

## 2. 検出遺構とその遺物

### SI01（第 20 図～第 25 図）

#### 規模と形態

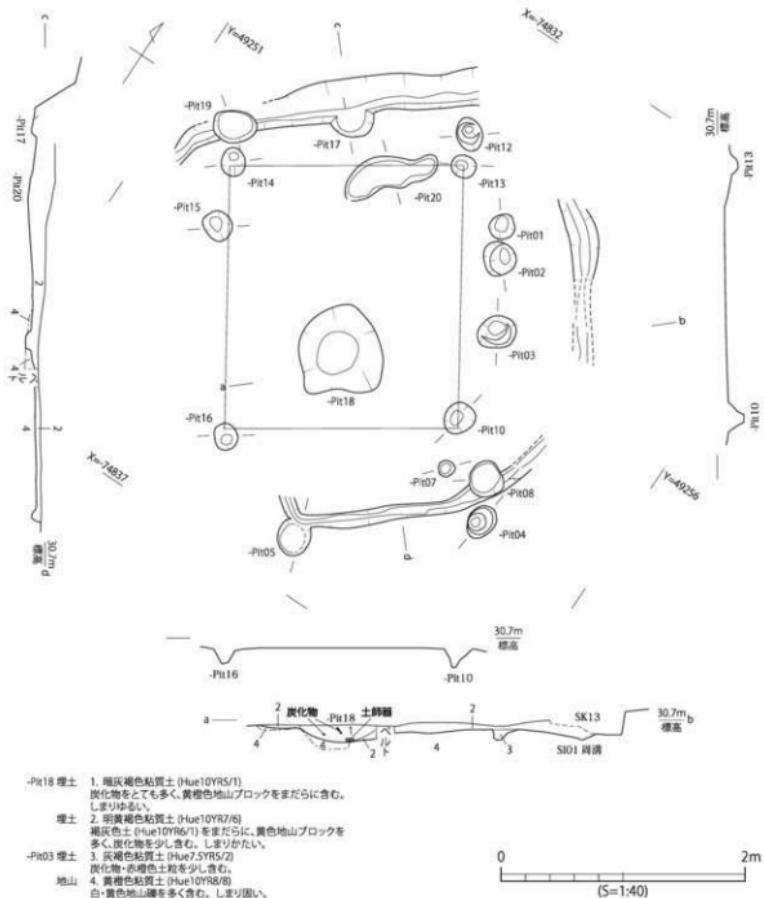
平坦部北西で検出した。表土掘削後の精査時から遺物が露出しており、後世の削平をかなり受けているとみられる。現状の規模は南北 3.63 m、東西 2.72 m、深さ 10cm を測り、Pit18 を主柱穴とする 4 本柱の竪穴建物跡であると考えられる。



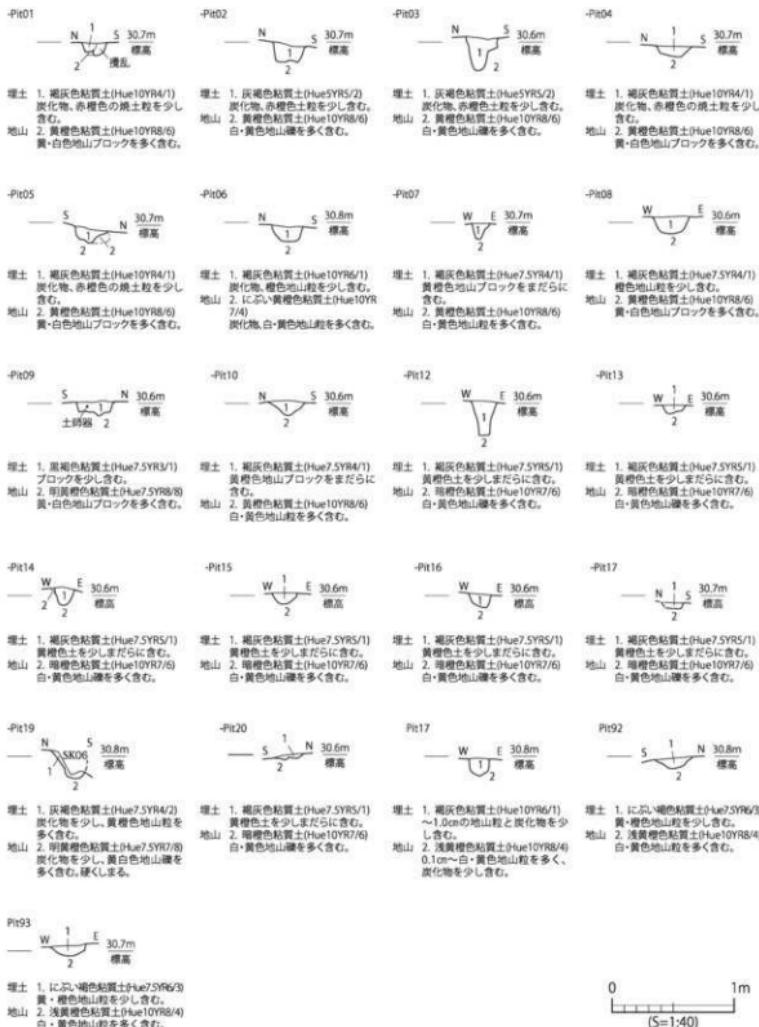
第 20 図 玉泉寺裏遺跡 VII 区 SI01 遺構実測図（1）(S = 1 : 40, 1 : 60)

当初検出した平面プランは方形で、上面から数基のピットが掘り込まれ、東側はSK11、SK13に切られていた。プランと同時に検出した弥生時代後期後葉の甕や砥石等は、やや北よりで検出した台石以外、炭化物が集中する Pit18 上面で出土した。上面から掘り込まれたピットは地山面まで掘り込む。埋土は褐色系の粘土單層がほとんどで、深さは 7cm～27cm と浅い。このうち 2 基から弥生土器の複合口縁片、3 基から土器の小片が出土している。

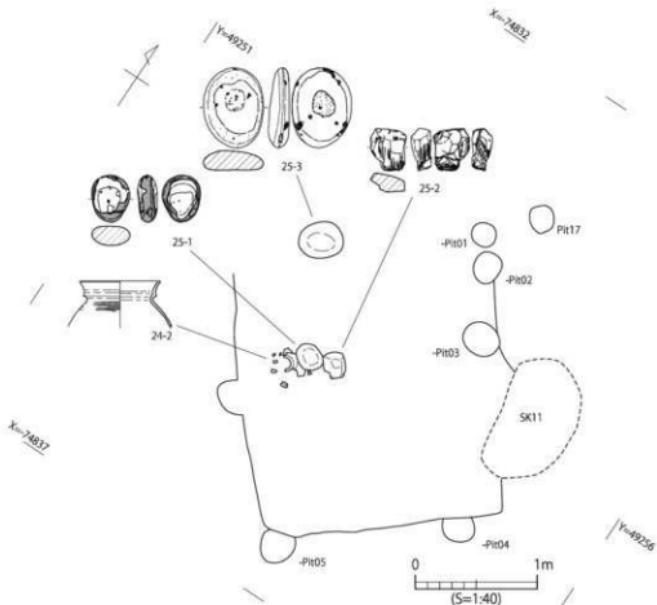
プラン検出後、土層観察用ベルトを十字に設定し、サブトレーンで確認をしながら掘削を行った。全面に硬い 2 層明黄褐色粘質土が堆積し、Pit18 埋土の 1 層暗灰褐色は炭化物を多く含む。2 層からは土器が少量出土するが、いずれも小片で摩滅が激しい。南側では、プランに沿って幅 10～15cm、深さ 8cm の壁際溝を検出した。2 層よりもやや暗く、灰褐色系の粘質土が堆積している。



第21図 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01 遺構実測図（2）(S= 1 : 40)



第22図 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01ピット土層断面図(S=1:40)



第23図 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01 遺物出土状況 (S= 1 : 40)

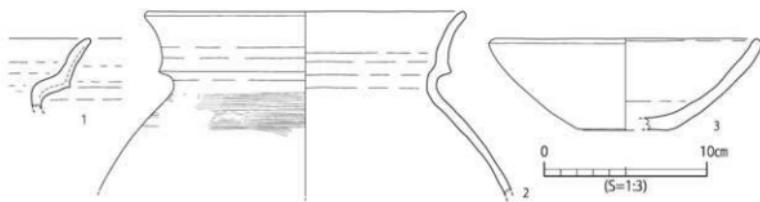
SI01の北側にある加工段3の底面からは、小規模な焼土溜まりとピットを検出した。さらに下層にはSI01に伴うとみられる壁際溝やピットが数基遺存していた。このことから、加工段3はSI01より新しい時期の遺構と判断した。この加工段3の西端は、後述するSK06に切られている。SK06は平安時代末～鎌倉時代の炭窯と考えられ、加工段3は少なくとも平安時代以前の遺構であるといえる。

SI01床面で検出したピットは直径20cm程度で、おむね上層から掘り込まれるピットと同規模である。深さは10cm～15cmで、褐色系の粘質土が堆積する。ピットから遺物は出土していない。

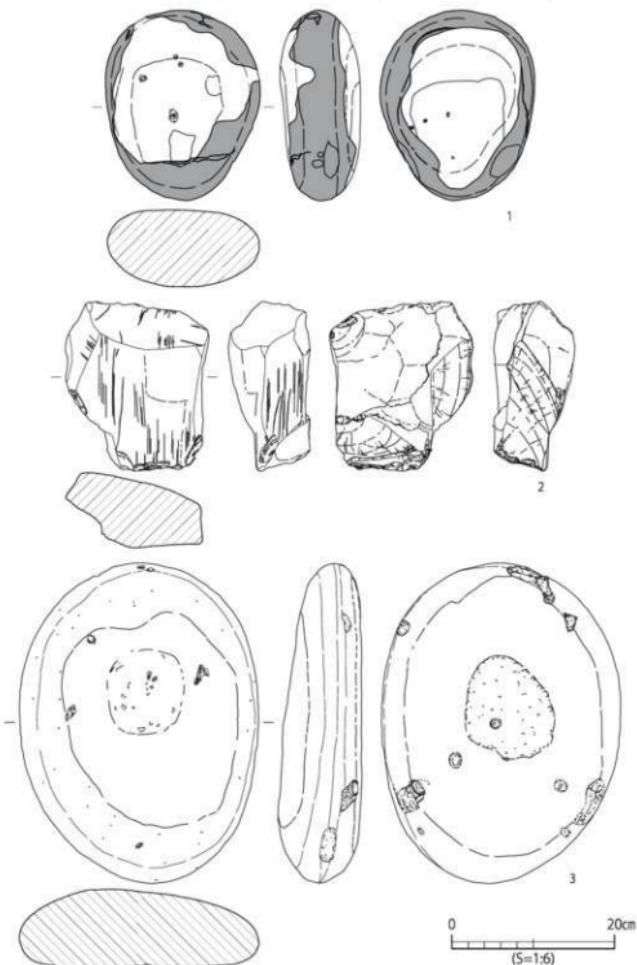
#### 出土遺物（第24図・第25図）

第24図1・2は弥生土器の甕である。1は複合口縁部の小片で、口縁内外にヨコナデが観察される。複合部は小さく突出する。2は複合口縁から肩部で、復元口径19.4cmを測る。風化しているが、口縁外面はヨコナデ、肩部はヨコ方向のハケ目、内面はヘラケズリが観察される。口縁は薄い造りでとがらせる。いずれも草田5期に属する。3は土師器の環か高环である。復元口径は16.2cmで、口縁はやや内湾して端部を単純に仕上げてある。風化のため調整は不明である。

第25図1～3は石製品である。1は長さ23.5cm、幅19.0cm、厚さ9.9cmの凝灰岩製とみられる台石である。断面は不整梢円形で、表裏面に研磨痕がある。縁辺部は全体に被熱し、赤褐色に変色している。2は砂岩製とみられる砥石で、一部欠損する。3面はよく研磨され鉄器による刃先痕が観察される。3は長さ39.2cm、幅29.3cm、厚さ10.3cmを測る台石で凝灰岩製か。断面は不整梢



第24図 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01出土遺物実測図 (1) (S= 1 : 3)



第25図 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01出土遺物実測図 (2) (S= 1 : 6)

円形で、表裏面に使用痕があり、両面中央付近と側面には敲打痕が観察される。そのほかにも、小片のため図化できなかったが弥生時代後期とみられる複合口縁片が複数出土している。

### 遺構の時期と性格

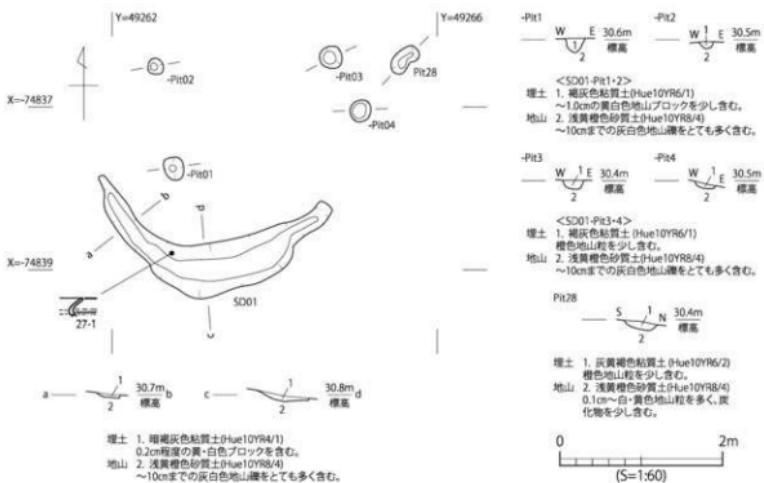
Pit18 の AMS 年代測定の結果、紀元前 1 世紀初頭から 1 世紀中頃という数値が得られており、草田 5 期の甕が出土していることから、弥生時代後期後葉に位置づけられる堅穴建物跡と推定される。

### SD01（第 26 図）

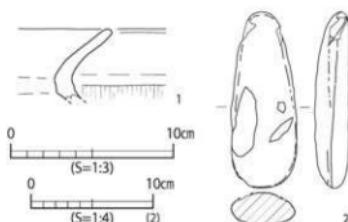
#### 規模と形態

平坦部中央付近の南壁際で検出した溝状遺構である。平面プランは東西方向に 2.9 m を測り、北に向かって弧を描く。幅は 20cm ~ 65cm を測る。埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質土単層で、10cm と浅い。埋土からは古墳時代中期頃の土師器と、小片が少量出土する。

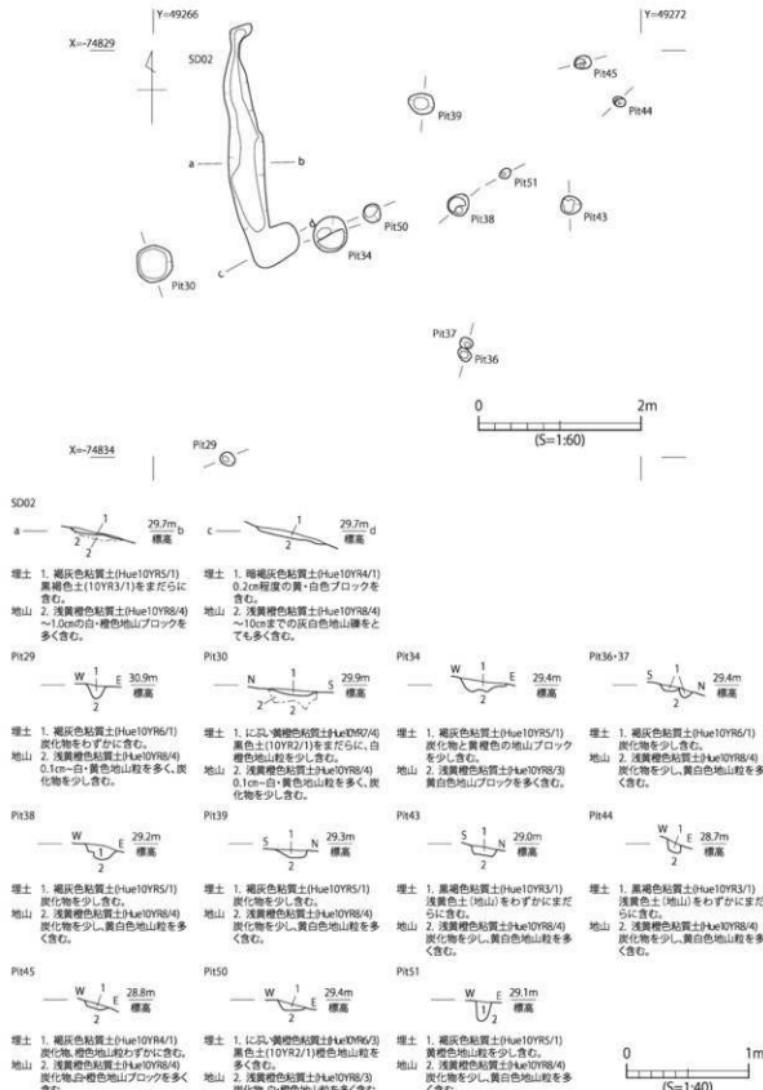
北側には直径 19cm ~ 40cm のピットが散見される。地山面に掘り込まれ、灰褐色粘質土が堆積する。深さは 10cm 程度で、遺物は出土していない。



第 26 図 玉泉寺裏遺跡 VII 区 SD01 遺構実測図 (S= 1 : 60)



第 27 図 玉泉寺裏遺跡 VII 区 SD01 出土遺物実測図 (S= 1 : 3, 1 : 4)



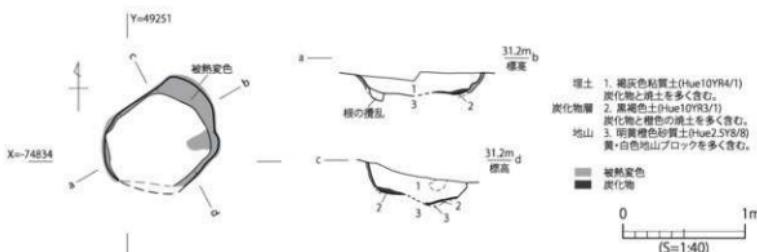
第28図 玉泉寺裏跡地VII区 SD02、周辺ピット実測図 (S=1:40, 1:60)

## 出土遺物（第27図）

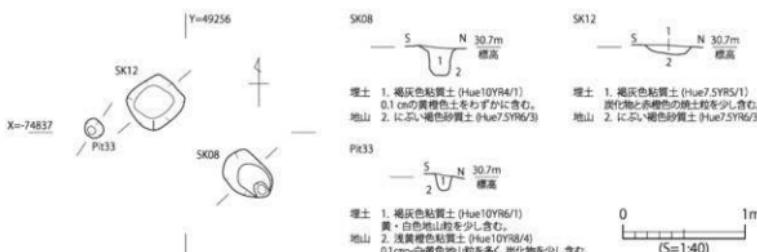
第27図1は土師器の縁口縁部である。単純口縁で肩部外面にわずかにハケ目が観察されるが、風化のため調整は不明瞭である。古墳時代中期以降に位置づけられるか。2は砂岩か安山岩製で長さ14.5cm、幅5.4cm、厚さ2.8cmを測る。磨製石斧様の形状だが刃部や使用痕などは観察できず、未完成の可能性もある。

## 遺構の時期と性格

出土遺物はわずかで詳細は不明である。



第29図 玉泉寺裏遺跡VII区 SK06 実測図 (S= 1 : 40)



第30図 玉泉寺裏遺跡VII区 SK08, SK12 実測図 (S= 1 : 40)



第31図 玉泉寺裏遺跡VII区 SK09 実測図 (S= 1 : 40)

## SD02 (第28図)

## 規模と形態

平坦部東側の斜面にかかる部分で検出した溝状遺構である。平面プランは現状長さ3.0m、幅44cmで南北に走る。南端は東に丸く屈曲していて、ピット状を呈する。地山ブロックを含む灰褐色から暗褐灰色の粘土質が堆積し、断面は浅い皿状になっている。深さ10cm程度で、遺物は出土していない。

周辺では直径12cm~45cmのピットを検出したが、いずれも浅く遺物は出土しなかった。

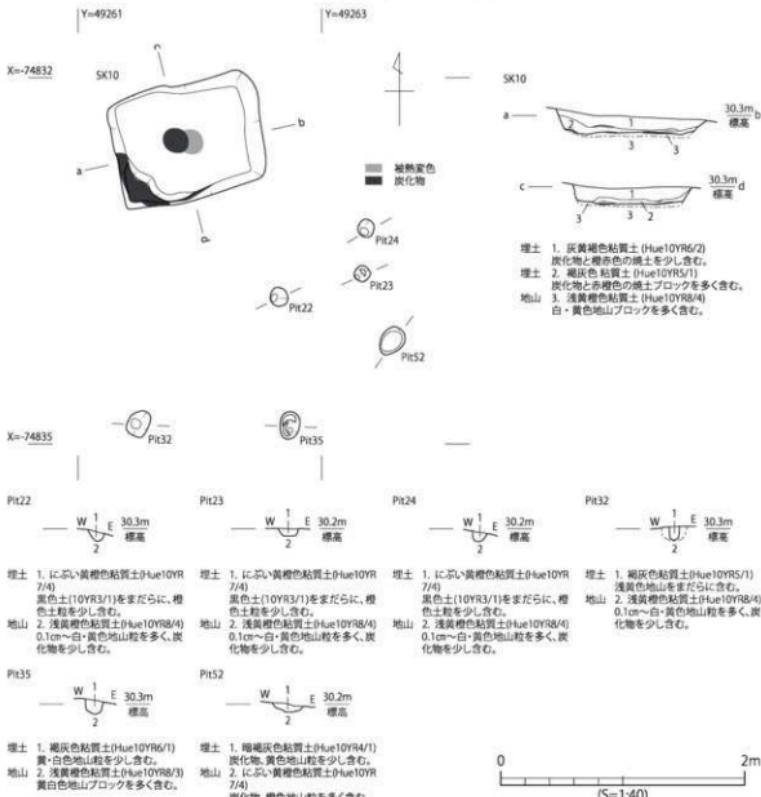
## 遺構の時期と性格

遺物は出土しておらず、時期の特定は困難である。

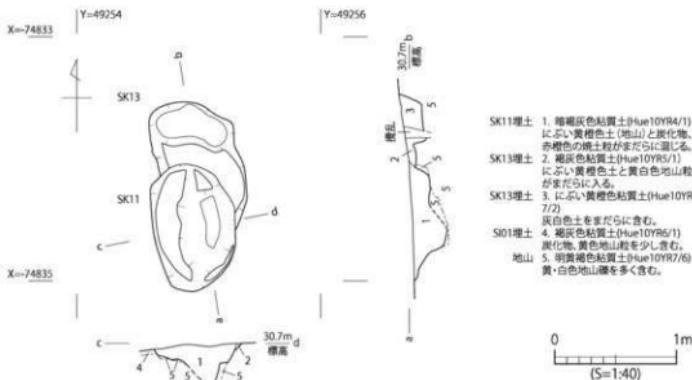
## SK06 (第29図)

## 規模と形態

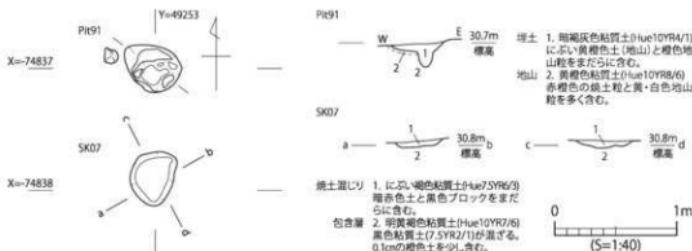
平坦部西壁際で検出した土坑である。平面形は不整の隅丸方形で、コンクリート製の境界杭が打



第32図 玉泉寺裏遺跡VII区 SK10、周辺ピット実測図 (S= 1 : 40)



第33図 玉泉寺裏遺跡VII区 SK11、SK13実測図 (S= 1:40)



第34図 玉泉寺裏遺跡VII区 SK07、Pit91 審査図 (S= 1 : 40)

ちこまれた南西角部分は崩れていた。検出規模は南北 0.8 m、東西 1.4 m、深さ 35cm を測る。遺構は包含層下面から掘り込まれ、壁面内周は粘土貼りは見られなかったが赤橙色に変色し被熱により硬化している。一方床面中央部分はほとんど熱変していない。土層は、1 層褐色灰質土で炭化物や焼土が多量に含まれ、それより下層に細かな炭化物と焼土のみで構成される 2 層が 3cm と薄く堆積していた。加工段 3 の西端を切って掘り込んでいるとみられる。遺物はほとんど出土していない。

## 遺構の時期と性格

土師器小片が出土しているか時期は不明である。2層から採取した炭化物をAMS年代測定にかけたところ、11世紀中頃～13世紀前半という数値が得られた。このことから、平安時代に機能していた小型の製炭窯と推察される。

### SK08、SK12（第30図）

規模と形態

SK08, SK12ともに、平坦部のSI01より南東側に位置する土坑である。包含層掘削後、地山直上で検出した。SK08は平面プランが不整椭円形で、南北45cm、東西32cm、深さ24cmである。

2段掘りで床面は平坦になる。SK12は40cm四方の方形プランを呈す。埋土は炭化物と焼土を少量含み、8cm堆積する。いずれも遺物は出土していない。

#### 遺構の時期と性格

SK08については詳細は不明である。平坦面一体では地山直上でいくつかピットを検出していることから、これらと同時期になんらかの施設を構成していた可能性もある。SK12は、壁面や床面は被熱しておらず土坑自体で焼成を行った可能性は低い。周辺に同様な遺構が存在することからも、焼土溜まりであると推測される。

#### SK09（第31図）

##### 規模と形態

平坦部中央の南壁付近、SD01西側で検出した遺構である。平面プランは楕円形で、南北58cm、東西50cm、深さ10cmを測る。包含層上面で検出しており、全体に炭化物と明橙色の焼土粒を含み床面付近には特に炭化物が多く堆積する。土師器小片がわずかに出土する。

#### 遺構の時期と性格

詳細は不明であるが、SK12同様に焼土溜まりであると考えられる。

#### SK10（第32図）

##### 規模と形態

平坦部中央の包含層掘削後、地山直上で検出した。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北1.0m、東西1.2m、深さ24cmを測る。1層は焼土混じりの灰黄褐色粘質土が10cm程度堆積し、2層は炭化物と赤変した焼土ブロックが硬化した状態であった。SK06とは違い、壁内外周には粘土の貼り付けや硬化はみられない。炭化物は特に南半分に集中していて、南壁角には炭材が残存していた。床面中央付近では、炭化物集中地点と被熱変色した部分をピット状に検出している。

土坑墓の可能性もあったことから埋土は土嚢袋で持ち帰り洗浄して微細遺物の検出を試みたが、土師器小片しか出土しなかった。

#### 遺構の時期と性格

遺物は小片のため時期が特定できないが、一方で、2層中の試料のAMS年代測定では、5世紀前半から6世紀中頃という結果が得られた。炭材がそのままの形状で残存していたことからも、古墳時代中期から後期の炭窯か土器焼成坑の可能性もある。

#### SK11、SK13（第33図）

##### 規模と形態

平坦部西側のSI01東側で検出した土坑で、ともにSI01を切って掘り込まれている。平面プランはいずれも南北に長い楕円形で、SK11はSK13を切っている。

SK11は南北105cm、東西68cm、深さ30cmを測る。2段に掘り込まれ、堆積する暗褐灰色粘質土には少量の炭化物と焼土粒が含まれる。SI01の南東側を切っており、遺物は須恵器と土師器小片が出土した。

SK13は南北105cm、東西55cm、深さ20cmを測る。南西半分をSK11に切られている。上面からの攪乱も影響して残存状況は悪いが、褐灰色からにぶい黄橙色の粘質土が堆積する。須恵器、土師器の小片が出土している。

### 遺構の時期と性格

いずれも出土遺物からの時期の特定は困難である。切り合い関係から考えると、SK11はSI01を切っていることから、弥生時代後期以降の土坑であるといえる。SK13はSK11に切られていることから、遺構の時期はSI01→SK13→SK11となり、中世以降の包含層以前に形成されたと推定される。

#### Pit91、SK07（第34図）

##### 規模と形態

SI01の南に隣接して検出したピットと土坑状遺構である。いずれも検出プランは不整円形を呈す。Pit91は南北36cm、東西48cmで、2段に掘り込まれる。熱変した暗赤色土と炭化物が堆積していた。遺物は出土していない。

SK07は包含層上面から掘り込まれる遺構である。南北42cm、東西41cmで、断面は浅い皿状で5cmの焼土と炭化物が堆積していた。遺物は出土していない。

### 遺構の時期と性格

いずれも壁面に被熱変色が見られないことから、炉などの機能をもった遺構ではなく、付近で発生した焼土を処理するための作業用土坑の可能性が高い。出土遺物がないことから、時期の特定は困難であるが、SK07はSK09と同様に包含層上面から掘り込まれることから、中世以降の包含層よりも新しいと推測される。

### 3. 遺構出土遺物（第35図～第37図）

遺構以外の包含層から出土した遺物は、出土位置を記録するかグリッド一括で取り上げ、図化できるものを掲載した。弥生土器と土師器は9割方が谷部のB7～G8グリッドから、須恵器は平坦面で出土した。

#### 弥生土器（第35図）

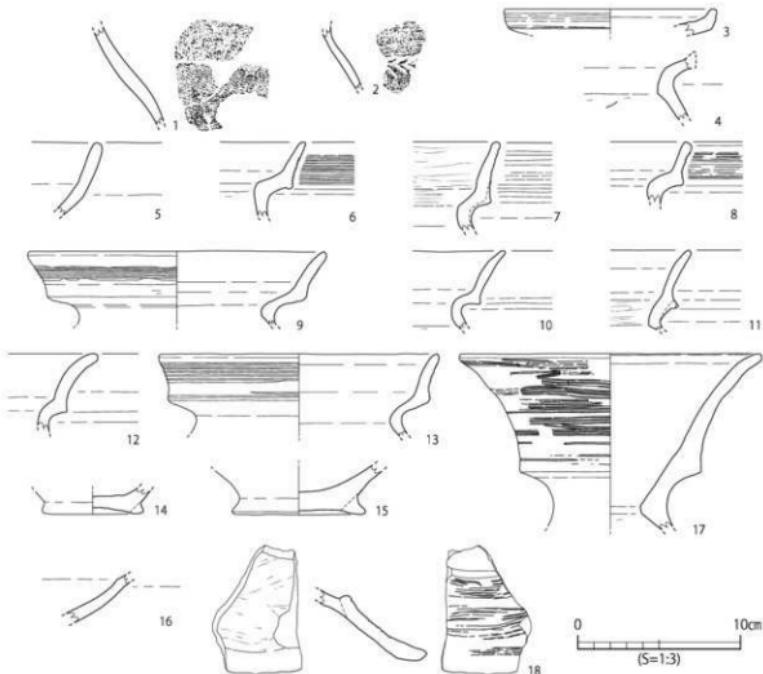
第35図は弥生土器である。1・2は壺か甕の肩部である。1の肩部にはクシ描き波状文と直線文が施され、内面は風化している。同一個体と思われる破片も出土しているが復元できなかった。松本II～III期に位置付けられる。2の肩部には、貝かクシ状工具での羽状文が施される。羽状文上部には区画するための沈線が2条認められる。松本I期後半の可能性がある。3～4、6～13は壺または甕の口縁部から頸部である。3は口縁上端を上方につまみ上げ、外面上にはかろうじて凹線文が2～3条観察される。復元口径は12.8cmで、松本IV期か。4は口縁端部を欠くが、3同様上方につまみ上げ、弥生後期から終末期に相当する可能性がある。5は鉢か無頸壺の可能性があるが、小片で調整風化のため時期不明である。6～13は甕の複合口縁である。6・8は口縁外面に擬凹線文が10条程度施され複合部下方につまむように突出する。7は沈線文のちナデ、内面はヨコ方向のミガキがみられる。9は外面上に5条の沈線文が施文され、口縁外端と突部のみナデ消している。復元口径は18.2cmである。10はほとんど風化しており、口縁端部は薄く尖る。頸部に黒斑がみられる。11は口縁外面ナデで、内面下半にはミガキが認められることから、上半にも同様にミガキが施された可能性がある。12は全体に風化しており、屈曲部の一部には煤が付着している。復元口径は17.1cmである。6～9は草田3期、10～12は草田5期、13は松本V・4期に位置付けられる。14・15は貼付高台状の底部で、14は全体に風化しているが底外面に粗雑な同心円ナデが認められる。復

元底径は 6.2cm である。15 は内面はミガキのように丁寧なつくりで、底外面は 14 同様粗雑なナデがみられる。復元底径は 8.2cm で、時期はいずれも弥生中期から後期に位置付けられよう。16 は端部が欠損しているが高环の环部である。内外面にミガキが施され、内面には明瞭な段があり口縁部に向かって外反する。松本 V - 3 ~ 4 の可能性がある。17・18 は鼓型器台である。17 は器受部から筒部がわずかに残存し、器受部外面には貝殻復縁による沈線文のちナデ消しているが、ナデは波打つように緩やかにゆがんでいる。内面がミガキのようにみられるため器受部と判断した。復元口径は 18.5cm、筒部内径 3.6cm である。唯一平坦部の B2 グリッドから出土した。18 は基部の複合部とみられ、外面には擬凹線文が波打つように施される。時期はいずれも草田 3 期と考えられる。

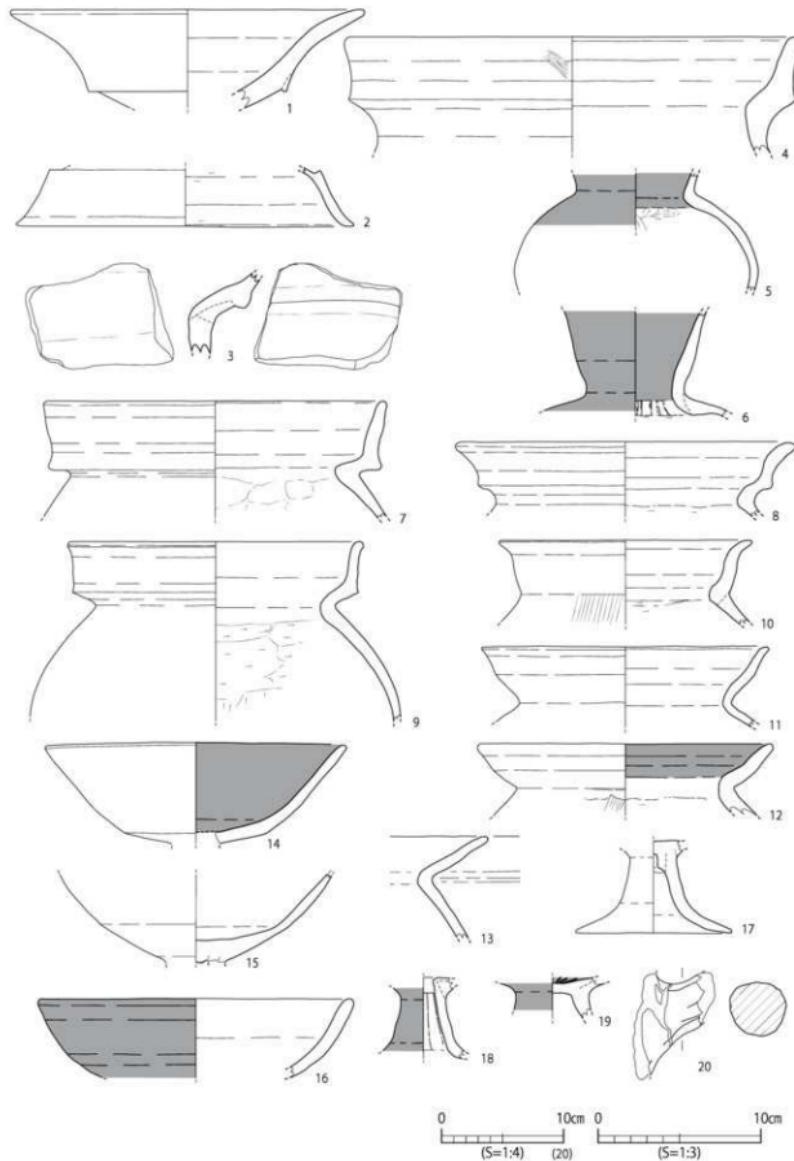
#### 古式土師器及び土師器（第 36 図）

第 36 図は古式土師器及び土師器である。1・2 は古式土師器の鼓型器台である。1 は風化のため調整不明だが、突出部があり、内面は緩やかに碗状となっていることから器受部口縁端部から体下部と判断した。復元口径は 21.7cm である。松山 II 期に分類される。2 は基部と判断した。器壁は薄く端部は軽く外反する。外面は風化しているが、内面にはケズリが認められる。復元底径は 22.3cm を測る。時期は松山 I 最古型式の可能性がある。

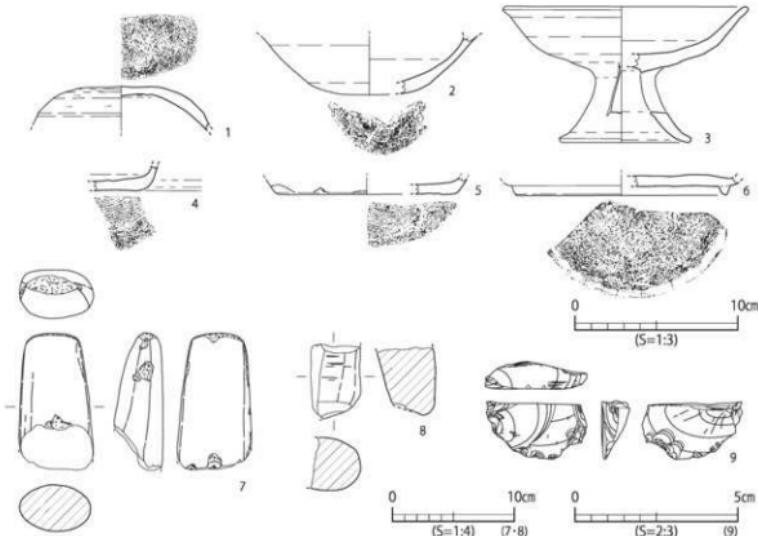
3・4 は壺の複合口縁部から頸部である。3 は外面にヨコナデが認められる以外は風化により調



第 35 図 玉泉寺裏遺跡 VII 区 包含層出土遺物実測図 (1) ( $S = 1 : 3$ )



第36図 玉泉寺裏遺跡VII区 包含層出土遺物実測図（2）（S=1:3、1:4）

第37図 玉泉寺裏遺跡VII区 包含層出土遺物実測図(3) ( $S=2:3$ 、 $1:3$ 、 $1:4$ )

整不明である。松山Ⅱ～Ⅲ類に分類される。4は外面にクシ描き波状文が一部残存し、内面はヨコナデがみられる。口縁部は厚く短く、復元口径は27.5cmである。松山Ⅲ期に分類されるか。

5・6は丹塗りの直口壺の頸部から体部である。5は頸部下半がケズリによって調整され、他はナデの後丹塗りを施す。6は接合部に指ナデがみられ、他はミガキ調整をしている。いずれも口縁端部は欠損しているが、松山Ⅲ期以降と考えられる。

7～11は古式土師器壺の複合口縁から胴部で、復元口径15.5cm～21.0cmである。7の内外面はヨコナデで肩部にはヘラケズリがみられる。口縁外面はナデによって中ほどがふくらみ稜になってしまい、口縁端部はまだそこまで平坦面でない。弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。8は明晰な突出部を持ち口縁端部は均一な厚みで、全体に厚くぼってりとしたつくりである。古墳前期から中期の松山Ⅱ期古段階に位置付けられる。9は口縁から胴部上半が残存する。しっかりした複合口縁で、中ほどはふくらみ端部は外反して折り返す。外面は丁寧なナデ、内面はヘラケズリで、口縁部はヨコハケが観察される。古墳前期の松山Ⅰ期と考えられる。10は複合口縁のなごりで口縁部中ほどは緩くふくらみ、端部は外反する。肩部外面はハケ目、内面はケズリにより調整しており、大東式の特徴を持つため松山Ⅱ期に位置付ける。11は端部のつくりが均一に薄く、先端は若干外反する。松山Ⅱ期であろう。

12・13は土師器壺である。12は口縁部内面にミガキ調整後丹塗りを施す。復元口径18.0cmで、外面はナデ、肩部以下はハケ目、肩部内面はヘラケズリがみられる。古墳中期から後期の松山Ⅳ期に相当する。13の口縁部はハの字に開き、複合口縁のなごりとしてわずかにふくらみがある。調整は肩部ケズリの他、ナデがみられる。松山Ⅳ期以降か。

14～16は高坏の坏部、17～19は高坏の脚部である。14・16・18・19には丹塗りが残存していた。14の内面はミガキ調整のち丹塗りが施され、暗文は観察されない。風化が激しく接合部の詳細は不明である。九景川様相4に相当するか。15も風化により調整は不明だが、外面体下部にわずかな稜がみとめられ、松山Ⅲ期に位置付けられる。16は碗型の坏部で内面に粗いミガキ、外面はヨコナデのち丹塗りを施す。九景川様相6に相当するか。17は脚部が2分の1程度残存しているが、風化のため調整不明である。接続はβ技法(松山1991)が観察でき、古墳前期か。18は外面丹塗り、脚内部にはしづら痕がみられる。接続部分はγ技法で、古墳中期か。19の坏部には暗文が放射状に広がり、古墳中期と考えられる。

20は瓢の把手で、差し込んで接合した体部がわずかに残る。把手の外面はハケ目で整え、つくりは扁平である。

#### 須恵器（第37図）

第37図1～6は須恵器、7～9は石器である。7以外はいずれも平坦部から出土している。1の坏蓋は天井部に回転ヘラケズリがみられ、段部がわずかに残ることから大谷4期に分類される。2は坏身で底外面ヘラ切り後ナデている。復元底径7.6cmを測る。大谷5期か。

3は脚部に2方向の三角形透かしがある高坏である。坏部は外方にひらいて立ち上がり、口縁端部はわずかに外反し丸くする。脚底部は端部が外反して接地面をつくり、透かしは外側から内側に向かって切り込まれる。復元口径14.7cm、底径7.7cmを測る。大谷4～5期の資料であろう。

4・5は坏底部で、ともに粗雑な回転糸切りが認められる。6は高台付皿底部で、底外面ヘラ切り後高台部を貼り付ける。いずれも8世紀以降と考えられる。

#### 石器（第37図）

7は緑色片岩製の磨製石斧である。刃部は欠損しているが、基部にむかってすぼまる撥形で断面は梢円形、重厚なつくりである。側面や表面に若干の敲打が観察され、石斧として使用後、基部先端を叩石として再利用した可能性が考えられる。8は花崗岩製とみられ、欠損部以外全面に使用痕のある磨石である。

9は隠岐産黒曜石の打面調整剥片で上面縁辺に小さな刃つぶしが施される。

## 第4章 九景川遺跡（V区）の調査成果

### 第1節 調査の方法

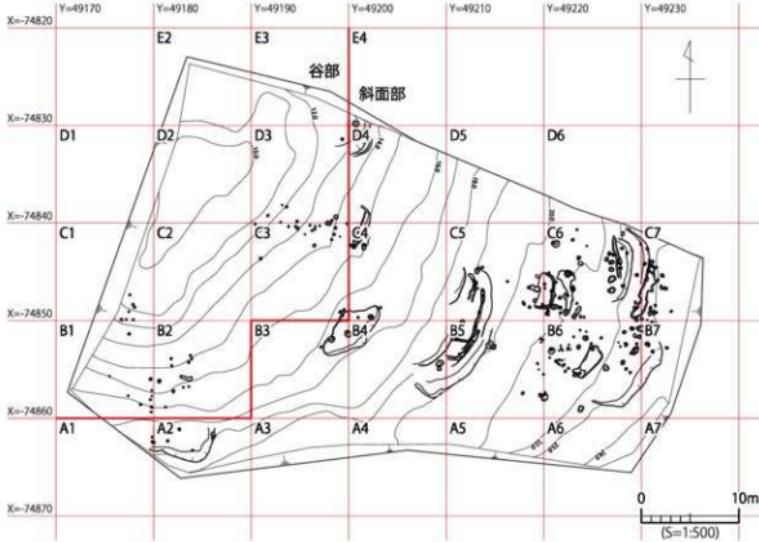
#### 1. 発掘調査区とグリッドの設定（第38図）

九景川遺跡の調査区は丘陵東西方向の谷部及び南側緩斜面部に設定した。過去調査との整合性をとるため、V区として報告する。調査にあたり、世界測地系の第III座標系に基づき座標軸を合わせた10m四方のグリッドを設定した。X=-74870、Y=49170を原点とし、北に向けてアルファベット順、東に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は各交点の南西隅をもってグリッド名称とした。遺構等に伴わない遺物はグリッドごとに一括して取り上げを行った。

#### 2. 表土の掘削と遺構の検出

調査地の現況は東側は段丘状の雑木林で、西側の平坦面には簡単な基礎を打った作業小屋が建っていた。調査区すぐ西側には九景川調整池がある。出雲インター線建設に伴う大規模な造成と丘陵一帯で行われている杉の植林のため、近年削平と造成が進んでいることが想定された。

表土掘削は、平成25（2014）年の試掘確認調査の結果に基づきバックホウを用いて表土を除去した。包含層上面まで掘削し、包含層は人力で掘り下げながら精査・記録を行った。谷部は表土下1m程度まで斜面からの流入土や近年までの造成によるものと思われる黄褐色の山土系造成土が堆積していた。中世から弥生時代の土器を含む暗灰褐色系の包含層を検出して停止した。斜面部は10cm～40cm程度で土器を含む暗褐色系の包含層となる。平坦面はとくに削平されていて、表土掘削時から遺構プランを検出するものもあった。表土掘削後はスコップ等によって人力で掘



第38図 九景川遺跡V区 調査区グリッド割り図 (S= 1 : 500)



第39図 九景川遺跡V区 調査区平面図 ( $S = 1 : 300$ )

り下げ、遺物包含層についても同様に行った。遺構検出は草削り・鋤簾によって精査したが、平面的にある程度の輪郭を確認した後に、サブトレーナによって断面を確認した上で遺構掘削を行った。

### 3. 遺構掘削

遺構の埋土掘削は、土層観察用のベルトを設定するか、遺構を半裁して埋土を掘削し、写真撮影後、必要に応じて土層断面図を作成した。遺構内から出土した遺物については遺存状態のよいものを中心に出土状況を記録し、出土地点を記録して取り上げた。その他の遺物は層位ごとに取り上げた。

### 4. 記録の作成

遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺構調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。また、報告書掲載が見込まれる遺物等は遺跡調査システムで出土位置を記録した後に取り上げを行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは6×7判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を行い、それ以外は35mmフィルムカメラ（モノクロネガ・カラーポジフィルム）及びデジタルカメラで撮影した。

### 5. 自然科学分析

自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託してAMS（放射性炭素<sup>14</sup>C）年代測定を行った。試料は、発掘調査中に位置を記録して取り上げ、調査終了後に選択した。（第5章参照）

## 第2節 V区の調査

### 1. 調査区の概略と基本層序

#### 発掘作業と検出遺構（第39図）

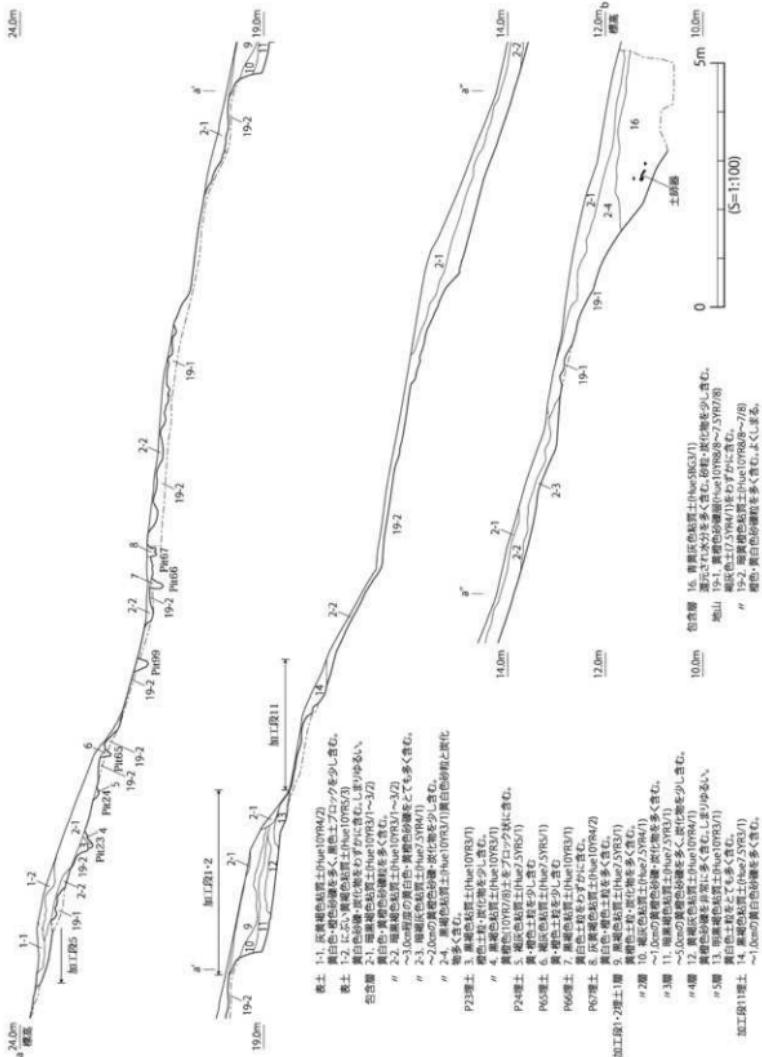
調査は、竹・雑木を伐採後、表土を重機によって除去し、その後人力によって抜根、掘削、精査を行った。調査面積は1,900m<sup>2</sup>である。古墳時代前期から中期、後期から終末期の加工段状遺構5基、溝状遺構1条、奈良・平安時代の溝状遺構1条を確認している。時期不明の柱穴や土坑も多数検出した。遺物の時期は弥生時代前期から中世に至り、出土量はコンテナ60箱以上になる。調査区が東西に長く標高差があり、土層の堆積も違いがみられることから、調査区東側・南側のA1グリッド～D6グリッドを斜面部、北西側のB1グリッド～E4グリッドを谷部と呼称することとする。

#### 基本層序（第40図）

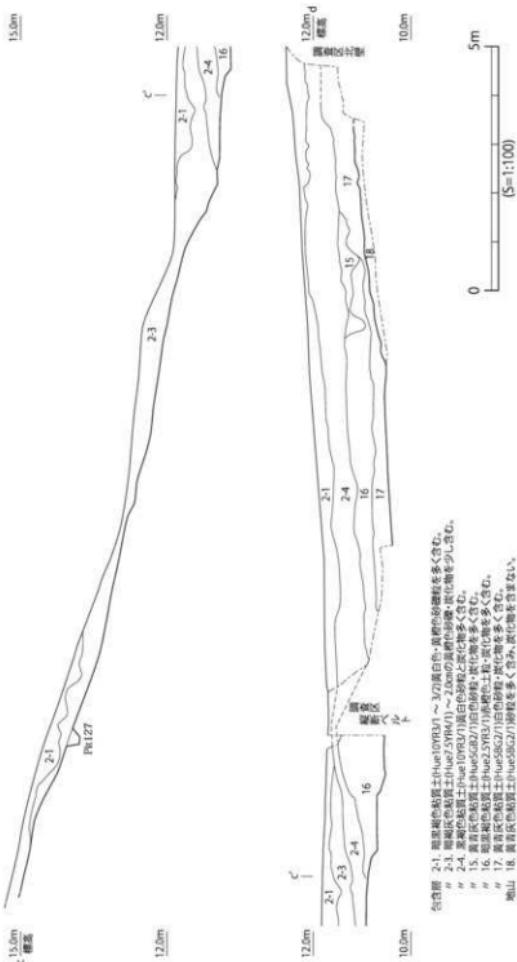
土層観察は、調査区四方の壁では十分な確認ができず、表土掘削後に斜面部から谷部にかけての東西縦断、谷部に南北横断のベルトを設定して行った。

斜面部の1層表土は標高が降るにしたがって堆積が厚くなり、黄橙色系の山土を主体としたものである。近年までの土地利用によって削平が激しく、一部では地山岩盤が露出する。2層包含層は暗黒褐色から暗褐色系の粘質土に地山砂礫やブロックが含まれる。2層上面では集石遺構やSD01を検出しているが、SD01は出土遺物やAMS年代測定から平安時代以降の遺構と考えられ、2層はこれより以前に形成されたものと推察できる。

3層以下14層までは各遺構の埋土である。2層除去後に検出したSD02と加工段3は、いず



第40図 九景川遺跡V区 総断土層断面図 (S= 1 : 100)



第41図 九景川遺跡V区 横断土層断面図 (S=1:100)

れも地山岩盤を掘り込んでつくられているが、埋土は15~25cm程度しか残存しておらず後世の削平の影響が及んでいる。加工段1・2は比較的良好に残存しており、床面直上の出土遺物から古墳時代後期から終末期と考えられる。ただし上層には奈良・平安時代の須恵器も多く含まれ、この時期の覆土である可能性が高い。調査区南側の横断ライン延長上では、1層表土除去後に加工段9を検出した。出土遺物から古墳時代後期から終末期頃の遺構と考えられる。

斜面部包含層から出土した遺物は奈良・平安時代のものが多く、この時期に斜面部に集落が展開していたことが窺える。

谷部には近代の造成土が1.5m程度盛土されていた。斜面部から続く2層は約50cm堆積しており、その下層の標高11.5m～10.5mにはさらに2面の包含層が1.5m以上堆積する。谷部では2層上面や除去後の16、17層上面で検出した遺構はなく、遺物の時期も弥生時代から平安時代まで含まれるため時期の特定は困難である。16、17層はとても粘性の強い暗黒褐色～黄青灰色土粘質土で、ともに炭化物を多く含む。15層は16層と17層が混ざり合う。谷部としている南西側の斜面でピットを多数検出しているが、規則的な配置はみられず建物は復元できなかった。

包含層出土の遺物は、弥生時代終末期～古墳時代中期までが主体で、ほぼ谷部の2～17層で出土している。V区の北西には過去調査のII区が位置しており、出土遺物は同様の傾向がみられる。他には奈良・平安時代の土器が一定量出土しており、斜面部で展開していた集落からの流れ込みであろう。

## 2. 検出遺構とその遺物

### 集石遺構（第42図）

**規模と形態** 調査区北東側の斜面部で検出した遺構である。10cm前後の楕円形で扁平な礫が集石されており、範囲は南北2.9m、東西1.0mである。土層観察の結果、遺構の深さは約25cmと確認した。集石は平面実測後、一つ一つ取り上げ確認したが、墨書などは認められなかった。埋土の2層は黒褐色粘質土で黄橙色～赤色土粒を少し含み、よく締まる。3層は別の遺構（加工段4）と判断し、集石遺構は加工段4を切って掘り込まれていると考えられる。出土遺物は下層の遺構に由来すると考えられるものもあり、混ざり込んでいる可能性が高い。

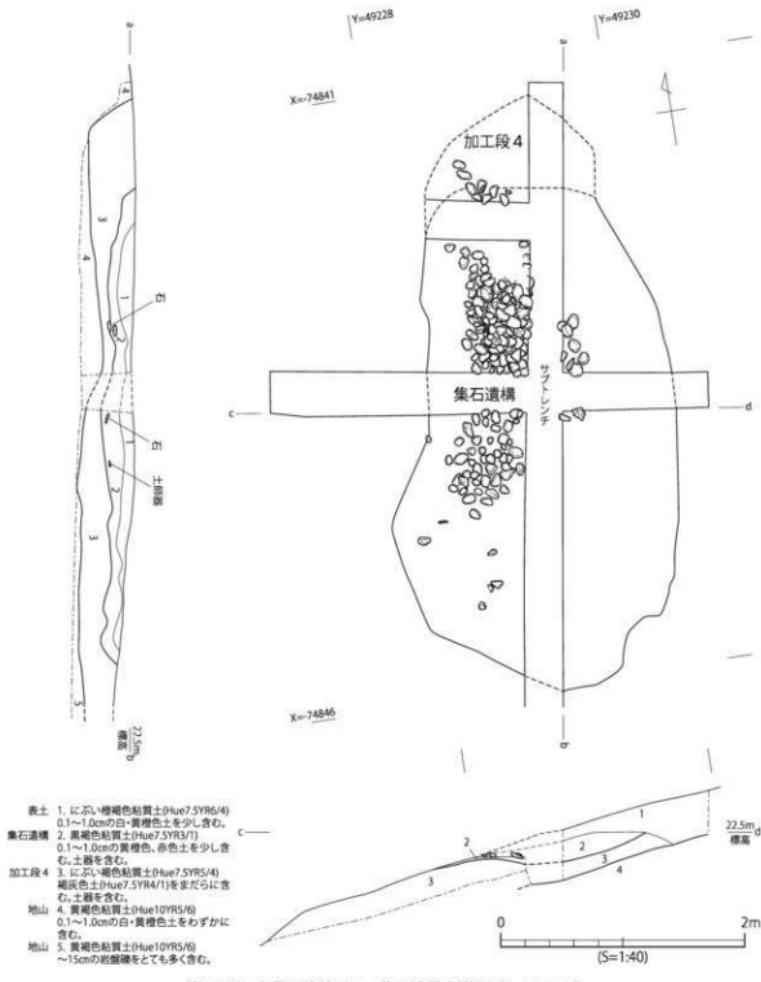
**出土遺物（第43図）** 第43図1は弥生土器費の複合口縁である。全体に風化し調整は不明だが、段は明瞭で口唇部は薄く引き出す。草田5期に相当するか。2は須恵器高台付皿の底部で、調整は回転ナデがみられる。小片のため切り離しは不明である。高台部が低く底部最外周付近に貼り付けられることから、8世紀末～9世紀初頭に位置付けられる。3は須恵器の口縁部で鉢とおもわれる。口縁端部は内側に丸め込み、外面にヘラ描きで「！」が施される。回転ナデ、ナデで調整され、復元口径は16.2cmである。時期は9世紀以降とみられる。

**遺構の時期と性格** 遺跡の東方には礫床を備える埋葬施設を検出した間谷東古墳などの古墳も位置している。集石には加工した痕跡がないものの、規格のそろった河原石を一箇所に集めていることから祭祀や墓の可能性も考えられたが、出土遺物は少なく詳細は不明である。包含層上面で検出していることを考えると、平安時代以降と推測される。

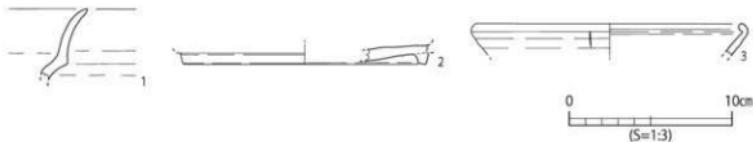
### S101（第44図）

**規模と形態** 調査区北東側、斜面部の平坦面で検出した竪穴建物跡である。地山岩盤に掘り込まれ、検出プランは主軸をほぼ南北にとり、南北3.7m、東西2.6mで、深さは10cm程度と非常に浅く後世の削平を受けていると考えられる。斜面上方の東側半分が残存しており、壁直下には幅10cm、深さ5cmの壁際溝が巡る。中央ピットと考えられる掘り込みはわずかに確認できる。堆積土は褐色灰色の粘質土単層で、炭化物を多く含む。

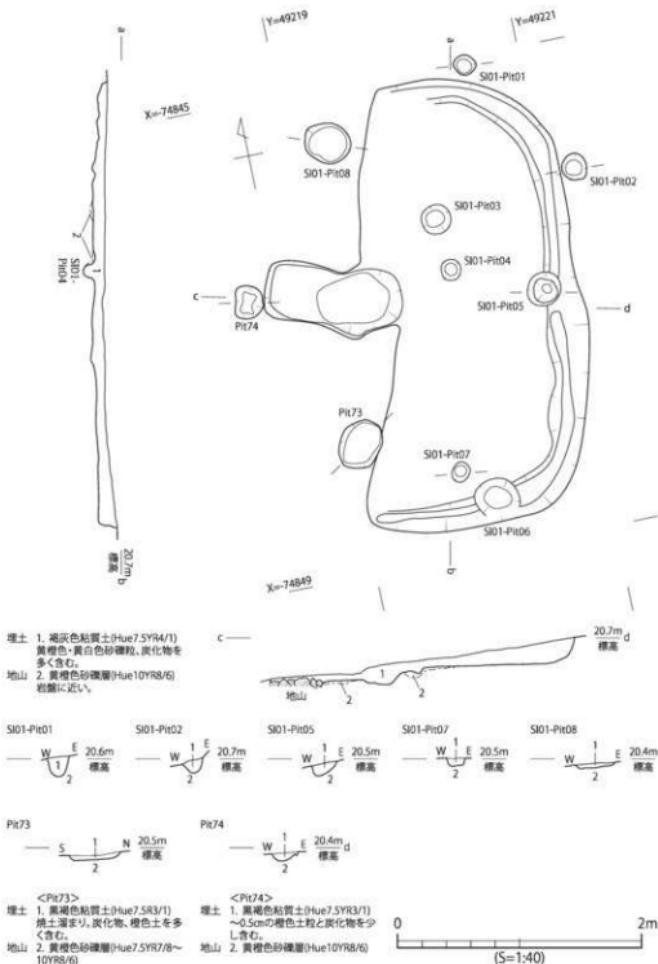
柱穴は周辺を含めて10基検出しているが、いずれも非常に浅くしか残存していない。Pit73は炭化物が多く混ざる焼土溜まりである。



第42図 九景川遺跡V区 集石遺構実測図 (S= 1 : 40)



第43図 九景川遺跡V区 集石遺構出土遺物実測図 (S= 1 : 3)



第44図 九景川遺跡V区 SI01実測図 (S= 1 : 40)

遺物は土師器が出土しているが小片のため図化や時期は不明である。

**遺構の時期と性格** 出土遺物は小片で時期の特定は困難である。2層包含層の除去後、地山直上で検出しているため、2層の形成される平安時代以前の遺構であるといえる。

#### 加工段1・2、加工段10、加工段11（第45図～第53図）

##### 規模と形態（第45図～第47図）

調査区中央、斜面部平坦面の標高約20mで検出した。平面プランは主軸を北東から南西にとり、南北14m、東西3.5mを測る。規模が大きく、2基が連続したようなプランだったことから加工段は2基あると推測されたが、土色の違いがなく切り合い関係を認識できなかった。サブトレーニチを設定し東西・南北方向で土層を確認したところ、南北方向での切り合いは認められなかった。東西方向は、斜面下方の西側で加工段10と加工段11に切られていることがわかった。

土層は、上層が黒褐色～褐色系の粘性の強い土で炭化物を多く含む。第46図のセクションa-bの5層とセクションe-fの6層は、地山の黄橙色砂礫をブロック状に非常に多く含み、しまりは緩い。北側の2層上面では小規模な焼土溜まりが2箇所検出されている。

東壁下端から少し離れて、地山岩盤の床面を掘り込む壁際溝SD01を検出した。溝は東壁のカーブに沿っていて、幅20cm、南北長さ7.8mに渡る。溝の北から4分の3あたりでは西方向に向けて直行する溝が接続し、さらに南端は西へ1.4m屈曲する。

溝の床面では小規模なピットが不等間隔に掘り込まれており、溝と一体で機能する構造物があった可能性も否定できない。さらに、壁際溝SD01から南へ1mの地点で、溝状遺構SD02を検出している。SD01と同規模だが、長さは北から2.6mしか検出できなかった。いずれの溝からも出土遺物はない。

柱穴は7基検出したが建物は復元できなかった。なお、壁際溝SD01の埋土から採取した炭化物をAMS年代測定にかけたところ、6世紀後半～7世紀中頃という年代が得られている。

南側では、床面直上で焼土溜まりと一部が赤橙色に被熱変色する土坑状遺構を検出している。規模は南北60cm、東西80cm、深さ10cmで、中央が硬化している。付近からは鉄滓が1点、金属製品を研いだとみられる砥石も多数出土していて、小規模な鍛冶が行われた可能性がある。

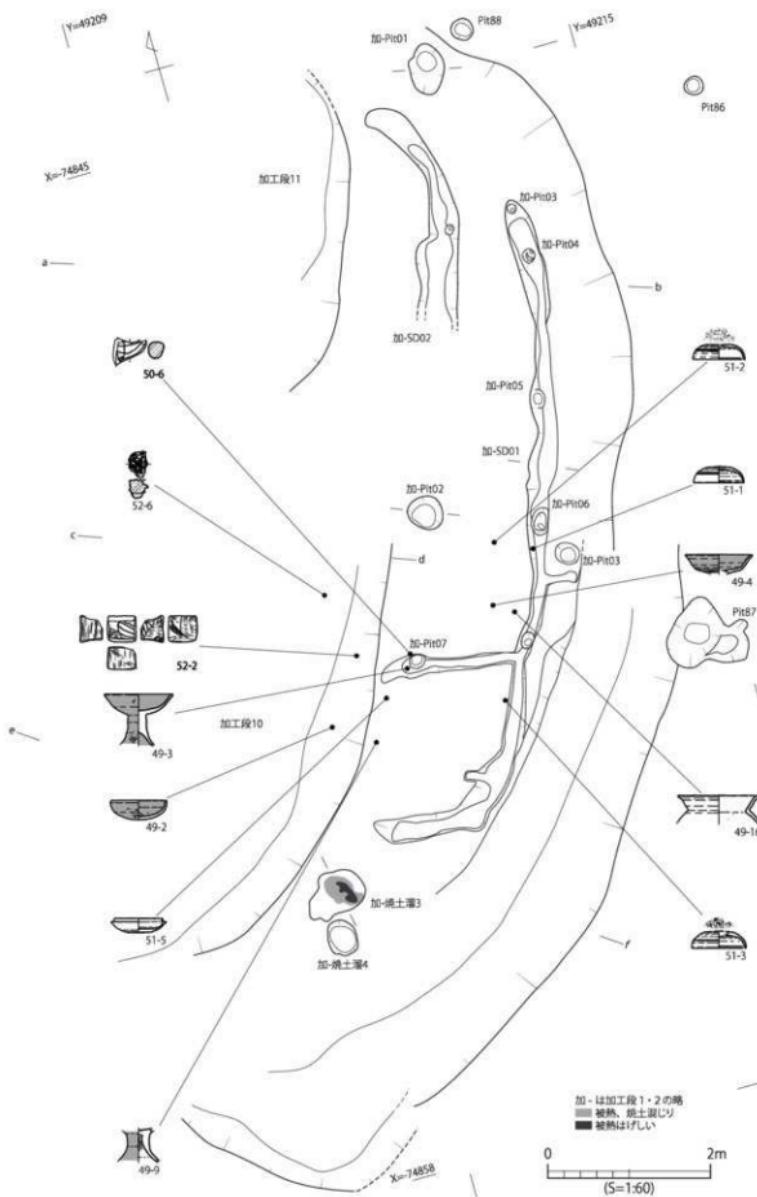
上層からは、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器、須恵器が出土した。下層および床面では古墳時代後期～終末期の須恵器がまとまって検出されていることから、遺構はこの時期に機能していたと考えられる。

加工段10は、第46図のセクションe-fで確認した。加工段1・2を切って掘り込まれている。平面プラン検出時には切り合いを確認できず、床面でプランをわずかに検出した。主軸は加工段1・2と同じで、現状で南北5.0m、東西2.0mを測る。埋土は3面あり、黒褐色～黄褐色系の粘質土が堆積する。遺物は加工段1・2の遺物が混ざり込んでいる可能性が高い。

加工段11は第46図のセクションa-bで確認し、床面まで掘り進めたところで平面でもプランを確認した。現状南北4.0m、東西1.0mを測る。加工段10とは埋土が違うこと等から別の遺構と判断した。わずかにしか残存しておらず、この地点からは遺物は出土していない。

##### 出土遺物（第49図～第53図）

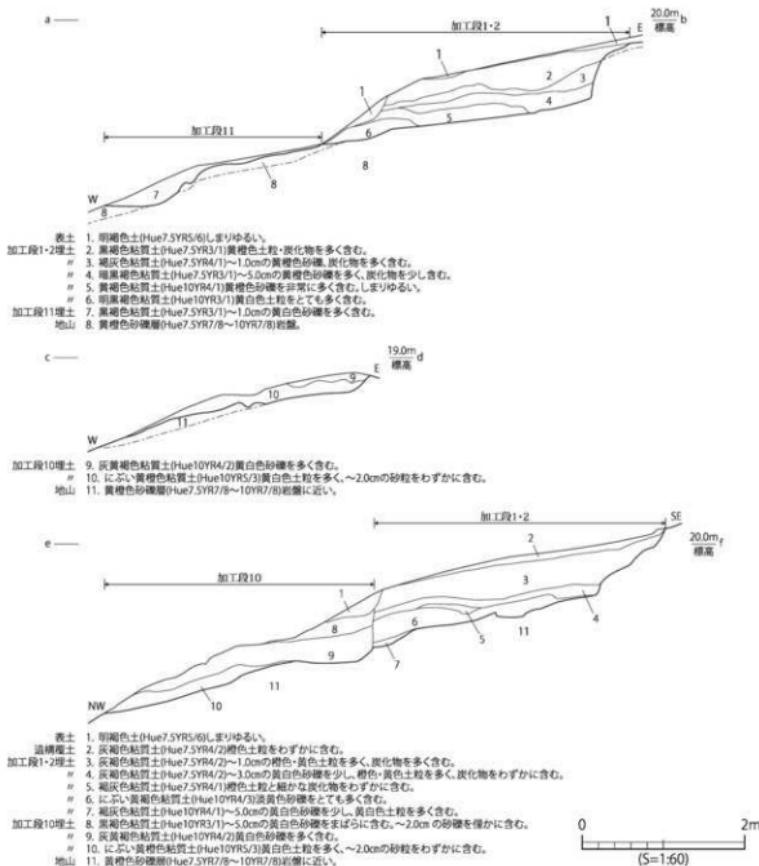
第49図1・2は土師器壺である。1は丸底で部体から口縁にかけてはやや開き気味に立ち上



第45図 九景川遺跡V区 加工段1・2、加工段10、加工段11実測図 (S= 1 : 60)

がり、風化しているが内外面の一部に赤色顔料が残存している。胎土はやや粗く浅黄橙色を呈し、復元口径は13.8cmである。2は内湾汽味に立ち上がり、底部は丸い。内面には暗文が施され、内外面全体に丹塗りが確認される。いずれも古墳時代中期に属する。

3～10は土師器高环である。3は脚端部を欠損するが环部～脚部まで残存する。摩滅が著しいが、脚外面はハケ目調整され、内外面に丹塗りが施される。环部の復元口径は16.6cmである。脚部は寸胴な外形で、脚内部は浅く造られており、大東式の特徴がみられることから古墳時代中期ごろに属すると考えられる。4は环部で、下半には明瞭な段があり、やや外反して立ち上がる。接合部にはハケ目がみられ、内外面には赤褐色の丹塗りが残存する。復元口径16.3cmである。5は風化が進み調整は不明だが、内外面には赤色の丹が塗布される。口縁部に向かってやや開き気

第46図 九景川遺跡V区 加工段1・2、加工段10、加工段11土層断面図 ( $S=1:60$ )



第47図 九景川遺跡V区 加工段1・2検出焼土灌まり、ピット土層断面図 (S=1:60)

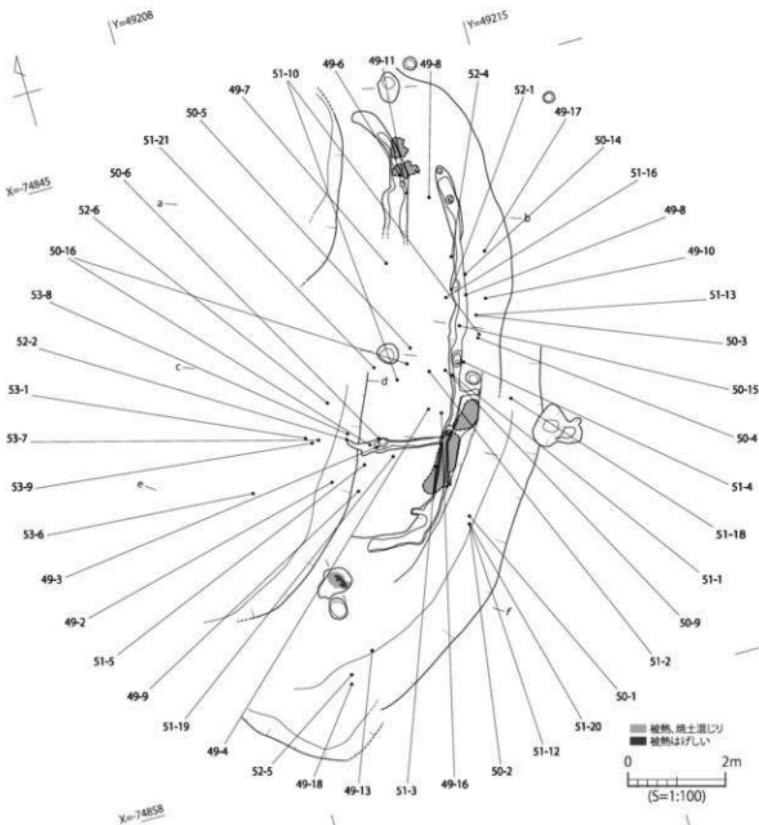
味に立ち上がり、器高は浅い。6は円形透かしが1孔残る。脚裾部は屈曲して裾広がりとなっていて、端部に平坦面をつくる。脚裾部外面には黒斑が観察され、調整は外面ナデ、内面は細いしづぼり痕がみられる。復元口径は11.7cmを測る。7は端部を欠くが脚柱部が残存する。脚裾部は強い屈曲がみられ、外面はハケ目調整のち赤色の丹が塗布され、明瞭な段がつく内面にはしづぼり痕が観察される。8も脚柱部で、内外面に丹塗りが施される。5と同一個体の可能性がある。9は分厚い粗雑なつくりで、坏部の見込み部分も含めて外面には丹塗りの痕跡が観察される。脚柱部下半の一部には黒斑がみられる。4と同一個体の可能性がある。10は坏部から脚柱部で、脚裾は小さな段を持つ。脚内面の接合部分は同心円ナデにより中心が突出している。いずれも古墳時代中期から後期で松山Ⅱ～IVに相当する。

11は直口壺である。胴部下半部はハケ目が確認でき、煤がハケ目の凹部に入る。頸部内面は指頭圧痕がみとめられる。復元口径は12.8cmを測る。松山Ⅱ～Ⅲに属する。14は壺の口縁部で、複合口縁が退化したものと考えられる。古墳時代後期か。

12～19、第50図1～4は壺の口縁部から胴部である。12は複合口縁小片で、ヨコナデで調整される。古墳時代前期から中期か。13は口縁端部が内湾するもので、15・16は口唇部を外へ引き出し、平坦面をつくる。15の外面には丹塗りが残存する。いずれも松山Ⅲに属するか。17の口縁部はふくらみを持ち厚みがある。頸部にはわずかにケズリ調整が見られる。古墳中期。18は口縁部が短く外反し、胴部の張りがないものである。19は口縁部が強く外反し端部は肥厚し丸く納める。口縁部内外面には煤が付着している。いずれも奈良・平安時代の遺物である。20は内外面に丹塗りされる短径壺である。風化が著しく調整は不明だが、頸部内面に指押さえがかろうじて観察される。古墳時代後期以降と考えられる。

第50図2の口縁部は厚く短く外反する。外面には所々に煤が付着する。3の頸部にはヘラキズ痕があり、頸部以下はこのヘラによるナデ調整となる。4は外面やや強いヨコナデ、内面口縁部もヨコナデで調整され、頸部はハケ目のちナデている。

第49図21は壺の口縁部から頸部である。頸部内面にケズリが確認できるが、風化により調整

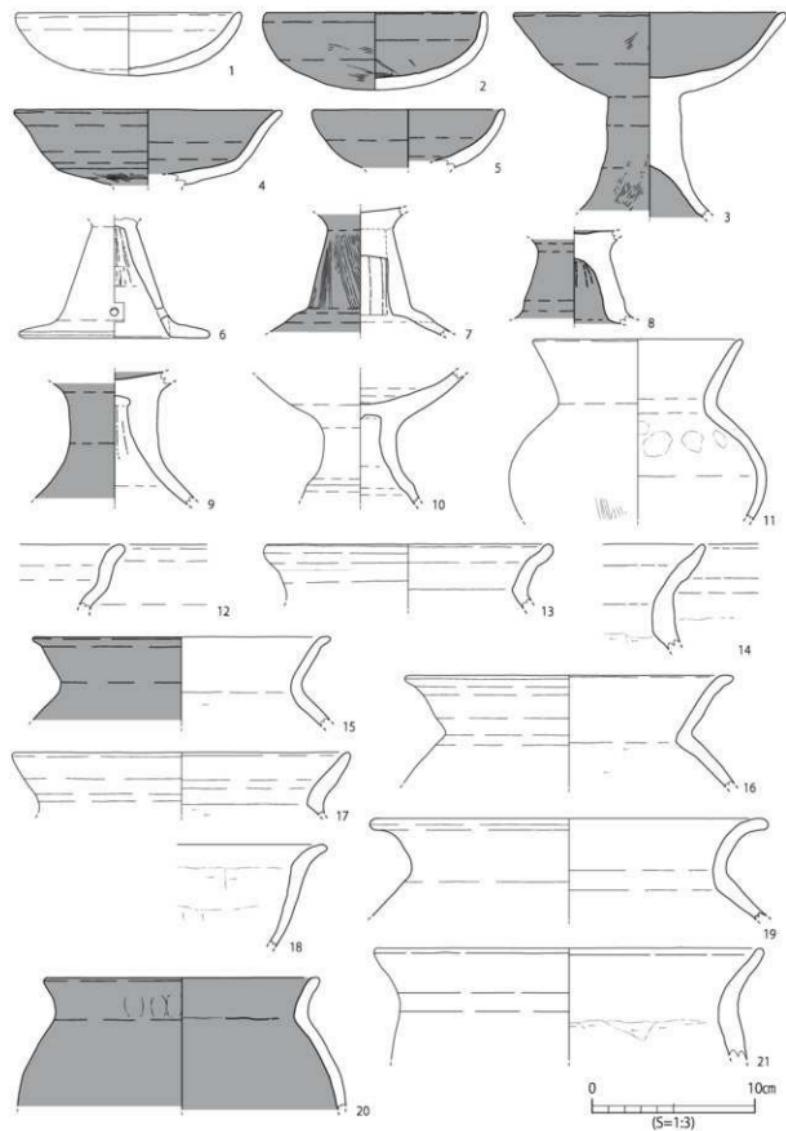


第48図 九景川遺跡V区 加工段1・2、加工段10遺物出土状況 (S= 1 : 100)

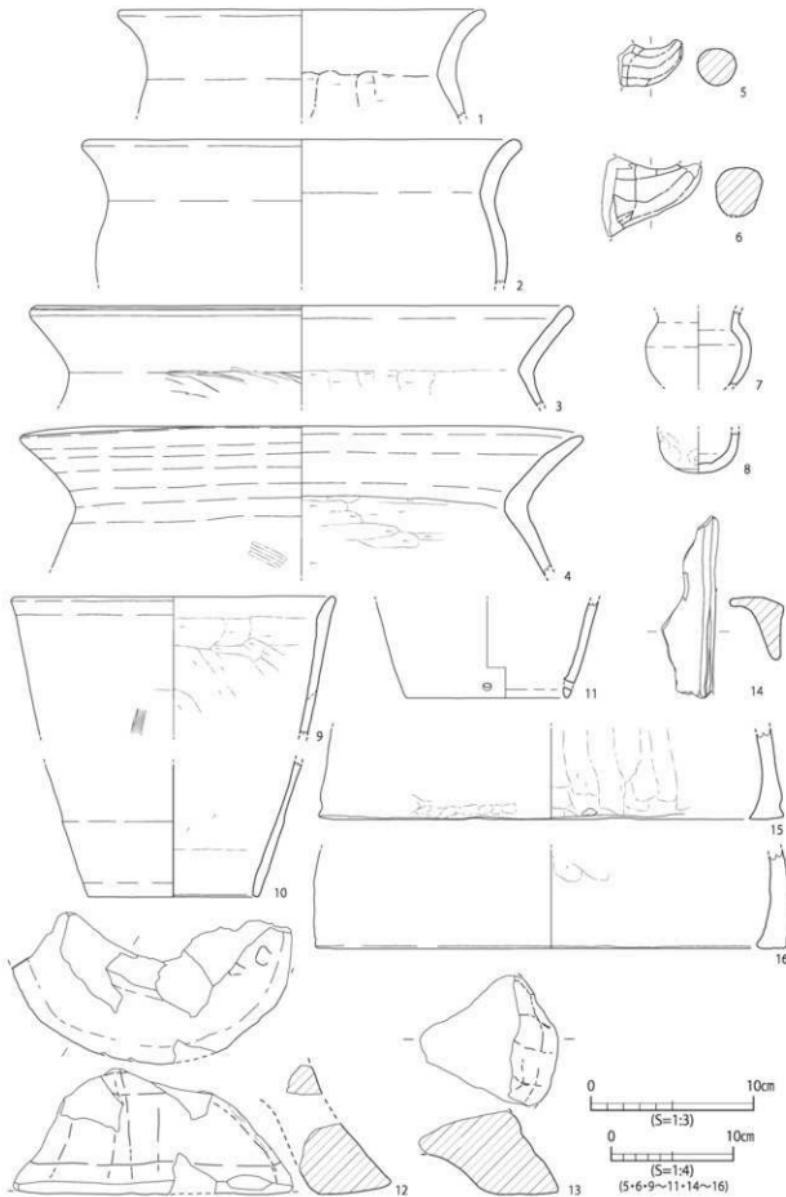
不明である。第50図5・6は瓢の把手で、5の直径は3.0cm、長さ5.3cmが残存する。6の先端部は欠損しており、貼付部の器内面は指頭痕とケズリが観察される。直径は4.0cm、長さ8.0cm。

7はミニチュア土器、8は手捏ね土器である。7は口縁部と底部が欠損している。頸部内面にはしっかりとした段があり肩部はふくらんでいる。風化していくて調整不明。にぶい黄橙色～橙色を呈す。8は内面ナデ、外表面は指押さえで調整され、底部内面が平坦になる。色調は明赤褐色で、硬い。

9～11は瓶である。9は口縁から胴部上半で、口縁部はやや外反するがほとんど直口である。胴部は0.7cmと薄いつくりで、内面はヨコケズリで調整され、外表面の一部にはハケ目がみられる。口径は26.2cmを測る。10は胴部下半から底部で、穿孔はない。内面はケズリや粗雑なナデで調整される。底径は13.8cm。9と10は同一個体の可能性がある。11の底部には外側から内側へ直径0.6cmの穿孔が1箇所ある。



第49図 九景川遺跡V区 加工段1・2出土遺物実測図（1）（S= 1 : 3）

第50図 九景川遺跡V区 加工段1・2出土遺物実測図 (2) ( $S=1:3$ 、 $1:4$ )

12・13は土製支脚の脚部である。12の表面はほとんど剥落しているが、一部に指ナデ痕が観察される。復元底径は18.5cmを測り、土製支脚としては大型のものである。13は脚底部の一部と考えられ、底面は接地面を平坦にするよう成形している。

14～16は移動式竈である。14は正面開口部向かって左側縁の底部分とみられ、内面にはケズリが観察される。15・16は底部で内面ケズリ、15の外面接地面付近は指でナデ付けた圧痕がみられる。接地面は摩滅していて調整は不明である。いずれも器形はやや内湾する。復元底径は37.1cm～38.6cm。

第51図1～12、14、15は須恵器蓋環である。1～3は环蓋で、1は肩部に沈線2条で稜をつくりだし、天井部外面は回転ヘラケズリが残る。口径は12.8cm、器高4.0cmを測る。2の外面突出部は上部を沈線、下部はナデによりつくりだし、突出部までの口縁部はやや高い。天井部外面は回転ヘラケズリ、中心部にはヘラオコシ痕の上からさらにケズル。口径12.6cm、器高3.8cm。3は沈線1条で稜をつくりだし、口縁端部内面には沈線が1条入る。口径13.0cm、器高4.2cmである。いずれも口縁端部を $\alpha$ ～ $\beta$ 類で仕上げ、大谷4に位置付けられる。4～6は环身である。4の天井部外面はヘラケズリ、中心部のヘラオコシ痕はケズリきらず残っている。カエリは内傾して立ち上がり、口径10.4cm、器高3.9cmを測る。5はほぼ完形で、口径11.6cm、器高3.6cmでやや扁平なつくりである。口縁部は欠損しており全体的に摩滅が著しいが、天井部外面の中心部にはヘラオコシ痕が観察される。6は天井部外面の外周ケズリ、中心部はナデている。焼きゆがみが激しく灰被りで、口径10.5cm、器高4.2cmを測る。

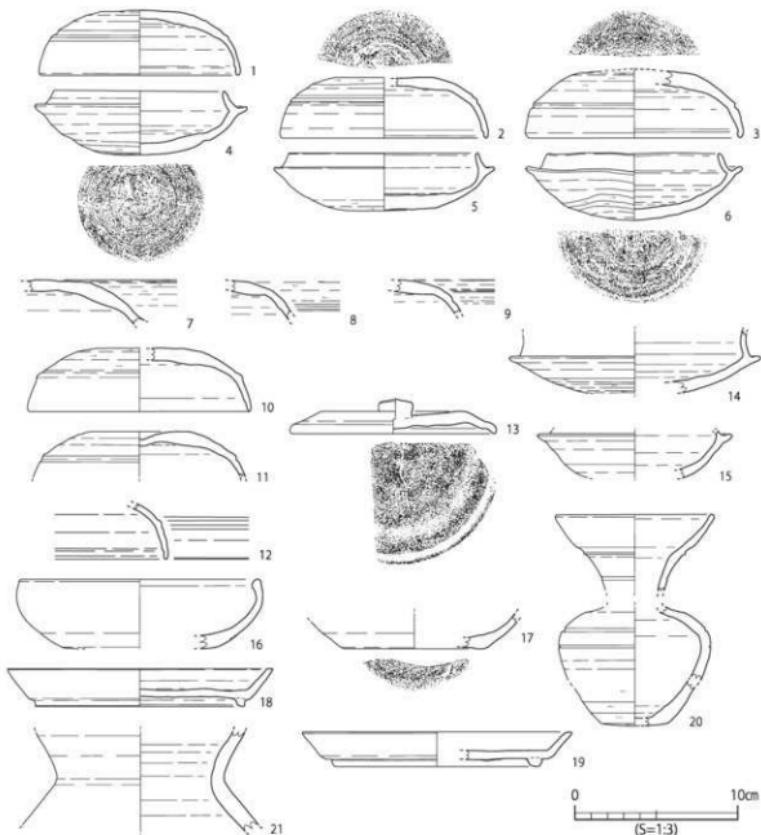
7～12は环蓋である。7の天井部外面は頂部を残し最外周はナデしている。8は肩部に沈線2条が施され、天井部は丁寧にケズル。9の肩部は上方の沈線が細く浅く、段状の稜をもつ。いずれも大谷4に分類される。10の天井部はヘラ切り後ナデしていく、肩部は1条の沈線でゆるい段をつくりだす。口径は13.4cm、器高3.9cmである。11は口縁端部が欠損している。天井部外面はヘラケズリ、最頂部はナデしていく、肩部は沈線が退化し段状になっている。12は肩部に沈線2条で稜がつくれられ、口縁端部内面に沈線1条が施される。いずれも大谷5に属する。

13は算盤状つまみの付く蓋である。口縁端部はつまみ出し、天井部外面はヘラケズリのちナデる。つまみの接合部には接合痕が観察される。8世紀後半～9世紀初頭の出雲IV A～B期に相当する。

14・15は环身である。14はやや扁平なつくりで、底部外面は丁寧な回転ヘラケズリ、口縁部のカエリは細く垂直に立ち上がる。大谷3～4か。15は薄手のつくりで、回転ヘラケズリにより調整する。

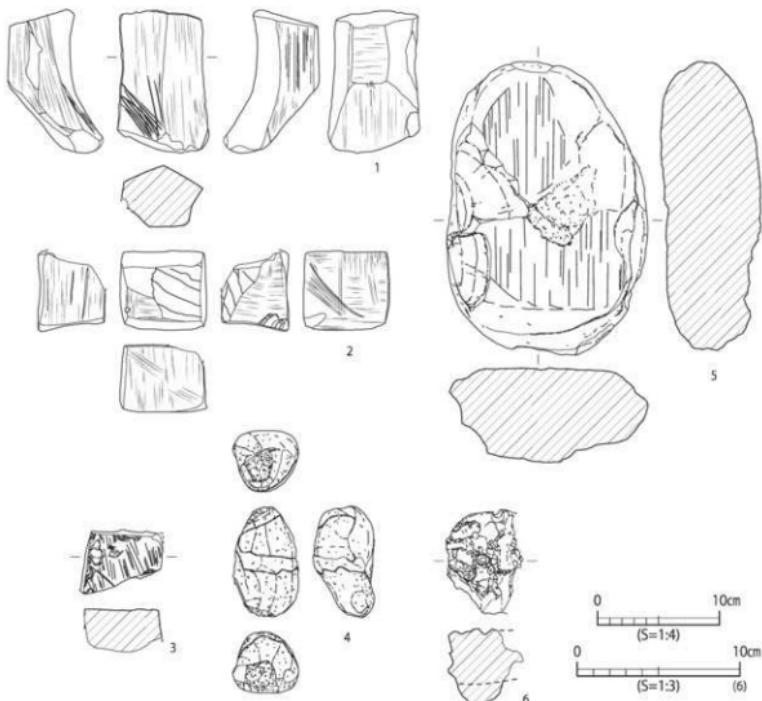
16・17は环である。16は口縁端部が肥厚し内湾気味に立ち上がるもので、摩滅により調整は不明である。復元口径は14.4cm、器高4.3cmを測る。17は底部切り離しが静止糸切りで、復元底径8.5cmである。いずれも8世紀前半の出雲III期であろう。

18・19は高台付皿である。18は復元口径16.3cm、器高2.3cmを測る。体部はやや外傾して直線的に立ち上がり、口縁端部は面取りして平坦に仕上げる。高台は底外周より4mm程度内側に貼り付け、接地面の内側がやや浮くつくりである。19の口縁端部は平坦に仕上げるために強く面取りしたためにくぼみがある。復元口径16.5cm、器高15.5cmである。18・19は8世紀末～9世紀初頭の出雲IV C期に位置付けられ、最上層からの出土であることからも紛れ込みの可能性が高い。

第51図 九景川遺跡V区 加工段1・2出土遺物実測図(3) ( $S=1:3$ )

20は壺でほぼ完形に復元できた。口縁部外面上半は、ラッパ状に開き端部は内湾して丸く納め、頸部にかけて強いナデにより突帯をつくる。頸部は細く沈線1条がみられる。肩部には沈線2条で区画されるが、刺突文はない。底部にかけて回転ヘラケズリで調整される。大谷5~6に属するか。21は壺の頸部で、内外面とも回転ナデ、外面は灰被りである。

第52図1~5は石製品である。1は花崗岩製の砥石で、平面は直方体で上面が強く反り、断面は六角形である。上方の小口以外7面すべてが仕上げ砥ぎに使用され、細かい刃先痕が残る。2は花崗岩製の砥石で、下面を欠損するが5面に作業痕が残る。2面中底ぎ、3面は仕上げ研ぎとみられ、鉄器による刃傷が残る。出土層位から古墳時代後期に属すると考えられる。3は泥岩系の砥石で、サイコロ状の立方体のうち半分を欠損している。1面は細かな刃傷が残るが、その四縁辺は剥離痕がみられ、他の面は未使用と考えられる。

第52図 九景川遺跡V区 加工段1・2出土遺物実測図(4) ( $S=1:3$ 、 $1:4$ )

4は敲石で凝灰岩製か。平面楕円形で下方はグリップ状にくぼみ、ほぼ完形。上下先端部にはツールとしての敲打痕があり、表面には帯状の自然面を残して成形とみられる敲打痕が残る。

5は凝灰岩製の台石である。平面は楕円形で断面は扁平だが、裏面は若干凸状を呈し使用痕はない。全体に被熱し特に縁辺部は赤変している。表面は平坦で、中央付近には敲打痕がみられ、その周囲は縱方向の研磨痕が顕著に認められる。

6は楕形溝で、長さ6.4cm、幅4.5cm、厚さ3.5cmを測る。

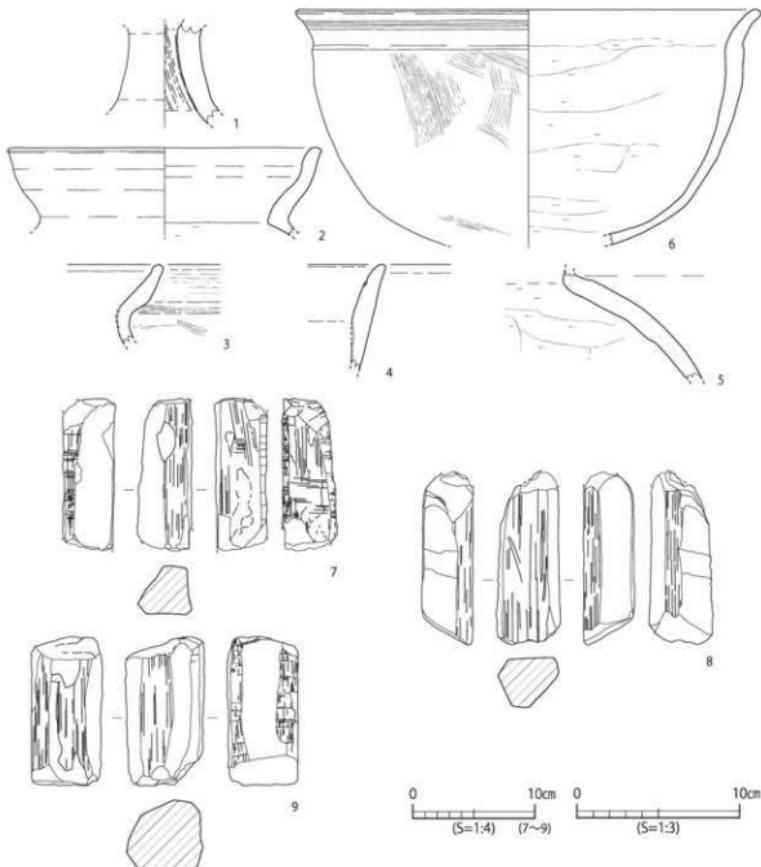
第53図は加工段10出土遺物である。1は土師器高環の脚柱部で、脚部内面にしづり痕が残る。分厚く粗雑なつくりである。

2は土師器壺の口縁部～頸部で、内外面ヨコナデで調整し、口縁外部は上下の強いナデにより中ほどに膨らみを持つ。口径19.0cmを測る。

3は土師器壺の口縁部で、複合口縁が退化し口唇部は内面に丸め込むようにつくる。内外面ミガキか。古墳時代中期か。

4は壺の口縁部で、風化により調整は不明。内外面に黒斑が観察される。5は土師器壺の肩部で内面にはケズりがみられる。

6は土師器鍋で、復元口径は28.2cmを測る。口縁部は外反しヨコナデのち4条の浅い沈線がみ



第53図 九景川遺跡V区 加工段10出土遺物実測図 (S= 1:3、1:4)

られ、脛部にかけてハケ目がナデ消される。外面には黒斑が観察される。古墳時代後期以降か。

7~8は花崗岩製の砥石である。7は直方体状で断面鼓型、5面に使用痕が認められる。中砥ぎとみられる4面には刃先痕がある。8は上部が欠損するが直方体の4面に刃傷がみられ、よく使用されている。9はほぼ完形で残存し平面直方体状である。5面に作業痕があり、荒研ぎ2面、中砥ぎ2面、仕上げ研ぎ1面で、刃傷がよく残る。

#### 遺構の時期と性格

遺物は上層から奈良・平安時代、下層からは古墳時代前中期から後期のものが出土しており、下層出土の須恵器を下限とすると、大谷4~5期に相当し、遺構は古墳時代後期に位置付けられる。AMS年代測定の結果である6世紀後半~7世紀中頃とも矛盾しない。

遺構は当遺跡の中では規模が比較的大きく、床面で炉跡や焼土溜まりを検出し、鉄滓や砥石な

どが出土する一方、移動式竈や土製支脚などがみられる。これらのことから、一般的な住居ではなく、金属製品の加工を行う小規模な工房であったと推察される。溝と小柱で構成される建物としては壁建ち建物が挙げられるが、検出できたピットは小規模で数も少なく浅く、積極的な復元はできない。建物の構造は不明である。

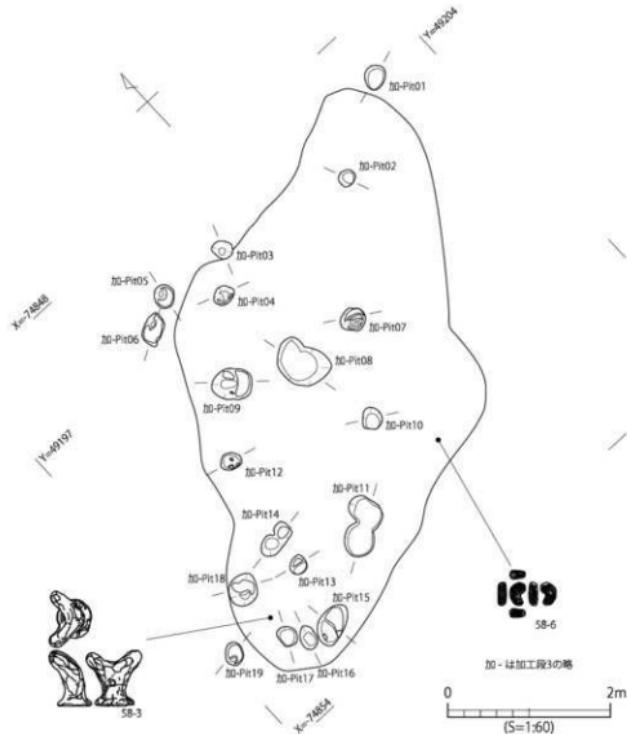
### 加工段3（第54図）

#### 規模と形態

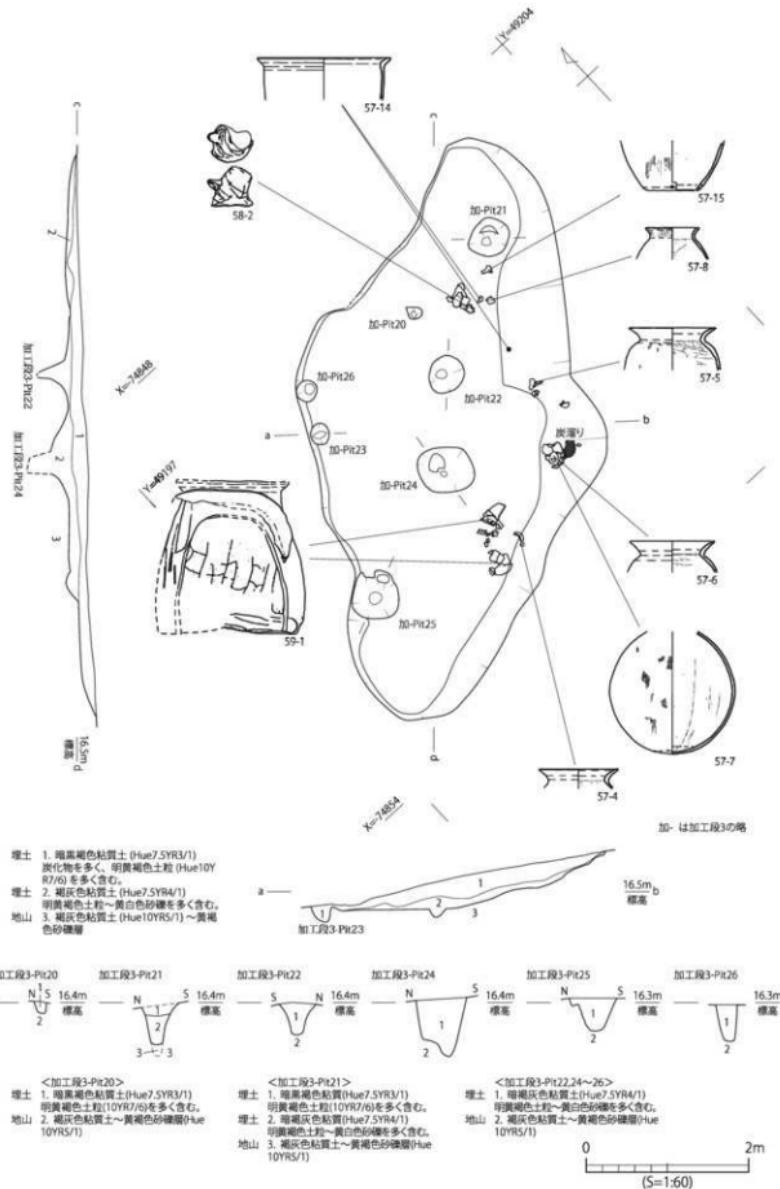
調査区の中央辺り、斜面部の標高17mの平坦面で検出した。平面プランは主軸を正北東から正南西にとる隅丸菱形状で、南北7.2m、東西3.8mを測る。検出上面から掘り込まれたピットを19基検出している。規模は20cm～70cmで規則的な配置ではなく、表土と同じ褐色灰色系の土が堆積していた。遺物は土師器小片のみで、ピットの形成時期は不明である。

同じ上面から碧玉製勾玉の未成品と土製支脚など、包含層に含まれていたとみられる遺物を検出している。

埋土は2面あり、1層暗黒褐色粘質土は炭化物を多く含み、粘性が強い。2層褐色粘質土は



第54図 九景川遺跡V区 加工段3上面実測図 ( $S=1:60$ )



第55図 加工段3床面実測図 (S= 1 : 60)



第56図 加工段3検出ピット土層断面図 (S = 1 : 60)

地山岩盤由来の砂礫を多く含む。現状での深さは40cmと浅く、東側の壁も明確な立ち上がりはなく、後世の削平を受けていると考えられる。

当初、上面検出した勾玉から玉作工房である可能性を考え、十字の土層観察用ベルトを挟んでA～Dのグリッドにわけて掘削を行った。掘削した土は土嚢袋に入れて持ち帰り、ふるいにかけ洗浄したが、土器片以外は出土しなかった。床面でも玉作工房にみられる構造は一切検出されなかった。

1層からは古墳時代中期～後期の土師器甕や瓶、土製支脚、床面からは移動式竈などが出土地おり、一括性の高い資料である。また、1層からは古墳時代後期の須恵器蓋坏が出土している。

床面では地山を掘り込む柱穴を6基検出している。主なピットはP21・P22・P24・P25で、南北3間以上の掘立柱建物跡が復元でき、主軸も概ね検出プランとずれていない。遺物は出土していない。

1層で検出した土師器甕と近接して検出した炭溜まりからは炭化物を採取していた。AMS年代測定にかけたところ、5世紀前半～6世紀前半という数値が得られている。

#### 出土遺物（第57図～第59図）

第57図1は土師器鼓型器台の基部である。復元底径は14.0cmで、全体に摩滅著しく調整は不明だが、脚端部はハの字に開き筒部に向けて明瞭な段をつくる。古墳時代前期末に属するとみられる。

2～3は土師器高坏の坏部である。復元口径13.2cm～13.4cmで、いずれも内外面丹塗りが施される。摩滅し調整は不明である。

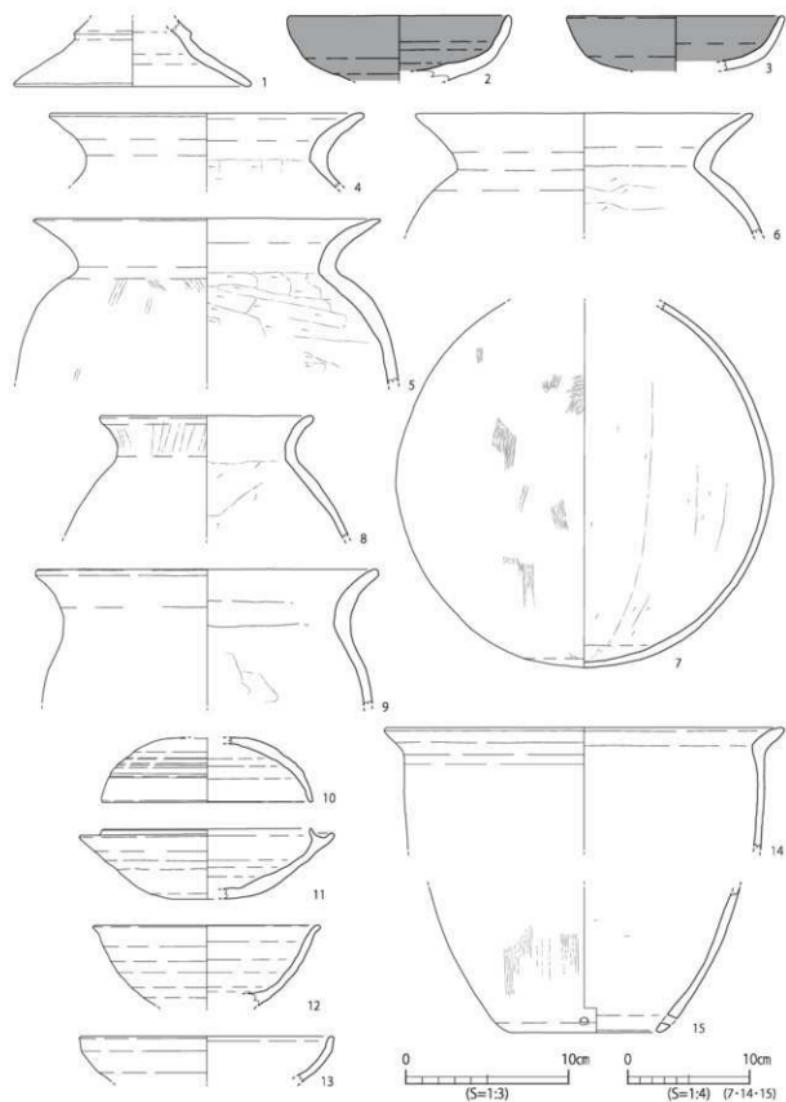
4～9は土師器甕である。4～6は口縁部がやや厚く端部は細く仕上げ、肩部は緩やかである。いずれも風化が進むが、内面ケズリと外面一部にハケ目が観察される。復元口径は19.0cm～21.3cmである。7は甕の胴部から底部で、完全な丸底を呈す。内面はケズリ上げ、外面にはハケ目で調整され部分的に煤が付着している。6と同一個体の可能性がある。これらは古墳時代前期～中期に位置付けられる。8は薄作りの甕で、口縁部外面はタテハケのちナデ、わずかに丹塗りが残る。9は肩部が完全になだらかになるもので、8世紀以降とおもわれる。

10～13は須恵器である。10は蓋坏の蓋で、復元口径13.0cm～15.5cmを測る。10は肩部回転ヘラケズリ、沈線1条が認められ、口縁端部内面はやくぼむものの均一に納める。11は蓋坏の身で、天井部外面に回転ヘラケズリ、中心部はヘラオコシ後ナデしている。復元口径は11.8cmで、立ち上がりはゆるく短い。12は高坏の坏部である。平坦な見込みから体部は上方に立ち上がり、口縁端部は外方につまり出す。外面はやや強い回転ナデが稜をつくり、復元口径14.0cmを測る。いずれも大谷4～5に分類される。13は坏の口縁部で、復元口径15.5cm。8世紀以降か。

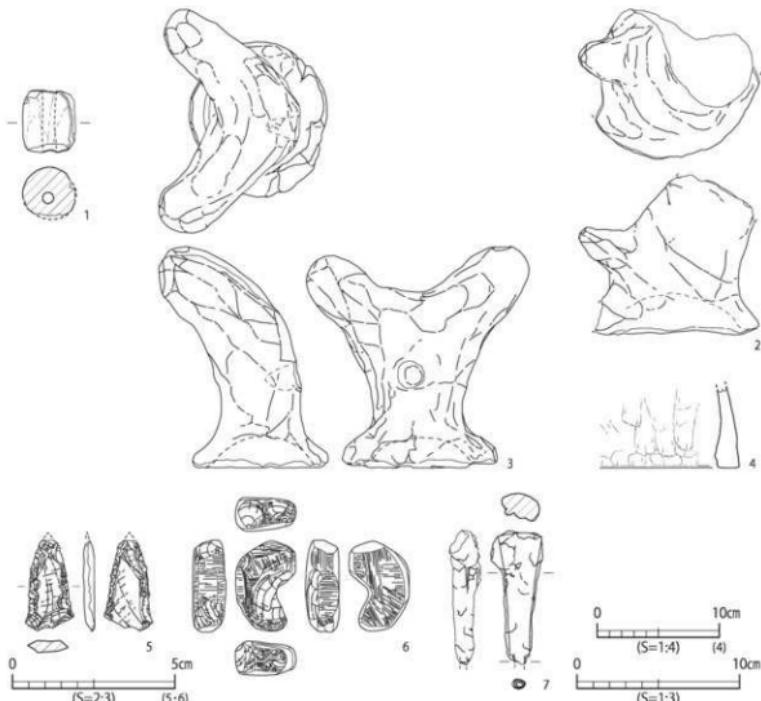
14・15は瓶で同一個体の可能性がある。14は口縁～胴部上半で、復元口径は32.4cmである。口縁部は肥厚し短く外反する。胴部は口縁部に対して器壁が薄く、剥落が著しいが、内面口縁部の一部に丹塗りが観察される。15は胴部下半～底部である。端部直上に1穴の穿孔があり直径7mmを測る。内面ケズリ、外面はハケ目で調整される。復元底径は12.9cmである。

第58図1は土錘である。長さ3.8cm、幅3.2cm、孔径0.7cmを測り幅広く厚手だが、土玉ではなく土錘と判断した。手捏ねで指頭痕が観察され、粗雑なつくりである。

2・3は土製支脚である。2は上半部を欠くが胴部から底部が残存する。胴部は穿孔がなく、



第57図 九景川遺跡V区 加工段3出土遺物実測図(1) (S=1:3、1:4)

第58図 九景川遺跡V区 加工段3出土遺物実測図(2) ( $S=2:3$ 、 $1:3$ 、 $1:4$ )

胴部中ほどに通常穿孔のある部分に小さな突起がつく。外面は突起の下半部分や底部にかけて煤が付着している。3は岩橋1C類に分類されるもので、2方向の突起があり胴部背面に非貫通孔がある。胎土が橙色であり被熱は観察できないが、全体に薄く煤が付着している。

5はサヌカイト製石鐵で、金山産の可能性がある。基部欠損後につくり直し、先端は欠損している。長さ2.8cm、幅1.4cm、厚さ0.35cmである。

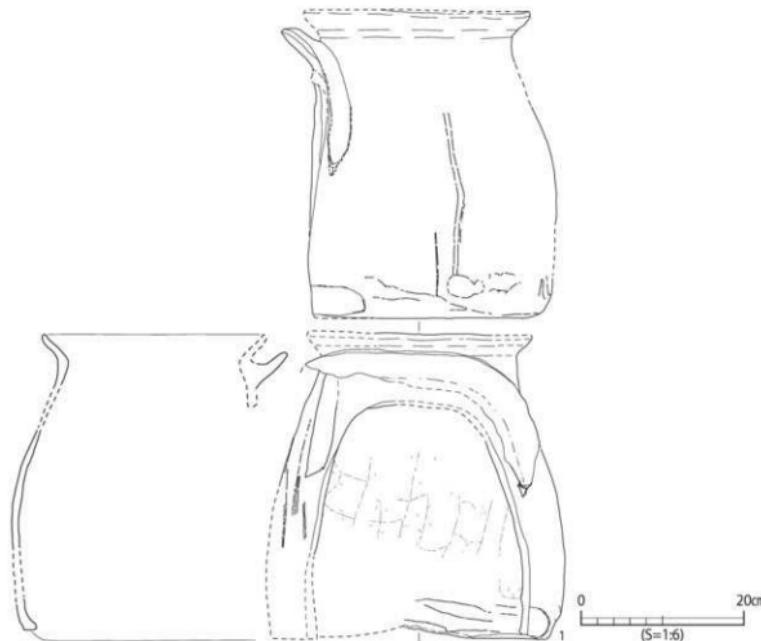
6は花仙山産碧玉製の勾玉未成品である。長さ2.8cm、最大幅1.8cm、厚さ1.0cmと小型のつくりで、穿孔の跡はみられない。裏面の両面研磨は稜線をほとんど残さずに数方向から研磨する。剥離面の頂部にも研磨が及び、剥離したのちに研磨している。

7は鉄鎌と考えられる。刃部は直線的ではなくやや丸みを帯び、左右に間を持つ。現存長8.1cm、幅0.6～2.7cm、茎の厚さ0.5cmを測る。方頭式とみられ、6世紀後半～7世紀に属する。

第59図1は移動式竈である。掛口端部は土師器甕口縁部に類似しており、外反してやや内傾する。掛口が外方に屈曲し、くの字状を呈する。底部は、甕口周縁及び周辺に粘土を貼り付け底とする。

#### 遺構の時期と性格

大谷4～5期の須恵器壺蓋が出土しており、遺構の時期も概ね古墳時代中期～後期に位置付け



第59図 九景川遺跡V区 加工段3出土遺物実測図（3）(S=1:6)

られる。南北3間以上の建物跡を復元できることから、竪穴建物跡だと考えられる。未完成の勾玉は検出上面での出土であり、工房跡としての痕跡や玉作関係遺物は一切出土していないため、玉作工房の可能性は低い。

### 加工段5

#### 規模と形態（第60図）

調査区東端の斜面部で検出した遺構である。主軸は北東から南西にとり、現状規模は南北8.7m、東西0.3mである。2層包含層の掘削後検出した。非常に浅く、当初は包含層の堆積と考えていた。が、床面がわずかながら平坦面となり、ピットを検出したことから遺構と判断した。後世の削平でほとんど残存していない状況である。ピット3基の埋土は灰黄褐色粘質土で、地山砂礫を多く含む。遺物は須恵器鉄鉢形土器が出土している。

**出土遺物（第61図）** 第61図1は須恵器鉄鉢形土器である。底部は欠損し、復元口径は17.3cmを測る。口縁は内湾し端部は切り落として平坦面をつくる。内外面回転ナデ、外面下部はケズリのちナデている。

#### 遺構の時期と性格

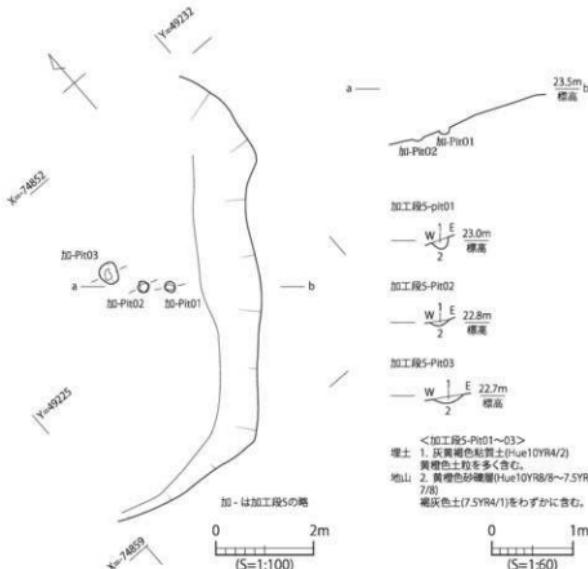
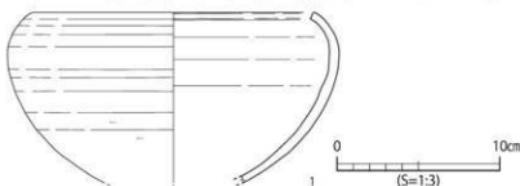
遺構の残存状況は非常に悪く、詳細は不明である。

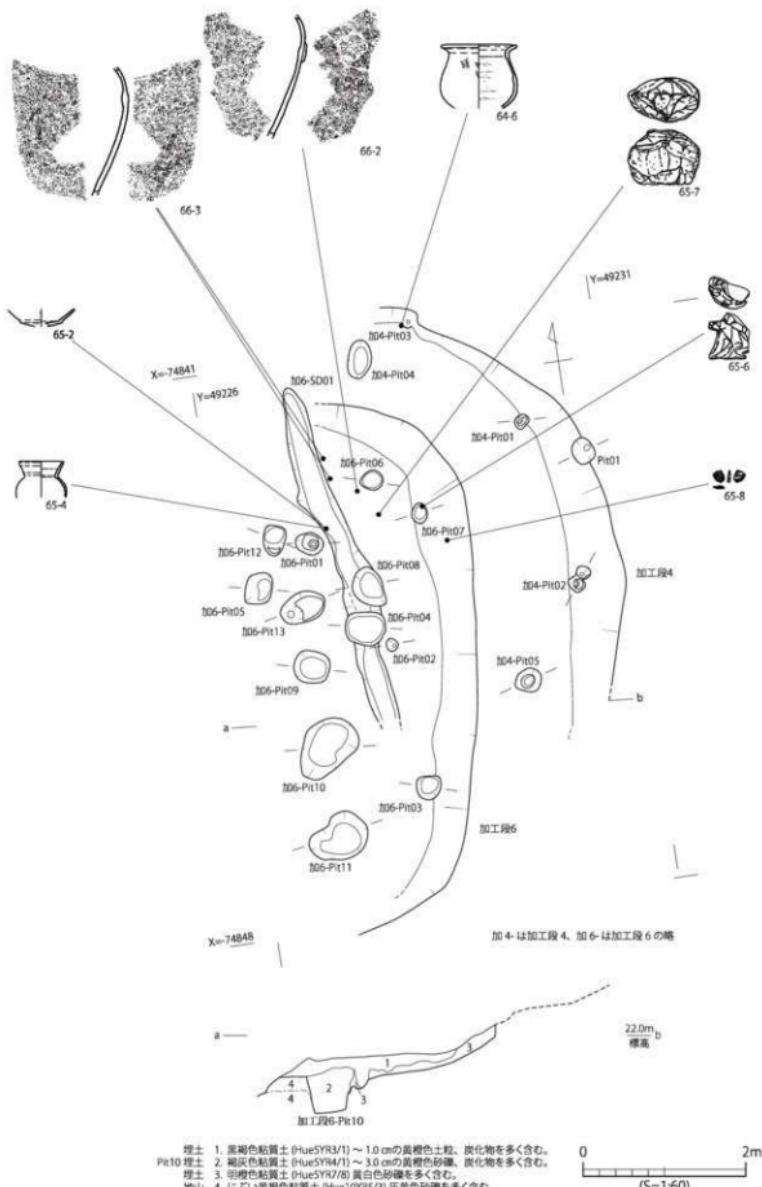
## 加工段4（第62図～第64図）

## 規模と形態

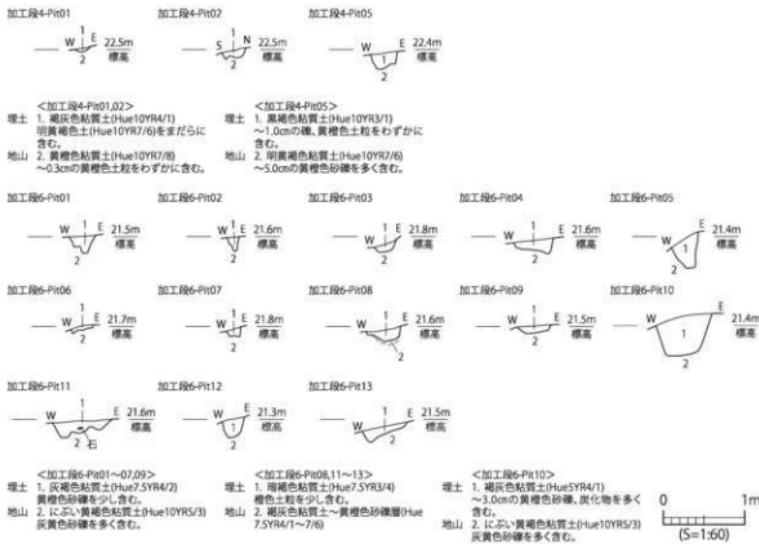
調査区北側、斜面部で検出した。主軸はほぼ北から南にとり、現存規模は南北5.7m、東西1.7mを測る。この場所は合計4基の遺構が重複している。上層で検出している集石遺構と、加工段6との切り合い関係は不明である。さらに、集石遺構と同じ面で検出した溝状遺構SD01は加工段4の南上面で検出している。

集石遺構完掘後、サブトレレンチの延長で土層を確認したところ、遺物を含む層が数面認められた。面的に掘り下げ加工段6のプランを検出したが、北側では地山を掘り込む場所が2段あったことから、それぞれ別の遺構と判断して上段を加工段4、下段を加工段6とした。集石遺構のサブトレレンチで確認した褐色系の粘質土が堆積していたと考えられるが、その堆積状況から遺構の埋土ではない可能性が高い。

第60図 九景川遺跡V区 加工段5実測図 ( $S=1:60, 1:100$ )第61図 九景川遺跡V区 加工段5出土遺物実測図 ( $S=1:3$ )



第62図 九景川遺跡V区 加工段4、加工段6実測図 (S= 1 : 60)



第63図 九景川遺跡V区 加工段4、加工段6検出ピット土層断面図 (S=1:60)

ピット5基を検出しており、堆積土は褐灰色～黒褐色系の粘質土である。ピットから遺物は出土していない。

遺物は、下層出土の土師器蓋のほか、8世紀後半～9世紀の須恵器蓋なども出土しており、上層の遺構からの混ざり込みも想定される。

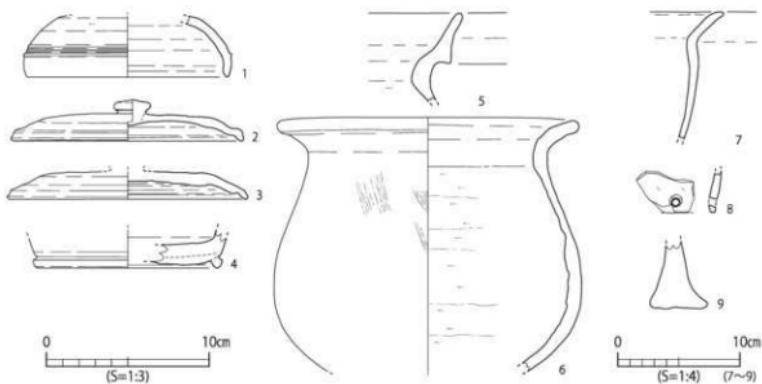
#### 出土遺物（第64図）

第64図1～4は須恵器である。1は蓋環の蓋で、復元口径12.3cmを測る。外面肩部回転ヘラケズリ、口縁部には明瞭な突帯が1条施され、端部内面は平坦面をつくる。大谷3か。2は算盤状つまみを持つ蓋で、口径は14.1cm。内外面回転ナデ、外面天井部はヘラ切り後ナデする。口縁部は回転ナデにより屈曲させ平坦面をつくり、端部は下方につまみ出す。出雲IV A期で8世紀後半に位置付けられる。3はつまみ部が欠損しているが、2と同型式とみられる。復元口径14.8cm。4は壺の底部で、回転ナデで整えた分厚い底部の最外周に、小さな高台をナデで貼り付ける。復元底径11.0cmを測る。8世紀後半以降の所産か。

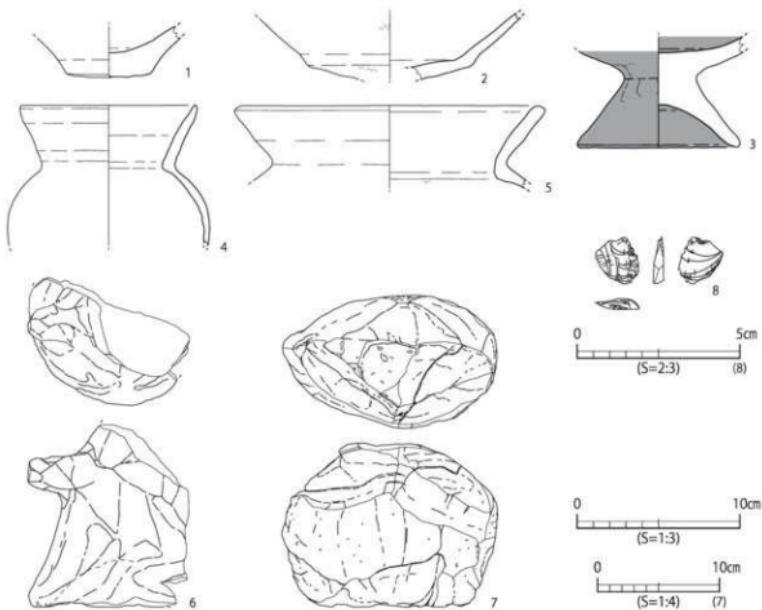
5は弥生土器壺か甕の複合口縁である。風化するが、口縁部内面にわずかに丹塗りが観察される。草田4期に相当する。

6は土師器甕の口縁部～胴部である。復元口径は18.0cmで、頸部から分厚いつくりで口縁部は強く外反する。肩部はなだらかで胴部下半が貼り下彫れるタイプである。内面はヨコナデとケズリ、外面はハケ目が観察される。なお、口縁部と胴部を図上で復元している。7世紀～8世紀か。

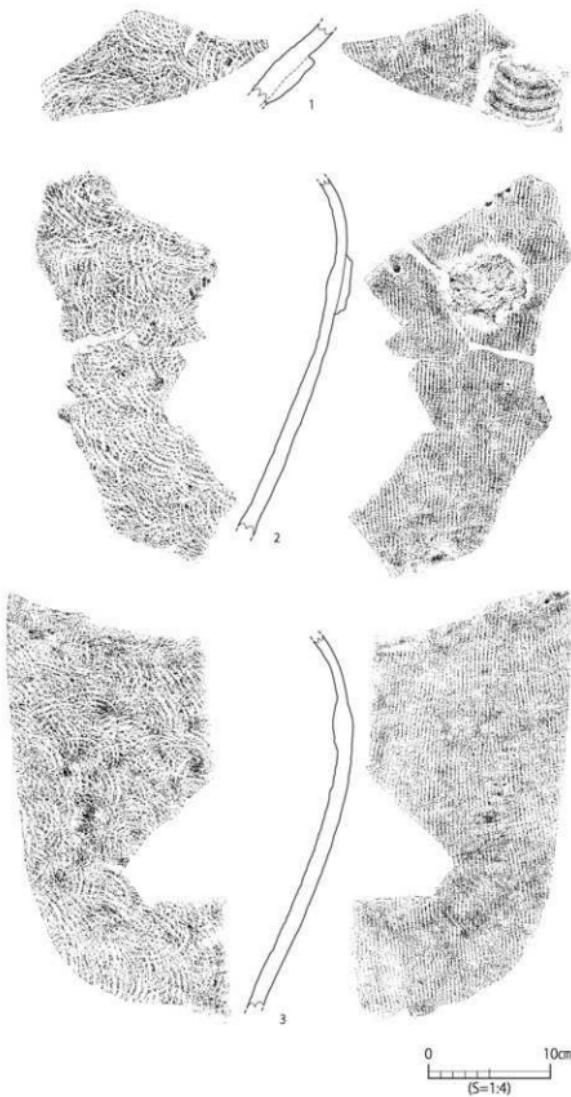
7～9は甕と移動式甕である。7は甕口縁部～胴部で、頸部屈曲して口縁部は外反する。8は甕底部で、底部接地面直上に0.7cmの孔がある。内面には粘土のもりあがりが確認でき、外から



第64図 九景川遺跡V区 加工段4出土遺物実測図 ( $S=1:3$ 、 $1:4$ )



第65図 九景川遺跡V区 加工段6出土遺物実測図 (1) ( $S=2:3$ 、 $1:3$ 、 $1:4$ )



第66図 九景川遺跡V区 加工段6出土遺物実測図（2）(S=1:4)

中へ向けて穿孔される。7と8は同一個体の可能性がある。

9は移動式竈の底部とみられるが摩滅著しく調整不明である。

#### 遺構の時期と性格

わずかな残存状況であり、詳細は不明である。下層出土遺物は7世紀～8世紀の土師器類があるが、時期の特定は困難である。ただし、SD01堆積土はAMS年代測定で10世紀末～11世紀前半の数値が与えられており、上限は11世紀前半といえるだろう。

#### 加工段6（第62図～第66図）

##### 規模と形態

調査区北側の斜面部で検出し、加工段4と重複しているが切り合い関係は不明である。主軸は加工段4より少し東に傾き、検出規模は南北6.4m、東西2.9mを測る。プランを検出した時点で既に加工段4の堀方が露出していた。加工段4の堆積土を除去後、当遺構のプランを検出したと考えられる。

埋土は黒褐色粘質土で炭化物が多く、細かな地山ブロックを多く含む。

床面で東西方向の溝状遺構を検出した。溝SD01は検出長さ4.2m、幅0.3m、深さ20cmを測る。検出プランは遺構の堀方からみ出るように検出されている。床面直上では13基のピットを検出した。溝を切って掘り込むピットが2基あり、埋土は灰褐色～暗褐色粘質土である。Pit10は径50cm～80cm、深さ50cmで、最も大きく深い。炭化物を多く含む褐灰色粘質土が堆積していた。他のピットは小規模なものが多い。ピットから遺物は出土していない。

遺物は古墳時代中期～後期の直口壺や高杯、須恵器大甕片、土製支脚、弥生土器が出土している。いずれも床面から浮いた状態で検出した。

#### 出土遺物（第65図、第66図）

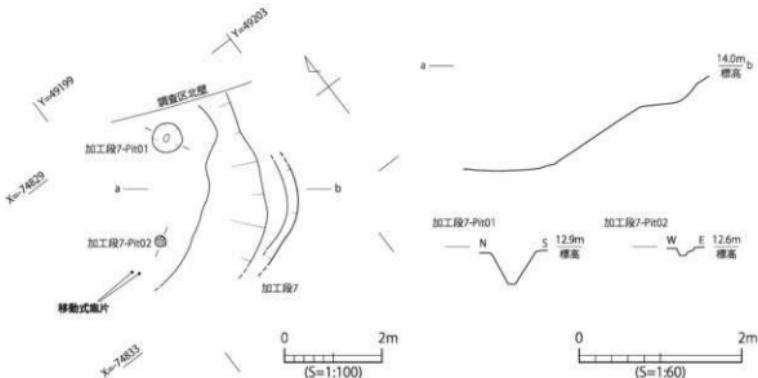
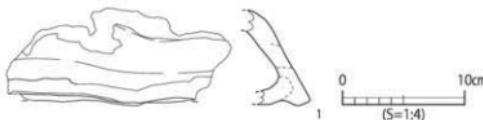
第65図1は弥生土器である。底径5.2cmを測り、平底を呈す。風化著しく調整不明である。弥生時代中期前半に位置付けられる。

2～5は土師器である。2は高杯で、杯部の口縁端部を欠損している。見込みからの立ち上がりは直線的で明瞭な段をつくる二重口縁で、外面一部にハケ目が残る。古墳時代前期～中期に属する。3は高杯である。底径は10.0cmを測り、内外面に丹塗りが施される。厚手の粗雑なつくりで、外面には指頭痕がみられる。脚柱部は短く、内面内湾する。古墳時代後期か。

4は直口壺の口縁部～胴部上半である。復元口径は10.7cmで、風化が進み調整不明である。口縁はやや外方に立ち上がり、端部はやや内湾して細く仕上げる。肩部は丸く、口径よりも最大幅は大きい。松山II新に相当するものである。5は甕口縁部で、口径は18.6cmを測る。口縁端部は平坦面をつくり厚手にする。肩部内面にはケズリが観察される。古墳時代前半期か。

6は土製支脚である。上部を欠損するが胴部～脚部が残存し、復元底径は11.0cmである。外面ナデにより調整される。胴部は穿孔がなく、胴部中ほどに通常穿孔のある部分に小さな突起がつく。加工段3で出土したものと同型式とみられるが、6の方がやや大型である。底部～胴部にかけて一部煤が付着する。

7は高さ11.0cm、幅17.7cm、厚さ13.4cmを測り、ほぼ完形とみられる。全体に被熱し一部は強く赤変する。剥落面は底面まで続き、それによって底面は平坦になっている。自然石ではあるが、

第67図 九景川遺跡V区 加工段7実測図 ( $S=1:60, 1:100$ )第68図 九景川遺跡V区 加工段7出土物実測図 ( $S=1:4$ )

支脚の代用として使用された可能性がある。

8は黒曜石の剥片である。打面調整剥片とみられ、基部は厚みがあり、若干欠損している。

第66図1～3は須恵器大甕である。同一個体とみられる破片が集中して出土したが、全形は復元できず、接合できたものを図化した。内面は同心円タタキ痕で、2の内面は一方向から叩いている。外面は平行タタキ目のち一部カキ目が施される。

#### 遺構の時期と性格

弥生土器は加工段4でも検出しており、上層からの検出であり混ざり込みと判断した。その他の出土土器は古墳時代後半に位置付けられる。ピットは検出しているものの建物は抽出できず、性格については不明である。

#### 加工段7（第67図）

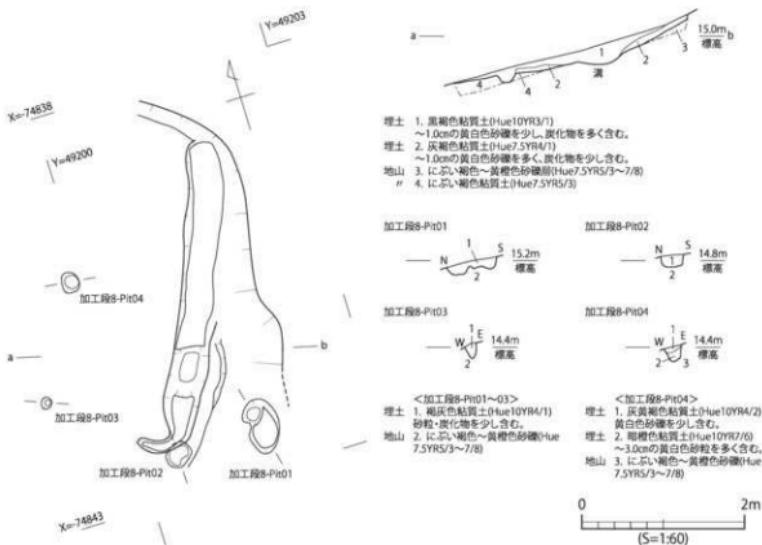
##### 規模と形態

調査区中央の北端、斜面部の標高14m付近で検出した。検出規模は現状で東西3.7m、南北3.3mである。調査区北壁以北にも続いているとみられる。

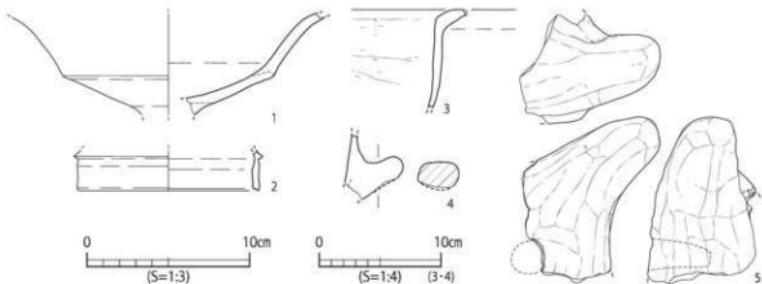
遺構の東壁は2段になっており、掘り直しの可能性もあるが確認できなかった。堆積していたのは包含層とみられ、プランは検出していない。床面ではピット2基を検出している。Pit01は焼土が堆積しており、移動式竈小片が出土した。

##### 出土遺物（第68図）

第68図1は移動式竈の底部で、焚口上部とみられる。断面で接合痕が確認できる。底内側と本体部分には煤が付着している。



第69図 九景川遺跡V区 加工段8実測図 (S= 1 : 60)



第70図 九景川遺跡V区 加工段8出土遺物実測図 (S= 1 : 3, 1 : 4)

### 遺構の特徴と性格

残存状況が悪く遺構の詳細は不明である。

### 加工段8（第69図）

#### 規模と形態

調査区中央の斜面部で、加工段3の北西で検出した。検出規模は現状で南北4.5m、東2.0mを測るが、南側は後世の削平でなくなっている可能性が高い。包含層掘削後、地山に掘り込むプランを検出した。東西方向のサブトレンチで土層を確認し面的に掘削したところ、床面では南北方向の溝状遺構を検出した。深さは20cmを測る。

埋土は1層が炭化物を多く含む黒褐色粘質土で、しまりは緩い。2層は灰褐色粘質土で、地山

砂礫を多く含む。1層上面ではピットを4基検出しているが、いずれも浅く建物は復元できない。溝には1層が堆積していた。

溝からは二重口縁を持つ土師器高环や、初期須恵器とみられる蓋環小片が出土している。その他1層から、壺と土製支脚が出土した。

#### 出土遺物（第70図）

第70図1は土師器高环の環部である。口縁端部を欠くが、明瞭な段を持ち二重口縁となる。段の部分には接合痕が観察される。内外面ともミガキが施される。古墳時代前期末～中期に属する。

2は須恵器の蓋環で、復元口径は11cmを測る。焼成は暗灰色で胎土は堅緻、肩部の突出部は鋭い。口縁端部には明瞭な沈線が施され、内外面回転ナデが観察される。初期須恵器の可能性がある。

3・4は壺である。3は口縁部から胴部で、分厚いつくりの口縁部は外反し端部は細く納める。口縁部に比べ胴部器壁はやや薄いつくりである。4は把手部で、断面はやや扁平である。

5は土製支脚である。大きく欠損しているが、突起部は2方向とみられ、非貫通孔が残存する。岩橋I C類に分類される。

#### 遺構の時期と性格

溝埋土から初期須恵器が出土したことは注目され、遺構の時期は5世紀後半以降と推察される。東壁堀方の直下に溝が掘られており、何らかの機能を持った加工段であった可能性はあるが、詳細は不明である。

#### 加工段9（第71図）

##### 規模と形態

調査区南端の、斜面部標高18.1m付近で検出した。当遺跡の検出遺構の中で、唯一主軸を東西から南北にとる。検出規模は東西6.5m、南北3.5mで、南壁の立ち上がりは高さ80cmを測る。

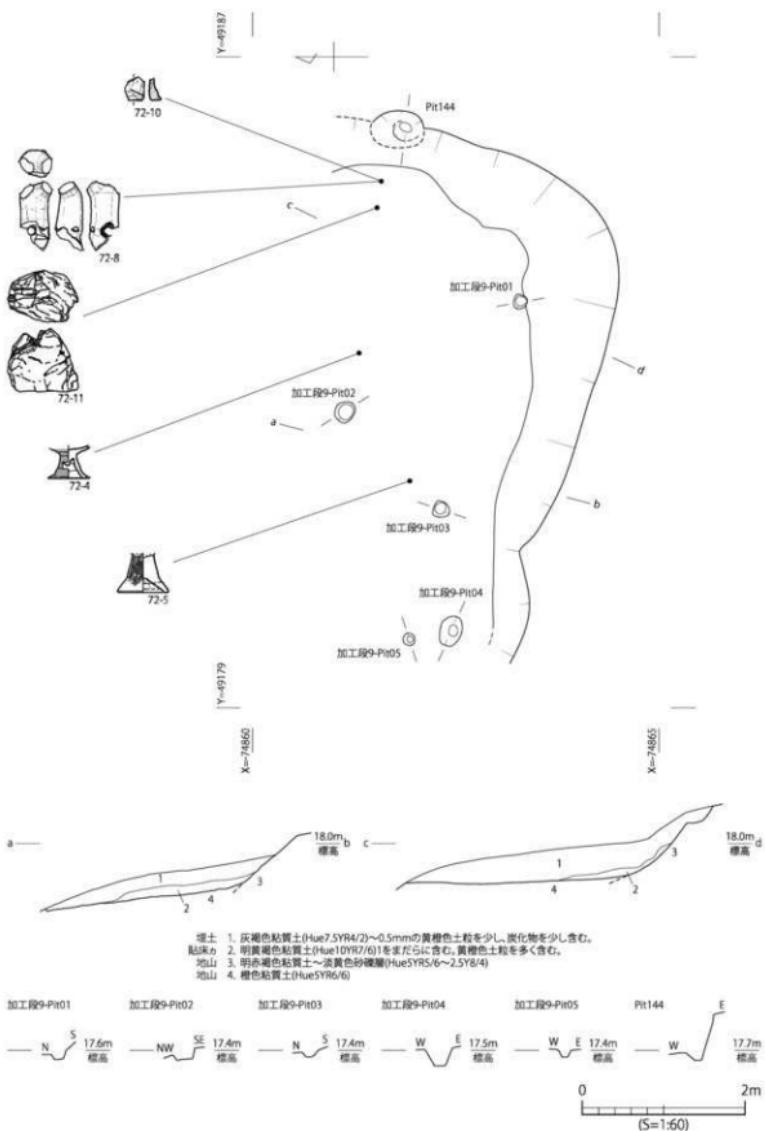
表土掘削後にプランを検出したため、サブトレンチを入れて土層を確認した後、面的に掘削した。埋土は1層灰褐色系～2層明黄橙色系の粘質土で、2層は粘性が強く硬くしまり、貼床の可能性もある。壁際溝は検出されなかった。ピットは床面で5基検出し、5cm～40cmを測る。小規模で規則性はなく、建物は復元できなかった。

遺物はすべて1層からの出土である。古墳時代後期の須恵器蓋環や、転用硯とみられる高台付环、土師器高环、土製支脚や移動式窓小片、手捏ね土器が出土している。

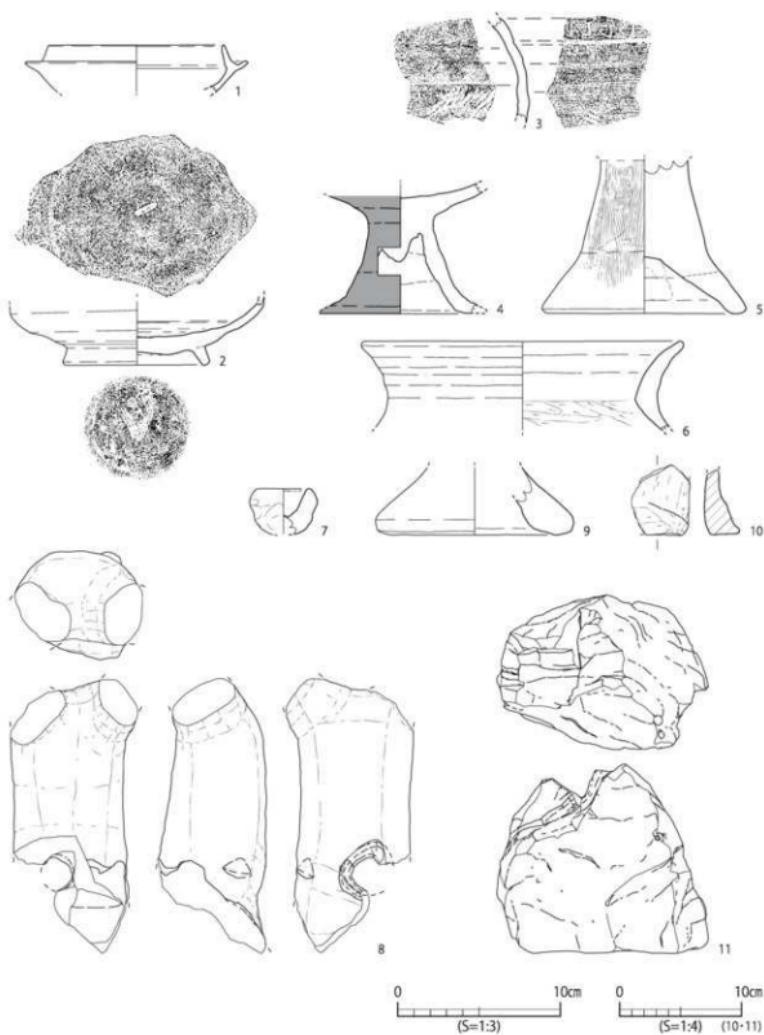
#### 出土遺物（第72図）

第72図1～3は須恵器である。1は環身で、復元口径10.7cmを測る。立ち上がりはやや内傾し、内外面回転ナデ。大谷3～4に属する。2は高台付环で、口縁部は欠損する。底径は9.0cmを測る。底部外面に「V」字のヘラ記号が施され、内面見込み部分は摩滅が著しい。墨痕は確認できないが、転用硯か。高台は外方へ踏ん張るタイプで、底部と环部の境はなくかなりゆるくたちあがり湾曲する。3は甕か壺の肩部である。内面上半と下半は段で区切られ、下半は当て具痕が残る。外面上半にはゆるい波状文が施され、下半はタタキのちカギ目が観察される。

4・5は土師器高环である。4は环底部から脚柱部で、復元底径は10.3cmを測る。風化著しく調整は不明だが、外面にわずかに丹塗りが残る。脚端部は外反して平坦面をつくる。5は脚柱部のみの残存で、全体にぼってりとして粗雑なつくりである。脚柱部外面はハケ目、内側は椀状を



第71図 九景川遺跡V区 加工段9実測図 (S= 1 : 60)

第72図 九景川遺跡V区 加工段9出土遺物実測図 ( $S=1:3$ 、 $1:4$ )

呈し、楕状部分は接合痕が観察される。いずれも古墳後期以降か。

6は土師器甕である。外反する分厚い口縁部で、外面は強いナデにより単位が明瞭にみられ、肩部内面はケズリである。6世紀末～7世紀初頭か。

7は手捏ね土器である。復元口径は3.2cmで、胎土は細かく浅黄橙色で焼成良好。内外面指頭による調整で圧痕が観察される。

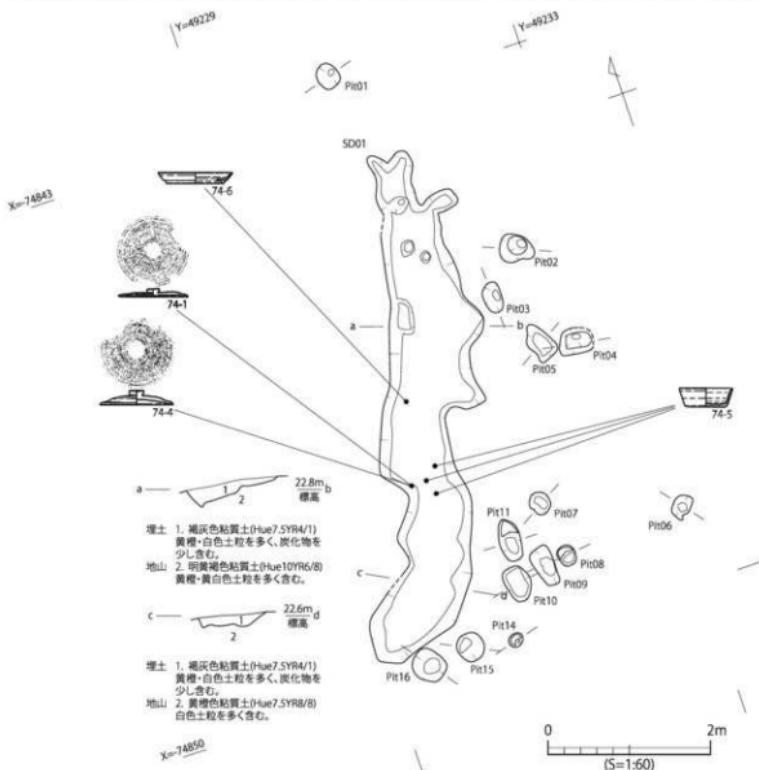
8・9は土製支脚である。8は胴部で、2方向の突起部、胴部下半に非貫通孔が観察される。脚裾部は胴部に薄く貼り付ける。岩橋I C類に分類される。9は脚裾部小片である。復元底径は12.2cm、風化のため調整不明である。

10は移動式竈の底部とみられ、接地面は煤が付着している。

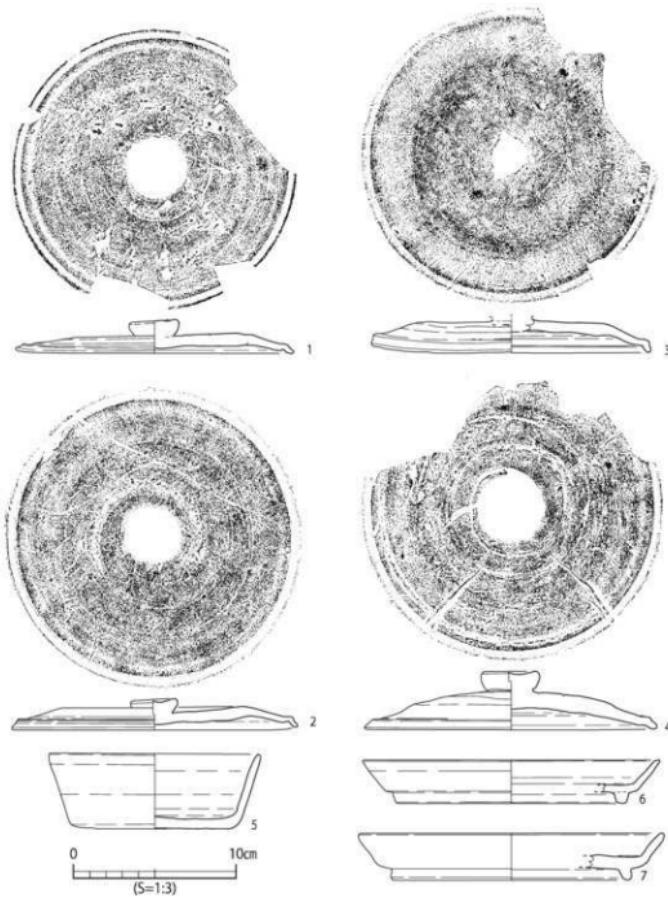
11は三角錐状を呈し、被熱により赤変している。支脚の代用として使用された可能性がある。

#### 遺構の時期と性格

出土遺物から時期はおおむね古墳時代後半と考えられる。転用硯の出土は今回調査では初であり、識字層の存在を窺わせる。また、移動式竈や土製・石製支脚の出土は加工段6と類似しており、



第73図 九景川遺跡V区 SD01 実測図 (S=1:60)

第74図 九景川遺跡V区 SD01出土遺物実測図 ( $S=1:3$ )

遺構は同時期に併存した可能性がある。

#### SD01 (第73図、第74図)

##### 規模と形態

調査区東端、斜面部で検出した。加工段4を切っている。検出標高は約23mである。主軸は北東から南西にとり、平面プランは南北6.3m、東西1.2mを測る。1層表土を掘削後、2層包含層上面で検出した。

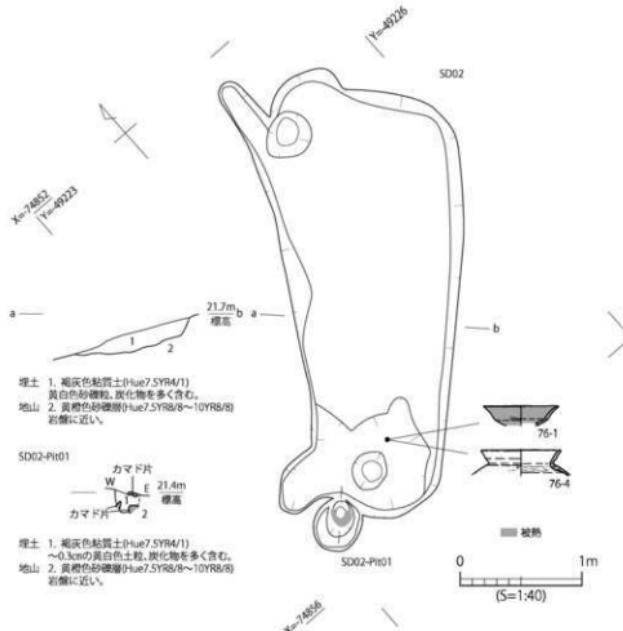
平成25(2014)年度試掘調査のT1で検出した遺構であり、出土遺物が接合できた。現状で深さは約10cmを測る。堆積土は炭化物を少し含む褐灰色粘質土で、試料をAMS年代測定にかけ

たところ10世紀末～11世紀前半の数値が得られた。

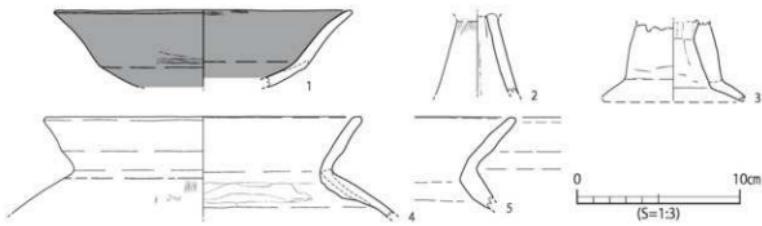
一方出土遺物は、須恵器蓋と环、高台付环が出土している。SD01 東側は緩やかな斜面で、ピットを多数検出しているが、建物は抽出できなかった。

#### 出土遺物（第74図）

第74図1～4は須恵器蓋である。いずれも算盤状つまみが付くもので、天井部外面には回転ヘラケズリが明瞭に残り、1・4はヘラ切りのちナデている。肩部は口縁部にかけて押さえて湾曲しており、端部は下方につまみ出す。口縁端部内面はヘラにより明瞭な沈線状となる。3・4には口縁部外面に重ね焼き時に付着したとみられる粘土が口縁状に付着しており、扁平なつくり



第75図 九景川遺跡V区 SD02 実測図 (S= 1 : 40)



第76図 九景川遺跡V区 SD02出土遺物実測図 (S= 1 : 3)

である。出雲IV A～IV B期に相当する。

5は壺で、遺存状況が良く、口径13.0cm、底径10.2cm、器高4.7cmを測る。体部と底部の境は緩やかで、やや外傾しながら直線的にのびる。口縁部は体部から一括回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデしている。2・4の肩部には、回転ナデの上からハケかクシ状の傷がある。出雲IV A期に属する。

6・7は高台付皿である。6は復元口径18.2cm、復元底径13.8cm、器高2.7cmを測る。体部は直線的にやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部は面取りして平坦面をつくる。高台は断面逆台形で低く、最外周よりも内側につく。7は6より厚手のつくりで、復元口径18.8cm、復元底径14.4cm、器高2.9cmである。いずれも焼成不良で淡黄～浅黄橙色を呈し、出雲IV C期に位置付けられる。

#### 遺構の時期と性格

出土遺物の時期は8世紀後半～9世紀初頭に位置付けられるが、AMS年代測定によると10世紀末～11世紀前半と考えられ、矛盾が生じる。少なくとも9世紀には地山を溝状かそれ以上に広く掘り込んだ加工段の可能性が考えられるが、その性格は不明である。

#### SD02(第75図)

##### 規模と形態

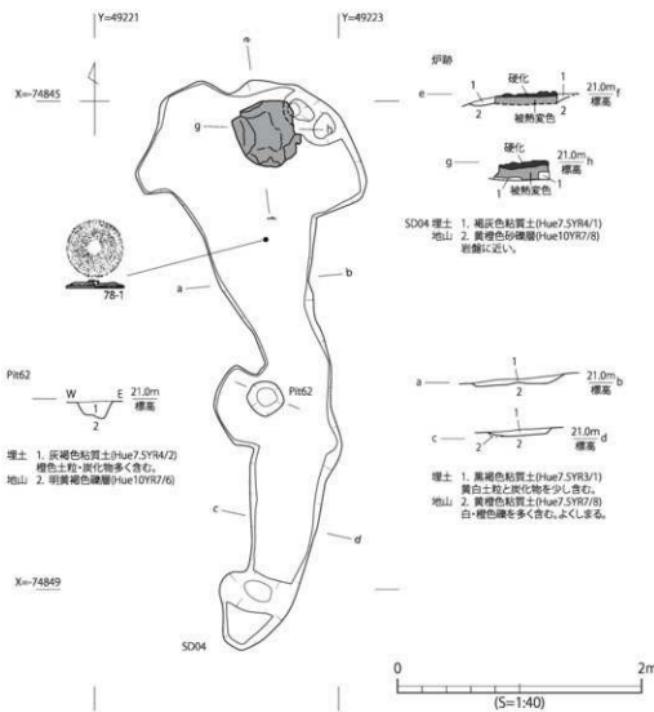
調査区東側の斜面部平坦面で検出した。検出標高は21.7mである。主軸は北東から南西にとり、検出プランは東側が3.7mの隅丸長方形である。南北は1.5mを測る。2層包含層掘削後、地山上面で検出した。東壁は、地山の立ち上がりと平坦面の境に沿っている。

埋土は褐灰色粘質土で約20cm堆積し、炭化物を非常に多く含みしまりはゆるい。床面は地山岩盤となり、凹凸が激しい。貼床、壁際溝は検出していない。

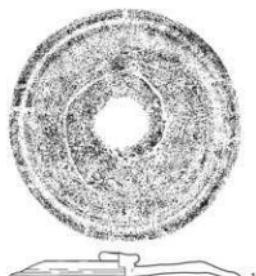
ピットを3基検出していて、そのうち最も南側のPit01内部には小規模な竈とみられる施設が確認された。ピット平面形は円形で、上端は40cm～50cm。2段掘りになっている中端から下端にかけて竈が残存し、北に開くコの字形を呈する。竈は被熱し赤橙色に変色・硬化していた。中端には土師器表が削れた状態で重ねてあり、近接して出土した破片と接合している。他に古墳時代前期末の丹塗りの土師器高壺や古墳時代中期の甕が出土している。

#### 出土遺物(第76図)

第76図1～3は土師器高壺である。1は口径18.2cmを測る壺部で、口縁端部内面にわずかに丹塗りが残存し、本来は内面全面に施されたと考えられる。二重口縁状に口縁部を貼り付け、明瞭な段をつくる。外面にはミガキがみられ、いわゆる大東式で、松山II期に位置付けられる。2・3は脚柱部である。2は外面にハケ目とミガキとみられる調整、内面はしづり痕が観察される。3は外面横位に傷痕がある他は調整不明である。内面上半はしづり痕、下半には外反する底部の貼り付け痕がみられる。2に比べて分厚く粗雑なつくりである。いずれも古墳後期に相当するか。4・5は土師器甕である。4は口径19.3cmを測る。口縁部は分厚く、中ほどにゆるい稜を持ち、端部は肥厚し平坦面をつくる。頸部から肩部にかけては、粘土を3重に貼り付けたことにより厚手となっている。松山IV期に分類される。5は口縁部～頸部片で、口縁部は4同様やや膨らみ、口唇部には平坦面を作る。頸部にミガキか丁寧なナデが観察される。古墳後期に属する。



第77図 九景川遺跡V区 SD04 実測図 (S= 1 : 40)



0 10cm  
(S=1:3)

第78図 九景川遺跡V区 SD04 出土遺物実測図 (S= 1 : 3)

## 遺構の時期と性格

隅丸方形の平面形状や竈を持つピットを検出し、竈上面での甕の出土状況は竈終いを想像させる。古墳時代中期～後期の竪穴建物跡と推察される。

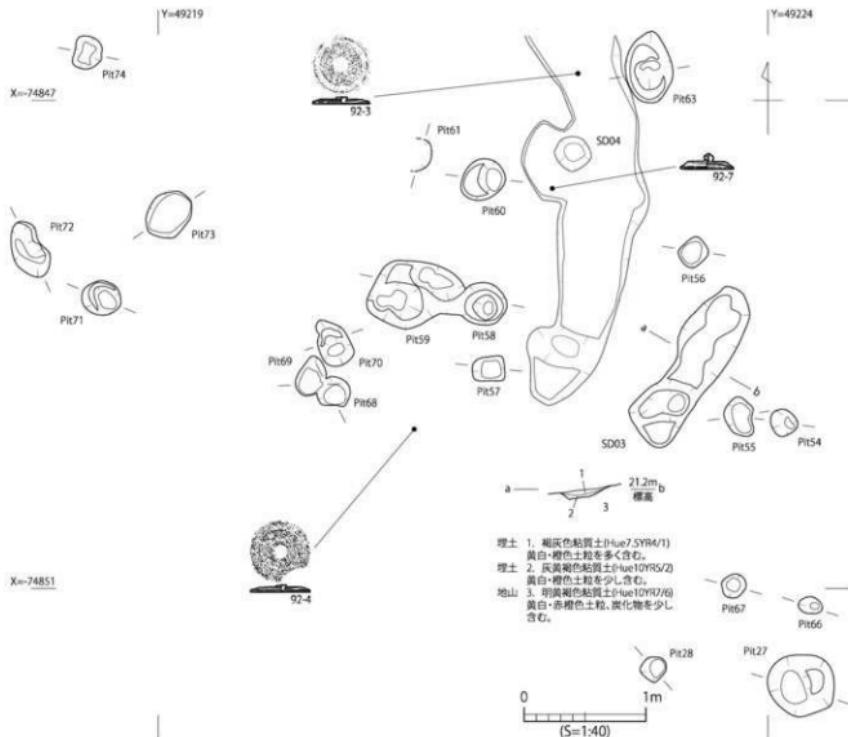
## SD04（第77図）

## 規模と形態

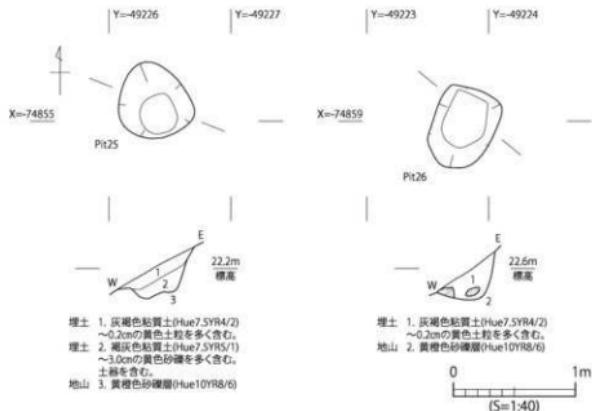
調査区北側、斜面部のSD02と同じ平坦面で検出した。すぐ西にはS101がある。主軸は北から南にとり、検出規模は南北4.7m、東西1.9mを測る。平面プランは、北端が東西2.0mまで広がり、南に向かって細く溝状となる。2層包含層掘削後の、地山岩盤に掘り込む。

残存する黒褐色粘質土の深さは10cmほどであり、後世に削平された可能性が高い。検出上面では、算盤玉状つまみの付く須恵器蓋や高台付坏などが出土しているが、遺構にともなうのは1点のみである。

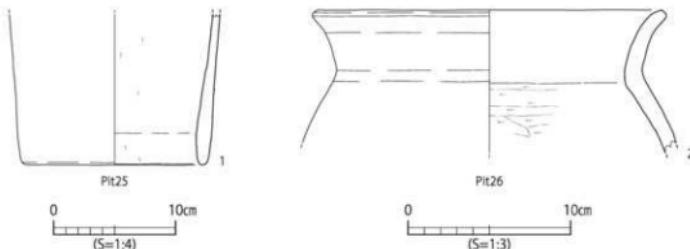
幅が広くなる北端では、炉跡を確認した。炉跡は50cm四方で、表面は硬化して被熱変色部分はもうろい。西側の焼土中からは土師器が出土したが、小片のため器種・時期とともに不明である。



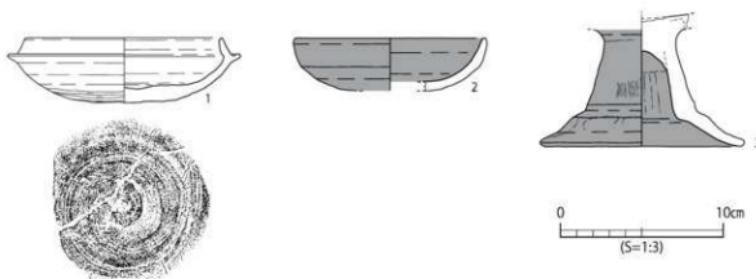
第79図 九景川遺跡V区 SD03、周辺ピット実測図 (S=1:40)



第80図 九景川遺跡V区 Pit25、Pit26 実測図 (S= 1 : 40)



第81図 九景川遺跡V区 Pit25、Pit26 出土遺物実測図 (S= 1 : 3、1 : 4)



第82図 九景川遺跡V区 SX01 出土遺物実測図 (S= 1 : 3)

中央付近ではピットを1基確認している。西側には多数のピットを検出しているが、規則的な配置は確認できなかった。

#### 出土遺物（第78図）

第78図1は須恵器蓋である。算盤玉状つまみ径は2.5cm、復元口径は13.9cm、器高は1.9cmを測り、扁平なつくりである。天井部外面はヘラ切りのちナデ、肩部は回転ナデで口縁部にむかって押さえて形作り、端部の垂下は短い。天井部にはハケかクシ状工具で傷をつけており、SD01で出土した蓋と同じ特徴を持つ。出雲IV A期で、8世紀後半に位置付けられる。

#### 遺構の時期と性格

遺存状況が悪く、詳細は不明である。須恵器は覆土に包含されていたとみられ、時期の特定は困難である。炉跡周辺には焼土や炭化物の集中する地点はないため、SD04の覆土上面につくられた小規模な地焼炉と考えられる。

#### Pit25、Pit26（第80図）

##### 規模と形態

調査区東側、斜面部標高約22mで検出したピットである。検出直径は50cm～70cmで、深さ30cmを測る。いずれも東方から西方に降る段丘の斜面で検出し、地山岩盤を垂直に掘り込む。

埋土は灰褐色～褐色系の粘質土で、Pit25の2層上面から土師器甌、Pit26の1層から土師器甌が出土した。Pit26からは他に拳大の石が出土したが加工痕などは確認できず、自然石と判断した。

#### 出土遺物（第81図）

第81図1は土師器甌の底部で、復元底径15.0cmを測る。内面にケズリ上げが観察され、底部と判断した。脚部は直線的に下り、やや分厚くつくる。外面一部に黒斑が認められる。古墳時代後期か。

2は土師器甌の口縁部～肩部である。復元口径は21.2cmを測る。全体的に厚手で、口縁部は外傾して立ち上がり、端部は外に小さく屈曲して平坦面をつくる。内面はケズリ、外面ヨコナデ・ナデ調整がみられる。にぶい橙色を呈し、焼成良好で胎土はよく締まる。古代に属するものか。

#### 遺構の時期と性格

周辺のピットを含めても規則的な配置は確認できなかった。出土遺物に時期差があることから、それぞれ違う時期に形成された遺構の可能性もある。

#### SX01（第82図）

##### 規模と形態（第39図）

谷部D3グリッドで検出した。包含層掘削中、30cm四方の範囲に貝溜まりSX01を検出したが、明確なプランは確認できなかった。遺物の一部は貝層に埋もれた状態であったため、これらをSX01出土とした。

#### 出土遺物（第82図）

第82図1は須恵器の环身である。復元口径12.0cm、器高4.0cmで、かえりは厚く内傾してたちあがる。底部外面はヘラ切り後ヘラケズリを施し、内面は全面研磨される。大谷5に位置付け

られる。

2は土師器壺で、復元口径 21.2cmである。やや平底で、体部はゆるやかに開いてたちあがる。体部外面下半はヘラケズリにより明確な稜ができる。全面に橙色の丹が塗られている。

3は土師器の高環脚柱部である。分厚いつくりで、ゆるやかな柱部から裾部はくの字に屈曲する。境を押さえナデて段をつくりだし、裾部は長くとて端部は外反する。古墳時代中期か。

### 3. 遺構外出土遺物

第83図～第93図は包含層出土遺物である。取り上げはグリッドごとに行い、谷部と斜面部にわけて、器種ごとに掲載している。谷部は包含層が2m近く堆積していたD2～E3グリッドが最も多く出土している。

一方斜面部では、遺構直上の包含層から出土した遺物が少量ある。遺物は主にB5～C6グリッドで出土しており、平安時代の須恵器が多く、黒曜石・サヌカイト製石鏃などが出土している。時期の傾向としては、谷部は弥生時代末～古墳時代後期が多く、斜面部は8世紀末～9世紀初頭が多い。

#### 包含層（谷部）出土遺物（第83図～第91図）

##### 弥生土器（第83図）

第83図1～4は弥生土器である。弥生土器は図化できたものは4点であるが、なかでも4はほぼ完形で残存する良好な資料である。時期は弥生時代終末期に位置付けられる。

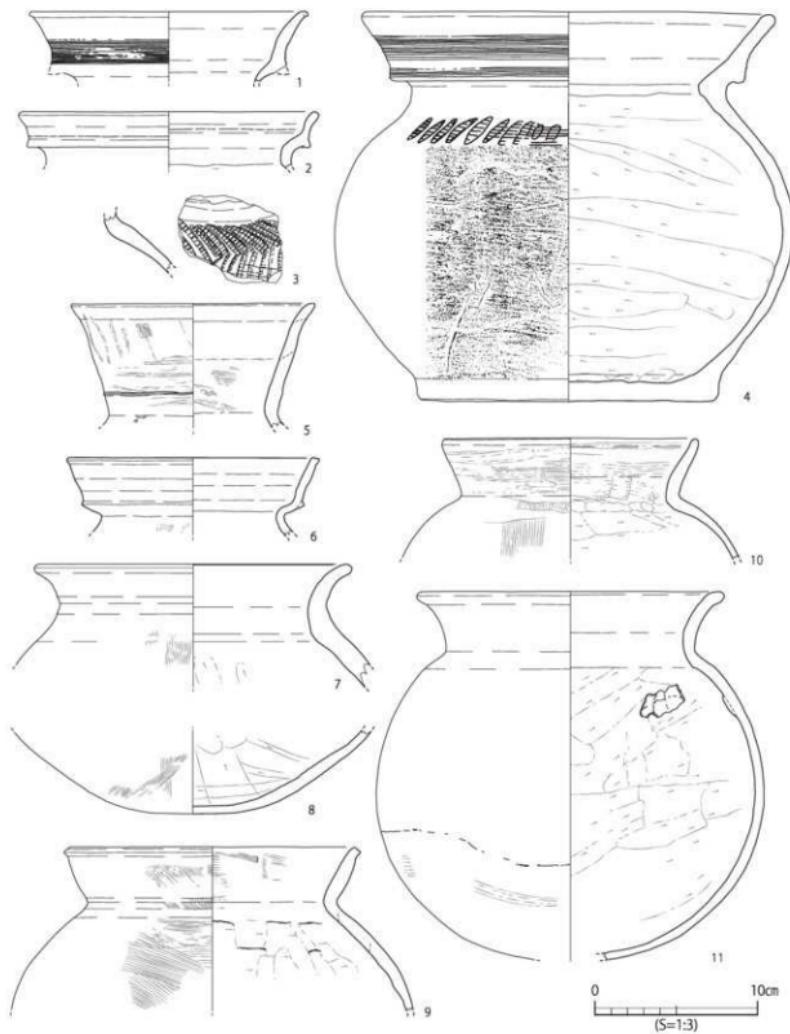
1は甕の複合口縁部で、口径 16.8cmを測る。口縁外面には擬四線文をナデ消しており、口唇部は外に引き出しおみ込む。突出部は欠損しているが、明瞭な角をもつとみられる。2の複合口縁部は短いつくりで、端部はふくらみ若干平坦面をもつ。沈線を施し端部の形状を整えたのちナデ消したとみられる。口縁内面はヘラ状工具によりナデる。復元口径 18.0cmである。3は壺か甕の頸部～肩部で、外面にはクシ歯状工具による刺突文が観察される。

4は鉢とした。口径 2.5cm、底径 18.0cm、復元器高 25.5cmを測る。全体的に厚手のつくりで、口縁部外面は擬四線文のちミガキのように丁寧なナデ消し、肩部は貝殻復縁によるヨコナデのち刺突文を施す。胴部内面は底面までケズリ、胴部と底部の見込みを押さえつけ、境をつけている。いずれも松本V-3期に位置付けられる。

##### 土師器（第83図～第86図）

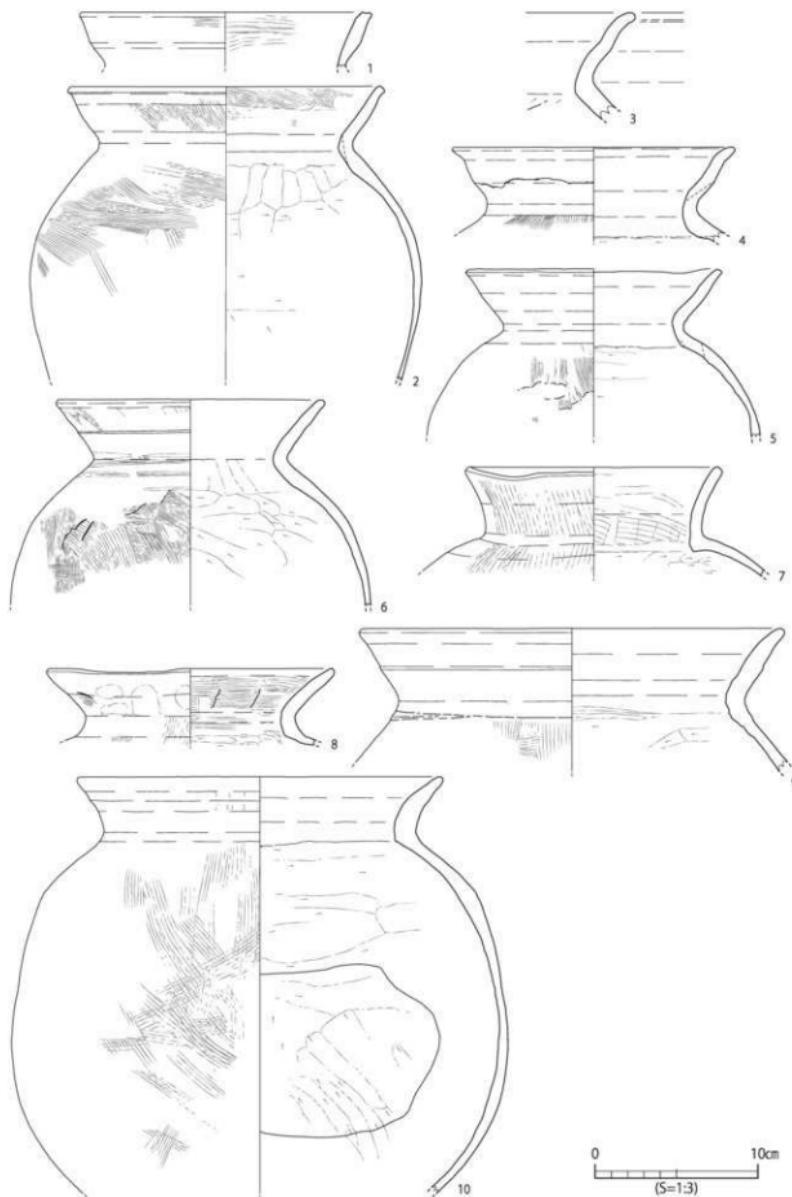
第83図5～11、第84図～第86図は土師器である。器種別にみると、甕が圧倒的に多く、壺、瓶、小型器台、壺、高環、低脚壺、小型丸底壺などが出土し、古墳時代前期末～中期に位置付けられる。

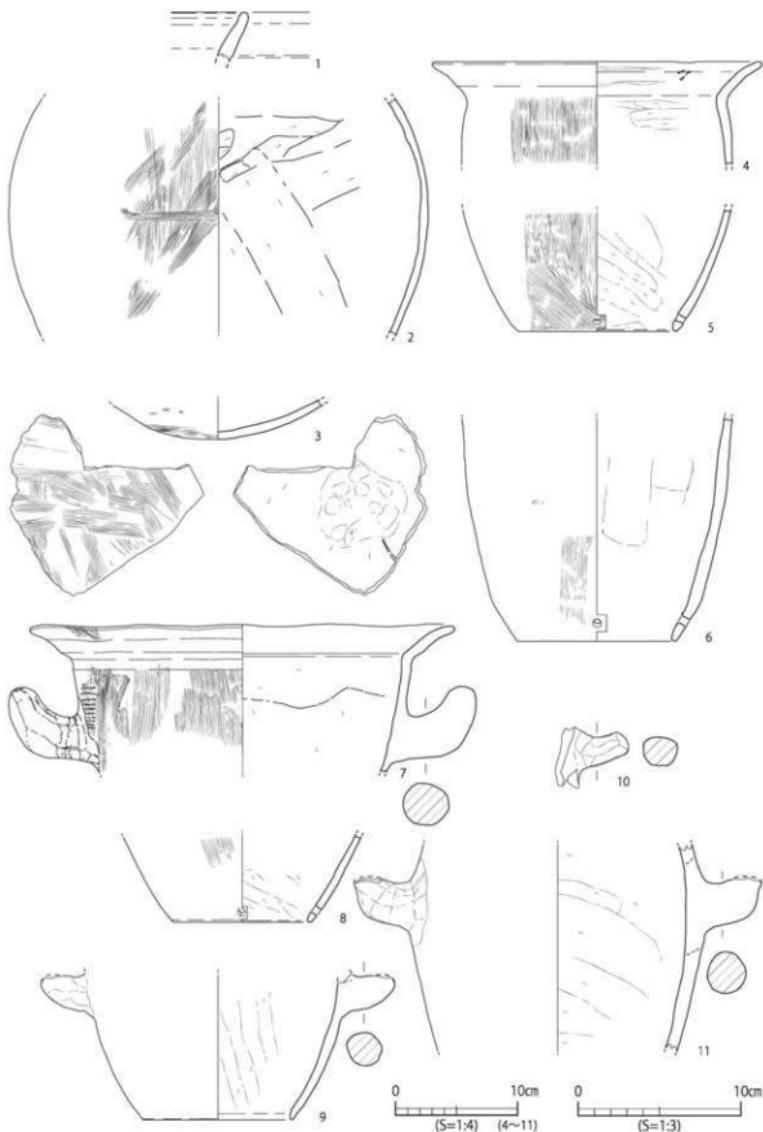
5は直口壺の口縁部で、口径 14.8cmを測る。口縁は外傾しながら直線的に立ち上がり粘土継ぎされている。端部は外に細くつまむ。松山II期に属する。6は甕の複合口縁で、復元口径 15.3cmである。口縁部には小口状の施工工具痕があり、口唇部は平坦面をつくる。平坦面は強いナデにより沈線状に窪む。淡黄色を呈し、胎土は石英、長石、角閃石などの微細砂粒を含む。草田6期のいわゆる小谷式に位置付けられる。7・8は甕の口縁と底部である。同一個体と考えられる破片が多数出土しているが、接点がなく復元していない。復元口径は 19.5cm、底径 9.0cmである。口縁部は分厚いつくりで短く外傾し、端部は外反して丸く納める。肩部内面はケズリ、外面はハケ目がみられる。底部は摩滅著しいが、内面にはケズリと指頭圧痕が観察され、全体的に煤が付着

第83図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図(1) ( $S=1:3$ )



第84図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図（2）(S= 1 : 3)

第85図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図(3) ( $S=1:3$ )

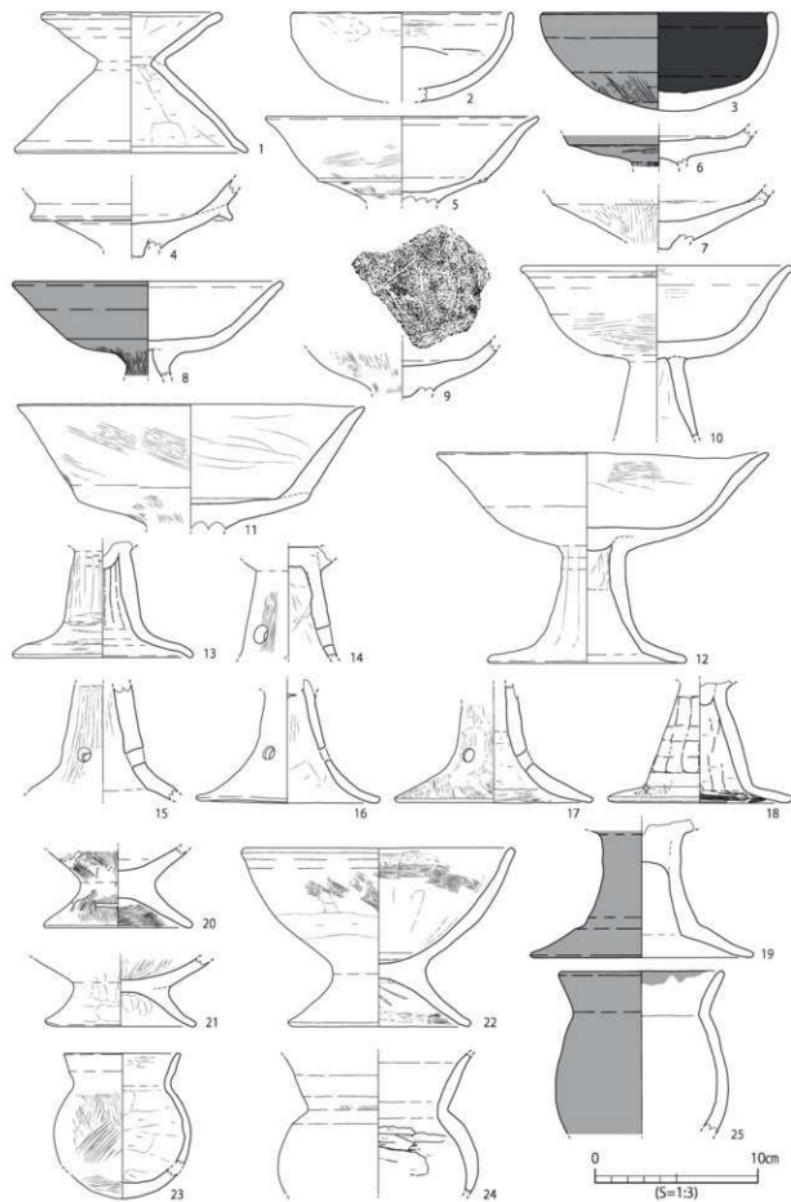


第86図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図（4）(S= 1 : 3、1 : 4)

している。古墳時代前期末頃のものか。9は口縁部にふくらみを残すもので、端部はナデにより明瞭な平坦面をつくる。復元口径 17.5cm である。肩部内面には粘土繙ぎ痕がみられる。松本Ⅲ～Ⅳ期に属する。10の口縁部は直線的に立ち上がり、端部は若干内側につまみわざかに平坦面をつくる。復元口径 15.6cm である。11は全体の約 2 分の 1 が残存する。復元口径 18.3cm、器高 22.8 cm を測る。口縁部は外反し、端部は玉縁状につくる。器壁は極薄く、底部は自立しない完全な丸底である。胴部内面は指頭圧痕がわざかにしか観察できない。いずれも松山Ⅲ期に分類される。

第 84 図 1～10 は甕の口縁部～胴部で、底部を欠くものが多い。1は復元口径 18.2cm で、口縁部はややふくらみを持ち、端部は内側にやや引き出して平坦面をつくる。器壁は平滑で、ナデが施される。肩部～胴部外面はタテ・ヨコのハケ目が観察されるが、全体に煤が付着し黒褐色を呈す。布留系 C 類に相当し、松山 I 新～II 期に位置付けられる。7は同様に布留系 C 類の口縁部をもつもので、復元口径 17.4cm を測る。2は胴部～底部で、内面ケズリと指頭圧痕、外面はケズる。1と同様、外面は全体に煤が付着している。5の口縁部は外方に強くつまみ出し平坦面をつくり、復元口径 16.2cm である。調整は外面にタテハケ目のちヨコナデがみられる。胴部に幅 3 mm、長さ 7 cm の帯状の付着物が確認され、使用時に何かと接地していたものか。6は底径 4.0cm で、内面底部は指による押さえ痕、外面にも指頭痕が観察される。内面底部付近には付着物があり、内容物の痕跡かもしれない。いずれも松山 II 期（古）に属し、いわゆる大東式である。1・2・7、5・6はそれぞれ胎土や調整などから同一個体と考えられるが、接点がなく復元はしていない。3は復元口径 15.3cm を測り、口縁部はやや外傾して直線的、端部に平坦面をつくる。肩部外面には焼成後の穿孔とヘラ描き「×」が確認される。8は口縁部にわざかに段をつくり、端部は内側に丸くつまみ出してわざかに平坦面をつくる。9・10は口縁部と肩部の接合痕が残るもので、9は口縁部を差し込むタイプ、10は肩部を貼り付けるタイプである。9は復元口径 15.5cm を測る。口縁部は厚手で、わざかにふくらみをもち端部は平坦面をつくる。外面は強いナデにより凹線状となる。頸部はくの字に屈曲して肩が張り、器壁は薄い。内面は粗いケズリ、外面はヨコナデと粗いタテハケが観察される。3・8は古墳前期末～中期、9・10は古墳時代中期以降に位置付けられる。

第 85 図 1～10 は甕の口縁部～胴部である。1～5は口縁部にややふくらみをもち、小さく平坦面をつくるものと丸く納めるものがある。1の端部平坦面は強いナデより沈線状の窪みがある。小谷 3 式のものか。2は復元口径 19.0cm を測り、端部は外方に少しつまみ出す。あまり肩は張らず、底部にかけて極薄いつくりとなる。大東式とみられる。3は口唇部を外方に引き出し、4はさらに外反させ内面に稜ができる。また、4の外面には吹きこぼれ痕が観察される。5は復元口径 15.2cm で、胴部外面ハケ目がみられ、煤が付着する。6は外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる口縁部を持ち、端部はやや玉縁状を呈す。復元口径 16.3cm である。内外面に丹塗りが施された可能性がある。7は焼き歪みが激しいが復元口径 15.4cm を測る。口縁部は均一な厚さでつくれられ外反し、端部に平坦面をつくる。8の口縁部は強く外傾しており、中ほどには指押さえ痕とキズが観察される。9は強いナデにより内外面器壁が段状になる。復元口径は 25.8cm を測る。10は約 2 分の 1 が残存し、復元口径 22.2cm を測る。口縁部は分厚く、外面と端部は一部指押さえにより稜を造り出す。肩部が一時的に厚くなるものの、器壁はほぼ薄いつくりである。底部は丸底と考えられる。3～10はいずれも古墳時代中期か、中期以降と考えられる。



第87図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図（5）（S=1:3）

第86図1～4は甕である。1は口縁部片で、端部はやや内側につまみ出す。2は胴部で、内面ケズリ、外面ハケ目で調整。3は丸く自立しない底部である。内面は指頭痕で底部をつくり、外面はハケ目がみられる。1～3は同一個体とみられ、いずれも全体的に煤が付着している。古墳時代前期末～中期に位置付けられる。

4～11は甕で、煤が付着するものが多く、確実な使用が想定される。4・7の頸部はくの字に屈曲し、口縁部は大きく外傾して立ち上がる。7・9・11は把手が付くもので、7・11は胴部上半に、9は下半に付くとみられる。5・6・8の底部には孔があり、5・8は外面から穿つ。10は把手片である。

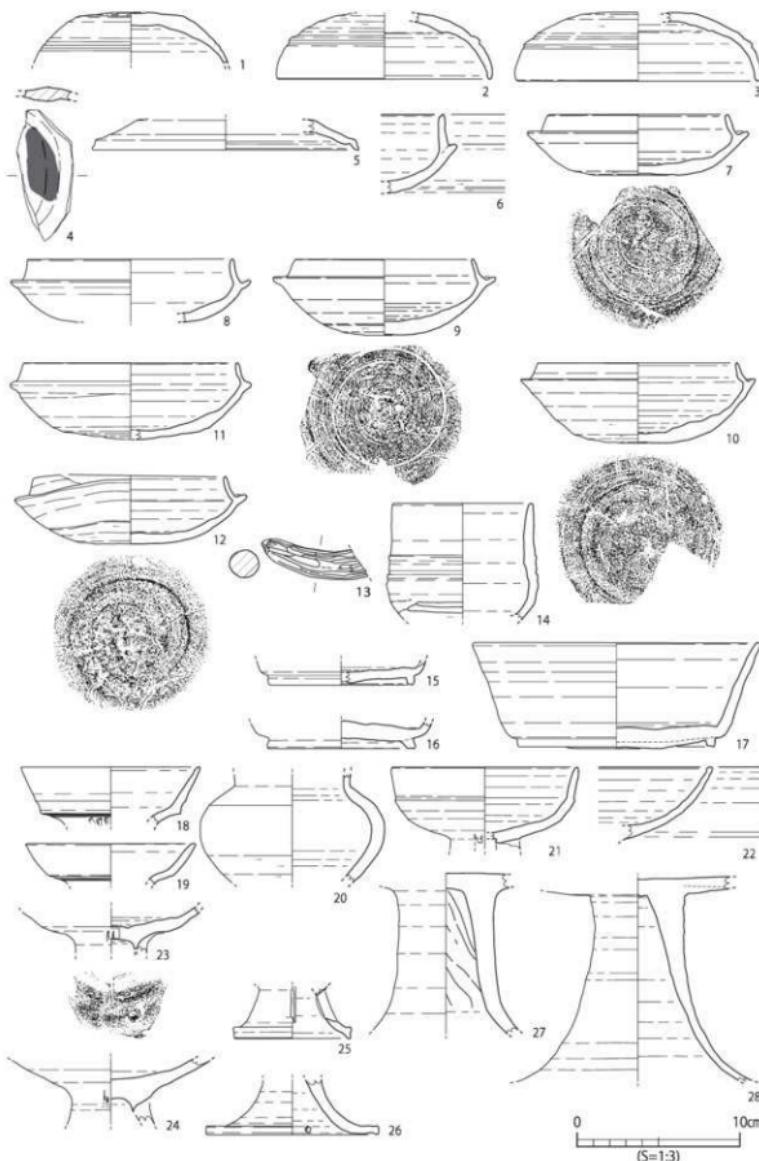
第87図には甕・壺以外の土師器を掲載した。1は小型器台である。復元口径10.7cm、頸部径4.1cm、底径8.7cmを測る。内外面にミガキが施され、底端部は外方へ引き出して内面に段をつくる。布留II式併行の小谷式と考えられる。

2・3は壺である。復元口径は13.4cm～14.1cmで、2は口縁部がやや直線的に細く納まり、3は内側に湾曲する。3は全体的に胎土が粗く、器壁は分厚く凹凸してナデによる調整はみられない。底部は尖り気味である。見込み部と底部外面は被熱によりほのかに赤橙色を呈し、外面は全体に丹塗りが残存する。内面に漆が付着するが、漆塗りかパレットとしての使用痕かは判断できなかった。大東式に属するか。

4～18は高杯で、4～7・11は壺部に段を有するものである。4は見込み外面に突帶状の段がつき、下方につまみ出すようにしている。壺部との接合痕が観察される。5は復元口径16.6cmで、壺部は外傾して立ち上がり、口縁端部は外反しつつ内側に面をつくり細く仕上げる。内面にはミガキが観察され、接合部のハケ目はナデ消される。6は分厚く粗雑で、外面に丹塗りがみられる。見込みはほぼ平坦なつくりで、摩滅し使用の痕跡がある。7の接続部は充填した粘土の肥厚が観察される。松山II～III期の大東式とみられる。8は明確な段は持たないもので、口縁端部はわずかに内側に面をつくる。11は平坦な見込みから壺部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反して細く納める。9・10・12は段を持たず壺部全体が緩やかに丸みを持つ。9は見込みに「×」のヘラ記号が認められる。10は楕型の壺部となり、口縁は外反して端部は玉状を呈する。12は壺部の器高が6.0cmと低く、平坦な見込みから体部は外反して端部外反する。粘土塊を充填しているが刺突痕は観察されない。器形の特徴は小谷式とみられるが、胎土は石英をあまり含まない大東式的な胎土である。

13～18は高杯脚部である。13は裾部が直線的に開き、端部は内湾する。脚部外面はタテミガキ、裾部はヨコミガキが観察される。粘土塊を充填する。14～17は脚下部に3方向の円孔透かしを有する。16・17は脚部がゆるやかに開き裾端部に平坦面をつくる。18はややふくらみを持つ脚部に、裾部はきつく屈曲させる。脚部外面はミガキがみとめられ、接合部は粘土塊が充填される。19は厚手のつくりのもので、脚部は強いナデによりやや内湾し、きつく屈曲する裾部との境は段をつくりだす。外面わずかに丹塗りが観察される。いずれも古墳時代前期末～中期とみられる。

20～22は低脚壺である。出土は3点のみで、他の器種に比べて少ない。20・21は壺部を欠き、底径は9.1cm～9.3cmとほぼ同じ規格で、22は11.0cmとやや大型である。20はやや高めの脚を持ち、壺部は外傾して直線的に開く。外面と脚部内面に単位の細かいハケ目原体を使用したとみられ、所々ナデ消す。21はやや低い脚部で、裾部は外反する。壺底部は広く内湾して立ち上がり、



第88図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図（6）(S= 1 : 3)

ミガキがみとめられる。22はほぼ2分の1が残存するもので、復元口径16.4cm、器高11.0cmを測る。坏部は外傾しやや直線的で、内面は粗雑なミガキがみられる。いずれも古墳時代前期に属すると考えられる。

23・24は小型丸底壺である。23は復元口径7.0cm、器高8.9cmで、口縁部にややふくらみをもつ。底部は厚く尖り気味である。胴部～底部外面はハケ目がみられ、内面はケズリにより調整する。器壁は薄く精緻なつくりで、灰白色を呈す。24は23よりも一回り大きく分厚いつくりで、口縁端部と底部を欠損するが、口縁部は外傾して直線的にのび、頸部は屈曲して丸い胴部と接続する。内面はヨコナデ・ケズリ、外面ハケ目のちナデている。25は小型の壺で、口径10.0cmを測る。口縁は直線的に開き、肩部はなだらかで底部付近が張るタイプである。屈曲する頸部外面付近はミガキがみられ、外面及び内面口縁部には丹塗りが認められる。いずれも古墳前期末～中期か。

#### 須恵器（第88図・第89図）

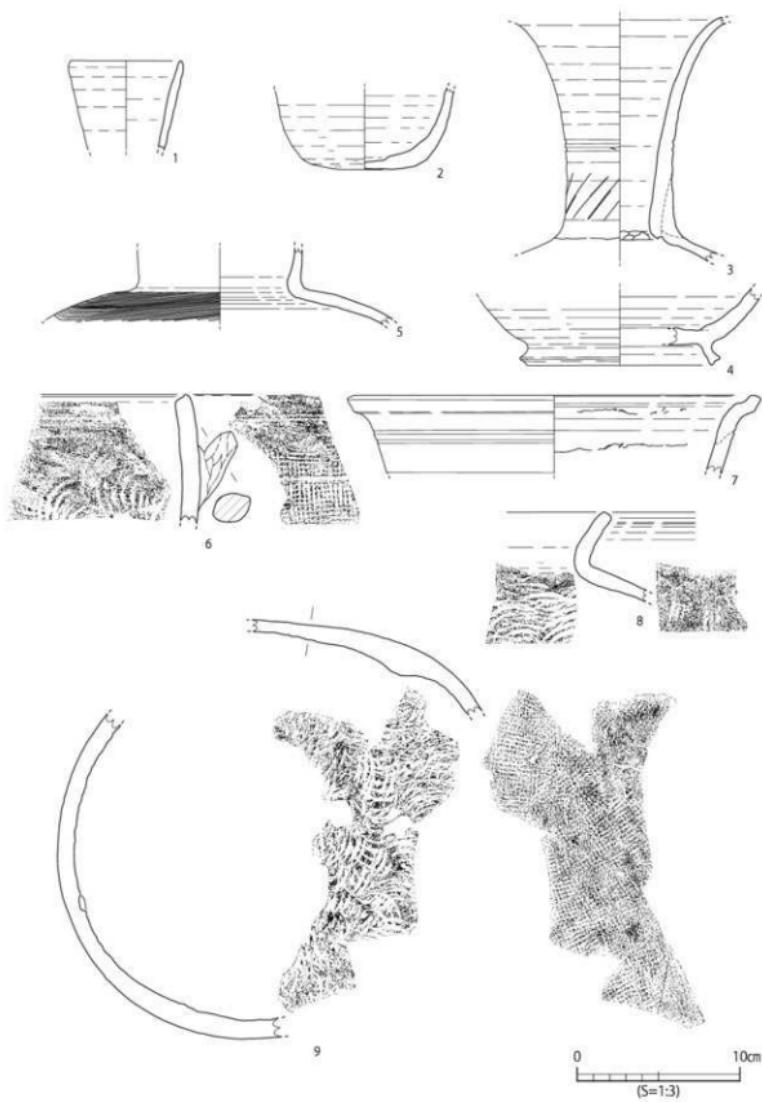
第88図～第89図は須恵器である。須恵器は古墳時代後期～平安時代初頭までが多く出土する。器種としては蓋坏、高坏、把手付椀、高台付坏、長頸壺などがある。

第88図1～3、6～12は蓋坏である。1～3は坏蓋で、天井部外面の最外周に回転ヘラケズリ、中心部はナデがみられる。1は肩部に沈線2条が施され、2・3は沈線2条で段をつくり出すもので、口縁端部はやや内湾する。復元口径は14.5cm～14.8cmである。4は天井部内面がよく研磨され、墨痕が観察されることから転用硯の可能性がある。いずれも大谷4～5に属する。5は蓋で、口縁端部を下方につまみ出すタイプで、8世紀代のものか。

6～12は坏身である。6は受け部が短く返りは長く直立する。端部のやや内側に沈線を入れ、段状に仕上げている。大谷2期に属するものか。7～12の口径は10.8cm～13.0cmで、7は底部外面ヘラ切り後、回転ヘラケズリで中心まで調整し、返りは内傾する。8は器高がやや低いタイプで復元口径12.5cmである。返りは内湾するように直立し、回転ナデがみられる。9は底部外面に回転ヘラケズリ、回転ナデがみられる。10は口径12.2cm、器高4.9cmを測る。底部外面回転ヘラケズリ、ヘラ切りのちナデしている。返りは内傾気味に立ち上がり、内面に稜を持つ。11は全体に摩滅著しいが、内外面回転ナデが観察される。12は焼き歪みが大きく、底部外面に回転ヘラケズリがみられる。返りは内湾して立ち上がる。いずれも大谷3～4に位置付けられる。

13は把手、14はそれが取り付く椀とした。良く焼き締まった暗灰色を呈し、胎土は密である。13は断面直径1.8cmで正円形に近く、全面にミガキが施される。上半と下半で焼成に差があり、暗灰色を呈する方が上方で、やや上方に湾曲する把手と判断した。14は復元口径8.5cmで、深い坏形を呈し体部は口縁部まで直立して立ち上がり、端部はそのまま細く納める。蓋をともなうような受けはみられない。底部にかけて屈曲し回転ヘラケズリがみられるが、欠損しているため形状は不明である。体部には2条の沈線が施され、それぞれをナデて上方は小さく、下方は大きく2段の突帶部をつくりだす。体部内面は突帶部あたりで肥厚するが、強い回転ナデにより調整されている。類例としては御崎谷遺跡、九景川遺跡で須恵器模倣土師器が出土している。古墳時代後半期か。

15～17は高台付坏である。いずれも底部周縁よりも内側に、面取りした低い高台部を貼り付ける。15・16は底部のみの残存で、復元底径8.8cm～9.1cmである。坏部底部外面はヘラ切り後



第89図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図（7）(S=1:3、1:4)

ナデる。16は底部が分厚いつくりで、高台の面取り部分は強いナデにより内湾する。底部内面はよく研磨され、転用窓の可能性がある。17は復元口径 17.7cm、底径 11.9cmを測る。坏部はやや外傾しながら直線的に立ち上がり、端部はそのまま細く納める。いずれも出雲IV期に相当し、8世紀前半のものである。

18～20は甌である。18・19は口縁部の小片で、復元口径は 10.9cm～10.3cmである。18は口縁部高 2.8cmで、頸部との境は鋭角な段がみられ、その上方を強くナデて内湾させ、さらに段をついている。鋭角な段直下にカキ目、タテ方向の刺突痕が施される。19の口縁部はやや内湾し、口縁部高 2.1cmである。頸部との境は緩やかに屈曲し、沈線が 1 条施される。18は大谷 4、19は大谷 5 に属するか。20は口縁部と底部を欠くが、甌と判断した。頸部径は太く、口縁部に向けて直立気味に立ち上がる。肩部は細い沈線が 1 条入り、丸みを帯びて湾曲する。底部にかけては回転ヘラケズリが観察される。

21～28は高坏である。21は無蓋高坏の坏部で、復元口径 11.4cmである。底部から緩やかに立ち上がり、見込みあたりから直線的に立ち上がる。体部中ほどで沈線の上方をナデて段をつくり出している。方形の透かしがわずかに確認できる。22は底部から口縁部にかけてゆるやかに広がり、端部は強いナデで小さく平坦面をつくる。23・24は坏部と脚部の接合部に 2 方向の透かしまたは切れ込みが観察される。25・26は脚底部で、復元底径 7.0cm～10.7cmである。25は低脚高坏とみられ、2 方向の方形透かしか切れ込みが確認できることから 3 方向に復元できる。脚裾部は短く、端部は上下につまみ出すように平坦面をつくる。26は裾がゆるくひろがる。27・28は脚部が長く坏部底面が平坦なことから、坏部が皿または盤形態を呈するものと考えられる。27の脚部内面にはしづら目痕が残り、外面は強い回転ナデで稜がつく。28は脚部内面まで回転ナデが施される。21～26は古墳時代後期、27・28は 8 世紀前半に位置付けられよう。

第89図1～4は長頸壺である。1はゆるやかに外傾し直線的に仕上げる口縁部で、復元口径 6.8cmである。2は体部～高台の付かない底部で、底径 6.3cmを測る。底部にかけて回転ヘラケズリ、底部外面はヘラ切りで、工具痕が残る。大谷 5～6 に相当する。3は頸部が長頸化し口縁にかけて外反するもので、頸部外面に沈線文 2 条が施される。体部との接合ははめ込んで粘土を貼り付けたとみられ、接合部近くはねじり込んだような痕跡が観察される。4は高台付きの底部で、復元底径 11.3cmを測る。短く外に踏ん張る高台で、外面回転ヘラケズリ、底外面の調整は確認できなかった。出雲II～IV A に相当すると考えられる。

5は瓶類の頸部～肩部である。口縁部は直角気味に立ち上がり、肩部にはカキ目が施される。7世紀後半か。

6は把手の付く鉢である。外傾して口縁部にかけて開き、端部は強いナデにより平坦面に段ができている。外面は格子タタキ目のち四線、内面は同心円タタキ目がみられる。

7は甌の口縁部で、復元口径 24.6cmを測る。端部は外方に屈曲したのち上方に立ち上がり、内面に受けのような平坦面をつくる。外面には 2 条の沈線文が入る。飛鳥V～平城I併行か。8は甌の口縁部～肩部である。

9は横瓶の肩部と胴部周りの実測を図上で復元している。胴部周り外面は平行タタキ目のちカキ目が施され、内面は同心円タタキ目がみられる。



第90図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図(8) (S= 2 : 3、1 : 3、1 : 4)

### 土師器、陶磁器（第90図）

第90図1は壺である。短く直立する口縁部で、肩部はほとんどなだらかである。外面には丹塗りが施され、黒斑が観察される。2は壺の口縁部～肩部で、口縁部はやや厚みのあるつくりである。摩滅著しく内面にわずかにケズリが観察される。いずれも8世紀以降のものか。3は短く外反する口縁部である。端部はやや玉縁状を呈す。4は円形に外反する口縁部を持ち、肩部の接合部は明瞭な段をつくる。貼り付け痕を隠すように沈線を施している。古代のものか。

5・7～10は壺で、いずれも底部のみの残存で、回転糸切りで切り離している。底径は5.5cm～6.0cmを測る。5は底部から直線的に立ち上げてから器壁をやや外反させる。9世紀前半とみられる。7～9は底部内面が平坦で、開く器形か。12世紀頃と考えられる。10は底部最外周から体部が立ち上がる器形で、やや時代が降る可能性がある。

11は福建省系白磁碗である。破面に漆が付着しており、漆継ぎをして使用された可能性もある。

12は瓦質土器の鍋と考えられる。受け口状の口縁を呈し、内外面に煤を吸着している。

### 石器、玉類（第90図）

第90図13～15は砥石である。13は現存長5.3cm、幅2.8cmと小型である。残存する4面に刃傷痕がみられる。砂岩製か。14・15は花崗岩製で、14は断面形が角の丸いかまぼこ形を呈す。6面に作業面が観察され、深い刃傷痕が残る。15は断面菱形で、使用により上面が沿っている。6面とも仕上げ研ぎに使用されたと考えられ、細かな刃傷痕がみられる。

16は泥質片岩製の磨製石斧である。長さ11.8cm、幅4.4cm、厚さ2.0cmを測る。基部がわずかに欠損し、刃部は一部刃こぼれしている。17は磨石である。

### 金属製品（第90図）

19は器種不明、20は鑓か。21は耳環である。平面形はわずかに椭円形で、断面円形である。径2.7～3.1cm、幅0.6cm、厚さ0.6cmを測る。

### 土製品（第91図）

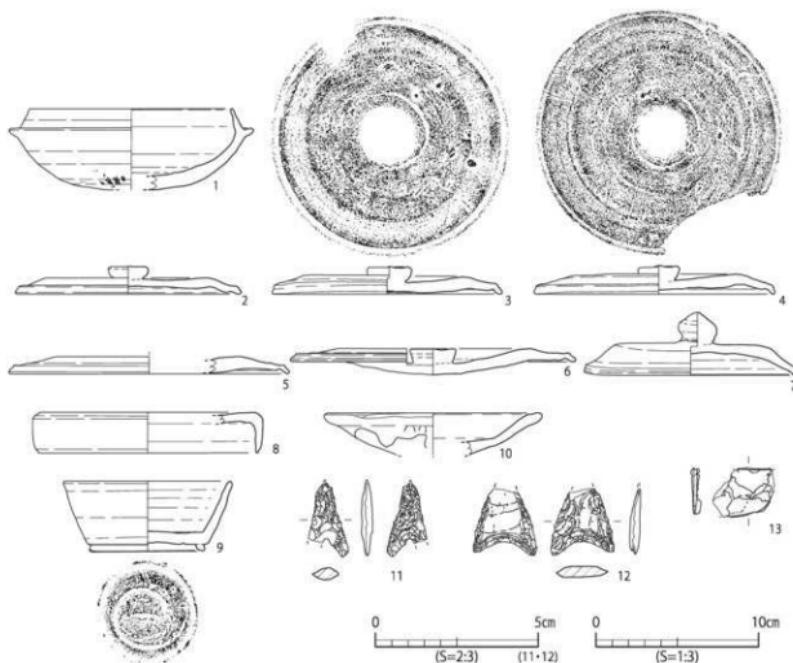
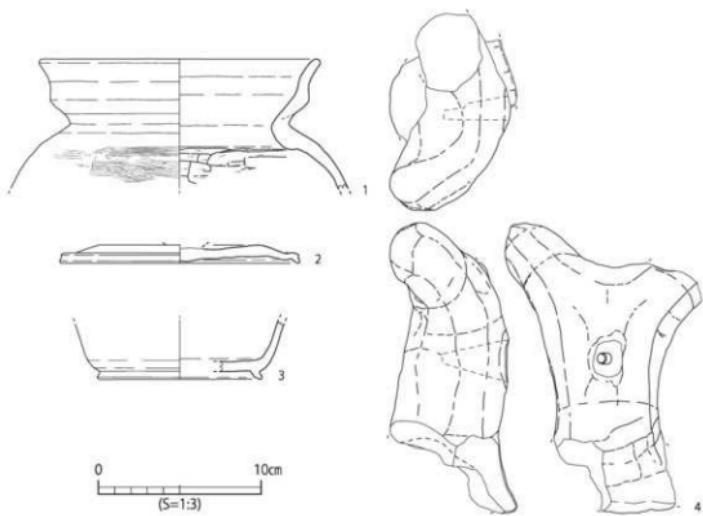
第91図1・3はミニチュア土器、2は手捏ね土器である。1は非常に薄造りで、頸部から外傾して直線的に立つ口縁を持ち、底部は平底である。体部内面はケズリ上げ、外面はタタキが観察される。庄内式併行期と考えられる。2は底部から口縁部までゆるやかに立ち上がる器形で、復元底径3.4cm。底部内面は指頭圧痕により見込みがつくられ、外面はハケ目である。3は厚手で粗雑なつくりで、口縁部は平坦面に凹みを施している。

4～9は土製支脚である。このうち4は岩橋I類で、2方向の突起を持ち、体部に穿孔はない。5は岩橋I C類で、2方向の突起に体部には非貫通孔が残存している。背面は被熱がみられる。6は底部で、復元底径19.5cmと大型である。7は欠損が激しく、1方向の突起しが残存していない。8は体部～底部で、体部外面にはハケ目がみられ、穿孔はない。9は裾が広がる底部である。

10～18は移動式竈で、10～12は底部、13～18は底部である。10は焚口の右肩部分にあたる。11は左側縁の一部とみられる。12は右側縁で、庇は正面に垂直に付く。13の底部接地面には凹凸痕がみられ、成形時に底部を押しつけたと推測される。14はやや内湾し直立する底部で、15は底部接地面にかけて外反するように反る。16は底部接地面が内外につぶれて広がり裾をつくる。内面には被熱痕がみられる。17・18は復元底径32.0cm～48.6cmを測る。底部は肥厚したつくりで、外面はタテハケ目が観察される。いずれも外面に黒斑があり、確実な使用が想定される。



第91図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図(9) ( $S=1:3$ 、 $1:4$ )

第92図 九景川遺跡V区 包含層出土遺物実測図(10) ( $S=2:3$ 、 $1:3$ )第93図 九景川遺跡V区 出土遺物実測図 ( $S=1:3$ )

包含層（斜面部）出土遺物（第92図）

須恵器（第92図）

第92図1は壺身である。復元口径12.4cmを測り、受け部は小さくかえりは内傾して高くなっている。底部外面は回転ヘラケズリが認められる。大谷4に属する。

2～7は蓋で、口径12.9cm～17.5cmを測る。7は宝珠状つまみ、2～6は算盤玉状つまみが付くものである。7は天井部外面回転ナデで調整し、口縁端部は短く垂下する。2～6は天井部外面ヘラケズリして平坦につくり、端部はやや外側の下方へつまみ出す。製作時の粘土紐痕が観察されるものもある。肩部との境にヘラ状工具でつけたとみられる傷が数カ所あり、ほぼ同じ工程でつくられたと考えられる。いずれも8世紀前半に位置付けられる。

8は短頸壺の蓋である。天井部は欠損しておりつまみが付くが不明だが、肩部～口縁部は下垂し端部は尖らせている。

9は高台付壺で、口径10.2cm、底径6.8cmを測る。平坦な底部から直立気味に立ち上がる体部を持ち、底部外面はヘラ切り後未調整である。低い高台は底部周縁より内側に貼り付けられる。8世紀前半に属する。

陶器（第92図）

10は唐津焼きの皿である。復元口径13.0cmで、胎土は灰黄色で緻密、オリーブ黄色の施釉がみられる。体部は低くゆるく開き、口縁端部は溝状の沈線を施す溝縁皿である。見込みには砂目積痕が若干観察される。17世紀前半の所産とみられる。

石器（第92図）

11は隱岐産黒曜石の石鎌である。基部は凹基式で片方欠損し、頂稜部は欠損後作り直したとみられ、左右から交互に加工している。12はサヌカイト製石鎌である。サヌカイトは金山産の可能性がある。基部は凹基式で先端部は欠損している。

金属製品（第92図）

13は鉄刃の刃部と考えられる。

その他の遺物（第93図）

第93図1～4は出土位置が不明な遺物である。1は上師器甕で、復元口径17.0cm。口縁部のふくらみは複合口縁が退化したもので、1条の沈線がめぐる。松山Ⅲ期に相当する。

2は須恵器蓋である。つまみは欠損している。天井部外面はヘラ切り後ナデて、押さえるため肩部が高くなり、口縁端部は下垂する。

3は高台付壺である。復元底径10.1cm、高台は底部周縁より内側に貼り付ける。

4は土製支脚である。2方向の突起を持ち、体部に非貫通孔が施される。岩橋ICに分類される。

## 第5章 自然化学分析

### 九景川遺跡・玉泉寺裏遺跡発掘調査に伴う AMS 年代測定

渡辺正巳 (文化財調査コンサルタント(株))

#### はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、遺構の年代を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターから委託を受け実施・報告した AMS 年代測定業務報告書を再編したものである。

九景川遺跡・玉泉寺裏遺跡は島根県中央部、出雲市東神西町の丘陵斜面に立地する遺跡である。

#### 分析試料について

分析試料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにより採取・保管中の試料から御提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

図 1 に調査区の配置、および各調査区内での試料採取位置を示し、図 2 ~ 5 に、各試料採取地点の詳細を示す。地点毎に一括して炭片が採取され、保管してあった。この中から状態の良いものを、分析試料として分取した。また、試料の詳細を、表 1 に示した。

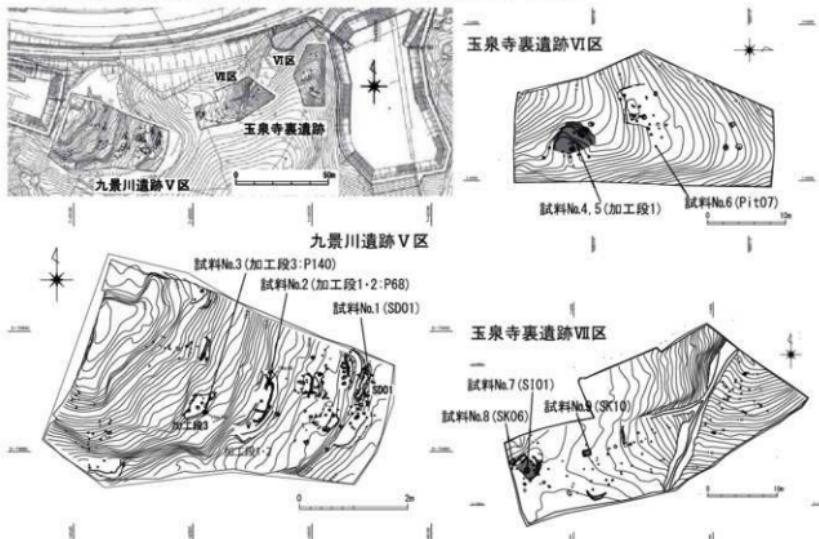
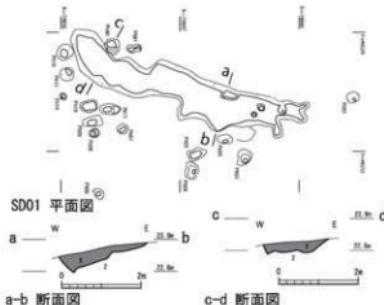


図 1 調査区の配置（試料採取位置）

図2 九景川遺跡 SDO1 平面・断面図  
測定試料（1層：No.1）図3 九景川遺跡 V区加工段 1・2、  
加工段3 平面・断面図  
測定試料（PN.68: No.2、P140: No.3）

## AMS 年代測定方法

前処理方法を表1に示した。前処理後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。

14C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.2.4 (Bronk Ramsey, 2009) を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013) を利用した。

## AMS 年代測定結果

年代測定結果を図6、7及び表1に示す。図6には、OxCal ver. 4.2 (Ramsey, 2009) による暦年較正図を示し、図7には遺跡（調査区）毎に校正年代の分布を示した。表1には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と測定年代など4種類の年代を示している。

## 年代測定値について

## (1) 九景川遺跡 V区

## ① SDO1

8C末という推定年代に対して、10C末～11C前半の年代が得られた。測定試料は炭片であり、遺構に伴うものである場合、遺構の実年代より新しい値になることは、通常あり得ない。推定年



図4 玉泉寺裏遺跡VI区加工段1、

Pit07 平面・断面図

測定試料（加工段1 1層：No.4、2層：No.5、  
Pit07：No.6）



図5 玉泉寺裏遺跡VII区 SI01、SK06、

SK10 平面・断面図

測定試料（SI01 1・2層網掛け部：No.7、  
SK06 2層：No.8、SK10 2層：No.9）

表 1 AMS 年代測定結果

No.	遺跡名	層類	出土遺構番号	重量(g)	推定年代	前名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 $\pm 1$ (yrBP $\pm 1\sigma$ )	歴年較正年代 $\pm 1$ (yrBP $\pm 1\sigma$ )	補正年代 $\pm 2$ (yrBP $\pm 1\sigma$ )	歴年較正年代		測定番号(PD)	
											1○歴年較正年代	2○歴年較正年代		
1	九景川遺跡	底 層	SD01 1層	2.4753	8C 前半	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-25.40 ± 0.15	1025 ± 20	1018 ± 19	1020 ± 20	AD995-1024(68.2%)	AD988-1030(95.4%)	28996	
			加工段 P# 68	3.9151	SC 前半 ～6C 前半	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-27.19 ± 0.22	1482 ± 21	1445 ± 21	1445 ± 20	AD603-40(68.2%)	AD575-649(95.4%)	28698	
3	玉泉寺裏遺跡	底層	加工段 3 P# 140	8.8171	SC 前半	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-23.25 ± 0.21	1540 ± 21	1568 ± 20	1570 ± 20	AD498-492(58.2%)	AD151-171(3.6%) AD529-536(6.5%)	AD425-542(95.4%)	28697
			VII 加工段 1層	1.6417	3C 前半	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-22.52 ± 0.12	1568 ± 20	1608 ± 20	1610 ± 20	AD108-492(52.9%)	AD492-530(39.1%)	AD485-533(44.5%)	28702
5	玉泉寺裏遺跡	底層	加工段 2 層	0.6327	3C 前半	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-26.25 ± 0.18	2048 ± 22	2027 ± 22	2025 ± 20	BC51-AD568(2%)	BC50-AD568(3%) AD40-49%	BC50-AD568(3%)	28699
			VII P# 07	2.0837	不明	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-30.06 ± 0.17	1979 ± 21	1895 ± 21	1895 ± 20	AD83-1266(8.2%)	AD56-145(91.8%) AD151-170(2.1%) AD194-209(1.8%)	AD198-473(52.9%)	28704
7	玉泉寺裏遺跡	底層	VII S01 1-2層	0.3356	3C 前半	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-23.82 ± 0.16	2094 ± 21	2113 ± 21	2115 ± 20	BC179-1046(8.2%)	BC198-879(7.1%) BC79-561(8.3%)	BC198-879(7.1%)	28700
			VII S06 1-2層	0.3211 (SC 以降)	不明	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-25.25 ± 0.19	874 ± 20	869 ± 20	870 ± 20	AD1163-120(68.2%)	AD1052-1080(7.1%) AD1152-1221(8.3%)	AD1163-120(68.2%)	28701
9	玉泉寺裏遺跡	底層	VII S10 2層	3.5453 (SC 以降)	不明	超音波洗浄 アルカリ・酸洗浄(地盤: -1.2‰) 水酸化ナトリウム: 1.0‰, 電離: 1.2‰	-24.16 ± 0.11	1533 ± 20	1546 ± 20	1545 ± 20	AD432-490(50.9%)	AD532-550(17.3%)	AD427-565(95.4%)	28703

\* 1±13C 補正年代 \* 2 ±13C 補正年代

代が正しいとすれば、試料が上位から生物擾乱などによって混入した可能性が高い。

### ② 加工段 1・2

5C 前半～6C 前半という推定年代に対して、6C 後半～7世紀中頃の年代が得られた。測定試料は炭片であり、遺構に伴うものである場合、遺構の実年代より新しい値になることは、通常あり得ない。推定年代が正しいとすれば、試料が上位から生物擾乱などによって混入した可能性が高い。

### ③ 加工段 3

5C 前半～6C 前半という推定年代に対して、5C 前半～6世紀前半といふ、ほぼ矛盾ない年代値が得られた。

## (2) 玉泉寺裏遺跡 VI 区

### ① 加工段 1

下層(2層)で BC1C 初頭から AD1C 前半、上層(1層)で 4C 前半～6C 前半という値が得られた。遺構の年代は 3C 半ばと推定されており、下層では推定年代より古く、上層では推定年代より新しい年代値が得られたことになる。上下で年代値の差が大きいことから、一方の試料が生物擾乱によって混入した

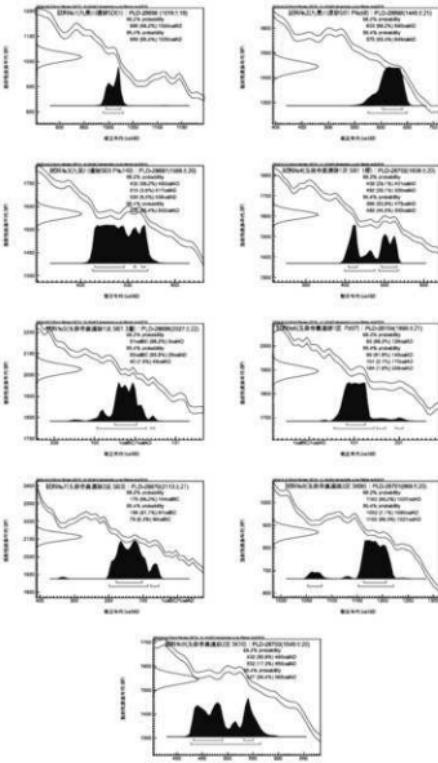


図 6 歴年較正結果

ものである可能性が指摘できる。また、時期の異なる複数の遺構が重なっている可能性もある。推定年代が正しいとすれば、上層（1層）の測定試料には、混入した可能性が示唆される。

### ② Pit07(加工段2)

1C 中頃から 3C 初頭という値が、得られた。出土遺物から、遺構の時期は推定できなかったが、1C 中頃から 3C 初頭、あるいはこれ以降の遺構と考えられる。

### ③ 玉泉寺裏跡Ⅶ区

#### ① SI01

BC2C 初頭から BC1C 中頃という値が、得られた。遺構の年代として 3C 半ばと推定されており、やや古い年代値が得られたことになる。しかし、遺構の推定年代と測定値の関係には、矛盾がなかった。

#### ② SK06

出土遺物からは、遺構の年代が推定できなかったが、周囲の状況から 9C 以前の遺構である可能性が示唆されていた。一方、11C 中頃～13C 前半という値が得られた。測定試料は炭片であり、遺構に伴うものである場合、遺構の実年代より新しい値になることは、通常あり得ない。周囲の状況と異なるが、11C 中頃～13C 前半、あるいはこれ以降の遺構と考えられる。

#### ③ SK10

出土遺物からは、遺構の年代が推定できなかったが、周囲の状況から 9C 以前の遺構である可能性が示唆されていた。測定年代は 5C 前半～6C 中頃であり、やや古い年代値であるが、推定年代と矛盾なく、5C 前半～6C 中頃以降、9C 以前の遺構と考えられる。

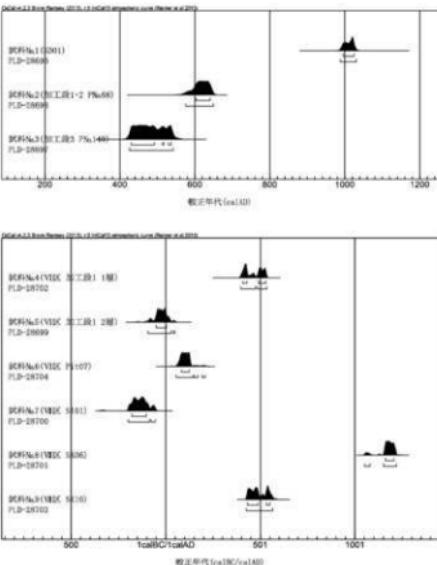


図 7 較正年代の分布

## 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

## 第6章 総括

ここまで、玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）、九景川遺跡（V区）の発掘調査作業から整理作業までの過程で把握できた遺構や遺物、それぞれの時期区分について述べてきた。第2章第3節で述べたように、各遺跡は過去に調査が行われ、出雲平野南西部一帯の遺跡を含めた集落景観が復元されている<sup>(1)</sup>。そこで、第1節では過去調査の先行研究を簡単に確認し、第2節では今回調査の成果を踏まえた上で、遺跡全体の構造や性格について時代ごとに整理し、第3節をまとめとしたい。

### 第1節 先行研究

出雲インター線建設に伴う事業として実施された平成17（2005）～平成19（2007）年度の発掘調査では10箇所の遺跡が対象となり、その成果から出雲平野南西部の縄文時代～中世に至る様相の一端が明らかとなった（第2表参照）。古墳時代中期前半頃の九景川遺跡や御崎谷遺跡を中心とした大規模集落は、玉泉寺裏遺跡の土壙墓や間谷東古墳、浅柄北古墳などの古墳の出現を支える背景となつたといえる。それぞれの遺跡は小さな谷底平野やそれに接する低丘陵に存在し、集落域はおよそ4つの単位で分布している。玉泉寺裏遺跡、九景川遺跡は御崎谷遺跡を含めた現在の東神西一帯に形成された集落域に属している。ほかの集落域と比べ遺構や遺物の検出量は膨大であり、この東神西一帯の集落は、周辺に点在する集落域や大小規模の古墳を擁する中枢的位置にあったと理解されている。

### 第2節 遺跡の変遷

玉泉寺裏遺跡、九景川遺跡で検出した遺構・遺物を第3表に示した。時期の不明な遺構は表に記載していない。今回調査区の概略としては、玉泉寺裏遺跡VI区では丘陵頂部の東側・北側斜面で加工段を2基検出し、うち1基は竪穴建物跡である。VII区では丘陵平坦面に主な遺構が集中し、北側の斜面部では多数のピットを検出している。遺物は、VI区では遺構からわずかに出土するのみで、VII区平坦面でも遺構や包含層から遺物は少量しか出土せず、時期の特定はAMS年代測定結果に頼るところが大きい<sup>(2)</sup>。斜面部には3面の包含層が堆積しており、弥生時代後期～平安時代までの遺物が出土する。

九景川遺跡V区で検出した遺構は竪穴建物跡1基、加工段10基、溝状遺構4条、土坑2基、ピット多数である。遺構は斜面部から検出し、谷部は南側でピットを確認した以外は包含層が分厚く堆積していて遺物が多量に出土した。弥生時代後期～中世の遺物が出土し、遺構の時期と重なる古墳時代後期の土器が多い点が注目される。

なお、今回の調査成果により新たな事実が填補されたが、その評価は先行研究に内包される要素となっていることを先に記しておく。

(1) 以下、集落復元や遺跡の評価に関しては、島根県教育委員会2008「第9章 総括」『九景川遺跡』、島根県教育委員会2009「第9章 総括」『御崎谷遺跡 間谷東遺跡 浅柄北古墳 間谷西II遺跡 間谷西古墳群』による。

(2) 以下、AMS年代測定に関して、第5章を参照のこと。

第3表 玉泉寺裏遺跡、九景川遺跡検出遺構一覧

遺跡	地区	立地	調査	弥生			古墳			奈良時代 ～平安時代	中世 11C末 ～14C	地区的特徴
				前期	中期	後期	前期	中期	後期			
玉泉寺裏遺跡	I	丘陵 頂部					F	F				弥生終末～古墳初頭：土 器墓 SK01 古墳中期：墳穴建物跡
	II	丘陵 斜面部							F		F	中世：土坑 SK02 土師器環（12C）
	III	谷部			L		L	F				
	IV	丘陵 斜面部										
	V	丘陵 斜面部										
	VI	丘陵 頂部				F						弥生後期：加工段1 複合口縁甕（草田3 期）
	VII	丘陵 平坦部 ～斜面部			F	F	L	F	F			弥生後期：SK01 複合口縁甕（草田5 期）
	I	谷底 平野部 平野側		F	F	F		F	F	L		中世：祭祀土坑 SK01 + 掘立柱建物・棚列・土坑 古代：掘立柱建物・自然 河道 土師器環・鍍鉄（14C 以前）、輸入陶器 (12C～13C) 鏡、土師器・土器（吉 木II～前期）
九景川遺跡	II	谷底 平野部 奥側		F	F	F		F	L	F		弥生前半：SK05 鍍鉄 古墳中期：自然河道 SR02 水辺の祭祀 銅鏡（松木I～II）、 鏡、土師器・ウシ上腕骨
	III	谷底 平野部 平野側		F	F	F	L	F	L	L		古墳中期：掘立柱建物、 自然河道 SR03 水辺の祭祀 古代：掘立柱建物群、 中世：貝塚
	IV	谷底 平野部 平野側		F			L	F	F	L		古墳中期：墳穴建物跡、 掘立柱建物跡・溝・土坑 中世：掘立柱建物跡・溝、 貝塚 土師器（有留系、小 谷式・大東式）、土 製勾玉 輸入陶器（12C～ 13C）
	V	谷底 平野部 平野側				F		L	L	F		鏡、土師器环（大谷I）、 土師器（松山II） 土師器（松山II～ IV）、鏡、土師器环（大 谷4～6）、 土師器、高环（松 山II～III）

F : Fewer (少量)。 L : Larger (多量)

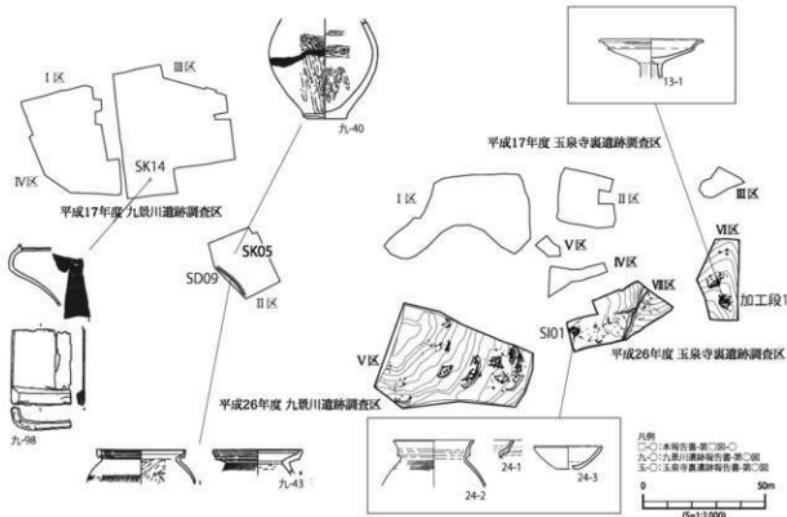
### 縄文時代晚期

縄文時代後期～晚期の遺物が初現となる。九景川遺跡Ⅰ区5層から縁帶文土器が出土したほか、各調査区から断片的に遺構や遺物がみられるようになる。御崎谷遺跡でも低地包含層から突帶文土器が出土しているが、わずかな出土状況である。九景川遺跡V区では谷部包含層の最下層付近から緑色片岩製磨石斧が出土したが、土器は確認していない。玉泉寺裏遺跡では、今回調査のVI区・VII区を含めて縄文時代の遺構、遺物は検出していない。縄文時代晚期は、この地域のような小規模な谷底平野が開発され、集落が形成され始めた時期として捉えられる。

### 弥生時代前期～中期

遺構、遺物ともに希薄な時期である。玉泉寺裏遺跡ではⅠ区～VI区からは一切出土せず、VII区斜面部の包含層から弥生時代前期頃とおもわれる甕か壺がわずかに確認できる。九景川遺跡では各調査区で断片的に遺物がみられるほか、Ⅱ区SK05で土器棺が検出された。口縁部を欠き倒立した状態で埋まっていたが、墓坑状の遺構は確認していない。V区では、前期に遡る遺物は出土していない。縄文時代に形成されつつあった集落は、周辺部で小規模な集落が継続して営まれていたと考えられる。

弥生時代中期に入っても同じ様相が続く。九景川遺跡ではⅠ区で松本IV-2様式の壺が出土した落ち込みSX01以外、遺構は確認できない。Ⅱ区～IV区ではわずかにみられる遺物も、V区では一切出土しない。玉泉寺裏遺跡においては遺物・遺構は認められず、この時期は人間活動が断絶している。前期に引き続き、周辺部に集落が存在していたと想定される。



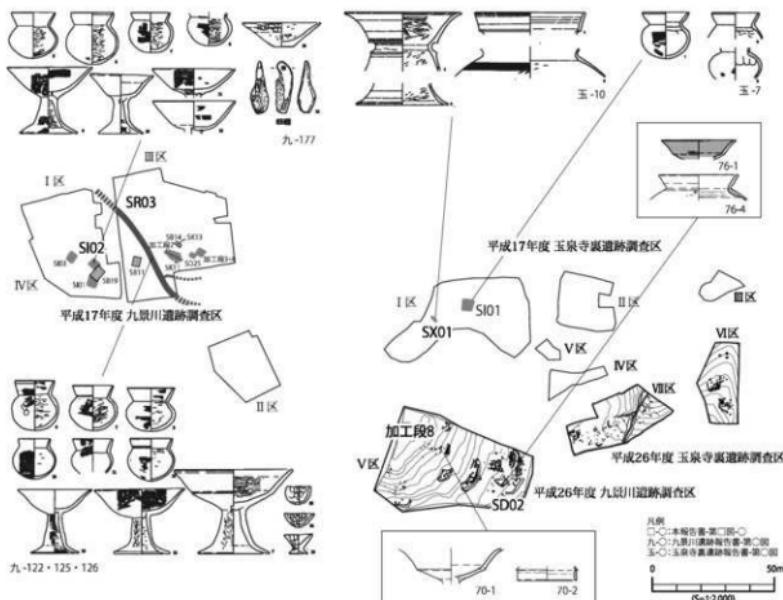
第94図 玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡 弥生時代の様相 (S=1:2,000)

### 弥生時代後期

後期になると遺物の出土量は増加し始める。九景川遺跡ではⅡ区やⅢ区南西側で遺構を検出し、Ⅱ区 SD09・SD10 からは後期前葉の甕が出土する。鉄物柄が遺存するⅢ区 SK14 は井戸の可能性が高い。遺物はⅠ区～Ⅲ区で一定量確認しており、Ⅴ区でも谷部包含層から松本V-3様式の鉢がほぼ完形で出土するなど、谷底平野から丘陵斜面にかけて分布が広がっている。

一方、玉泉寺裏遺跡では、Ⅰ区～Ⅶ区で遺構は確認されていなかったが、VI区東側斜面で加工段1、VII区平坦部で竪穴建物跡 SX01 を検出した。加工段1は斜面上方・下方で2時期あることが確認され、新段階に伴う埋跡には松本V-3様式の高環が埋められていたことから弥生時代後葉には埋没していると考えられる。AMS年代測定により下層は紀元前1世紀初頭～1世紀前半と判明しており、時期をあけずに加工段を掘り直したと推定される。SX01は隅丸方形に巡る壁際溝を伴い、松本V-3様式の甕や台石が検出された。遺物を検出した土坑状遺構の埋土はAMS年代測定により紀元前2世紀初頭～1世紀中頃と判明していく、弥生時代後期に機能した建物跡と考えられる。遺物は、Ⅲ区包含層から大量に出土する。Ⅲ区は小さな谷筋にあり、谷筋は北方に御崎谷遺跡、南方にⅦ区斜面部へと延びている。御崎谷遺跡では弥生時代中期以降に遺物の出土がみられはじめ、後期には増加する傾向にある。VII区斜面部の包含層からは弥生時代後期の土器が少量だが確認でき、Ⅲ区と同じ様相となる。

今回玉泉寺裏遺跡VI区・VII区で遺構が検出されたことで、この時期から東神西地域一帯に集落が



第95図 玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡 古墳時代前期～中期の様相 (S= 1 : 2,000)

広がり、その範囲は丘陵頂部まで進出していたことが推定される。

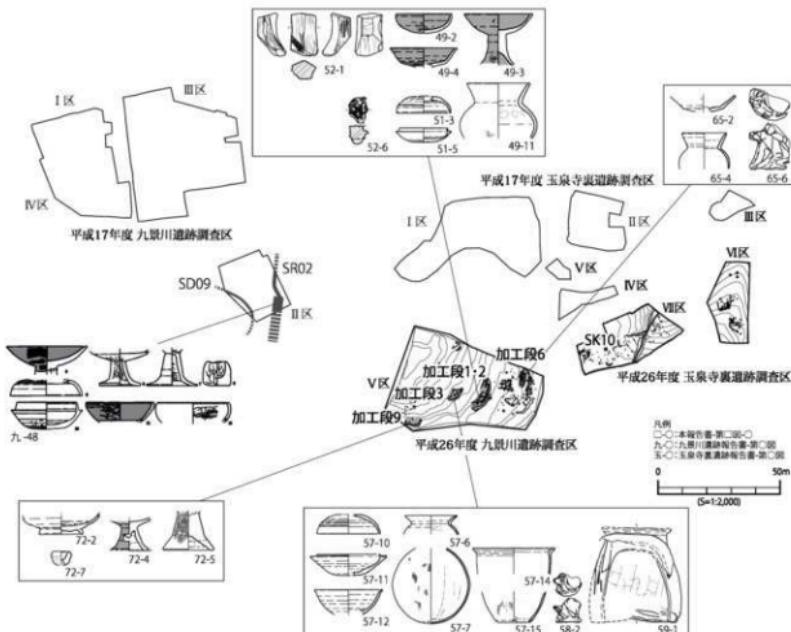
### 古墳時代前期

玉泉寺裏遺跡Ⅰ区の尾根頂上部では土壙墓SX01が確認された。Ⅰ区とⅦ区平坦部は同一丘陵上に位置しており、谷底平野の集落から離れた丘陵頂部に存在することからⅦ区S101との関係性が注目される。周辺丘陵では、前期後葉～中期前半に浅柄II遺跡、山地古墳、間谷東古墳、浜井場古墳群などで古墳が築造され、SX01はこれらの古墳に先行するものと推定される。また、Ⅲ区・Ⅶ区斜面部では多くの遺物が出土している。御崎谷遺跡の土器溜まりは器種構成から祭祀跡の可能性が高い。

九景川遺跡ではⅢ区でわずかに遺物が確認されるものの、Ⅴ区でも遺構や遺物は確認されず谷底平野での集落は一時断絶する。東神西地域の中でも御崎谷遺跡のある東方や、間谷地域の古墳周辺に集落が存在していたと考えられる。

### 古墳時代中期

九景川遺跡では古墳時代前期末～中期になると本格的な集落が営まれる。九景川遺跡Ⅲ区・Ⅳ区では竪穴建物跡や掘立建物跡、加工段が数多く検出される。Ⅴ区では古式須恵器が出土した加工段8や、谷部包含層から土器飾表、高环、小型丸底壺、低脚环など多量の遺物が出土している。Ⅲ区



第96図 玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡 古墳時代後期の様相 (S=1:2,000)

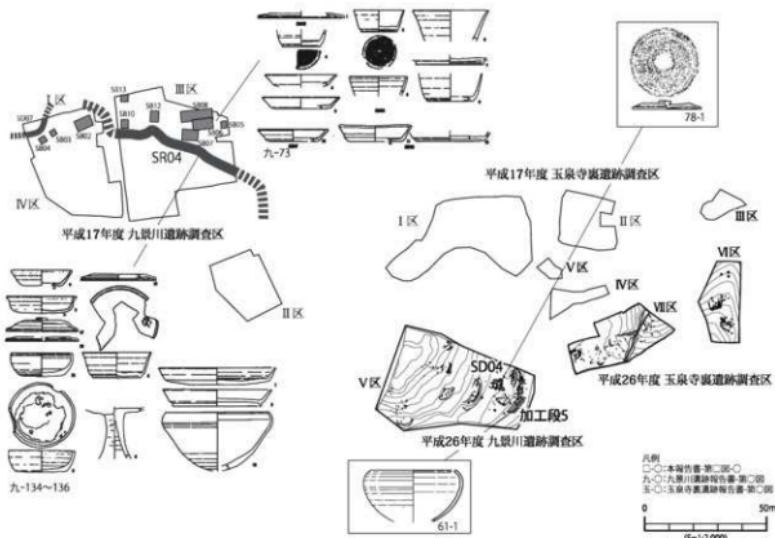
で検出した自然河道 SRO3 を挟んで、西側に居住域、東側に居住施設に付随する倉庫群・作業場としての機能が想定される。SRO3 では小型丸底壺が一括投棄されており祭祀が行われていたと考えられる。V区では、松山II期～IV期の高环・甕が出土した SD02 が挙げられる。残存状況から溝状遺構としているが、ピット内部に小さなコの字型のかぶ跡を持ち、竪穴建物跡の可能性も考えられる。

玉泉寺裏遺跡 I 区では竪穴建物跡 S101 が検出されている。遺物は前期に引き続き一定量確認され、御崎谷遺跡でもこの時期の遺物が出土する。古墳時代中期は、小規模な集落がそれぞれ小さな谷間ごとに営まれていたと考えられる。

### 古墳時代後期

古墳時代後期前半に入ても引き続き谷底平野部で集落が集中して展開している中、玉泉寺裏遺跡でも II 区・VII 区斜面部からわずかに遺物が出土している。遺構としては、VII 区平坦部で SK10 を確認した。遺物の出土がなく詳細は不明だが、AMS 年代測定により 5 世紀前半～6 世紀中頃の土器焼成坑あるいは小規模な炭窯の可能性もある。集落の中心からはやや距離をとりつつ営みが丘陵まで及んでいたことが想像される。

古墳時代後期後半は、九景川遺跡 I 区～IV 区では遺物の出土量に比べこの時期の遺構が検出されず、集落の中枢が移ったことが指摘されていたが、今回調査した V 区で確認した遺構と遺物はこの時期に最も集中していた。検出した遺構は加工段 4 基、溝状遺構 1 条である。加工段 1・2 は焼土溜まりや小さな炉跡、鉄滓や砥石が中期～終末期の土器とともに検出されており、小規模な鍛冶工房と考えられる。壁際からやや離れた位置に溝が巡り、AMS 年代測定により埋土は 6 世紀後半～



第 97 図 玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡 奈良時代～平安時代初頭の様相 (S=1 : 2,000)

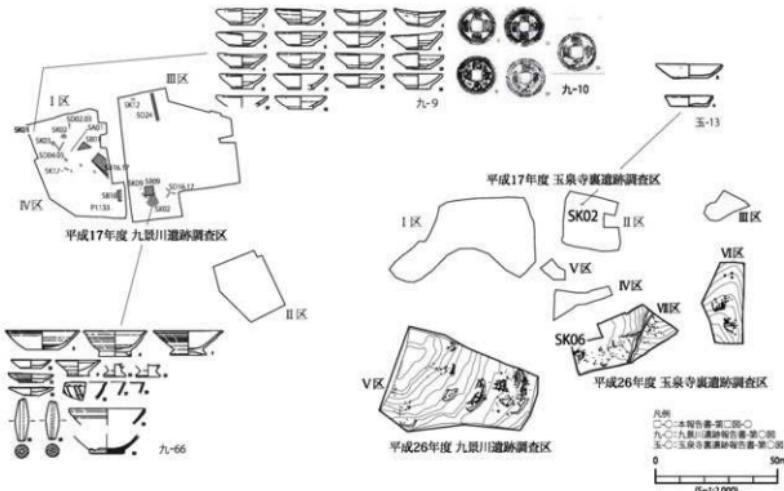
7世紀中頃と判明している。また、加工段3の上面では花仙山産碧玉製の勾玉未成品が検出された。玉作関連の遺物はV区ではほかに谷部包含層から滑石製勾玉が出土するのみである。碧玉製勾玉は小型の未成品で、流通したものか集落内で製作されたものか詳細は不明である。過去調査区でも玉作関連遺物とみられる出土は極めて少なく、IV区 SI03からは同じ花仙山製碧玉の剥片が出土するものの、中期頃の住跡であるSI03との関連性は不明である。加工段3・6は胴部中ほどに小さな突起をもつ土製支脚が、加工段6・9は自然石を支脚の代用にしていた痕跡が観察されるなど、出土遺物に共通性がみられ、同一の集団が生活を共有していたことを示している。

玉泉寺裏遺跡では、II区・III区では包含層から少量の遺物がみられるが、遺構は確認されていない。今回調査区でも、VII区で大谷4～5期の須恵器がわずかに認められるのみである。

九景川遺跡V区の調査成果により、古墳時代中期まで平野寄りに展開していた集落は、谷奥の丘陵斜面に進出していたことが明らかとなった。この時期、大規模古墳が増加し平野部の開発が進展しているとみられ、当地域でも人口の増加に伴い集落を拡大させていったことが窺える。

#### 奈良時代～平安時代初頭（8世紀～9世紀前半）

九景川遺跡I区・III区・IV区で遺構が最も多い時期である。I区では倉庫群と考えられるSB02～SB04、III区では自然河道SR04が中央付近を横断し、それより北側で倉庫群SB10・12・13を検出した。SR04が埋め立てられた後、SD05が掘り込まれ、それに区画されるように住居としてSB05～08が営まれたと想定される。谷奥のII区では遺構は確認されていないが、遺物は一定量出土する。V区斜面部のSD04やその直上の包含層からは、同一工人の手によるとおもわれる出雲IV期の須恵器蓋が複数出土し、加工段5からは鉄鉢形土器が出土している。I区・III区北半で展開されている集落に付属する施設が存在していた可能性が高い。



第98図 玉泉寺裏遺跡・九景川遺跡 平安時代末～鎌倉時代の様相 (S=1:2,000)

一方で、玉泉寺裏遺跡ではⅦ区斜面部でわずかに須恵器が出土するのみで、当時の様相を知るには資料が乏しい状況である。ただし、御崎谷遺跡では一定量の遺物が出土し、加工段も確認されているため、縮小傾向にはあるが集落は継続していたと考えられる。

### 平安時代末～鎌倉時代（11世紀末～14世紀）

九景川遺跡では、平安時代中期～後期の空白期を挟み、11世紀末～12世紀になるとⅢ区南側を中心として集落が営まれる。古墳時代中期の集落域とほぼ重複する範囲で、Ⅰ区・Ⅲ区・Ⅳ区からは複数の屋敷跡やそれを区画する柵列、土坑、小規模な貝塚、集落を区画したとみられる大溝が検出されている。Ⅱ区・Ⅴ区では遺構を検出していないが、Ⅴ区谷部包含層からは12世紀頃の土師器环や福建省系白磁碗、瓦質土器片が確認できる。

玉泉寺裏遺跡では、丘陵斜面のⅡ区で12世紀頃の土師器环が出土したSK02のほか、Ⅲ区でもわずかな遺物が確認されていた。Ⅷ区平坦面では、SK06を検出している。SK06は土坑内壁や底面が被熱硬化する。遺物は出土しなかったがAMS年代測定により11世紀中頃～13世紀前半と判明しており、炭焼き土坑等の可能性が考えられる。

九景川遺跡を中心に広がる集落は谷に接する平地に展開し、丘陵部は生活に必要な資材の調達など、里山として利用されていたと解釈できるだろう。

## 第3節まとめ

以上、玉泉寺裏遺跡及び九景川遺跡の調査成果と集落跡の様相について概観してきた。

玉泉寺裏遺跡では、集落中心部を見下ろす丘陵部に埋葬施設や建物を構えていた様子が復元される。九景川遺跡では、これまで遺構検出の少なかった古墳時代後期～終末期に、丘陵斜面に集落の一部が展開されていることが判明し、先行調査の時間的空白を埋める成果となった。

これにより、両遺跡の立地する出雲平野南西部の低丘陵一帯には、縄文時代から嘗村活動が始まり、時期ごとにその中枢を移動させながら中世まで集落が持続することがわかった。中でも、古墳時代中期に集落が大規模化する事実は、当地に北光寺古墳のような大規模な古墳が出現する背景を現しているといえる。

今回の発掘調査では、神門水海という特異な環境が豊かな動植物相を生み、その恩恵を受けた人々が陸域と水域で活発に活動していた様子を解明することができた。今後はさらに北辺・南西辺を含めた神門水海全域にわたる調査研究が蓄積され、進展することを期待したい。

## 引用・参考文献

- 湖陵町教育委員会 1994『神西地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』  
出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として—』  
出雲市教育委員会 2000『浅柄遺跡』  
湖陵町教育委員会 2000『湖陵町遺跡地図』  
西尾克己・野坂俊之 2000『湖陵町の歴史』『湖陵町誌』湖陵町誌編纂委員会  
山根正明 2000『中世の湖陵町』『湖陵町誌』湖陵町誌編纂委員会  
内田律雄他 2004『出雲市北光寺古墳群測量報告』『島根考古学会誌』第20・21集合併号  
出雲市教育委員会 2005『浜井場古墳群発掘調査報告書（一）出雲インター線新世紀道路（改良）工事地内』  
島根県教育委員会 2005『畠ノ前遺跡・菅原I遺跡・クボ山遺跡・菅原II遺跡・菅原III遺跡・廻田V遺跡・  
保知石遺跡・浅柄II遺跡・柳ノ内遺跡 山陰自動車道島取益田線（穴道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発  
掘調査報告書2』  
島根県古代文化センター 2007『北光寺古墳発掘調査報告』  
島根県教育委員会 2008『玉泉寺裏遺跡 浜井場4号墳 間谷東古墳 一般県道出雲インター線建設事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II』  
島根県教育委員会 2008『九景川遺跡 一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I』  
島根県教育委員会 2009『御崎谷遺跡 間谷東遺跡 浅柄北古墳 間谷西II遺跡 間谷西古墳群 一般県道  
出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III』  
島根県古代文化センター 2012『出雲国風土記の研究IV 神門水海南辺の研究（資料編）島根県古代文化セ  
ンター調査研究報告書46』  
島根県古代文化センター 2014『解説出雲国風土記』  
島根県古代文化センター 2015『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究 島根県古代文化セン  
ター研究論集第15集』



第4表 玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）、九景川遺跡（V区）出土土器観察表

編號	閲版番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13-1	17	VII区 B4 加工段 1-PtOB 包含層 1層	弥生土器	高杯	25.6	6.0	ミガキカ、模ミガキ、し 器高 ぼり痕	Zmm以下の砂粒子 多く含む	良好 やや 不良	明黄褐色 黄褐色 10YR5/6 10YR5/6	口縁外側に黒斑あり、円錐充填法	
13-2	14	VII区 加工段 1-PtOB 1層	土師器	高杯				ミガキカ	1mm以下の砂粒子 (石英など)を多く含む	やや 不良	黄褐色 10YR5/6 丹青り	
13-3	14	VII区 加工段 1-PtOB 1層	弥生土器	鉢				ナデカ、ミガキ	2mm以下の砂粒子 (石英など)を多く含む	良好	暗灰黄色 2.5Y5/2	
17-1	14	VII区 G4 表土	知出器	环身	(10.8)	(4.0)		ハセナデ、回転 ラケツリカ	白色中粒砂を少し 細粒砂を多く含む	良好	内: 灰色 7.5Y6/0 外: 灰色 5Y5/1	外向自然輪
17-2	14	VII区 C4 表土	知出器	皿			(9.0)	ナデ、回転ナデ、 回転ラケツリ 切削	白色細粒砂を多く 含む	良好	灰色 7.5Y6/1	
17-3	14	VII区 表土	知出器	甕				ナデ、回転ナデ、 回転ラケツリ後被 文、沈線文 2 条	中粒砂をわずかに 含む	良好	内: 灰色 7.5Y6/1 外: 灰色 N4/0	
24-1	14	VII区 S01 方埋土	弥生土器	甕				模ナデ、ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	やや 良好	灰黄色 2.5Y6/2 10YR7/4	外向腹部炭化物付 着
24-2	14	VII区 C2・B2 包含層	弥生土器	甕	(19.4)			模ナデ、模ハイカ、 ケズリカ	1mm以下の砂粒子 (石英など)を多く 含む	やや 不良	灰黄色 10YR7/4	
24-3	14	VII区 S01 北	土師器	环カ 环カ	(16.2)	(5.9)	(5.8)	不明	鶏卵粒子 (石英、長 石など)を含む	やや 不良	10YR7/4	減灰変色カ
27-1	14	VII区 S01 埋土	土師器	甕				ハケ目	鶏卵粒子 (石英な ど)を若干多く含む	良好	10YR6/4	
35-1	14	VII区 D5・C5 包含層	弥生土器	直カ 含層				波状文、平行弦 文	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	やや 不良	10YR6/4 10YR6/4	内: にふい黄褐色 外: 明黄褐色 5YR5/6 文
35-2	14	VII区 C6 包含層	弥生土器	小形直カ 甕				ナデ、2条の区画 比較、クシ衝撃 具による羽状文	1.5mm以下の砂粒子 をやや多く含む	良好	内: 明黄褐色 10YR6/4 外: 黄褐色 2.5Y5/2 - 2.5Y5/3	
35-3	14	VII区 C6 包含層	弥生土器	小型直カ 甕	(12.8)			2～3条の波状 文	1.5mm以下の砂粒子 (石英など)をやや 多く含む	不良	にふい黄褐色 10YR6/4	にふい黄褐色
35-4	14	VII区 D8 包含層	弥生土器	直				ナデ、ケズリ	細粒砂を多く含む	良好	褐色 5YR7/8	輪部径 (13.0) cm
35-5	14	VII区 C6・D6 包含層	弥生土器	直カ直カ 含層				粗糲なナデ	1mm以下の砂粒子 (石 英など)をやや多く 含む	良好	内: にふい黄褐色 10YR7/4 外: 黑褐色 N2/	
35-6	14	VII区 C6 包含層	弥生土器	甕				ナデ、ケズリ、 10条の腹出線文、 10条の腹出線文	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	にふい黄褐色 10YR7/4	複合部径 (12.8) cm
35-7	14	VII区 D8 包含層	弥生土器	甕				模ナデ、ミガキ 比較文後部分的に ナデ消し	模ナデ、ミガキ、 比較文 (石英など) を含む	良好	にふい褐色 7.5YR6/3	複合部径、外向及 び口縁部内面に保 付着
35-8	14	VII区 D7・D8 C8 包含層	弥生土器	直 C8 包含層				ナデ、ミガキ 10条の腹出線文 後ナデ消し	2mm以下の砂粒子 (石英など)を含む	良好	浅黄褐色 10YR8/3	
35-9	14	VII区 D8 包含層	弥生土器	甕	(18.2)			模ナデ、比較文 (5 条) 後ナデ消し	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	やや 不良	10YR7/4	外向腹付着カ
35-10	15	VII区 D8 包含層	弥生土器	甕				ナデ、ケズリ	鶏卵粒子 (石英、長 石など)及び岩石の 2mmの砂粒子を含 む	良好	浅黄褐色 10YR8/4	腹部内面黒褐色
35-11	15	VII区 C6 包含層	弥生土器	甕				ナデ、ミガキ	2mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を含む	良好	にふい褐色 7.5YR7/4	
35-12	15	VII区 R2 包含層	弥生土器	甕				不明	1mm以下の砂粒子 (石英、角閃石など)	やや 不良	10YR7/4 7.5YR7/4	
35-13	15	VII区 D8 包含層	弥生土器	甕	(17.1)			模ナデ、貝殻模様 による直輪文後ナ デ消し	模ナデ、貝殻模様 細粒砂を多く含む	良好	褐褐色 10YR8/8	貝付着
35-14	15	VII区 D2 包含層	弥生土器	直カ 詰カ 含層	(6.2)			同心模ナデ、輪付 高台底部 ほか)を含む	若干の砂粒子 (石 英など)を含む	やや 不良	にふい黄褐色 10YR7/4	
35-15	15	VII区 D6 包含層	弥生土器	直カ直カ 含層	(8.2)			ナデ、同心模ナデ、 輪付高台	細粒砂を多く含む	良好	内: 黄褐色 10YR8/8 外: 棕 5YR7/6～に ぶい褐色 7.5YR7/6	外向腹付着
35-16	15	VII区 C7 包含層	弥生土器	高杯				ミガキカ	1mm以下の砂粒子 (石英、角閃石など) を含む	良好	にふい褐色 10YR7/3	
35-17	17	VII区 B2 東西べ ルト 包含層	弥生土器	鼓形沿台	(18.5)			模ナデ、ミガキカ、 貝殻模様 (石英など) 底付	2mm以下の砂粒子 (石英など)をやや 多く含む	良好	にふい黄褐色 10YR6/4	
35-18	15	VII区 C7 包含層	弥生土器	鼓形沿台				ケズリ、ナデ、偏 凹輪文後半ナデ消 し	2mm以下の砂粒子 (石英など)を含む	良好	にふい黄褐色 10YR7/4	4～5条半位の幅 凹輪文後ナデ消し
36-1	15	VII区 D8 包含層	古式土師	鼓形沿台	(21.7)			不明	1.5mm以下の砂粒子 (石英など)を含む	良好	にふい黄褐色 10YR7/4	
36-2	15	VII区 D6 包含層	古式土師	鼓形沿台	(22.3)			ナデ、ケズリ	鶏卵粒子 (石英、長 石など)を多く含む	不良	浅黄褐色 10YR8/3	

辨別 番号	開闢 番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	断土	焼成	色調	備考
36-3	15	VII区 D6 包含層	古式土師 豚器					横ナデ	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	浅黄褐色 10YR8/4	
36-4	15	VII区 D8 + E8 包含層	土師器	甕	(27.5)			横ナデ、ナデカ。 波状文	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	にぶい黄褐色 10YR7/4	
36-5	15	VII区 D7 包含層	土師器	直口甕				ナデ、ケズリ、ナ ラ後丹塗り	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	圓筒: 浅黄褐色 2.5YR8/4 円: 明る褐色 SYR5/6 部様 (7.3) cm	外山丹塗り、内 口縁部丹塗り、留 目
36-6	17	VII区 D8 包含層	土師器	直口甕				ナデ、ミガキ後 丹塗り、ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	やや 不良	円: 明る褐色 2.5YR8/8 圓筒: 黄褐色 2.5YR7/8	丹塗りカ、底部桂 6.2cm
36-7	15	VII区 D6 包含層	古式土師 豚器		(21.0)			ナデ、横ナデ、節 面压痕	石英、長石、角閃石 などの重鉱物を多 く含む	良好	にぶい黄褐色 10YR8/4	
36-8	16	VII区 D6 包含層	古式土師 豚器		(20.7)			ナデ、回転横ナデ、 ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	にぶい黄褐色 10YR7/4	
36-9	16	VII区 D8 包含層	古式土師 豚器		(17.8)			ナデ、粗粒なナ ダ、横方向ケズリ、 難向ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、角閃石、長 石など)をやや多く 含む	良好	内: 黄褐色 10YR5/2 外: にぶい黄褐色 10YR7/3	
36-10	16	VII区 D7 包含層	古式土師 豚器		(15.5)			ナデ、ハケ目、 ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	にぶい黄褐色 10YR7/4	
36-11	16	VII区 D8 包含層	古式土師 豚器		(17.5)			横ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	やや 不良	にぶい黄褐色 10YR7/4	
36-12	16	VII区 D7 包含層	土師器	甕	(18.0)			ナデ、ミガキ後 丹塗り、ハケ目、 ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	内: 丹塗脂: 浅黄褐色 10YR8/4 [丹]赤色 外: 丹塗脂に付着 10R5/6 外: 浅黄褐色 2.5YR8/4	丹塗りカ、外山口 縁部に付着する 10R5/6
36-13	16	VII区 C7 + C8 包 含層	土師器	甕				ナデカ、ケズリカ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	にぶい黄褐色 10YR7/4	
36-14	17	VII区 D8 包含層	土師器	高环	18.5			ミガキ後丹塗り	粗粒砂を少し含む	良好	黄褐色 7.5YR8/9 ~ 赤色 10R5/8	
36-15	15	VII区 D5 包含層	土師器	高环				不明	難燃な砂粒子 (石英など)を含む	不良	褐色 SYR6/6	
36-16	15	VII区 C6 包含層	土師器	高环	(19.0)			粗粒なミガキ、 横ナデ後丹塗り	2mm以下の砂粒子 (石英など)を多く 含む	良好	内: にぶい黄褐色 10YR7/4 外: 細かい黄褐色 10YR7/4 [丹] 褐色 SYR6/6	丹塗り
36-17	15	N25 T11 帽灰 色土	土師器	高环	(9.6)			不明	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	やや 不良	内: 棕色 SYR7/6 外: 棕色 SYR6/8 結晶法 #	
36-18	15	VII区 D7 包含層	土師器	高环				しぶり模	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	やや 不良	にぶい黄色 2.5Y6/3 丹塗り 2.5YR4/8	
36-19	15	VII区 D8 包含層	土師器	高环				ナデ、ヘラミガキ 後丹塗り	1mm以下の砂粒子 (石英、角 閃石など)をやや 多く含む	やや 不良	棕赤褐色 2.5YR5/6 ~褐灰色 SYR5/1 外: 赤色 10R5/8	丹塗り、脚部桂 (4.5) cm
36-20	15	VII区 B4 包含層	土師器	甕(肥)				ハケ目	難燃粒子 (石英、角 閃石など)をやや 多く含む	良好	にぶい褐色 7.5YR6/4	把手は差し込み
37-1	16	VII区 B4 包含層	土師器	甕				回転ナデ。回転ナ デ後ナデ。回転ハ ラケ目	中砂粒をわずかに 含む	良好	内: 黄白色 7.5Y7/1 外: 黄 N5/0	
37-2	16	VII区 東西ペル ト包含層、C3 包含層	須恵器	蓋身	(7.6)			回転ナデ、 回転ナデ ナラ	白色和粉砂をわず かに。細粉砂をわず かに含む	灰白色	7.5Y7/1	
37-3	17	VII区 B2 + C2 + C3 包含層	須恵器	低脚無蓋 高环	(14.7)	(7.7)		ナデ、回転ナ デ。黒・白色和粉砂 を含む	白色和粉砂をわず かに。細粉砂をわず かに含む	良好	内: 黄白色 N7/0 外: 灰色 N5/0	2方向の三角形透 かし
37-4	16	VII区 C4 包含層	須恵器	环				ナデ、回転ナデ、 回転ナデ ナラ	白色和粉砂を少し 含む	良好	内: 黄色 N5/0 外: 色灰 7.5Y6/0	
37-5	16	VII区 B2 包含層	須恵器	环	(11.2)			ナデ、回転ナ デ。中砂粒を少し含む	良好	内: 黄色 N6/0 外: 灰色 7.5Y6/1		
37-6	16	VII区 B3 (合 成) 包 含層	高台付器	高台付器 内側ペルト 包含層	(12.3)			ナデ、回転ナ デ。白色和粉砂をわざ かに。細粉砂を多く 含む	良好	内: 黄色 SY7/1		
43-1	35	集石道崎 下層	弥生土器	甕				不明	1mm以下の砂粒子 (石英など)を含む	良好	内: 浅黄色 2.5Y7/3 外: にぶい黄褐色 10YR7/4	
43-2	35	集石道崎 上層 + 須 恵器	須恵器	高台付器	15.0			ナデ、回転ナデ	0.5mm以下の砂粒を 若干含む	不良	浅黄色 2.5Y7/3	
43-3	35	集石道崎 下層 (明黃褐色土)	須恵器	脉力	(16.2)			ナデ、回転ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英など)をや 多く含む	良好	内: 灰色 N5/0 外: 灰色 N4/0	ヘラ引き「U」、灰被 り
49-1	35	加工段 1 + 2 + 2 剖	土師器	环	13.8	6.0	3.9	不明	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	やや 不良	浅黄褐色 10YR 内外山丹塗り、丸 底	

辨別 番号	図版 番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
49-2	35	加工段1・2・4 層	土師器	窯	13.4	3.0	4.8	ミガキ丁寧な デカ、暗文、ハケ 目	1mm以下の砂粒子を 多く含む	良好	内: 淡黄色 2.5YR7/3 外: 淡褐色 2.5YR7/3	内外面丹塗り、 内側明文
49-3	35	D3・E3 加工段 1・2・4 層	土師器	窯	(16.6)			ナデカ、ハケ目	1mm以下の砂粒子を 多く含む	良好	内: 赤褐色 2.5YR4/8 外: 淡褐色 2.5YR4/8	内外面丹塗り、 内側明文
49-4	35	加工段1・2 4層	土師器	窯	(16.3)			横ナデ、ハケ目	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	やや不良	内: 赤褐色 2.5YR4/8 外: 淡褐色 2.5YR4/8	内外面丹塗り、 内側明文
49-5	35	B5 加工段1・2 ～SD02 墓土	土師器	窯	(11.6)			不明	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	内: 赤褐色 10YR4/8 外: 淡褐色 10YR4/8	内外面丹塗り、 内側明文
49-6	35	加工段1・2・2 層	土師器	窯	(11.7)			ナデ、絞り瓶	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) が多く、若干の2 ～5mmの大砂粒子も 含む	良好	内: 明褐色 7.5YR5/4 外: 淡褐色 7.5YR6/6	内外面丹塗り、 内側明文
49-7	35	加工段1・2層	土師器	窯				ナデ、絞り瓶、 ケ目	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	やや不良	内: 赤褐色 10YR4/8 外: 淡褐色 10YR6/6 ～5YR6/6	内外面丹塗り、 内側明文
49-8	35	加工段1・2・2 層	土師器	窯				絞り瓶	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	内: 赤褐色 5YR4/6 外: 淡褐色 5YR6/6	内外面丹塗り、 内側明文
49-9	35	加工段1・2・4 層	土師器	窯				削押さえ、絞り瓶、 ナデ	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	内: 赤褐色 2.5YR4/8 外: 淡褐色 2.5YR7/4	内外面丹塗り、 内側明文
49-10	35	加工段1・2・2 層	土師器	窯				ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	内: 淡褐色 10YR8/3 外: 淡褐色 10YR8/4 ～8/6	内外面丹塗り、 内側明文
49-11	35	加工段1・2・2 層	土師器	直口壺	(12.8)			ハケ目、指押模 り	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	内: 明褐色 2.5YR4/4 外: 淡褐色 2.5YR6/6	胸部下部に保付 着
49-12	35	B5 加工段1・2 1層	土師器	窯				横ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	内: 赤褐色 7.5YR4/3 外: 淡褐色 7.5YR4/4	内外面丹塗り、 内側明文
49-13	36	加工段1・2・1 層	土師器	窯	17.2			ナデカ、ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	やや不良	内: 淡褐色 2.5Y7/2 外: 淡褐色 2.5Y7/3	内外面丹塗り、 内側明文
49-14	36	加工段1・2・2 土附近(黒褐色 土)	土師器	曲				ナデ、ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を含む	良好	内: 淡褐色 10YR6/3 外: 淡褐色 10YR7/3	内外面丹塗り、 内側明文
49-15	36	B5 加工段1・2 3・4層	土師器	窯	(18.2)			ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	内: 淡褐色 10R8/2 外: 淡褐色 10R8/3	内外面丹塗り、 内側明文
49-16	36	加工段1・2・4 層	土師器	窯	(20.3)			ナデカ、横ナデカ、 ケズリ	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)をやや多く 含む	良好	内: 淡褐色 7.5YR7/4 外: 淡褐色 7.5YR7/4	内外面丹塗り、 内側明文
49-17	36	加工段1・2・2 層	土師器	窯	(20.5)			ナデ、ケズリ	砂を含む	良好	内: 淡褐色 7.5YR 外: 黑褐色～灰褐色 SYR	内外面丹塗り、 内側明文
49-18	36	加工段1・2・1 層	土師器	窯	(18.4)			ケズリ、ケズリ上 げ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	やや不良	内: 淡褐色 10YR7/3	内外面丹塗り、 内側明文
49-19	36	B5 加工段1・2 土附近(黒褐色 土、B5 加工 段1・2断ベルト	土師器	窯	(23.2)			ナデカ、ケズリ	1mm以下の砂粒子を 多く含む	良好	内: 淡褐色 10YR8/6 外: 黑褐色～灰褐色 SYR	内外面丹塗り、 内側明文
49-20	36	B5 加工段1・2 南側周辺土	土師器	窯	(16.6)			陶部: 剥押さえ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)をやや多く 含む	良好	内: 淡褐色 2.5YR7/4 外: 淡褐色 2.5YR7/4 ～5YR6/6	内外面丹塗り、 内側明文
49-21	36	B5 加工段1・2 黒褐色土	土師器	窯	(23.6)			ケズリ	1.5mm以下の砂粒子 (石英など)を多く 含む	やや不良	内: 淡褐色 7.5YR7/6 外: 淡褐色 10YR7/6	内外面丹塗り、 内側明文
50-1	36	加工段1・2・2 層	土師器	窯	(22.2)			ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	内: 淡褐色 10YR7/4	内外面丹塗り、 内側明文
50-2	38	B5 加工段1・2 1層	土師器	窯	(26.5)			不明	1mm以下の砂粒子 (石英など)をやや 多く含む	不良	内: 淡褐色 10YR7/4 外: 淡褐色 10YR7/4 ～5YR6/6	内外面丹塗り、 内側明文
50-3	36	B5 加工段1・2 層	土師器	窯	(32.8)			水引き綱ナデ、ケ ズリ、水引きナデ (石英など)をやや 多く含む	1.5mm以下の砂粒子 を多く含む	良好	内: 淡褐色 5YR5/3 外: 淡褐色 5YR4/1	内外面丹塗り、 内側明文
50-4	38	加工段1・2・2 層	土師器	窯	(33.0 ～ 34.6)			横ナデ、ケズリ、 ハケ目後ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	淡褐色 10YR8/3 ～5YR5/2	内外面丹塗り、 内側明文

辨別番号	開発番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	歯土	焼成	色調	備考
50-5	37	加工段1・2 22 層	土師器	壺(把手)				ナデ	砂を含む	良好	外: 淡黄褐色 10YR	
50-6	37	加工段1・2 4 層	土師器	壺(把手)				ナデ、ナデ後ケズ リ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) やや多く含む	良好 不良	内: 淡黄褐色 10YR8/4 外: ぶじ褐色 7.5YR7/4	
50-7	37	加工段1・2 9 北ベルト	土器類	ミニチュ ア土器				小明	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	やや 良好	内: ぶい黄褐色 10YR7/4 外: ぶじ褐色 7.5YR7/4	
50-8	37	加工段1・2 2 層	土器類	手捏ね土 器	(2.6)			ナデ、押押さえ けり	1mm以下の砂粒子 (石英など) を若干含む	良好	刷毛褐色 5YR5/6	
50-9	37	加工段1・2 22 層	土師器	壺	(26.2)	13.8		ナデ、傾ケズリ、 ケズリ上げ、ハク 目	1mm以下の砂粒子 (石英など) を多く含む	良好 良好	内: 灰黄褐色 10YR5/2 外面被付着 - 淡黄褐色 10YR4/1 外: 淡灰黄色 2.5YR5/2	
50-10	37	加工段1・2 1 層	土師器	壺	(13.8)			ナデ、粗造なナ カ、ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英など) を多く含む	良好 良好	内: ぶい黄褐色 10YR7/4 外: ぶい黄褐色 10YR7/3	表面一部に黒斑
50-11	37	B5 加工段1・2 床面	土器類	壺	(13.2)			ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	内: 淡黄褐色 10YR8/3 外: ぶじ褐色 10YR7/4	外面に黒斑、穿孔 1ヶ所。孔径 0.6cm
50-12	38	B5 加工段1・2 3～4層	土器類	土製支脚	(18.5)			ナデカ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	内: ぶい褐色 7.5YR7/3 長石、角閃石など を多く含む	外面に黒斑、穿孔 1ヶ所。孔径 0.6cm
50-13	38	B5 加工段1・2 3～4層	土器類	土製支脚				押押さえ	2mm以下の砂粒子 (石英など) を多く含む	良好	内: ぶじ褐色 7.5YR5/4 底面: 刷毛褐色 7.5YR4/1	
50-14	38	加工段1・2 2 層	土器類	移動式壺				ナデ、ケズリ	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: ぶい黄褐色 10YR7/3	
50-15	38	加工段1・2 2 層	土器類	移動式壺	(37.1)			ナデカ、ケズリ、 粗面压痕	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: 淡黄褐色 10YR8/3 外: 淡黄褐色 10YR8/4	
50-16	38	加工段1・2 2 層 4層	土器類	移動式壺	(38.6)			ケズリ	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: 淡黄褐色 10YR8/4 外: 淡黄褐色 10YR8/6	
51-1	39	加工段1・2 4 層	須恵器	壺环(縦)	(12.4)		(4.0)	ナデ、回転ナデ、 ケズリ、沈線2 本	密、0.5mm以下の白 砂粒子を若干含む	良好	内: 灰白色 7.5Y7/1 外: 明るいオーブ灰 2.5G17/1	
51-2	39	加工段1・2 4 層	須恵器	壺环(縦)	(12.6)		3.8	ナデ、回転ナデ、 回転ケズリ、 ヘラコシ痕	1mm以下の砂粒子を含 む	良好	灰白色 7.5Y 1	
51-3	39	加工段1・2 4 層	須恵器	壺环(縦)	(13.0)		(4.2)	ナデ、回転ナデ、 粗面压痕	1mm以下の砂粒子を含む 回転ケズリ、 沈線1条	良好	内: 朱色 5Y6/1 外: 灰白色 5Y7/1	1条の沈線による 突堤表現
51-4	39	加工段1・2 2 層	須恵器	壺环(身)	10.4		3.9	ナデ、ヘラコシ痕、 1mm程度の砂粒子を含 む	良好	内: 朱色 N6/0 外: 朱色 5Y5/1		
51-5	39	加工段1・2 4 層	須恵器	壺环(身)	11.6	7.0	3.6	回転ナデ、回転 ケズリ 0.5mm以下の白砂 粒子を若干含む	良好	内: 朱色 10Y7/1 外: 朱色 7.5Y8/1		
51-6	39	加工段1・2 東 西ベルト 3～4層	須恵器	壺环(身)	(10.5)	(5.0)	(4.2)	ナデ、回転ナデ、 1mm以下の砂粒子を若 干含む	良好	内: 朱色 5Y7/1 外: 朱色 N6/0		
51-7	37	B5 加工段1・2 第1層	須恵器	壺环(縦)				回転ナデ、回転ヘ ラコシ痕	1mm以下の砂粒子を含 む	良好	内: 灰白色 7.5Y 外: 朱色 N6/1	
51-8	37	B5 加工段1・2 3～4層 (黒土)	須恵器	壺				ナデ、回転ナデ、 回転ケズリ、む 沈線2条	密、若干の砂粒子を含 む	良好	内: 朱色 N6/1 外: 朱色 N5/0	
51-9	37	B5 加工段1・2 3～4層 (黒土)	須恵器	壺环(縦)				ナデ、回転ナデ、 回転ケズリ、 沈線1条	密	不良	内: 灰白色 5Y7/1 外: 朱色 N7/0	
51-10	39	加工段1・2 2 層 1・2層 1・2層 4層(黒土)	須恵器	壺环(縦)	(13.4)		3.9	ナデ、回転ナデ、 1mm以下の白砂粒子を含 む ヘラコシ後ナデ	1mm以下の白砂粒子を含 む 若干含む	良好	内: 朱色 N6/1 外: オーリーブ灰 2.5G6/1	
51-11	39	B5 加工段1・2 3層	須恵器	壺环(縦)				ナデ、回転ナデ、 0.5mm以下の砂粒子を含 む 回転ヘラコシ痕	0.5mm以下の砂粒子を含 む	良好	内: 朱色 9Y7/1 外: 朱色 10Y7/1	
51-12	37	B5 加工段1・2 1・2層	須恵器	壺环(縦)				回転ナデ、沈線2 本、少量の粗面压痕	少量の粗面压痕	良好	内: 朱色 10Y7/1 外: 朱色 10Y7/1	
51-13	37	B5 加工段1・2 1・2層	須恵器	壺	(12.5)	つま み透 2.1cm	(2.1)	ナデ、回転ナデ、 ヘラコシ後ナデ	1mm以下の砂粒子を含 む ヘラコシ後ナデ	良好	内: 朱色 N7/0 外: 算盤玉状つまみ 朱色 N6/0	
51-14	39	B5 加工段1・2 2層	須恵器	壺环(身)	(14.6)	(15.4)		回転ナデ、回転ヘ ラコシ痕	0.5mm以下の砂粒子を含 む	良好	内: 灰白色 5Y7/1	
51-15	37	B5 加工段1・2 1・2層 (黒土)	須恵器	壺环(身)	(10.9)			回転ナデ、回転ヘ ラコシ痕	0.5mm以下の砂 粒子を少し含む	良好	内: 朱色 N7/0 外: 朱 色 10Y6/1	
51-16	39	加工段1・2 1 層	須恵器	壺	(14.4)			ナデ、回転ナデ	砂粒子を若干含む	不良	灰白色 5Y8/1	
51-17	40	B5 加工段1・ 2 黑褐色土	須恵器	壺	(8.5)			ナデ、回転ナデ	砂、微砂粒子を若干含 む 静止系切り	良好	内: 灰白色 7.5Y7/1	

辨別 番号	図版 番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
51-18	40	B5 加工段1・2・3 水槽	高台付皿	(16.3)	(2.3)			ナデ、回転ナデ、 回転ナデ後ナデ、若干含む ヘラオシ鉢	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰白色 7.5Y7/7	
51-19	40	加工段1・2・1 水槽	高台付き皿	(16.5)	(15.0)	(2.3)		ナデ、回転ナデ、 回転ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	やや不良	淡黄色 2.5Y8/3	
51-20	40	加工段1・2・1 水槽	皿	(9.8)	(4.1)	(3.0)		ナデ、回転ナデ、 回転ヘラケズリ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰白色 3Y7/1	2条の沈糊面
51-21	40	加工段1・2・2 水槽	皿					ナデナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	灰白色 3Y7/1	外表面剥り、内部 焼成により黒褐色 を呈す、胎部(10.3) cm
53-1	41	加工段10 1層 土師器	高环					ナデ、段り瓶	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	良好	内: 黄褐色 10YR 外: 灰色、浅黄褐 色 10YR	脚部直径 4.5cm
53-2	41	C6 加工段10 土師器 埋土	甌	(19.0)				横ナデ、ケズリ	細砂粒子(石英、長 石など)をやや少量 含む	良好	内: 明灰褐色 10YR7/6 外: 浅黄褐色 10YR8/4	
53-3	41	加工段10 1層 土師器	甌					ミガキカ	細砂粒子(石英、長 石など)をやや少量 含む	良好	内: ぶい黄褐色 10YR7/3	
53-4	41	B5 加工段10 土師器	甌					不明	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を含む	良好	褐灰色 10YR6/1	口縁部内外面に黒 斑
53-5	41	C6 加工段10 土師器 埋土	甌					ナデ、ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英など)を含む	良好	内: ぶい黄褐色 10YR7/4	
53-6	41	加工段10 2層 土師器	鍋	(28.2)				横ナデ、ケズリ、 ハケ後ナデ、後 ハケ後4条	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	内: 黑褐色 10YR6/1 外: ぶい黄褐色 10YR7/2	外変に黒斑、保付 着
57-1	41	B4 加工段3 B-1 土師器	鼓形器蓋	(14.0)				ナデカ	2mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: 浅黄褐色 7.5Y8/4 外: 黄褐色 10YR8/6	
57-2	41	B4 加工段3 南 北サブトレ南	土師器	高环	(13.4)			不明	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	丹: あら 10YR5/6 外変面丹塗り のぶい黄褐色 10YR7/4	
57-3	41	B4 加工段3 A-1 層	土師器	高环	(13.2)			不明	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	丹: あら 10YR4/8 外変面丹塗り のぶい黄褐色 10YR8/4	
57-4	41	加工段3 2層 土師器	甌	19.0				ケズリ	細かく砂を含む	良好	浅黄褐色 7.5YR	
57-5	41	加工段3 1層 土師器	甌	(21.3)				ケズリ、横ナデカ、 ハケ目	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	内: 灰褐色 10YR5/2 外: 口周部 7.5YR5/6	
57-6	41	加工段3 2層 土師器	甌	(20.7)				ケズリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を含む	良好	浅黄褐色 10YR8/4	57-7と同一個体
57-7	41	加工段3 2層 土師器	甌	(10.0)				ケズリ上げ、ハケ 目	1mm以下の砂粒子 (石英、肉厚など) を含む	良好	内: 浅黄褐色 7.5YR8/4 外: 黄褐色 10YR8/6 57-6と同一個 体、丸底	外変付着有り、 57-6と同一個 体、丸底
57-8	42	加工段3 1層 土師器	甌	(12.8)				ケズリ、ハケ後 ナデ	細砂粒子(石英など) を多く含む	良好	丹: あら 7.5YR7/6 外変面丹塗り の浅黄褐色 10YR8/3	外変面丹塗り
57-9	42	B4 加工段3 A-1 層	土師器	甌	(20.6)			ケズリ、ナデカ	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	10YR8/4	
57-10	42	B4 加工段3 水槽	高环(蓋)	(13.0)				ナデ、回転ナデ、 回転ヘラケズリ、 シ含む コシ前ナデ	1mm以下の砂粒子を少 し含む	良好	内: 灰褐色 N7/0 外: 灰白色 7.5Y7/1	
57-11	40	B4 加工段3 サ ブレ、B4 加 工段3南北サブ トレ、B4 加工 段3 A-1 層	水槽	蓋环(身)	(11.8)	(5.3)	(4.0)	回転ナデ、 ナデ、回転ナデ、 回転ナデ後ナデ、 コシ前ナデ	1mm以下の砂粒子を 若干含む	良好	灰白色 10Y6/1	
57-12	42	C4 加工段3 土	高环	(14.0)				ナデ、回転ナデ、 ナデ、回転ナデ、 回転ナデ後ナデ	0.5mm以下の砂 粒を若干含む	良好	内: 灰色 10Y5/1 外: 灰色 N5/0	
57-13	42	B4 加工段3 南 北サブトレ南, 加工段3 1層	水槽	环	(15.5)			回転ナデ、回転ナデ、 回転ナデ後ナデ	0.5mm以下の砂 粒を若干含む	良好	内: 灰色 10Y5/1 外: 灰色 7.5Y5/1	
57-14	42	加工段3 土師 器	甌	(32.4)				不明	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	良好	明灰褐色 10YR7/6 内面に黒斑付有り 外、外に黒斑	
57-15	42	加工段3 1層 土師器	甌	(12.4)				ケズリ、ハケ目	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	良好	丹: あら 7.5YR7/6 外: 7.5YR8/6 ~ にぶい黄褐色 10YR7/4	穿孔、孔径 0.7cm
58-1	43	B4 加工段3 A-1 層	土製品	土雞				ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	灰褐色 7.5YR4/2	表面に黒斑、長さ 3.8 × 幅 3.2 × 奥 3.2cm、孔径 0.7cm
58-2	42	加工段3 1層 土製品	土製支那	(11.0)				ナデ、ケズリ	2mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: 浅黄褐色 10YR6/2 外: ぶい黄褐色 10YR7/2	
58-3	42	加工段3 土製品	土製支那		13.6			ナデ	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	褐色 5YR6/6	非貫通孔あり、孔 径 1.6、奥行き 2.1 cm

辨別番号	閲覧番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	断土	焼成	色調	備考
58-4	41	加工段3Ⅰ層	土製品	移動式窯	(32.2)			ナデ、ケズリ 石英、長石など)	1.5mm以下の砂粒子 を多く含む	良好 10YR7/4	灰褐色	外面部に黒斑
59-1	42	加工段3Ⅱ層 B4-B1層、C2 包含層(黑褐色 土)	土製品	移動式窯 (27.2) (36.8)	37.8			細ナデ、ケズリ、 1mm以下の砂粒子 を多く含む ナデ、底面ナデ、 底地面ナデ (石英、長石、角閃 石など)をやや多く 含む	良好 10YR7/4 良好 10YR8/4	内:灰褐色 外:灰褐色	如草51(1層)、外面部 の背面に黒斑あり、 底内面、底部に上 部に焼付着	
61-1	40	B6・B7包含層、須恵器 C7南ベルト	土製品	鉢形土器 (17.3)				回転ナデ、ケズリ 石英、1mm以下の白砂 粒子を若干含む ナデ	良好	灰褐色 7.5Y6/1		
64-1	43	加工段4Ⅰ層	須恵器	高环 (縦) (12.3)				回転ナデ、ナデへ 1.5mm以下の少量の ラケズリ、司馬印 突帯 1条	良好 10YR7/1	灰褐色 5.5Y5/1		
64-2	42	加工段4Ⅱ層 色土	須恵器	蓋	14.1	つま み様 2.2cm	2.6	ナデ、三転ナデ、 少量の砂粒子を含む ナデ、ナデへ ナデへ	良好 10YR7/1 良好 10YR7/1	灰白色 7.5Y7/1	算盤玉状つまみ	
64-3	42	加工段4Ⅲ層 色土	須恵器	蓋	(14.8)			回転ナデ、ケズリ 2mm以下の砂粒子を 含む ナデ	良好 10YR7/1	灰白色 7.5Y8/1	算盤玉状つまみ のくもの	
64-4	43	加工段4Ⅳ層 色土	須恵器	蓋	(11.0)			ナデ、回転ナデ、 0.5mm以下の白砂粒 子を若干含む ナデ調整	良好 10YR7/1	灰白色 7.5Y7/1		
64-5	43	加工段4Ⅴ層 土器	須恵器	腰				ケズリ 2mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好	褐色 7.5YR7/6	口縁内面に朱付 着力	
64-6	43	加工段4Ⅵ層	土師器	甕	(18.0)			細ナデ、粗粒なナ デ、ケズリ、ハケ 砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	褐色 7.5YR6/6		
64-7	43	加工段4Ⅶ層	土師器	甕				ナデナ 1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好 10YR7/4	64-8と同一個体 カ		
64-8	43	加工段4Ⅷ層 (黑褐色土)	土師器	腰				ケズリカ、ナデ 1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)をやや多く 含む	良好 10YR7/4	灰褐色 0.7cm、64-7と 同一個体カ	円形の穿孔、孔径 0.7cm、64-7と同 一個体カ	
64-9	43	加工段4Ⅸ層	土製品	移動式窯	(38.8)			ケズリカ、ナデ 1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好 10YR7/6 良好 10YR8/4	灰褐色 5.5Y5/3	平底	
65-1	44	加工段6Ⅰ層	須恵器	底部 土器	(5.2)			不明 2mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好 10YR7/6 良好 10YR6/6	灰褐色 5.5Y5/3		
65-2	44	加工段6Ⅱ層	土師器	高环				ハケ目カ 0.5mm以下の砂粒子 を多く含む	良好 10YR7/4	灰褐色		
65-3	43	加工段6Ⅲ層	土師器	高环	10.0			粗粒なナデ 1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好 10YR8/3	灰褐色	外面部僅僅り	
65-4	44	加工段6Ⅳ層	土師器	直口甕	(10.7)			不明 0.5mm以下の砂粒子 を多く含む	良好 10YR7/4	灰褐色		
65-5	44	加工段6Ⅴ層	土師器	甕	(18.6)			ナデ、ケズリ 粗砂粒子 (石英な ど)をやや少含む	良好 10YR8/4	灰褐色 5.5Y5/4	外:灰褐色 0.5cm、64-4と 同一個体カ	
65-6	42	加工段6Ⅵ層	土製品	土製支脚	(11.0)			ナデ 1mm以下の砂粒子 を多く含む	良好 10YR7/3	浅黄色 2.5Y7/3	現存高 11.2cm、現存 幅 9.85cm	
66-1	44	加工段6Ⅶ層	須恵器	甕				同心円タキ目、 砂粒子を物と含ま ず	良好 10YR7/1	灰褐色 5.5Y1/1	自然 輪:暗オリーブ色 7.5Y4/5	
66-2	44	加工段6Ⅷ層	須恵器	甕				同心円タキ目、 砂粒子を物と含ま ず	良好 10YR7/1	灰褐色 5.5Y1/1	自然 輪:暗オリーブ色 7.5Y4/3	
66-3	44	加工段6Ⅸ層	須恵器	甕				同心円タキ目、 砂粒子を物と含ま ず	良好 10YR7/1	灰褐色 5.5Y1/1	自然 輪:暗オリーブ色 7.5Y4/4	
68-1	44	D4 加工段 7-Pd01、D4 包 含層 (黑褐色土)	土製品	移動式窯				ケズリ、横ナデ、 粗粒なナデ 1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	良好 10YR8/4 良好 10YR6/3 良好 10YR8/3	灰褐色 5.5Y5/2	内:灰褐色 5.5Y5/2	
70-1	45	加工段8Ⅰ層 (原)	土師器	高环				ミガキカ 無砂粒子 (石英、長 石など)を含む	不良 10YR7/4 良好 10YR7/8 良好 10YR8/4	灰褐色 5.5Y5/0	一重山繩、段階形 (13.0) cm	
70-2	45	加工段8Ⅱ層	須恵器	高环 (縦) (11.0)				回転ナデ、沈線、 明瞭な段	良好 10YR7/4	灰褐色 5.5Y5/0	端部に沈線 色N4/0	
70-3	45	C4 加工段8Ⅲ層	土師器	甕				ケズリ 1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	中や 不良 10YR7/4 良好 10YR7/4	灰褐色 5.5Y5/0	内:灰褐色 5.5Y5/0	
70-4	45	C4 加工段8Ⅳ層	土師器	甕				把手部分:ナデ (石英、長石、角閃 石など)を多く含む	良好 10YR8/4	灰褐色 5.5Y5/0	体部 (20.0) cm	
70-5	45	C4 加工段8Ⅴ層	土製品	土製支脚				ナデ 1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好 10YR7/6	灰褐色 5.5Y5/0	非貫通孔残存 い裏側 10YR7/3	

辨別 番号	図版 番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	断土	焼成	色調	備考
72-1	45	加工段9 墓土	須恵器	壺(身)	(10.7)			回転ナデ	衝、0.5mm以下の砂粒を若干含む	良好	オリーブ灰	2.5GY6/1
72-2	43,	加工段9 墓土	須恵器	高台付壺	9.0			ナデ、回転ナデ	衝、1mm以下の砂粒を若干含む	良好	内:灰白色 2.5Y7/1 外:灰黄色 5Y6/1	内面研磨、軸用規 外:ヘラ記号「V」 字
72-3	45	加工段9 墓土	須恵器	壺(口)				回転ナデ、当て具 底、0.5mm以下の砂 粒を若干含む	良好	内:黄灰色 2.5Y5/1 外:灰色 N5/0		半径4.0mm 半径5.3cm
72-4	43	加工段9 1 様	土師器	高杯	(10.3)			不明	0.5mm以下の砂粒を 多く含む	やや	浅黄褐色 7.5YR8/6	外面研磨、脚接 触部 4.0cm
72-5	45	加工段9 1 様	土師器	高杯	(12.6)			粗面ナデ、ハケ 目	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	脚部部 [内] 棕色 7.5YR6/[外] 棕色 5YR6/6	
72-6	45	加工段9 墓土	土師器	壺	(19.5)			水引模ナデ、ケズ リ	微砂粒子(石英、長 石、角閃石など)を 多く含む	良好	棕褐色 7.5YR7/6～浅黃 色 10YR8/4	
72-7	45	加工段9 1 様	土製品	手捏ね土	(3.2)			脚面压痕	0.5mm以下の砂粒を 含む	良好	浅黄色 2.5Y7/3	
72-8	45	加工段9 1 様	土製品	土製支脚				不明	1mm以下の砂粒子 (石英、角閃石など) を多く含む	良好	棕色 7.5YR7/6	現存 幅 7.7cm、貫通孔 残存
72-9	45	加工段9 1 様	土製品	土製支脚	(12.2)			不明	1mm以下の砂粒子 (石英、石など) をやや多く含む	やや	にぶい褐色 7.5YR7/4	
72-10	45	加工段9 1 様	土製品	移動式壺				ナデ、擦ナデ、 クリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など)をやや多く 含む	良好	にぶい褐色 7.5YR7/4	底面は黒斑
74-1	46	SD01 墓土, H25 T1	須恵器	壺	(16.8)	つま み径 3.1cm	2.1	ナデ、回転ナデ、 ヘラ切り後ナデ	若干の砂粒を含む	良好	灰色 N6/0	算盤玉状つまみ
74-2	46	H25 T1 黒灰色 土, H25 T1	須恵器	壺	17.4	つま み径 2.9cm	2.0	糊ナデ(糊土ヒ モ巻き土)	若干の砂粒を含む	良好	灰白色 7.5Y7/1	算盤玉状つまみ
74-3	46	SD01 H25 T1	須恵器	壺	16.9			ナデ、回転ナデ、 回転ナデ後ナデ、 干含む 最大5mm の糊をヘラケリ後 ナデ	2mm以下の砂粒を若 千含む 小石も觸感される。	良好	灰色 7.5Y6/1	火被り、自然結付 着
74-4	46	SD01	須恵器	壺	17.7	つま み径 3.6cm	3.7	ナデ、糊ナデ、 ヘラ切り後ナデ	若干の砂粒を含む	良好	灰白色 2.5Y7/1	算盤玉状つまみ
74-5	46	SD01 墓土	須恵器	壺	13.0	10.2	4.7	ナデ、回転ナデ後 ナデ、ヘラ切り後 ナデ	2mm以下の砂粒を多 く含む	良好	浅黄色 2.5Y8/3	
74-6	45	SD01	須恵器	高台付壺	(18.2)	(13.8)	(2.7)	回転ナデ、高台點 り付け後ナデ	0.5mm以下の白砂粒 を少し含む	やや	淡黄色 2.5Y8/3 不良	
74-7	45	H25 T1 黒灰色 土	須恵器	高台付壺	(18.8)	(14.4)	(2.9)	回転ナデ	1mm以下の砂粒を若干 含む	良好	浅黄褐色 10YR8/4	
76-1	47	SD02	土師器	高杯	(18.2)			ミガキ	糊かし砂を含む	良好	浅黄褐色 10YR	円錐形
76-2	47	SD02	土師器	高杯				ナデ、絞り継、ハ ケル、ミガキ	糊かし砂を若干含 む	良好	浅黄色 2.5Y	円錐形
76-3	47	SD02	土師器	高杯				糊ナデ、絞り継	微砂粒子(石英な ど)を少し含む	良好	内:にぶい褐色 7.5YR 外:灰褐色 5YR6/2 ～にぶい褐色 5YR6/6	
76-4	47	SD02	土師器	壺	(19.3)			ナデ、糊ナデ、 糊砂粒子を少し含 むナデ、ハケル	良好	褐色 7.5YR7/6		
76-5	47	SD02	土師器	壺				ナデ、ケズリ、 ミガキナデ	1mm以下の砂粒子を 少しあむ	良好	内: 棕 7.5YR7/6～ 5YR7/4 外:にぶい褐色 5YR7/4～深褐色 10YR6/4	
78-1	46	SD04	須恵器	壺	13.9	つま み径 2.5cm	1.9	ナデ調整、回転ナ デ、ヘラ切り後ナ デ	砂粒を含む	良好	内:灰 N5/0 外:灰色 N6/0	算盤玉状つまみ
81-1	47	Pt25	土師器	壺	(15.0)			ケズリ上げ	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	内:にぶい褐色 10YR7/4 外:にぶい褐色 5YR7/4～深褐色 10YR8/4	外に黒斑あり
81-2	47	Pt26 墓土	土師器	壺	(21.2)			ナデ、糊ナデ、 クリ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好	内:にぶい褐色 7.5YR6/4 外:にぶい褐色 7.5YR7/4	
82-1	61	SDX01、D3 包含 層(青灰色土)	須恵器	壺(身)	(12.0)	6.5	(4.0)	回転ナデ、ヘラ切 り、ヘラ切り後ヘ ラケズリ	1mm以下の砂粒子を若干 含む	やや	灰白色 7.5Y8/1 不良	内面全面的に厚塗 (使用歴)
82-2	61	D3 SDX01 周辺	土師器	壺	(11.7)			ナデ、ヘラケズリ	糊砂粒子(石英、長 石など)を少し含む	良好	丹:赤色 10R4/8 黒:深褐色 7.5YR7/4 ～浅褐色 10YR8/4	内外面丹塗り
82-3	61	D3 SDX01	土師器	高杯	(12.6)			回転ナデ、ナデ	1mm以下の砂粒子(石 英、長石など)を少 少含む	良好	内:丹(赤) 10R4/8 外:黒:深褐色 7.5YR7/4 ～浅褐色 10YR8/4 外:丹(赤) 10R4/8	内外面丹塗り
83-1	47	E3 包含層(黑 青灰色土)	弗生土器	壺	(16.8)			ナデ、糊ナデ、 糊砂粒子(石英、角 閃石など)を含む	良好	内:浅褐色 2.5Y5/1 外:灰白色 10YR8/2	内面に黒斑あり	

辨別番号	開発番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	断土	焼成	色調	備考
83-2	47	E3 包含層 (黒 青灰色土)	弥生土器	甕	(18.0)			ナデ、ヘラ状工具 によるナデ跡、傾 石(石英、長石など) の入った砂粒を含む	1mm以下の砂粒子 によるナデ跡、傾 石(石英、長石など) の入った砂粒を含む	良好 10YR7/2	外山鰐部に保付着	
83-3	47	E3 包含層 (青 灰白色土)	弥生土器	甕か甕カ 土器				ナデ、横ナデ、ケ ズリ、ミガキ跡 クシ衝撃工具によ るやや多く含む 礫突起	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好 2.5YS6/3 外にぶい黄褐色 10YR7/2	内にぶい黄褐色 外にぶい黄褐色	
83-4	49	D3・E3 包含層 (青灰色土)	弥生土器	甕	25.0	18.0	(25.5)	ナデ、横ナデ、ケ ズリ、ミガキ跡 クシ衝撃工具によ るやや多く含む 礫突起	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	良好 10YR8/2~ 灰黄色 2.5Y5/1	横ナデの施用具は 貝殻	
83-5	47	D3 包含層 (青 灰白色土)	土師器	直口甕	(14.8)			ナデ、横ナデ、ケ ズリ、ミガキ跡 のナデ消し、鏡子 テ後削面に削痕 文、横ナデ、ケズ リ、底面までケズ リ	1mm以下の砂粒子 を含む	良好 10YR6/3~ 暗灰黄色 2.5Y5/2	外山に保付着、鉢 11後端がハゲ	
83-6	47	D3 包含層 (黒 青灰色土), E3 器 包含層 (青灰色 土)	古式土師	甕	(15.3)			ナデ、横ナデ、既 包含層 (石英、長 石、角閃石など) を 含む	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好 10YR7/2	既包含層と同様 の色調	
83-7	48	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	甕	(19.5)			ナデ、ケズリ、ハ ケ目、1.5mm以下の 砂粒子を多く含む	良好 内:灰白~黃灰色 2.5TT7/1 ~ 4/1 外:灰白~黃灰色 2.5TT7/1 ~ 6/1	83-8と同一個体か		
83-8	48	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	甕	9.0			ケズリ、ハケ目、 粗頭削痕	1.5mm以下の砂粒子 を多く含む	良好 黃灰色 2.5Y5/1	全体的に保付着、 83-7と同一個体か	
83-9	48	E3 包含層 (青 灰白色土)	土師器	甕	(17.5)			ナデ、横ナデ、ハ ケ目、ケズリ、 及び若干の4.5mm大 きな砂粒子を含む	良好 内:浅黃褐色 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	外山鰐部の埴ら み範囲と体部中央 付近に保付着		
83-10	48	D3 包含層 (黒 青灰土)	土師器	甕	(15.6)			ハケ目後ナデ消 し、横ナデ、ケ ズリ、ミガキ跡 及び若干の金雲母 11後端がナデ、ハケ を含む	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を少し含む	良好 内:灰黄色 2.5Y7/2 外:灰白色 2.5Y8/2	外山に保付着	
83-11	49	D3 包含層 (青 灰白色土)	土師器	甕	(18.3)		(22.8)	横ナデ、型削し 1mm以下の砂粒子 ナデ、ハケ目、(石英など) を多く ケズリ	良好 内:浅黃褐色 10YR8/3 外:浅黃褐色 10YR8/4	丸底		
84-1	48	E3 包含層 (黒 青灰色土), D3 包含層 (青灰色 土)	土師器	甕	(18.2)			ナデ、横ナデ、ケ ズリ、石英など) を少し含む 横ナデ、既ハケ目 後横ナデ、横ハケ 目、横ハケ目	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) 及び若干の 砂粒子を含む	良好 内:灰黄色 2.5Y7/2 外:灰白色 2.5Y8/2	外山に保付着、内面 口縁部と下半部に 付着物あり、84-7 と同一個体か	
84-2	48	E3 包含層 (黒 青灰色土)	土師器	甕				ケズリ、ハケ目、 粗頭削痕	既包含層 (石英、長 石など) 及び若干的 の砂粒子を含む	良好 内:灰黄色 2.5Y7/2 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	外山に保付着、内 面に灰褐色の付着 物あり	
84-3	46	D3 包含層 (青 灰白色土)	土師器	甕	(15.3)			ケズリ、ナデ、ハ ケ目後ナデ、既 ハケ目、 後穿孔、ヘラ引き	1mm以下の砂粒子 を多く含む	良好 内:浅黃褐色 10YR8/4 外:浅黃褐色 10YR8/3	ヘラ引き ×	
84-4	47	D3 包含層 (青 灰白色土)	土師器	甕	(18.3)			ナデ、横ナデ、既 ハケ目、既ハケ 目、横ハケ目 後横ハケ目、横 ハケ目、既ハケ 目、既ハケ目	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好 内:灰黄色 2.5Y5/2 外:灰黄色 2.5Y6/2 10YR6/2 ~ 5/2	外山口縁部、側脚 以下に保付着	
84-5	46	E3 包含層 (黒 青灰色土)	土師器	甕	(16.2)			ナデ、横ナデ、横 1mm以下の砂粒子 ハケ目後ナデ消 し、ケズリ、既 ハケ目、既ハケ 目、横ハケ目 既ハケ目、既ハケ 目、既ハケ目	1mm以下の砂粒子 (石英など) を含む	良好 灰黄色 2.5Y7/2	外山斜面以外に保 付着	
84-6	48	E3 包含層 (黒 青灰色土)	土師器	甕	4.0			ケズリ、ハケ目、 粗頭削えナデ、既 ハケ目	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	良好 内:灰黄色 10YR6/2 外にぶ い黄褐色 10YR7/2	外山に保付着、内 面底面附近に付着 物あり、84-5と同 一箇体か	
84-7	49	D3・E3 包含層 (黒青灰色土)	土師器	甕	(17.4)			ナデ、横ナデ、既 ハケ目、既ハケ 目、既ハケ目、横 ハケ目、既ハケ 目、既ハケ目	1mm以下の砂粒子 (石英など) を含む	良好 内:灰黄色 2.5Y7/2 外:浅黃褐色 2.5Y8/3	外山斜面以外に保 付着、内面の一部 に付着物あり、 84-1と同一箇体か	
84-8	49	D3 包含層 (黒 青灰色土), E3 包含層 (黑青灰色 土)	土師器	甕	(16.6)			ナデ、ハケ目後ナ デ、ケズリ	1mm以下の砂粒子 を多く含む	良好 内:灰黄色 2.5Y7/2 外:にぶい黄褐色 10YR7/2		
84-9	49	E3 (37例) (黒 青灰色土)	土師器	甕	(15.6)			ナデ、横ナデ、ハ ケ目後ナデ、既 ハケ目、既ハケ 目、既ハケ目、横 ハケ目、既ハケ 目	1mm以下の砂粒子 (石英など) を含む	良好 内:灰白色 10YR8/2		
84-10	49	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	甕	(17.6)			ナデ、ケズリ、横 1mm以下の砂粒子 調頭窓	既包含層 (石英、長 石など) をやや多く含む	良好 内:浅黃褐色 7.5YR8/3 外山口縁部に出現 10YR7/2		
85-1	49	D3 包含層 (青 灰白色土)	土師器	甕	(17.8)			ナデ、ハケ目後ナ デ	0.5mm以下の微細 砂粒子を含む	良好 灰白色 2.5Y8/2		

辨別番号	図版番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
85-2	51	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	甕	(19.0)			ナデ、指ナデ、糊 1mm以下の砂粒子 のみナデ、ハケ目 (石英など) を含む 後壁に糊、蓋に糊 後内壁糊ハバ口沿 糊ハケ目、糊ナ 目ケズリ、ケズリ、 ケズリ上げ	良好	内: 淡黄褐色 外: 7.5YR8/4 7.5YR7/3	外生焼付着、内面 下位に付着物あり	
85-3	50	C2 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕				ナデ、糊ナデ、 ケズリ	2~3mm以下の砂粒子 を含む	良好	橙色 7.5YR6/6	
85-4	50	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(17.2)			ナデ、糊ナデ、ハ ケ目、糊ナデ後糊 や多く含む	良好	内: にぶい黄褐色 外: 10YR7/3 10YR7/3~10YR8/2	外面部にふきこぼれあり	
85-5	50	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(15.2)			ナデ、糊ナデ、ハ ケ目、糊ナデ後糊 所々ナデ消し、ケ ズリカ	良好	内: 灰色 10YR8/2~保水着 10YR8/6 外: 10YR7/3 7.5YR8/2 ~にぶい褐色	保水着	
85-6	49	E3 包含層 (黒 青灰色)	土師器	甕	(16.3)			ナデ、糊ナデ、糊 ハケ目後糊ナデ ハケ目、ケズリ やや多く含む	良好	内: 黄褐色 2.5YR7/2 外: 残片化、にぶい褐色 7.5YR7/4 外: 灰白色 2.5YR1	口縁部内外面、外 面部以外保水着 内面部丹塗り有	
85-7	50	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(15.4)			ナデ、糊ナデ、糊 1mm以下の砂粒子 ハケ目後糊ナデ ハケ目後ナデ消し、ケ ズリ	良好	黄褐色 2.5YR4/1	口縁部外主要保 着有	
85-8	50	E3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(17.5)			糊ナデ、ハケ目、 ハケ目後糊ナデ、ケ ズリ	良好	内: にぶい黄褐色 1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を含む	10YR7/4 10YR6/3	
85-9	50	E3 包含層 (茶 褐色土)	土師器	甕	(25.8)			糊ナデ、ハケ目、 ハケ目後ナデ消し、 ケズリ	良好	にぶい黄褐色 1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など) をやや多く 含む	10YR7/3	
85-10	51	D2・D3 包含層 (青灰色土)	土師器	甕	(22.2)			ナデ、糊ナデ、糊 ケ目、ケズリ	良好	内: にぶい黄褐色 (石英、角閃石など) を含む	内面部付着有 り、削痕大径以 下に被熱斑	
86-1	50	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	甕				ナデ	0.5mm以下の砂粒子 を若干含む	良好	内: 灰色 2.5YR7/2~ 灰白色 2.5YR8/2 外: にぶい黄褐色 10YR7/2	B6-2・3と同一個 体
86-2	50	D3 包含層 (茶 褐色・青灰色), E3 包含層 (黑 青灰色)	土師器	甕				ハケ目、ケズリ	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: 淡黄色 2.5YR7/3 外: 淡黄色 2.5YR6/2	外生保付着、 B6-1・2と同一個 体
86-3	50	E3 包含層 (黒 青灰色土)	土師器	甕				ケズリ後ナデ、ハ ケ目、指頭痕	1mm程度の砂粒子を多 く含む	良好	淡黄色 10YR8/3	外生保付着、 B6-1・2と同一個 体
86-4	51	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(26.6)			ナデ、ハケ目、ケ ズリ後ナデ	1mm以下の砂粒子を含 む	良好	内: 淡黄褐色 10YR8/3 外: にぶい黄褐色 10YR7/3	口縁部内外面保 着、外面部、口縁部 内面部被熱斑色、 B6-5と同一個個体
86-5	51	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(13.0)			ナデ、ハケ目後ナ デ、ケズリ	1mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: にぶい黄褐色 10YR7/4 外: 淡黄色 10YR8/3	穿孔、孔径 0.6cm、 内面部保付着、 B6-4と同一個個体
86-6	51	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(13.0)			ナデ、ハケメカ、2mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: にぶい褐色 7.5YR7/3	穿孔、孔径 0.8cm	
86-7	49	D3・E3 包含層 (青灰色土), D3 SNK1 部 包含層 1層	土師器	甕	(34.5)			糊ナデ、ナデ、ケ スリ、ナデ、ハケ 目、タキナデ	1mm以下の砂粒子 を含む	良好	内: 淡褐色 2.5YR8/3 外: にぶい褐色 10YR8/3~褐色 7.5YR7/6	把手上方・口縁部 に保付着
86-8	51	E3 包含層 (茶 褐色土)	土師器	甕	(11.0)			ケズリ後一部ナ デ、ハケ目後ナ デカ	1.5mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: 淡黃褐色 10YR8/3 外: にぶい黃褐色 10YR7/3	穿孔
86-9	51	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕	(11.1)			ナデ、ケズリ後ナ デ	3mm以下の砂粒子を含 む	良好	内: 淡黃褐色 10YR8/3 外: にぶい黃褐色 10YR7/3	
86-10	51	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕				ナデ	2mm以下の砂粒子を多 く含む	良好	内: にぶい褐色 7.5YR7/4 外: 灰白色 2.5YR8/2	把手先端の下に 黒斑あり
86-11	51	C2 包含層 (青 灰色土)	土師器	甕				ナデ、若いケ ズリ	2mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好	内: にぶい褐色 7.5YR7/4 外: 淡黄色 7.5YR8/4	外面部に黒斑あり
87-1	50	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	小型器台	(10.7)	14.3	87	ミガキ、ナデ、ケ スリ、ミガキ、ナ デ (石英、角閃石など) や粗粒なミガキを含む	良好	内面 [10YR8/3] 灰白色 5YR8/2 7.5YR7/6 [新部] 灰 褐色 2.5YR7/2 外面 [10YR8/3] 灰 褐色 2.5YR7/2 ~にぶい褐色 7.5YR7/4	筒部径 4.1cm	

辨別番号	開発番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	歯土	焼成	色調	備考
87-2	50	E3・D3 包含層 (青灰色土)	土師器	环	(13.4)			ナデ、ケズリ後ナ デ	1mm以下の砂粒を多 く含む	良好	内: 淡黄色 10YR8/3 外: にぶい黄褐色 10YR8/3	外面部丹張り
87-3	52	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	环	(14.1)	4.5	6.1	ハケ日状工具による 砂粒粒子(石英、角 石)を含むナデ、ケズリ 等(長石など)を やや多く含む	良好	内: [1透] 黄褐色 2.5YR8/6、黒褐色 5YR2/1 黄褐色 外: 5.5YR8/3~灰白 2.5YR7/1~灰色 5YR7/1 5.5YR7/8[灰 薫脂] 淡 黃色 2.5YR8/3~橙 色 2.5YR7/6	内面部墨引り、外面部 丹張り、内外面部 熱あら	
87-4	52	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	高环				ナデ、回転ナデ	長石、石英を多く含 む 1mm以下の砂粒を 若干含む	良好	内: 黄色 2.5YR7/2 外: 5.5YR8/3	脚接続部 (3.6) cm
87-5	52	E3 包含層 (青 灰色土)	土師器	高环	(16.6)			ミガキ、ハケ日後 ナデ	1mm以下の砂粒を 若干含む	良好	内: 淡黃褐色 2.5YR8/3 外: 淡黃褐色 10YR8/3	外面部墨引
87-6	52	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	有段高环				部ナデ、模ナデ、 形織なミガキ、ハ ケ目	1mm以下の砂粒子 をやや多く含む	良好	内: にぶい黄褐色 2.5YR7/2 外: にぶい褐 7.5YR7/2~灰黃褐色 3.4cm、外面部墨 10.9cm	外面部丹張り、外面部 墨引、内面部 付着、脚部墨 熱あら
87-7	52	D3 包含層 (茶 褐色土~青灰色 土)	土師器	高环				ナデ、擦方向のハ ケ、砂粒は極小 ケ目	1mm以下の砂粒を含 む	良好	内: にぶい褐色 5YR7/4 外: にぶい褐 7.5YR7/4~橙色 5YR7/6	外面部丹張り
87-8	52	D3 包含層 (茶 褐色土~青灰色 土)、E3 包含層 (黑褐色土)	土師器	高环	(16.2)			ナデ、横ナデ、ハ ケ目	1mm以下の砂粒を含 む	良好	内: 黄褐色 2.5Y7/2 外: 丹張り	外面部丹張り
87-9	52	E3・D3 包含層 (青灰色土)	土師器	高环				ナデ、ハケ目	黒、少量の1mm以下 の砂粒を含む	良好	内: にぶい黄褐色 10YR6/3	内面部ハ記号カ (×)、印状のキズ
87-10	52	D3・E3 (41含) (青灰色土)	土師器	高环	(16.2)			ナデ、ハケ日後 ナデ、ハ ケ目後ナデ、ハ ケ目後ナデ、 ズリ、絞り直	1mm以下の砂粒を多 く含む	良好	内: にぶい黄褐色 10YR7/3	脚接続部 (3.4) cm
87-11	54	B1 包含層 (茶 ~黒褐色土)	土師器	高环	(21.1)			ナデ、ハケ目、ハ ケ目後ナデ、ハ ケミガキ	1mm以下の砂粒を多 く含む	良好	内: 棕色 7.5YR6/6 外: 棕色 5YR6/6	
87-12	52	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	高环	(20.2)	12.2	13.0	ハケ日、絞り直、 ミガキ、ケズリ	1.5mm以下の砂粒を 多く含む	良好	内: 黄褐色 2.5Y7/3	
87-13	53	E3 包含層 (青 灰色土)	土師器	高环				ナデ、模ナデ、模 砂粒子(石英、長 石)及び若干の 模ミガキ	1mmの大砂粒子を含 む	良好	脚部墨 4.5cm	
87-14	53	D3 包含層 (青 灰色土)	土師器	高环				ナデ、絞り直、ハ ケ目、ケズリ	0.5mm以下の白 砂粒を含む	良好	内: 黄褐色 2.5YR8/3 外: にぶい橙色 2.5YR7/2	円形の透かし (3 方向)、孔径 1.2cm、 脚接続部 4.0cm
87-15	53	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	高环				ナデ、ナデ後ナ デ、枝ナデ	1.5mm以下の砂 粒を含む	良好	内: 淡黃褐色 2.5YR8/3 外: にぶい黄褐色 10YR7/3	円形の透かし (3 方向)、孔径 0.9cm
87-16	53	E3 包含層 (青 灰色土)	土師器	高环	11.4			模ナデ、絞り直後	1mm以下の砂粒を若 干含む	良好	内: 灰白色 10YR8/2 外: 淡黃褐色 7.5YR8/6 方向: 0.8~ 0.9cm	円形の透かし (3 方向)、孔径 0.8~ 0.9cm、脚接続部 3.1 cm
87-17	53	E3 包含層 (青 灰色土)	土師器	高环	12.2			ナデ、ハケ目、ハ ケ目後ナデの分 割、ケズリ	1mm以下の砂粒子 を含む	良好	内: 灰黄色 2.5Y7/2 外: 灰白色 2.5Y8/2 孔径 0.9~1.0cm	円形の透かし 2.5cm
87-18	53	D3 包含層 (黑 青灰色土)	土師器	高环	11.3			模ナデ、模砂粒子 (石英、長石)、 模ミガキ、模ハケ 目、模ナデを含む 後模ナデ、ケズリ	良好	内: 灰黄色 2.5Y7/2	脚部墨内面に黒斑 あり	
87-19	53	B2 包含層	土師器	高环	(13.8)			ナデカ	1mm以下の砂粒を含 む	良好	内: 明赤褐色 5YR5/6 外面部墨引 輪郭: 淡黃褐色 10YR8/4	外面部丹張り
87-20	53	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	低脚环	(9.1)			ハケ目、ハケ日後 ナデ等ナデ消し、 前 ド)を含む	1.5mm以下の砂粒子 を含む	良好	内: にぶい黄褐色 10YR7/2	接合部墨 4.6cm
87-21	53	B3 包含層 (青 褐色土)	土師器	低脚环	(9.3)			ナデ、擦頭直彫、 ナデ消し	1.5mm以下の砂粒を 含む	良好	内: 灰白色 2.5Y8/2 外面部墨引内面 熱あら	
87-22	52	D3 包含層 (黑 褐色土)	土師器	低脚环	(16.4)	11.0	11.0	ナデ、ハケ目後 ナデ、模ナデ、 模ナデ、ナデ消し 等ナデ	1.5mm以下の砂粒子 を含む	良好	内: 灰白色 2.5Y8/2 外面部墨引内面 熱あら	
87-23	54	E3 包含層 (黑 褐色土)	土師器	小型丸底 壺	(7.0)		(8.9)	ナデ、ハケ目、ハ ケメ後ナデ消し、 ケズリ	0.5mm以下の砂 粒を若干含む	良好	内: 灰白色 SYR8/1 外: 灰白色 2.5Y8/2	
87-24	52	E3 包含層 (黑 褐色土)	土師器	小型丸底 壺				ナデ、模ナデ、 模砂粒子(石英、 長石、角閃 石)、模ミガキ、 模ナデ、ナデ消 し、模ミガキナ ドナデ	良好	内: 淡黃褐色 2.5Y8/2 外面部墨引下に黒 斑、模黃褐色 2.5Y5/2 孔径: 8.6cm		
87-25	52	D3・E3 包含層 (青灰色土)	土師器	小型壺	(10.0)			ケズリカ、ミガ 1mm以下の砂粒子 (石英など)を含む カ	良好	内: 淡黃褐色 10YR8/3 外: 棕色 5YR6/6	外面部、内面部 輪郭墨引 丹張り、外面部一部 に模白粉	

辨別	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	形態・手法の特徴	出土	焼成	色調	備考
辨別番号	器種番号										
88-1	55	C2 包含層 (茶) 褐色土	須恵器	高杯 (蓋)			回転ナデ、回転ナデ、密、1~2mmの白砂 デ後ナデ、回転ナデ、白砂を少量、0.5mm含 ラクアツリ、比較2~4の砂粒を若干含む 等	良好	内: 灰白色 N7/0 外: 灰色 N5/0		
88-2	55	C3 包含層 (黒) 褐色土	須恵器	高杯 (蓋) (14.5)			ナデ、回転ナデ、1mm以下の砂粒を若干含む 回転カラケズリ、白含む	良好	内: 灰色 N5/0 外: 灰色 5YR5/1		
88-3	55	C2・D2 包含層	須恵器	高杯 (蓋) (14.8)			(4.2) 回転ナデ、回転ナデ、1mm以下の砂粒を若干含む ヘラカム	良好	内: 灰色 N5/0 外: 灰色 N6/0		
88-4	55	D3 台次削 (茶) 褐色土	須恵器	高			回転ナデ、斜面へ 2mm以下の砂粒を若干含む ラクアツリ、ヘラカム	良好	内: 灰色 N5/0 外: 灰色 N4/0	單板、転用板瓦	
88-5	55	D3 包含層 (茶) 褐色土	須恵器	高 (16.4)			回転ナデ、密、1mm以下の砂粒を若干含む	良好	内: 灰色 N6/1 外: 灰色 N5/0	算盤玉状つまみの つくもの	
88-6	55	D4 包含層 (黒) 褐色土	須恵器	高杯 (身)			回転ナデ、回転ナデ、0.5mm以下の砂粒を若干含む ラクアツリ、口端部	良好	灰白色 N8/0		
88-7	53	D3 台次削 (茶) 褐色土、D3 包 含層 (青灰土)	須恵器	高杯 (身) (10.9) (7.8)			ナデ、回転ナデ、密、0.5mm以下の砂粒を若干含む 回転カラケズリ	良好	内: 灰白色 N7/0 外: 灰色 N6/1		
88-8	55	D3 包含層 (青) 褐色土	須恵器	高杯 (身) (12.5)			回転ナデ、密、0.5mm以下の砂粒を若干含む	良好	内: 灰白色 N7/0 外: 灰色 N6/1	灰被り	
88-9	53	B2・C2・D2 (茶) B2時、C2 包含 層 (青灰土)、 B2 (青灰土)、 B2 (褐色土)、 B2 化 食剤 (青灰褐色 土)	須恵器	高杯 (身) (10.8) 5.0			(4.5) 回転ナデ、回転ナデ、密、0.5mm以下の砂粒を若干含む ラクアツリ、ヘラカム	良好	内: 雨灰白色 N8/0 外: 灰白色 N7/0		
88-10	54	D3・E3 包含層	須恵器	高杯 (身) (12.2) (6.5)			(4.9) 回転ナデ、回転ナデ、密、0.5mm以下の砂粒を若干含む ラクアツリ、ヘラカム	良好	灰白色 N8/0		
88-11	53	D3・E3 包含層 (青 褐色土)	須恵器	高杯 (身) (13.0) (9.6)			(4.7) 回転ナデ、カキ目、密、1mm以下の砂粒を若干含む リ後ナデ、回転ナデ	やや不良	内: 灰白色 N8/0 外: 灰色 5Y5/1 ~ 灰色 N5/0		
88-12	54	D3 包含層 (青) 褐色土	須恵器	高杯 (身) 11.8 7.0			4.4 回転ナデ、回転ナデ、1.5mm以下の砂粒を若干含む ヘラカム	良好	内: 灰白色 N7/0 外: 黄褐色 5Y6/1	自然釉	
88-13	55	D3・E3 包含層	須恵器	楕 (把手) (8.5)			全面はミガキ (茶褐色土)、 全面はミガキ (青褐色土)	良好	外: 雨灰白色 N3/0	自然釉付着 石など) を含む	
88-14	55	D3・E3 (火炎削)	須恵器	楕 (8.5)			回転ナデ、ミガキ、回転ナデ、密 カキ、回転ヘラカムなどを含む	良好	内: 灰色 N4/0 外: 雨灰白色 N3/0	自然釉付着、回輪 文2条、大小の凸 窓が内側に2段、台 付か、把手付か	
88-15	55	D3 包含層 (茶) 褐色土	須恵器	高台付坏 (8.8)			ナデ、回転ナデ、0.5mm以下の白砂粒を多く含む ヘアカツリ	良好	内: 灰色 N6/1 外: 灰色 N7/0		
88-16	55	E3 包含層 (青) 褐色土	須恵器	高台付坏 (9.1)			回転ナデ、回転ナデ、2mm以下の白砂粒を若干含む ヘラカム	良好	内: 雨灰白色 SP8/1 外: 青灰色 5Y5/1	転用板瓦、灰被り、 見込み部断面	
88-17	54	D3・E3・D3 包 含層 (茶褐色 土)、D3 包含層 (青褐色土)	須恵器	高台付坏 (17.7) 11.9 (6.6)			ナデ、回転ナデ、密、0.5mm以下の白砂粒を含む 高台付坏側面は砂粒を含む	良好	内: 灰色 N7/0 外: 灰色 N6/1		
88-18	55	D3 包含層 (茶) 褐色土	須恵器	楕 (10.9)			回転ナデ、カキ目、密 回転ナデ後側削痕	良好	内: 灰白色 2.5Y7/1 外: 灰色 7.2Y6/1		
88-19	55	D3 包含層 (茶) 褐色土、E3 暗 褐色土、E3 暗 褐色土、E3 暗 褐色土、E3 加工 痕	須恵器	楕 (10.3)			回転ナデ、カキ目、密、0.1mm程度の砂 粒を若干含む	良好	内: 灰色 7.5Y6/1 外: 灰色 7.5Y5/1	灰被り	
88-20	56	D3 包含層 (青) 褐色土、E3 暗 褐色土、E3 暗 褐色土、E3 暗 褐色土、E3 加工 痕	須恵器	楕			回転ナデ、回転ナデ、密、白砂微細砂粒を若干含む ラクアツリ	良好	内: 灰色 N6/1 外: 灰色 N7/0	頭部 (7.1) cm	
88-21	55	B1・B2 包含層 (茶~褐色土)	須恵器	加羅高杯 (11.4)			ナデ、回転ナデ 1mm以下の砂粒を若干含む	良好	内: 灰白色 N7/0 外: 灰色 N4/0	方巾通かし、脚接 続部 (4.2) cm	
88-22	55	C3 包含層	須恵器	高杯カ			回転ナデ	良好	灰白色 N8/0		
88-23	55	D3 包含層	須恵器	高杯			回転ナデ、回転ナデ、密、1mm以下の砂粒を若干含む デ後ナデ	良好	内: 灰色 N6/1 外: 灰色 N5/0	环面部内面灰被り、 2方向の透かしかけ り込み、脚接続部 径 4.4cm	
88-24	55	D3 包含層 (青) 褐色土	須恵器	高杯			回転ナデ、回転ナデ、0.5mm以下の砂粒を若干含む デ後ナデ	良好	灰白色 N7/0	脚接続部 4.3cm	
88-25	55	C2・D2 包含層	須恵器	低脚高杯 (7.0)			回転ナデ	良好	内: 灰色 N6/0 外: 仁木いわゆる 7.5YR 2ヶ稅	透かしかけ目	
88-26	55	B2 包含層 (茶) 褐色土	須恵器	高杯 (10.7)			回転ナデ	良好	灰白色 N7/0		
88-27	57	D3 2層	須恵器	高杯			ナデ、回転ナデ、 2mm程度の砂粒を少し含む、1mm以下の 白砂粒を若干含む	やや不良	灰白色 7.5Y7/1	脚接続部径 6.6cm	
88-28	57	D3 2層	須恵器	高杯			ナデ、回転ナデ、 2mm以下の砂粒を含む	良好	灰白色 N8/0	脚接続部径 5.9cm	

地図 番号	版面 番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	断土	焼成	色調	備考
89-1	56	D2・D3 包含層	埴造器	壺	(6.8)			回転ナデ ナデ、回転ナデ、 砂粒を若干含む	密、0.3mm以下の砂 粒を若干含む	良好 内:オーリーブ色 外:7.5Y3/1 外:暗灰色 N3/0		
89-2	54	C2・D2 包含層 B2 包含層 C3・D3 包含層	埴造器	壺	6.3			ナデ、回転ナデ、 砂粒を若干含む 回転・ラケグリ、 △う切り	密、0.2mm以下の砂 粒を若干含む	良好 内:灰色 N6/1		
89-3	54	D3 2層	埴造器	長頸壺				ナデ、回転ナデ、 砂ナデ、回転ナデ、 砂粒を若干含む	1.5mm以下の砂粒子 砂ナデ、回転ナデ、 砂粒を若干含む	良好 内:灰色 NB/ 外:灰色 N5/	灰被り、沈殿 2 条、 類部径 6.6cm	
89-4	56	D3 包含層	埴造器	壺	(11.3)			回転ナデ、 砂粒を若干含む	0.5mm以下の砂粒を 若干含む	良好 内:灰白色 N7/0 外:灰色 N6/1		
89-5	56	C3・D3 包含層 D3 包含層 (青 褐色土)	埴造器	壺				ナデ、回転ナデ、 砂ナデ、 砂粒を若干含む	1mm以下の砂粒 砂粒を若干含む	良好 内:灰色 N6/0 外:灰色 N5/0	類部 (10.0) cm	
89-6	56	D3・E1 包含層	埴造器	鉢				ナデ、回転ナデ、 砂粒を少し含む 同心円タキ目後 ナデ、砂子タキホ 日後の陶、指ナデ	圓錐粒子を少し含む 同心円タキ目後 ナデ、砂子タキホ 日後の陶、指ナデ	良好 内:灰色 10Y5/1		
89-7	56	E3・D3 包含層 (青褐色土)	埴造器	壺	(24.6)			回転ナデ 砂粒を含む	1mm以下の砂粒を含 む	良好 内:灰色 N6/0 外:灰色 N4/0	灰被り、沈殿 2 条、 青褐色の付着物あり	
89-8	56	B2 包含層	埴造器	壺				回転ナデ、回転ナデ ラケグリ、同心円 当て具眼、平行タ タキ	密	良好 内:灰色 N6/1 外:灰色 7.5Y5/1	自然解	
89-9	56	D3・E3 包含層	埴造器	壺				同心円タキ目後 砂粒を少し含む	圓錐粒子 (石英等 平行タキホ後) 2	良好 内:灰色 N6/0		
90-1	57	C2 包含層 (青 褐色土)	土師器	壺				ケズリ	1mm以下の砂粒を多 く含む	良好 内:浅黃褐色 7.5Y8R/4	類部 (11.4) cm	
90-2	50	D3・E3 包含層	土師器	壺				横ナデ、ハケ目、 ケズリ	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) 及び褐色土粒を やや多く含む	良好 内:灰褐色 7.5Y7/4 外:明赤褐色 2.5Y8/8 (黒斑) に ぶつ接 7.5Y7/3 ~ 深褐色 10Y8/2	外面風化あり、 外表面墺り	
90-3	56	C2 包含層 (青 褐色土)	土師器	壺	(24.0)			ナデ、ケズリ	こまかい砂を含む も良好	良好 内: 7.5R	丹塗り	
90-4	56	C2 包含層 (青 褐色土)	土師器	壺	(25.9)			ナデナ、横ナデ、 粗雑なケズリ	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) 及び褐色土粒を やや多く含む	やや 内: 棕 7.5YR7/6 ~ 良 深褐色 7.5Y8/3 外: 深褐色 7.5Y7/4 1粉白 7.5Y8/3 1粉白 7.5Y8/3	外面熟成により風 化を呈する	
90-5	56	D4 (E1含む) (黑 褐色土)	土師器	环	(6.0)			回転ナデ、回転ナ 砂粒を含む	砂粒を含む	良好 内: 棕 7.5Y3/1 外: 棕 7.5Y8/2	内外面丹塗り	
90-6	57	D4 包含層 (黑 褐色土)	土師器	足高台 (15.8) (8.8)	16.3			ナデ、回転ナデ (石英、長石など) をややや少しある	1.5mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をややや少しある	良好 内: 浅黃褐色 7.5Y8R/9 外: ぶつ接 7.5Y8/3		
90-7	56	D3 包含層	土師器	环	5.8			回転ナデ、回転ナ 砂粒を含む	1mm以下の砂粒を含 む	良好 内: ぶつ接 7.5Y8/3 外: ぶつ接 7.5Y8/4		
90-8	56	E1・D3 包含層 (青褐色～青 褐色土)	土師器	环	(5.7)			回転ナデ、回転ナ 砂粒を含む	0.5mm以下の砂粒を 少しある	良好 内: 灰白色 2.5Y8/1 外: 灰白色 10Y8R/2		
90-9	57	H25 T11 黒灰	瓦質土器	罐	6.0			回転ナデ、回転ナ 砂粒を含む	1mm以下の白砂粒を 若干含む	良好 内: 深黃褐色 2.5Y7/2 外: 深褐色 2.5Y8/3		
90-10	57	D3 包含層 (黑 褐色土)、D3 付 附 (青褐色土)	土師器	环	5.5 ~ 6.0			回転ナデ、回転ナ 砂粒を含む	圓錐粒子 (石英、良 好) 砂粒を含む	良好 内: 深褐色 2.5Y8/4 外: 深褐色 2.5Y8/4 1粉白 2.5Y8/7	底面に黒斑あり	
90-11	57	D3 包含層	白磁	碗				回転ナデ、施釉	細密	良好 内: 灰白色 10Y8/1 外: 1粉白 5T7/1	施付着 施釉: 棕 5T7/1	
90-12	57	H25 T11 黒灰	瓦質土器	罐				ナデ、回転ナデ、 砂粒を含む	砂粒を含む	良好 内: 灰白 5Y7/1 ~ 良 色 N5/0 外: 1粉白 2.5Y7/1 ~ 深褐色 N5/0	受け状(上縁、口 縁部内外に保護 着)	
91-1	58	D3・E3 包含層	土製品	ミニチュ ア土器	7.0	2.2	(7.2)	ナデナ、ケズリ、 ケズリ上げ、右上 がりのタキホ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) をやや多く含む	やや 内: 棕 2.5YR7/6 ~ 不良 深褐色 7.5Y8R/6 外: ぶつ接 7.5Y7/4	深褐色孔残存、 内: ぶつ接 7.5Y7/4	
91-2	58	D2・D3 包含層	土製品	手捏ね土 器	(3.4)			ナデ、ハケ目、前 頭正直	0.5mm以下の砂粒を 含む	良好 内: 棕 7.5YR6/6		
91-3	58	D3・E3 包含層	土製品	ミニチュ ア土器	(4.7)			ナデ、ケズリ上げ ナデ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など) をやや多く 含む	良好 内: 黄灰色 2.5Y6/1 外: 10Y4/8 (黒斑) 黄 褐色 2.5Y5/1	外表面丹塗り	
91-4	57	B2・C2 包含層 (青 褐色土)	土製品	土製支脚				ナデナ	1mm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃 石など) をやや多く 含む	良好 内: 棕 2.5YR7/6 ~ 10Y7/4	高さ 10.3 cm × 幅 6.5 cm × 厚 さ 1.3 cm	
91-5	59	C1 包含層 (青 褐色土)	土製品	土製支脚				不明	1mm以下の砂粒子 (石英、長石など) を多く含む	良好 内: 棕 5Y8R/6 外: 1粉白 1黄褐色 10Y7/4	非貫通孔残存、 内: 1粉白 1黄褐色 10Y7/4 外: 棕 2.5YR6/6 1粉白 7.5YR7/6 × 体部厚 5.5cm	

辨別番号	図版番号	出土地点	種別	器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	構造・手法の特徴	断土	焼成	色調	備考
91-6	59	D3 2層	土製品	土質支脚	(18.5)			ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好 内:灰白色 2.5YR8/2 外:灰白色 10YR8/2		
91-7	59	D3 包含層(青灰色土)	土製品	土質支脚				ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好 外面:浅黄褐色 10YR8/3		
91-8	59	C2 包含層(青灰色土)	土製品	土質支脚	(12.5)			ハケ目	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)をやや多く含む	良好 にぶい褐色 5YR6/4 ~ にぶい褐色 10YR7/4 非貫通孔残存 頭部幅 11.7 × 厚 5.7cm		
91-9	58	D3(次層)(青灰色土)	土製品	土質支脚	(12.3)			ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好 灰白 2.5YR8/2		非貫通孔残存
91-10	58	C2 包含層(青灰色土)	土製品	移動式壠				ナデ、ハケ目、ケ ズリ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好 内:灰白色 10YR8/2 外:灰白色 2.5YR8/2		
91-11	58	C2 + D2 包含層	土製品	移動式壠				ナデ、ハケ目、ケ ズリ	1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)をやや多く含む	良好 内:灰白色 7.5YR7/4 ~ にぶい褐色 10YR7/7 外:浅黄褐色 10YR8/3		
91-12	59	C3 包含層	土製品	移動式壠				ナデ、ケズリカ、ハケ目	1mm以下の砂粒子を多く含む	良好 内:稍白 2.5YR7/6 外:にぶい褐色 7.5YR7/4		
91-13	59	C3 包含層	土製品	移動式壠				ナデ	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)を多く含む	良好 内:にぶい黃褐色 10YR7/4 外:にぶい黃褐色 10YR6/3	煤付着	
91-14	59	C2 + D2 包含層	土製品	移動式壠				取付 高 度	ナデ、ハケ目、ケ ズリ	1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)をやや多く含む	良好 にぶい褐色 2.5YR7/2	保存厚 1.8cm
91-15	59	D3 + E3 包含層(青灰色土)	土製品	移動式壠			10.0	ナデ、ケズリ、ハケ目、工具あり	1mm以下の砂粒子を多く含む	良好 灰黄色 2.5YR7/2		
91-16	59	C2 包含層(青灰色土)	土製品	移動式壠				指ナデ	1mm以下の砂粒子(石英など)を多く含む	良好 にぶい褐色 10YR7/3 ~ 7/4	外側に被熱痕あり	
91-17	60	D3 包含層(青灰色土)	土製品	移動式壠	(32.0)			ナデ、籠ハケ目、ケズリ	1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)をやや多く含む	良好 内:灰黄色 2.5YR8/2 外:灰白色 10YR8/2 ~ 9.18と同一 体カ		
91-18	60	D3 包含層(青灰色土)	土製品	移動式壠	(48.6)			ナデ(所々にハケ目)、籠ハケ目、ケズリ	1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)をやや多く含む	良好 内:浅黄 2.5YR7/3 外:灰白色 2.5YR7/1		
92-1	60	C6 包含層(黒褐色)	高杯(分)	(12.4)				回転ナデ、回転ナデ ラケナデ	1mm以下の砂粒子を若干含む	良好 灰色 N6/1		
92-2	61	C6 包含層	楽器	酒	(13.9)	つま み径 2.5cm		(1.8) 回転ナデ、回転ナデ、 ラケナデ	1mm以下の砂粒子を若干含む	良好 灰白色 5Y7/2	算盤玉状つまみ	
92-3	59	C6	楽器	酒	14.0	1.7 2.7cm		ナデ(所々にハケ目)、回転ナデ、 ラケナデ	0.5mm程度の砂粒を含む	良好 内:灰黄 2.5YR7/2 外:灰白色 2.5YR7/1		
92-4	59	C6	楽器	酒	14.5	1.7 2.5cm		ナデ、回転ナデ、 ラケナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	良好 内:灰白色 7.5YR7/2 外:灰白色 7.5YR7/1		
92-5	60	C6 包含層	楽器	酒	(17.3)			ナデ、回転ナデ ラケナデ	0.5mm以下の砂粒を含む	良好 内:灰白色 7.5YR8/1 外:灰白色 N6/1	算盤玉状つまみ	
92-6	61	B6 包含層(黒褐色)	高杯	酒	(17.5)	つま み径 2.8cm		(1.5) ナデ、回転ナデ、 ラケナデ後ナデ	1mm以下の砂粒を若干含む	良好 内:灰白色 7.5YR7/1 外:灰白色 10YR6/1	算盤玉状つまみ	
92-7	60	C6	楽器	高杯(酒)	12.9	3.9 2.4cm		回転ナデ	細粒粒子を含む	良好 内:灰白色 7.5YR6/1 外:灰白色 7.5YR7/1	宝珠状つまみ	
92-8	60	C7 南北ベルト	楽器	酒	(13.4)			回転ナデ	0.5mm以下の白砂粒を含む	良好 内:灰白色 N6/0 外:灰白色 5Y7/1		
92-9	60	C6 包含層	楽器	高台付环	10.2	6.8	4.4	ナデ、回転ナデ、 高台付环後回転ナ デ、ヘラ切り	1mm以下の砂粒を含む	良好 内:灰白色 N6/0 外:明オーブ灰 2.5YR7/1	重ね焼きの痕跡	
92-10	60	SD01より西茶唐津燒	皿	(13.0)				回転ナデ、沈刷、織密 全走痕跡		良好 色:オーブ黄色 5Y6/4 深褐色 2.5YR6/2 織密:灰褐色 5YR6/3 全走痕跡:青緑色 5YR6/1	輪郭:オーブ黄色 5Y6/4 深褐色 2.5YR6/2 織密:灰褐色 5YR6/3 全走痕跡:青緑色 5YR6/1	
93-1	61	包含層	土師器	甕	(17.0)			ナデ、横ナデ、ハ ケ目、ケズリ	1mm以下の砂粒子(石英、長石など)を多く含む	良好 浅黄褐色 10YR8/3	L線面に沈刷 1条	
93-2	60	包含層	楽器	酒	(14.7)			回転ナデ、ヘラ切 り後ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	良好 白灰色 7.5YR7/1		
93-3	60	甕	楽器	高台付环	(10.1)			回転ナデ	0.2mm以下の砂粒を若干含む	良好 内:灰白色 7.5YR7/1 外:灰白色 7.5YR7/1		
93-4	61	包含層(茶褐色土)	土製品	土質支脚				指押さえ板	1mm以下の砂粒子(石英など)を多く含む	良好 正前頭 植 2.5YR6/8 背面中央に非貫通 孔(右側に2段階 背面:橙 5YR8/8 ~ け続)、孔径 2.3cm, 橙色 7.5YR7/6 0.7cm、奥行き 4.5 cm、裏面高 17.8 × 体部幅 6.2 ~ 9.0 ×体部厚 6.7cm		

第5表 玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）、九景川遺跡（V区）出土石器、玉作関係遺物観察表

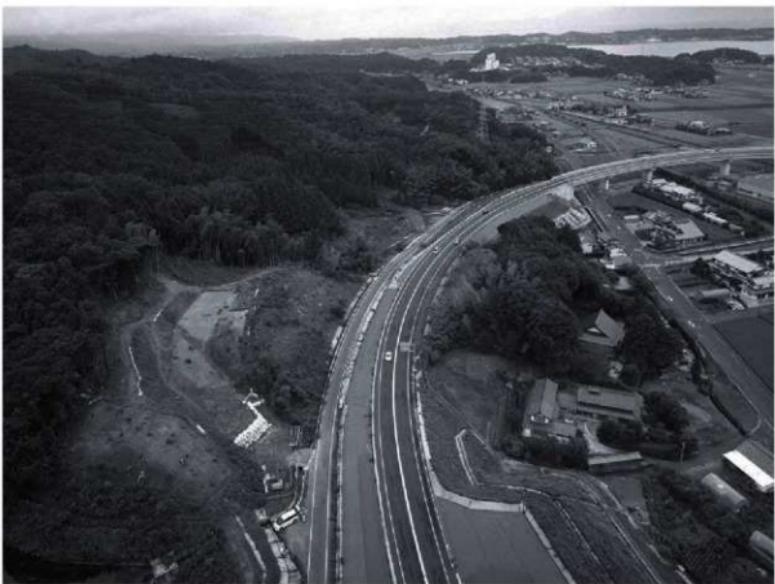
辨別番号	出土地点	石材	器種	製作段階	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
13-4 14 VI区 加工段1 11 覆瓦岩カ 砥石				現存長9.0	厚さ2.2	現存幅6.5	19.50		
25-1 17 VII区 SD01 覆瓦岩カ 台石				長さ23.5	厚さ9.9	幅19.0	5950.00	完形、表面とも研磨（使用）痕あり	
25-2 17 VII区 SD01 砥石				長さ20.9	厚さ10.0	幅17.5	3750.00	完形、3面には刃キズ痕あり、裏面にある剥離痕は砥石（台石）として利用される前のもの。（本来は原石（石核）として遺跡に落ちたもの）、4面の作業面	
25-3 17 VII区 SD01 覆瓦岩カ 台石				長さ39.2	厚さ10.3	幅29.3	13800.00	表面とともに使用、研磨面の中央に嵌打痕あり	
27-2 14 VII区 SD01 球理土 砂利カ安 不明 1層 山河カ				長さ14.5	厚さ2.8	最大幅5.4	232.00	未成品	
37-7 16 VII区出土位置不 緑片岩 磨製石斧 明				現存長 11.2	厚さ4.0	最大幅6.0	405.00	磨製石斧部欠損、磨製石斧欠損後基部先端 研磨として使用（他の縁辺部及び表面頂部にも若干の嵌打痕あり）	
37-8 16 VII区 C3 包含層 周囲石 制片				現存長5.6	厚さ4.9	最大幅4.0	135.00		
37-9 16 VII区 C3 包含層 周囲石 制片				長さ1.8	厚さ0.8	最大幅3.0	3.99	ほぼ完形、加工痕あり、打削調整断面、上面 縁辺に小さなつぶし痕がある	
52-1 40 加工段1・2 22 花崗岩 砥石				11.7	7.5	5.0	518.00	ほぼ完形、細かい刃キズ痕あり、7面に作業面（仕上げ砥き）	
52-2 40 加工段1・2 4 花崗岩 砥石				6.5	7.0	5.5	355.00	表面欠損、砥ぎ面の四隅部は未使用面か、細か に刃キズ痕あり、1面に作業面（仕上げ砥き）	
52-3 40 BS 加工段1・2 花崗岩 砥石				5.1	6.4	現存厚3.5	165.00	表面欠損、砥ぎ面の四隅部は未使用面か、細か に刃キズ痕あり、1面に作業面（仕上げ砥き）	
52-4 40 加工段1・2 22 花崗岩 砥石				9.0	5.3	5.0	223.00	ほぼ完形、上方先端部に嵌打痕（使用痕）あり、 その外周部は2層の断面の自然面を残し、嵌打 痕ある（成形前のもの）	
52-5 40 加工段1・2 21 覆瓦岩 台石				23.7	16.5	7.8	452.00	完形、全体に被磨し赤茶、裏面は灰茶、表面中 央部に嵌打痕、その上の平坦部に研磨痕あり	
53-7 40 加工段10 1層 花崗岩 砥石				現存長 12.5	4.4	4.2	310.00	底面欠損、この部分が部分的に欠損、5面に作業面 (仕上げ砥き4、仕上げ砥き1)	
53-8 40 加工段10 1層 花崗岩 砥石				現存長 14.2	5.2	4.2	370.00	上部欠損、刃キズ痕あり、4面に作業面（中砥ぎ 2、仕上げ砥き2）	
53-9 40 加工段10 1層 花崗岩 砥石				12.2	6.4	5.8	690.00	ほぼ完形、5面に作業面（中砥ぎ2、中砥ぎ1、 仕上げ砥ぎ2）	
58-5 41 B4 加工段3面 サヌカイ 石礫				現存長2.8	1.4	0.35	1.24	先端欠損、縁辺加工、基部欠損後に内調整、金山 産	
58-6 41 B4 加工段3 錫玉 母玉 未成品				2.8	最大幅1.8	1.0	6.89	完形、表面欠損、裏面の両端部は接着部を殆 んどなくす数段高から研磨、花山産、無空孔	
65-7 46 加工段6 基土				11.0	17.7	13.4	2580.00	完形、全体に被磨し赤茶、支脚の代用として使 用	
65-8 44 加工段6 基土 周囲石 打削調整 刃カ				1.4	1.2	0.3	0.47	基部若干欠損、基部の方が厚い	
72-11 46 加工段9 1層				12.7	17.4	15.5	3450.00	完形、底面はフラット、全体に焼熱か、支脚の 代用として使用	
90-13 58 D3・E3 包含層 砂利カ 砥石				現存長5.3	2.8	現存厚1.7	31.06	裏面、基部欠損、表面の側面は近接付着、 4面に作業面（中砥ぎ1、仕上げ砥ぎ3）	
90-14 58 B1・B2 包含層 花崗岩 砥石				9.7	7.3	5.7	390.00	完形、縁辺部に嵌打痕、6面とも仕上げ砥ぎ、 刃キズ痕あり、6面に作業面（仕上げ砥き）	
90-15 58 B2 (青灰色土) 花崗岩 砥石				7.7	7.8	5.5	420.00	ほぼ完形、未使用の3面は欠損部から、6面に作 業面（中砥ぎ4、中砥ぎ1、仕上げ砥ぎ1）、深 い刃キズ痕あり	
90-16 58 E3 包含層 (青 花崗岩 磨製石斧				11.8	4.4	2.0	120.00	基部若干かに欠損、刃部分にこぼれあり、裏面凹 部分は使用時の嵌打痕	
90-17 58 D3・E3 包含層 (青褐色～青 灰色土) 砧石				9.8	8.0	2.3	275.00	完形	
90-18 62 C2 包含層 滑石カ 勾玉				3.4	1.1	0.7	6.31	端部若干欠損、ほぼ完形、画面穿孔	
92-11 62 B6 包含層 (黑) 黒曜石 石礫				現存長2.3	現存幅1.1	0.35	0.58	頂端部、基部下方欠損、基部は凹基式、左右 から頂部に交叉に加工	
92-12 62 (2束糸ベルト) サヌカイ 石礫 包含層 (茶褐色土)				現存長2.0	1.9	0.35	1.21	先端欠損、基部は凸基式、縁辺加工	

第6表 玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）、九景川遺跡（V区）出土金属器観察表

辨別番号	出土地点	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	メタル度	備考
52-6 62 加工段1・2 4 金属製品 鋼洋				6.4	4.5	3.5	160.00	L (●) 細長い一部	
58-7 62 加工段3 A-1 金属製品 截歯カ				現存長8.1	現存幅0.6	厚さ0.5 ~2.7	33.96	方盤式、基部の先端のみ断面が生きている。方 盤部直線的よりもやや丸みをおびる	
90-19 62 C3 包含層 金属製品 不明				現存長6.3	現存幅2.5	現存厚1.0	23.54		
90-20 62 トレンチ8 (H25) 基土 (H26C2) 金属製品 鋼カ				現存長4.7	現存幅2.9	現存厚0.2	8.49		
90-21 62 C2 包含層 金属製品 截歯 鋼カ				径2.7~ 3.1	幅0.6	厚さ0.6	12.68		
92-13 62 C4 包含層 (黑 鋼色土) 金属製品 鋼刃のみ				現存長3.8	現存幅2.8	現存厚0.2	7.17		

写真図版





調査区上空より神西湖を西に望む



VI区全景（上が東）

図版 2 玉泉寺裏遺跡



VI区近景（東から）



加工段 1 調査状況（北から）



加工段 1 東西断面（北から）



左上：加工段 1 東西断面（南から） 右上：加工段 1-Pit08 棚出状況（北から）  
左下：加工段 1-Pit08 断面と遺物出土状況（東から） 右下：加工段 1 完掘状況（北から）

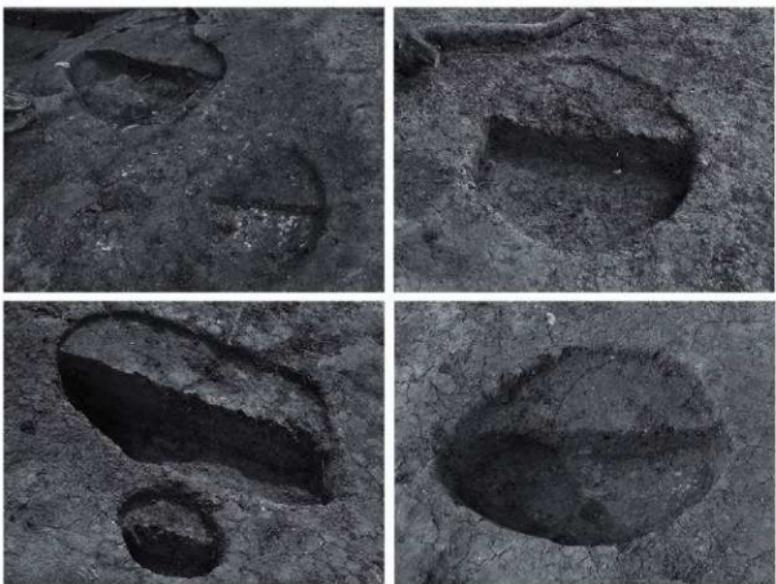
図版 4 玉泉寺裏遺跡



加工段 2 東西断面（北から）



左上：加工段 2 東西断面西部（北から） 右上：同東部（北から）  
左下：加工段 2 南北断面南部（東から） 右下：同北部（西から）



左上：SK01・02 断面（北から） 右上：Pit09 断面（東から）  
左下：Pit05-1・2 断面（東から） 右下：Pit06 断面（北から）



VII区全景（上が南）

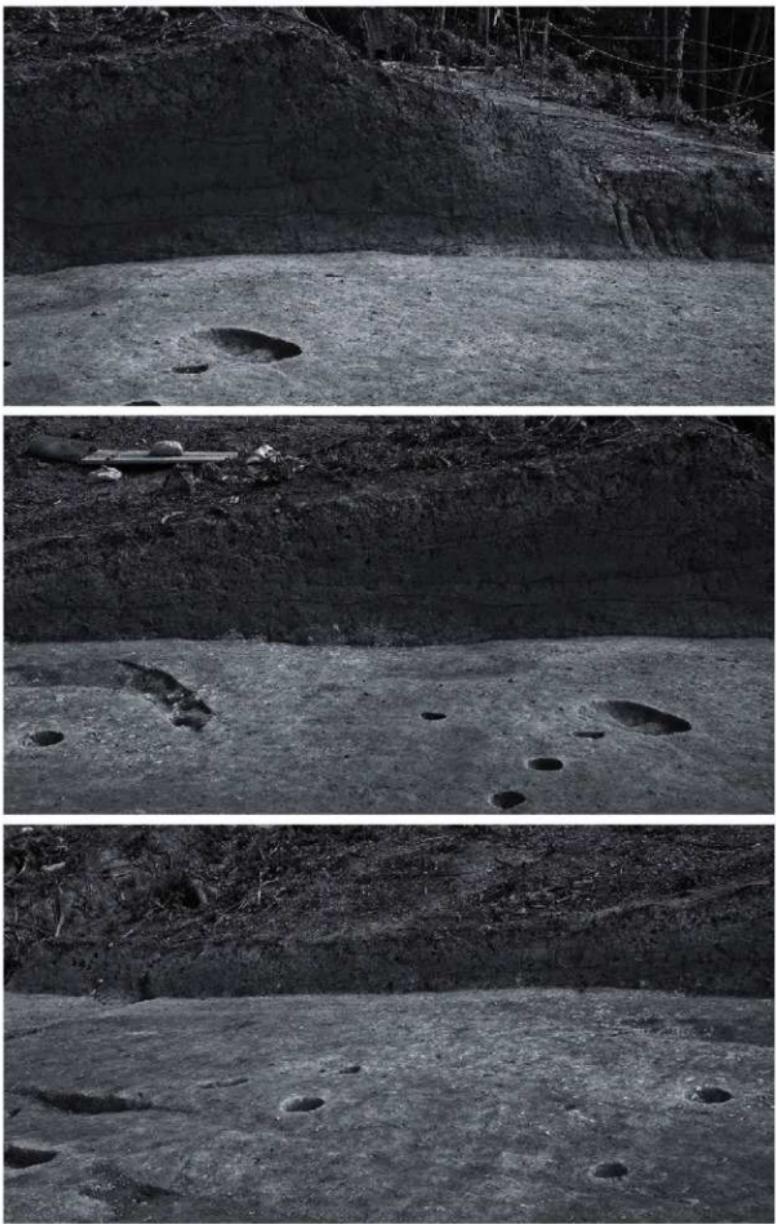
図版 6 玉泉寺裏遺跡



VII区平坦面（北東から）



VII区北東部斜面（北東から）



VII区南壁土層（北から） 上：A3 グリッド部分 中：A4 グリッド部分 下：A5 グリッド部分

図版 8 玉泉寺裏遺跡



VII区西壁土層 B2 グリッド部分（南西から）



VII区西壁土層 C2 グリッド部分（南西から）



VII区縦断面土層堆積状況 D7 グリッド部分（南東から）



VII区横断面土層堆積状況 D7 グリッド部分（北東から）

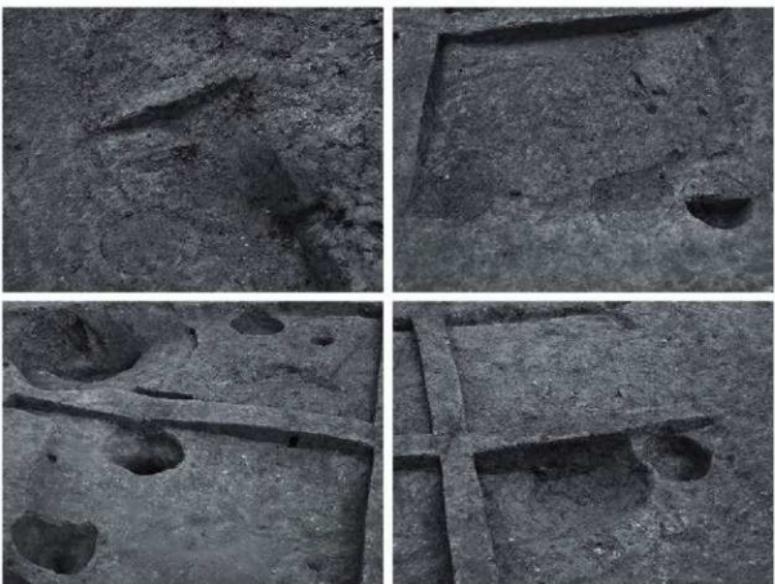
図版 10 玉泉寺裏遺跡



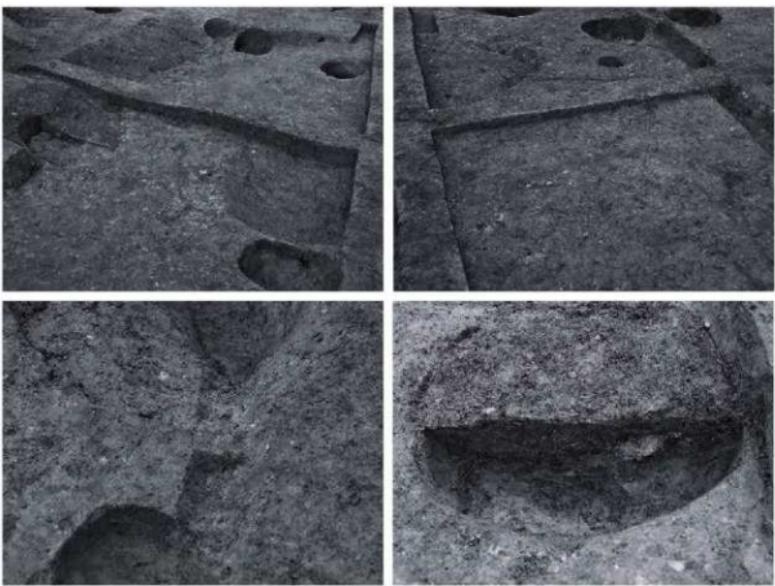
SI01 調査状況（南東から）



同遺物出土状況（南西から）



左上：加工段 3 断面（東から） 右上：SI01-Pit01 断面（東から）  
左下：SI01 東西断面東部分（北西から） 右下：同西部分（北西から）



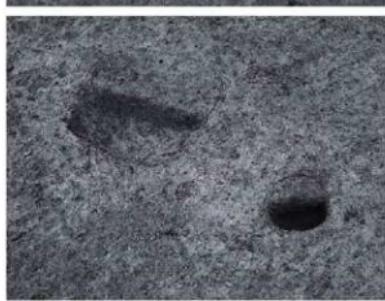
左上：SI01 南北断面北部分（南西から） 右上：同南部分（南西から）  
左下：SI01 壁際溝南東部断面（南から） 右下：SI01-Pit09 断面（北東から）

図版 12 玉泉寺裏遺跡



左上：SK06 調査状況（北東から） 右上：同完掘状況（北東から）

左下：SK08 断面（南東から） 右下：同完掘状況（北西から）



左上：SK09 調査状況（北東から） 右上：同完掘状況（北東から）

左下：SK12・Pit33 断面（北西から） 右下：SK14 断面（南東から）

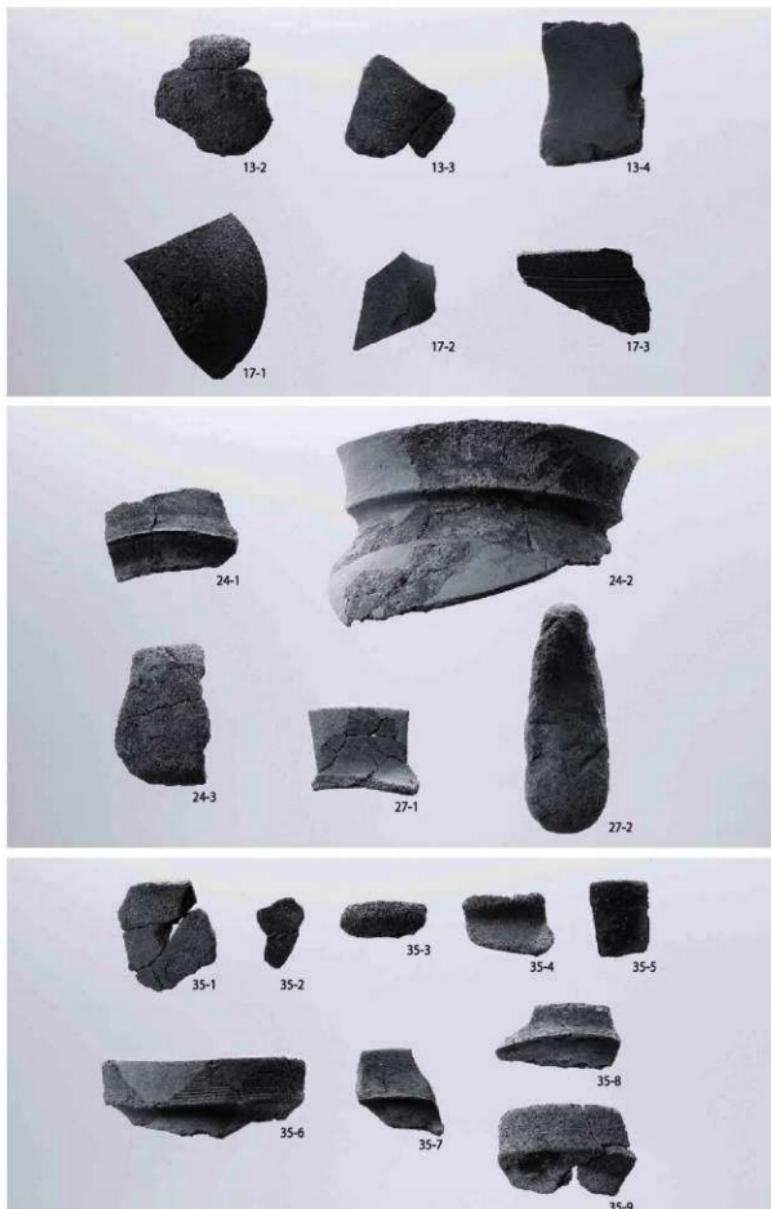


左上：SK10 断面（南から） 右上：同完掘状況（北から）  
左下：SK11 東西断面（北から） 右下：同完掘状況（北から）

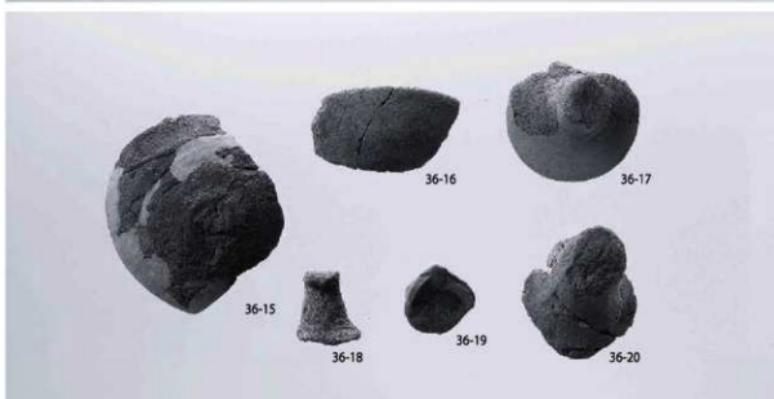
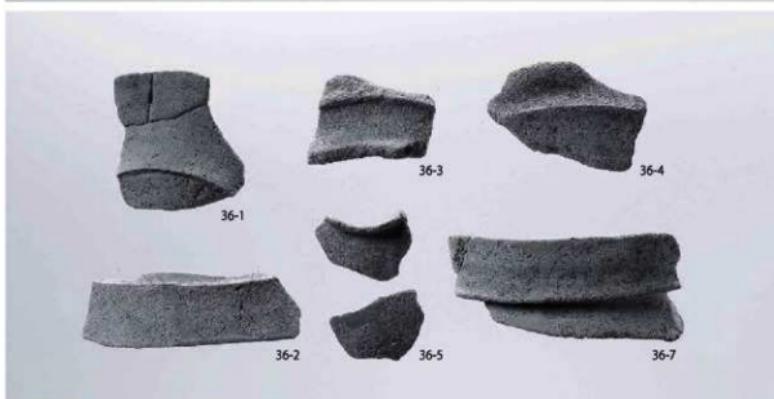
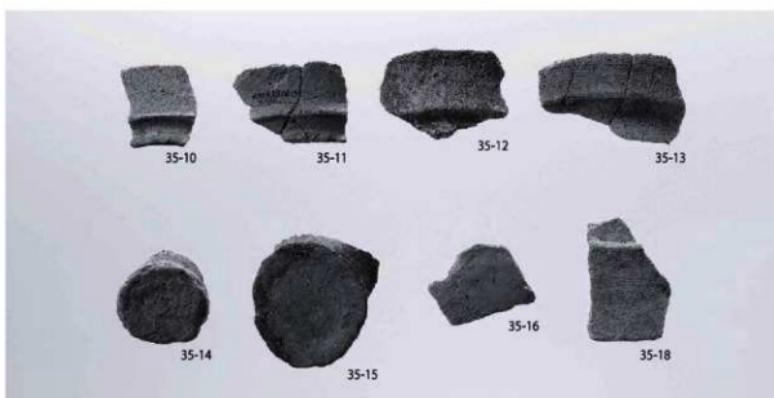


左上：SK13 断面（東から） 右上：同完掘状況（北東から）  
左下：Pit91 断面（北東から） 右下：Pit92 断面（北東から）

図版 14 玉泉寺裏遺跡



玉泉寺裏遺跡VI区・VII区出土遺物（1）

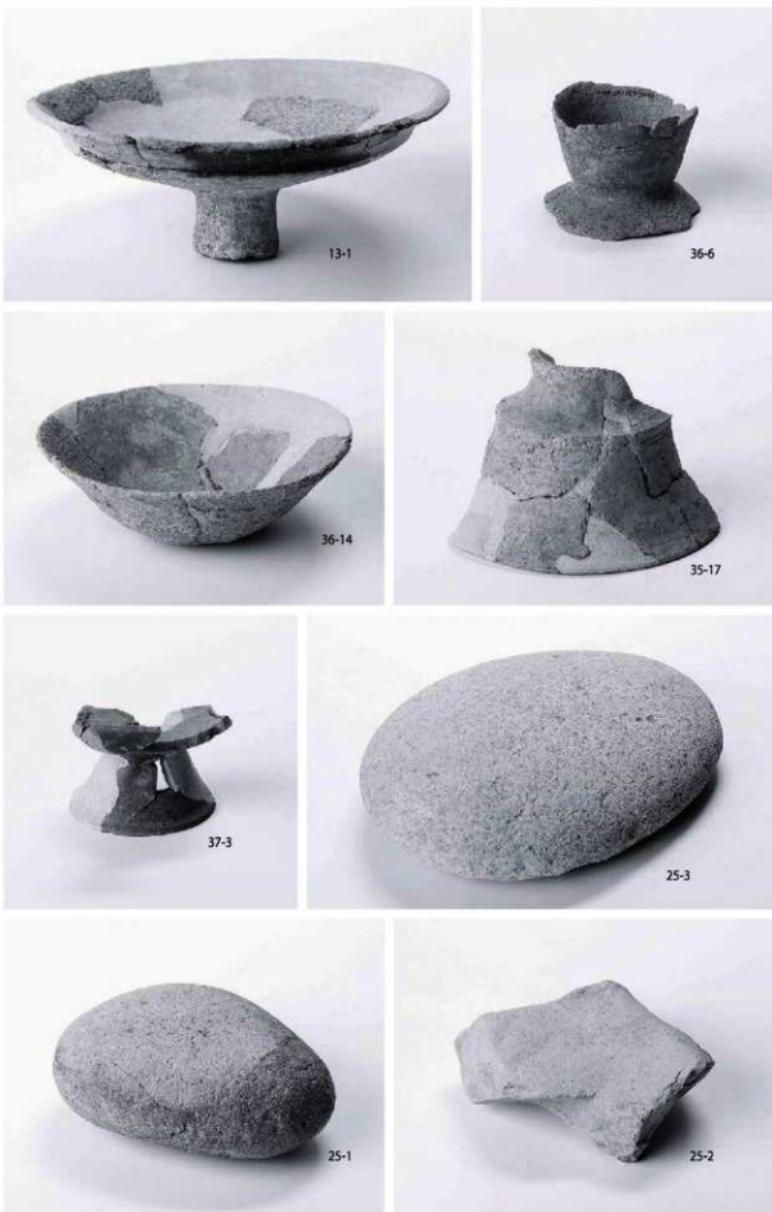


玉泉寺裏遺跡 VI区・VII区出土遺物（2）

図版 16 玉泉寺裏遺跡



玉泉寺裏遺跡VI区・VII区出土遺物（3）



玉泉寺裏遺跡VI区・VII区出土遺物（4）

図版 18 九景川遺跡



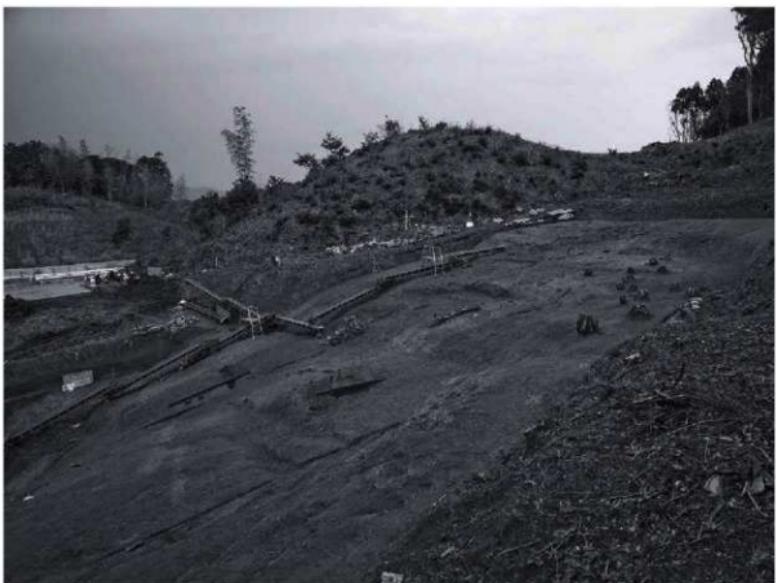
調査区遠景（西から）



調査区遠景（東から）



調査区全景（北から）



調査区近景（南西から）

図版 20 九景川遺跡



調査区縦断面土層堆積状況 B6 グリッド部分（南から）



調査区縦断面土層堆積状況 C2 グリッド部分（南から）

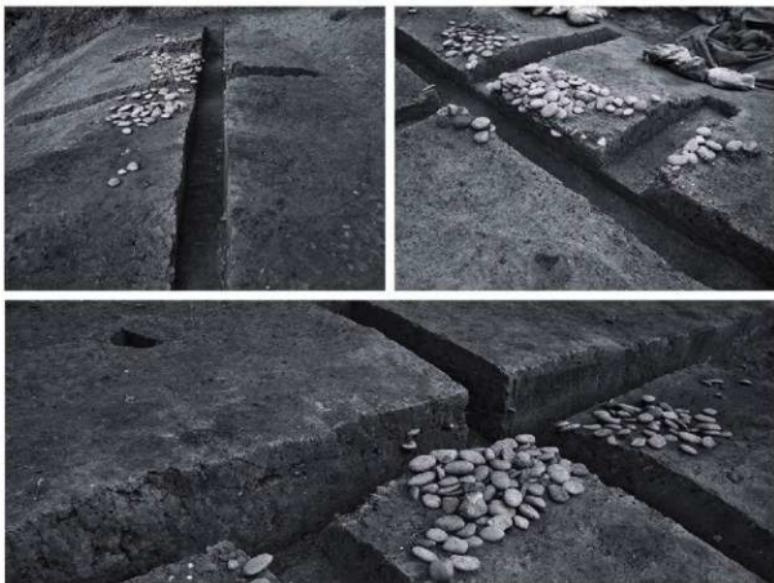


調査区横断面土層堆積状況 C2 グリッド部分（南から）



調査区横断面土層堆積状況 E3 ~ D2 グリッド部分（東から）

図版 22 九景川遺跡



集石遺構 左上：完掘状況（南から） 右上：同（北東から） 下：南北断面（北西から）



S101 調査状況（北西から）



左上：SI01 東西断面西部分（南から） 右上：同東部分（南から）  
左下：SI01-Pit02 断面（北から） 右下：SI01-Pit05（北から）



SI01 完掘状況（北西から）

図版 24 九景川遺跡



加工段 1・2 調査状況（北から）



加工段 10・11 調査状況（北から）



加工段 1・2 遺物出土状況（北から）



上：調査区縦断面の加工段 1・2、11 部分（北から）  
下：加工段 1・2、10 東西断面（北から）



左上：加工段 1・2、10 東西断面（南西から）右：加工段 1・2-SD01 調査状況（北東から）  
左下：加工段 1・2-SD01 調査風景（北西から）



加工段 3 検出状況（西から）



左上：C2 グリッド包含層勾玉出土状況 右上：加工段 3-Pit07 断面（南西から）

左下：加工段 3-Pit17 断面（西から） 右下：加工段 3 調査風景（南東から）



加工段3 東西断面と遺物出土状況（北から）



同南北断面と遺物出土状況（南東から） 上：南部分 下：北部分

図版 28 九景川遺跡



左上：加工段 3-Pit22 断面（南東から） 右上：加工段 3-Pit24 断面（西から）  
左下：加工段 3-Pit21 断面（南西から） 右下：加工段 3-Pit24 完掘状況（南西から）



加工段 6 断面（南から）



左上：加工段 6 遺物出土状況（南から） 右：加工段 6 溝検出状況（北から） 左下：加工段 6 溝断面（北から）



加工段 6 完掘状況（南から）

図版 30 九景川遺跡



加工段 8 溝検出状況（南から）



加工段 9 調査状況（西から）



加工段 9 土層堆積状況（西から）



SD01 調査状況（南から）

図版 32 九景川遺跡



左上・左下：SD01 断面（南西から） 右：SD01 遺物出土状況（南西から）



SD02 調査状況（南西から）



上：SD02・SD02-Pit01 遺物出土状況（北東から）  
左下：SD02-Pit01 断面（北東から） 右下：SD02-Pit01 完掘状況（北西から）



左：SD04 遺物出土状況（南から） 右上：SD04 炉跡調査状況（西から） 右下：SD04 炉跡完掘状況（北から）

図版 34 九景川遺跡

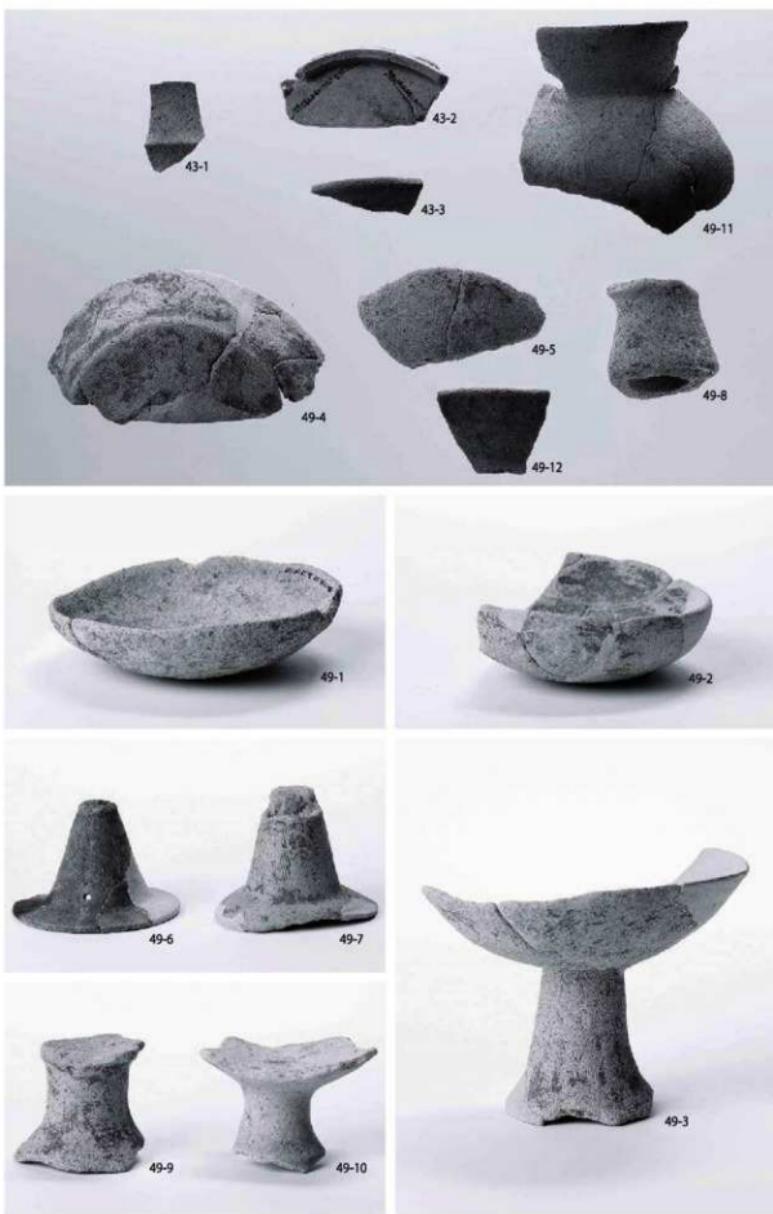


SD04 完掘状況（南から）



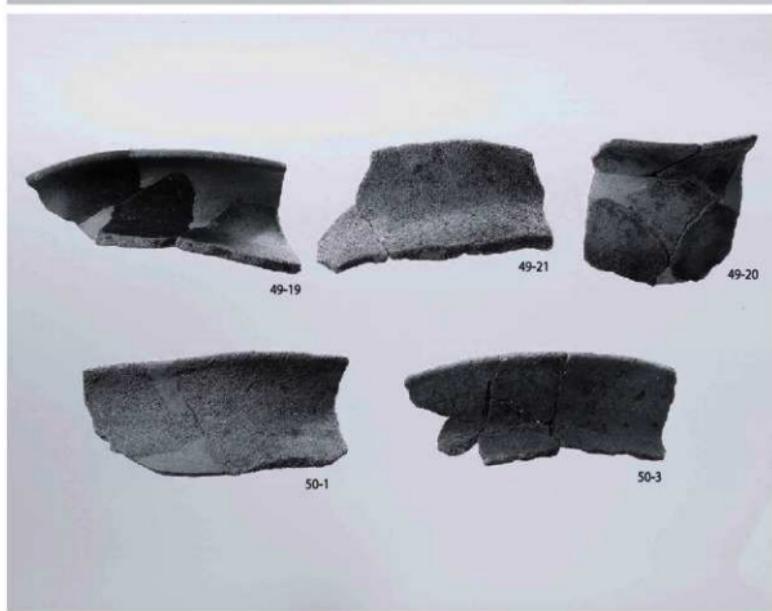
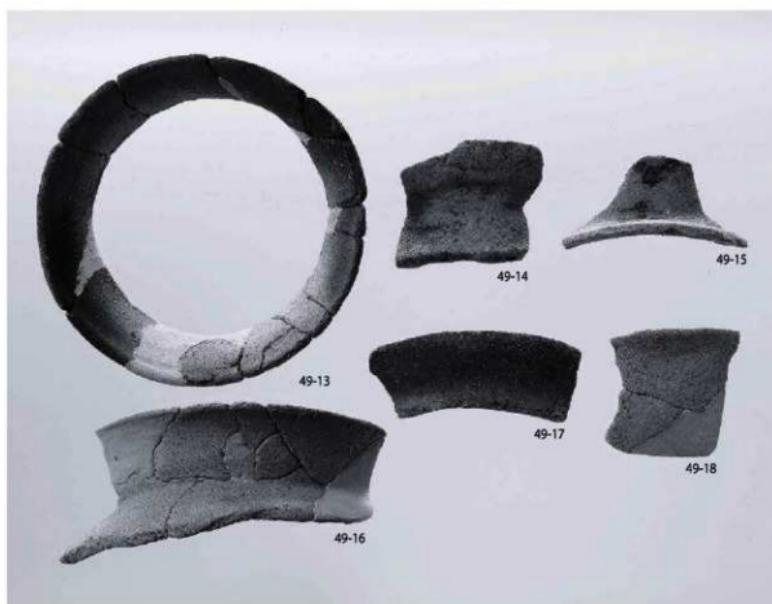
左上：Pit25 断面（南西から） 右上：Pit26 断面（北から）

左下：C2 グリッド包含層耳環出土状況 右下：D3 グリッド包含層土師器甕出土状況

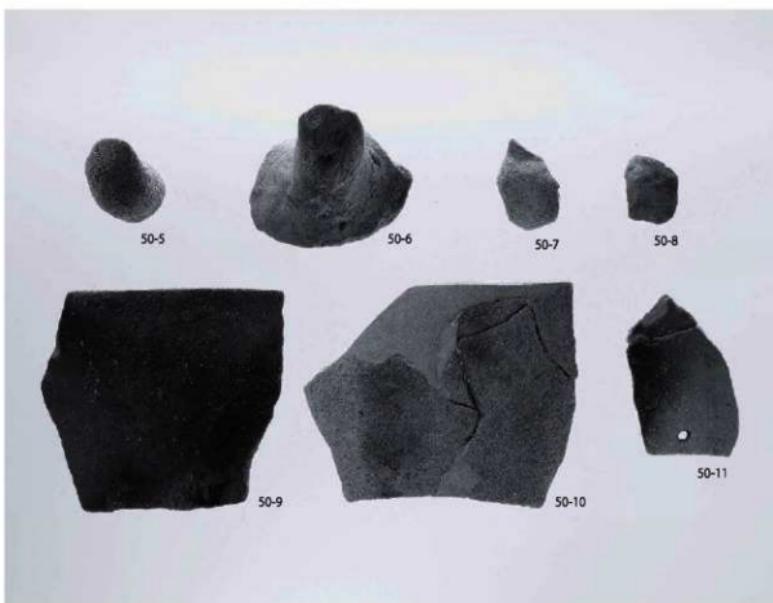


九景川遺跡V区出土遺物（1）

図版 36 九景川遺跡

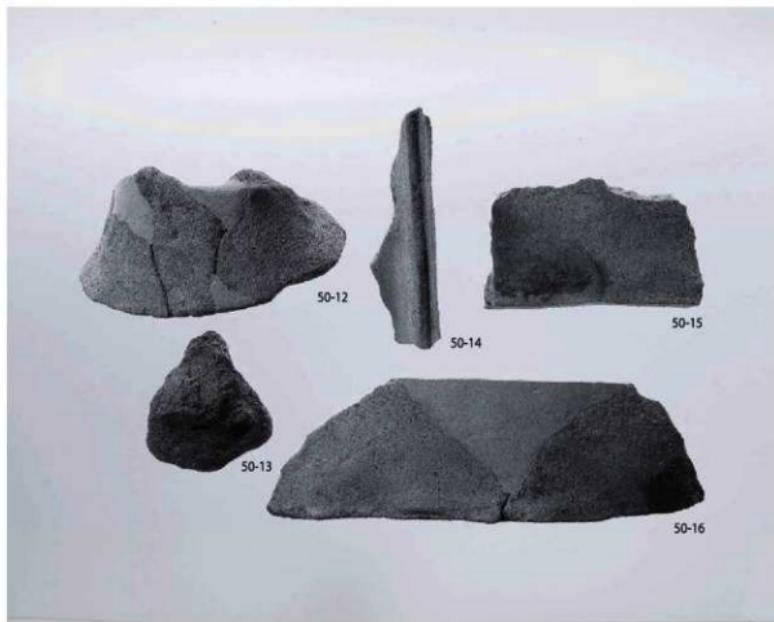


九景川遺跡V区出土遺物（2）

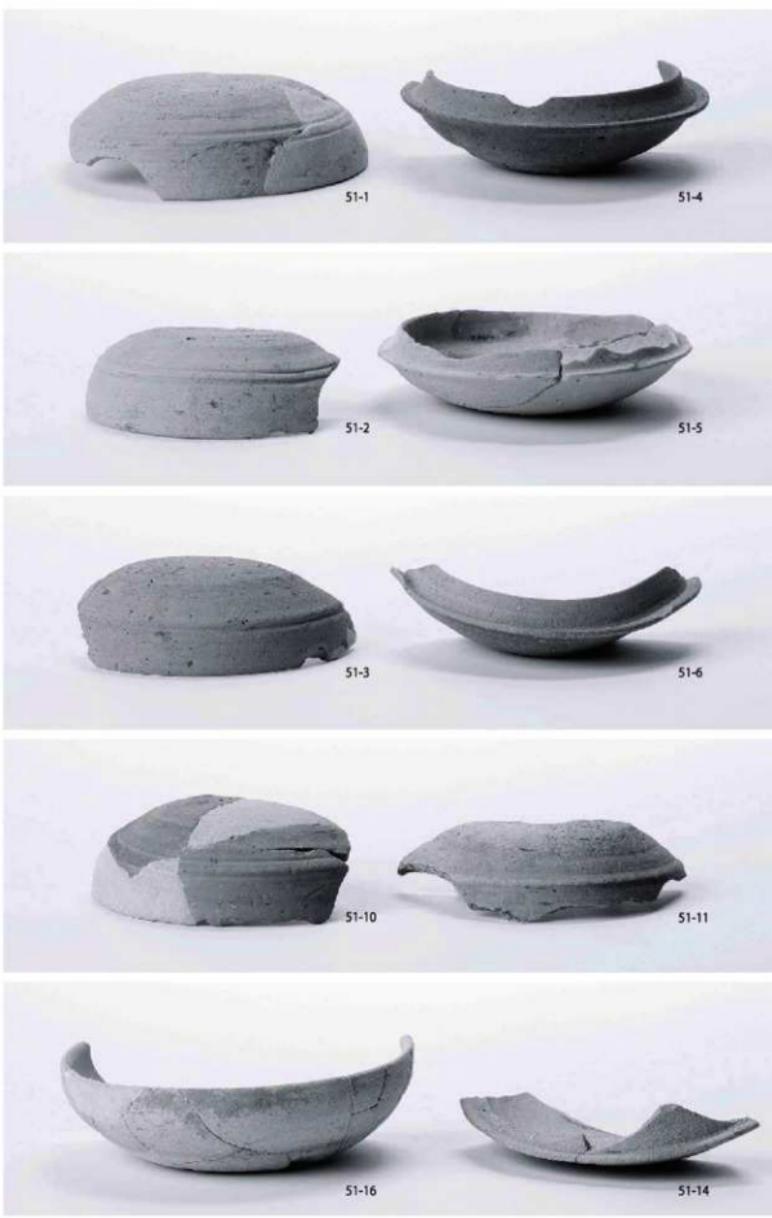


九景川遺跡V区出土遺物（3）

図版 38 九景川遺跡

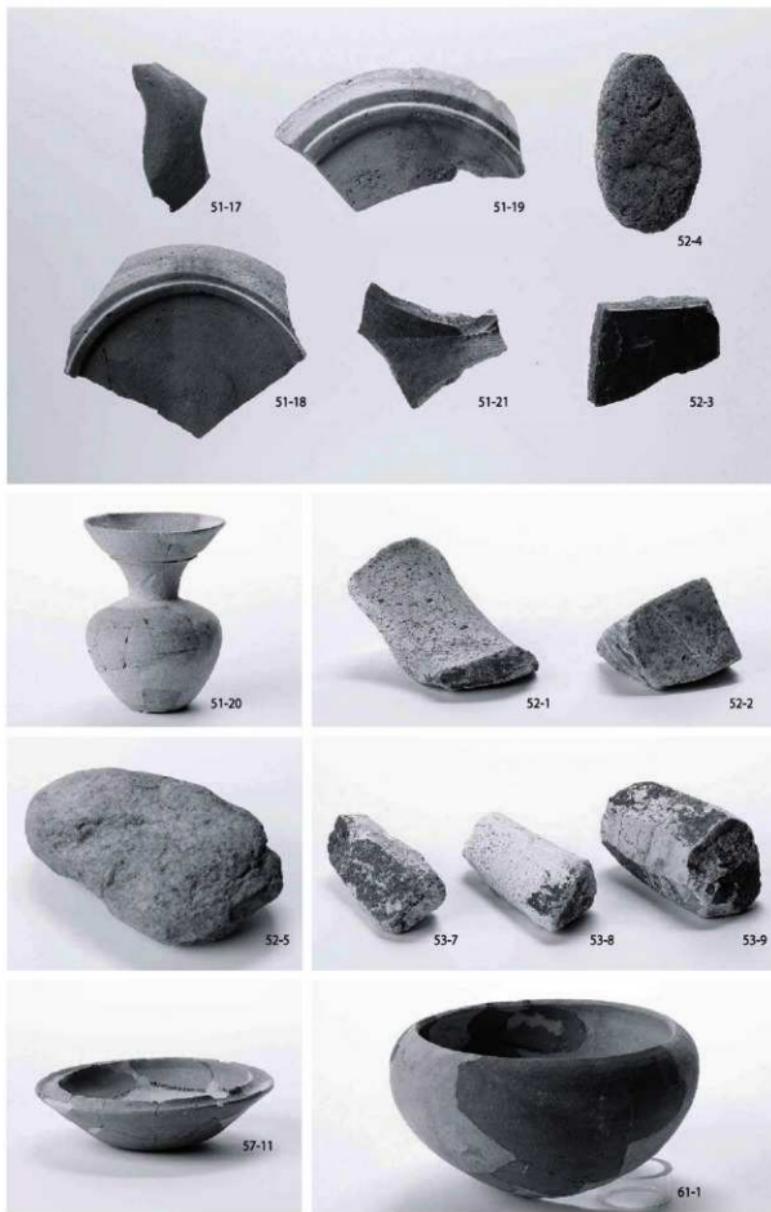


九景川遺跡V区出土遺物（4）

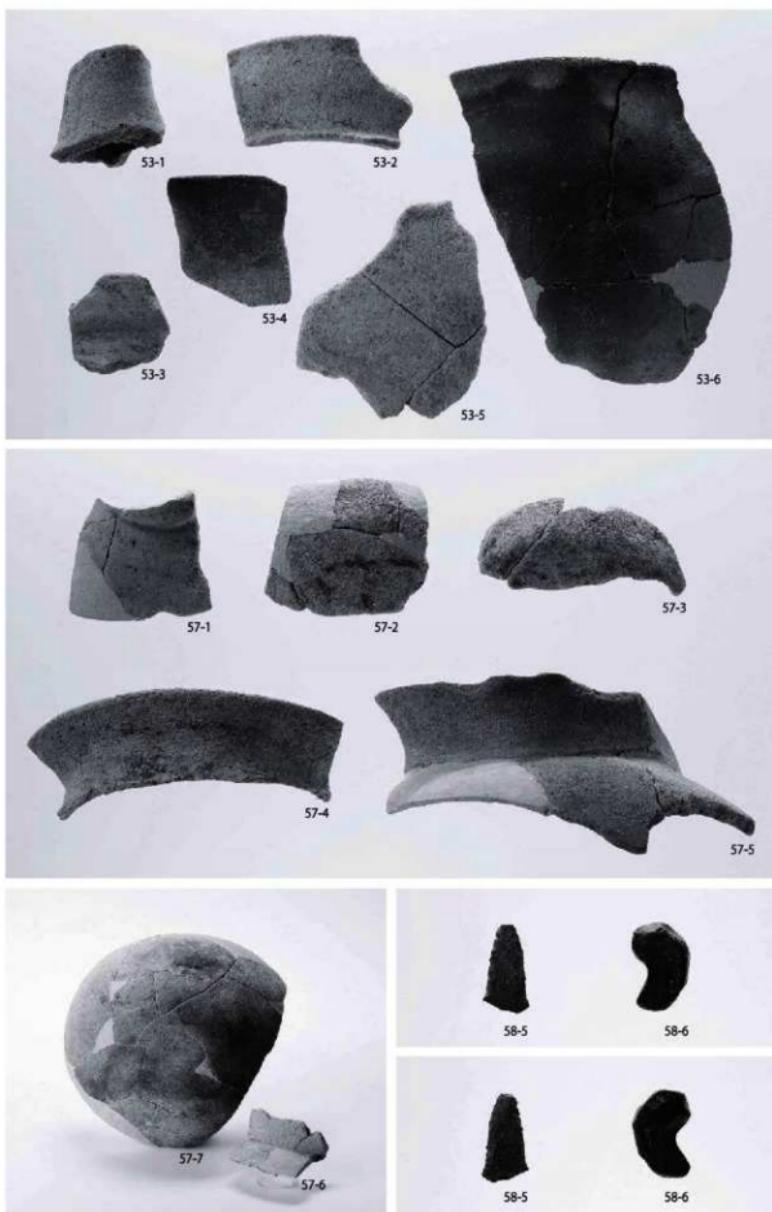


九景川遺跡 V区出土遺物（5）

図版 40 九景川遺跡

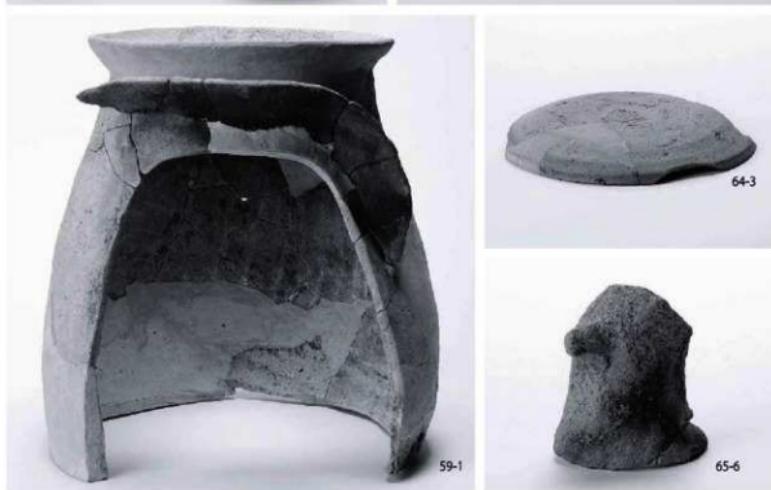
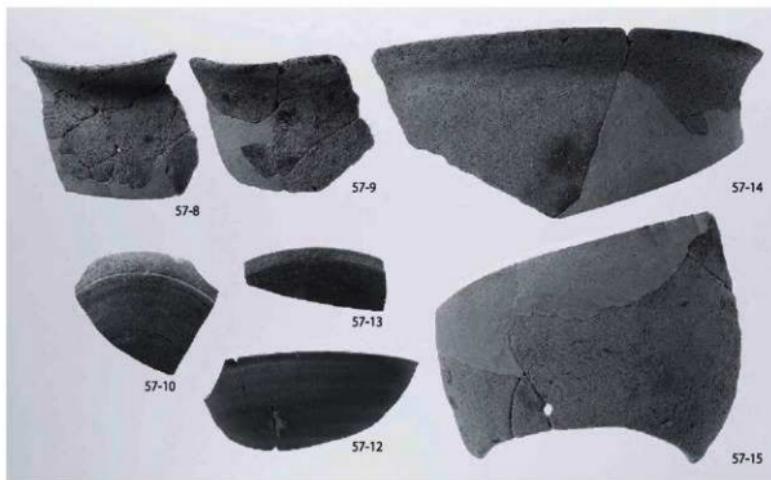


九景川遺跡V区出土遺物（6）

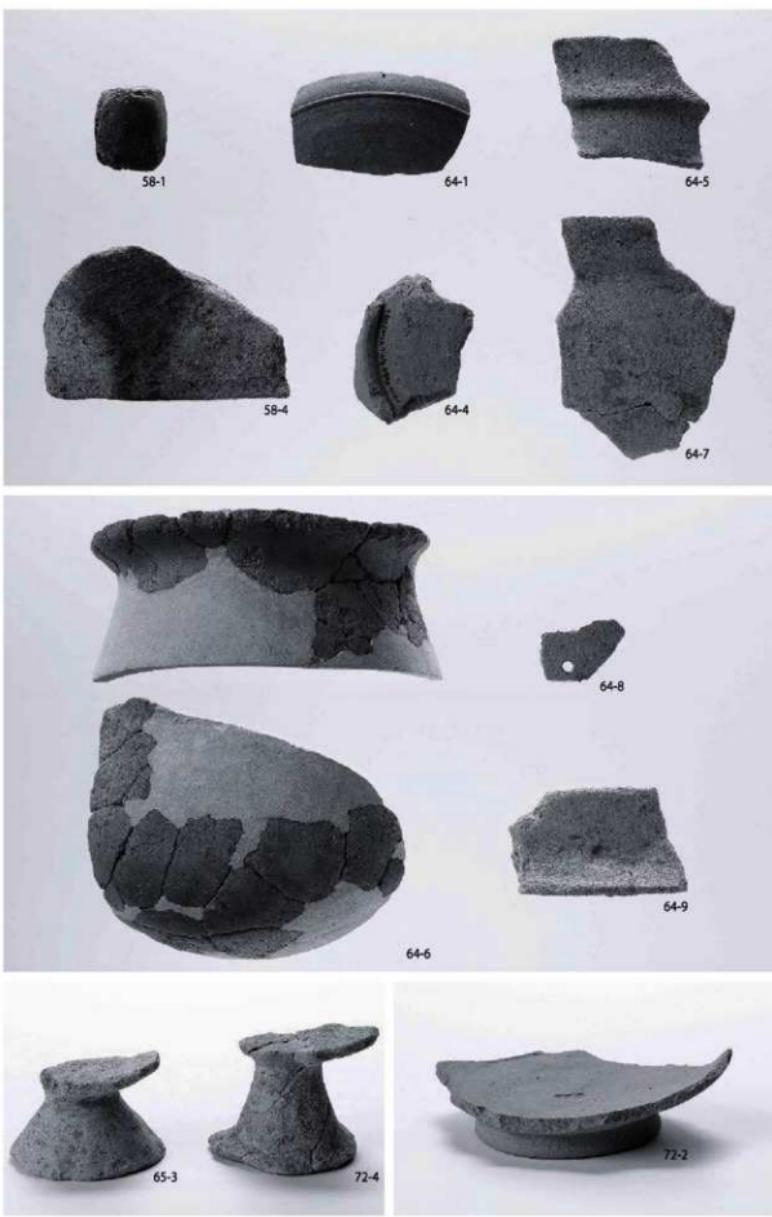


九景川遺跡V区出土遺物（7）

図版 42 九景川遺跡

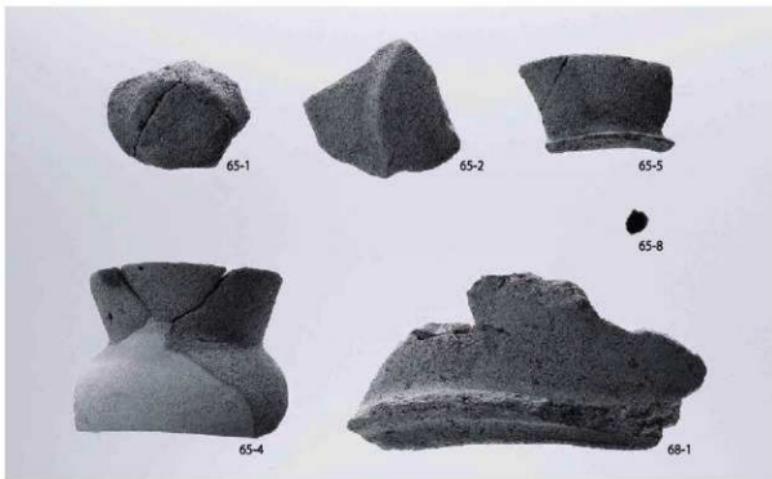


九景川遺跡V区出土遺物（8）

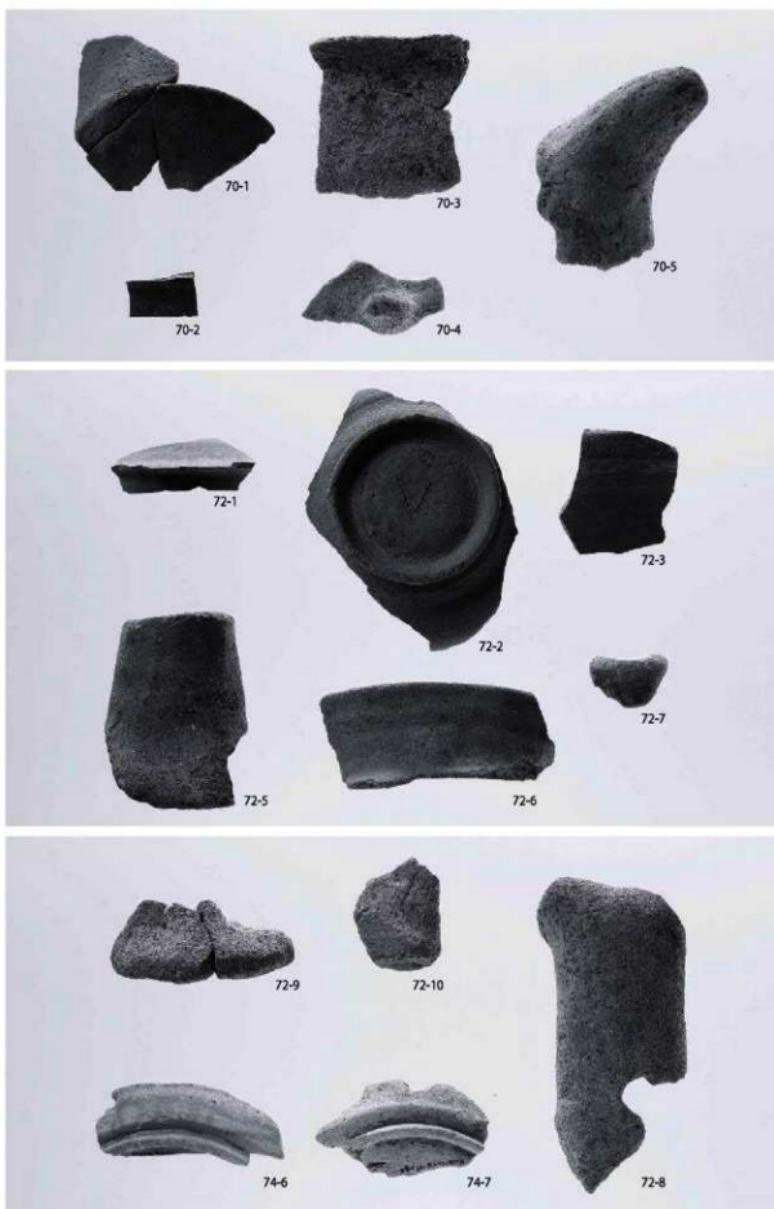


九景川遺跡 V区出土遺物（9）

図版 44 九景川遺跡

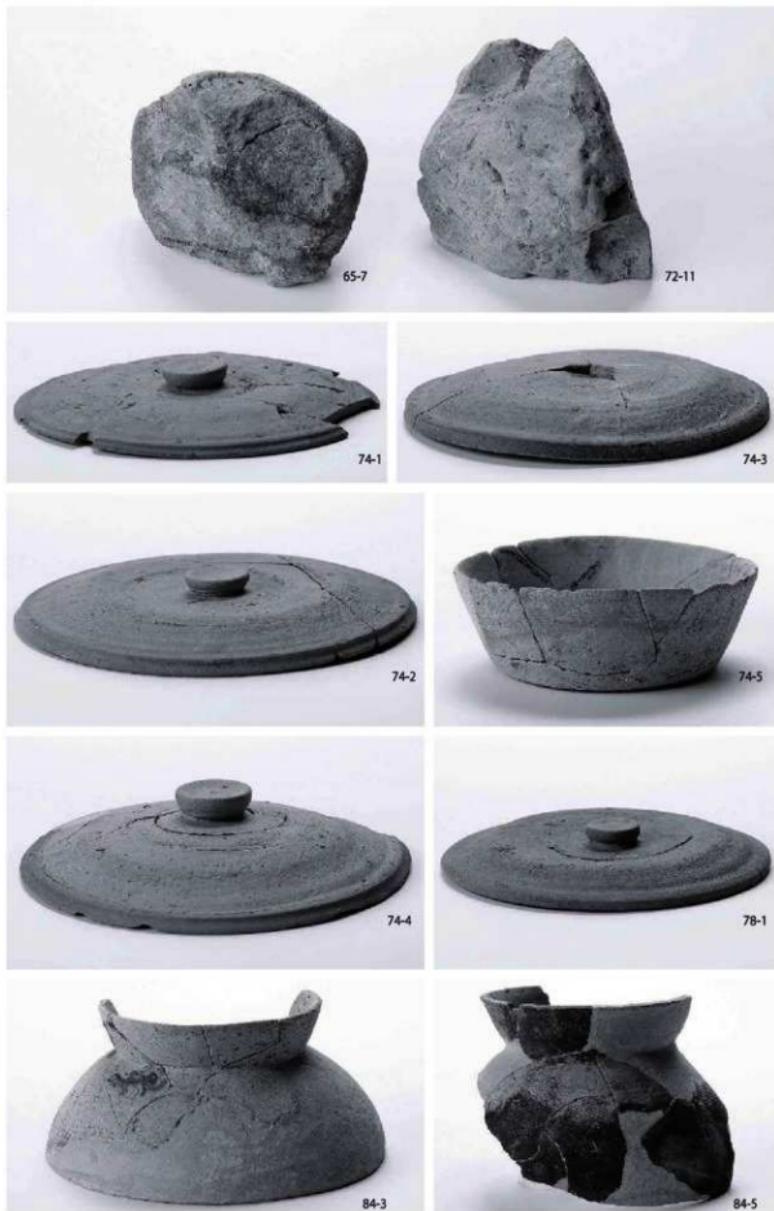


九景川遺跡V区出土遺物 (10)

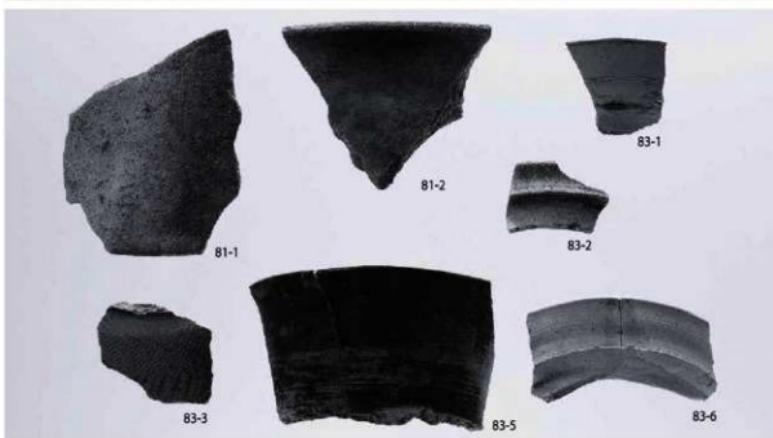
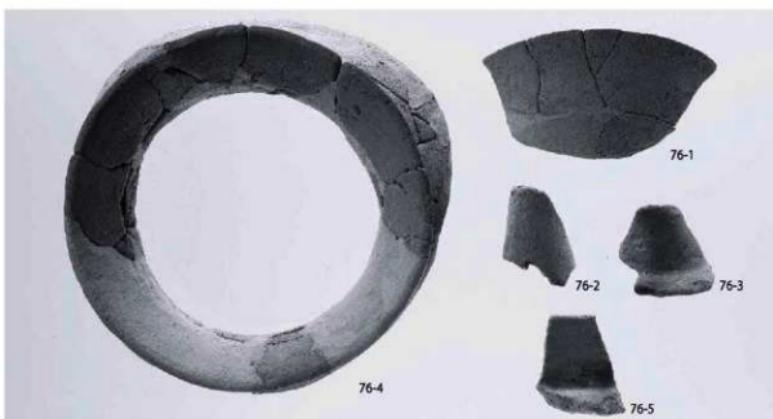


九景川遺跡 V区出土遺物 (11)

図版 46 九景川遺跡

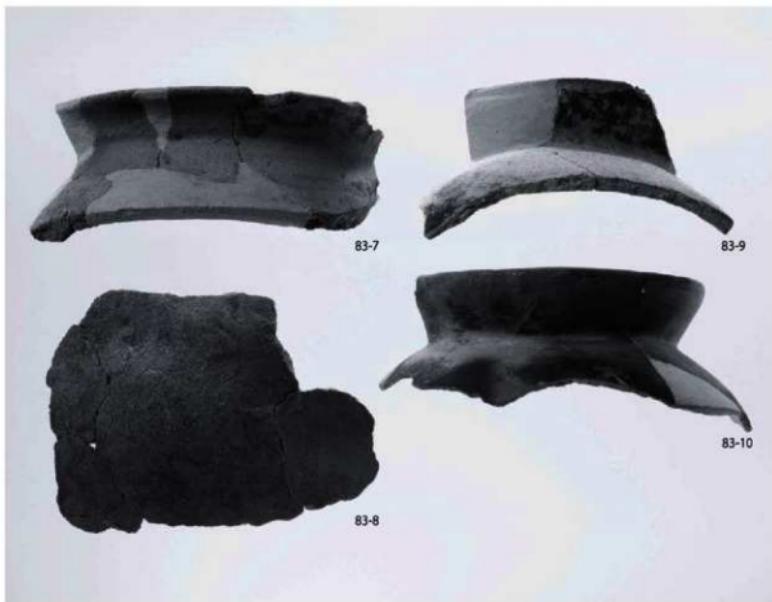


九景川遺跡V区出土遺物 (12)

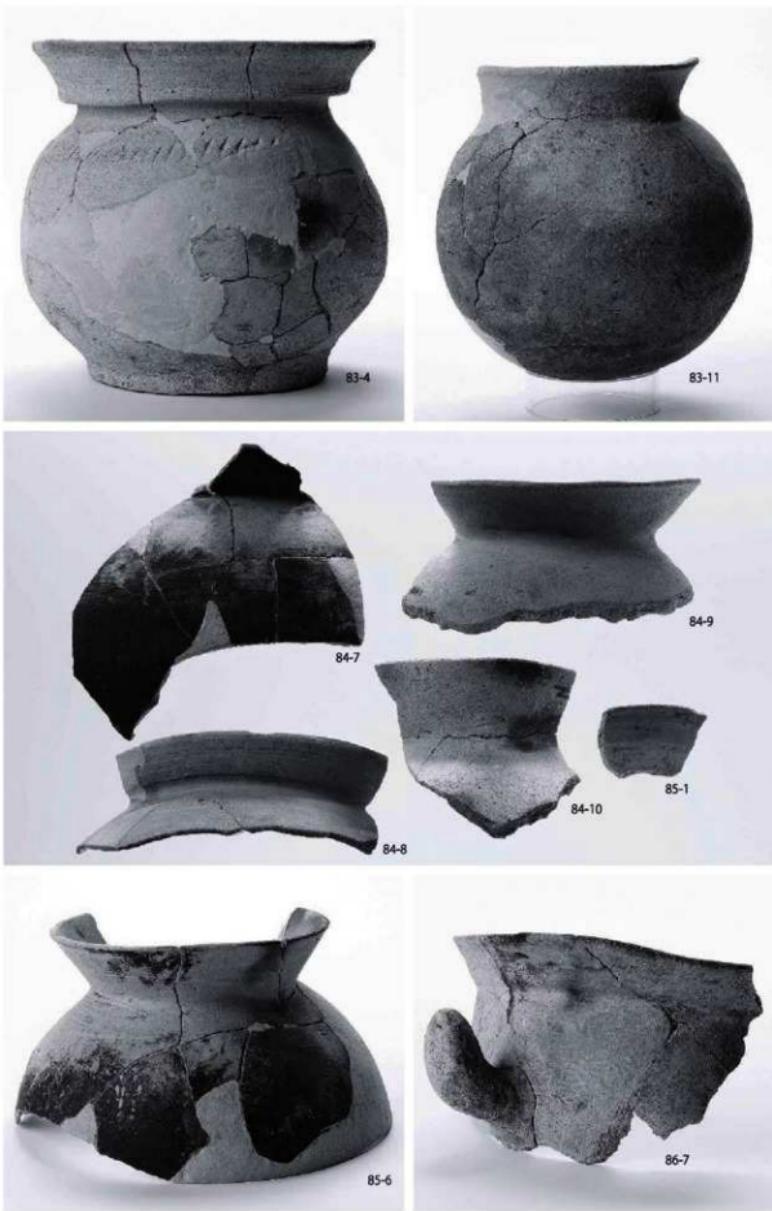


九景川遺跡V区出土遺物（13）

図版 48 九景川遺跡

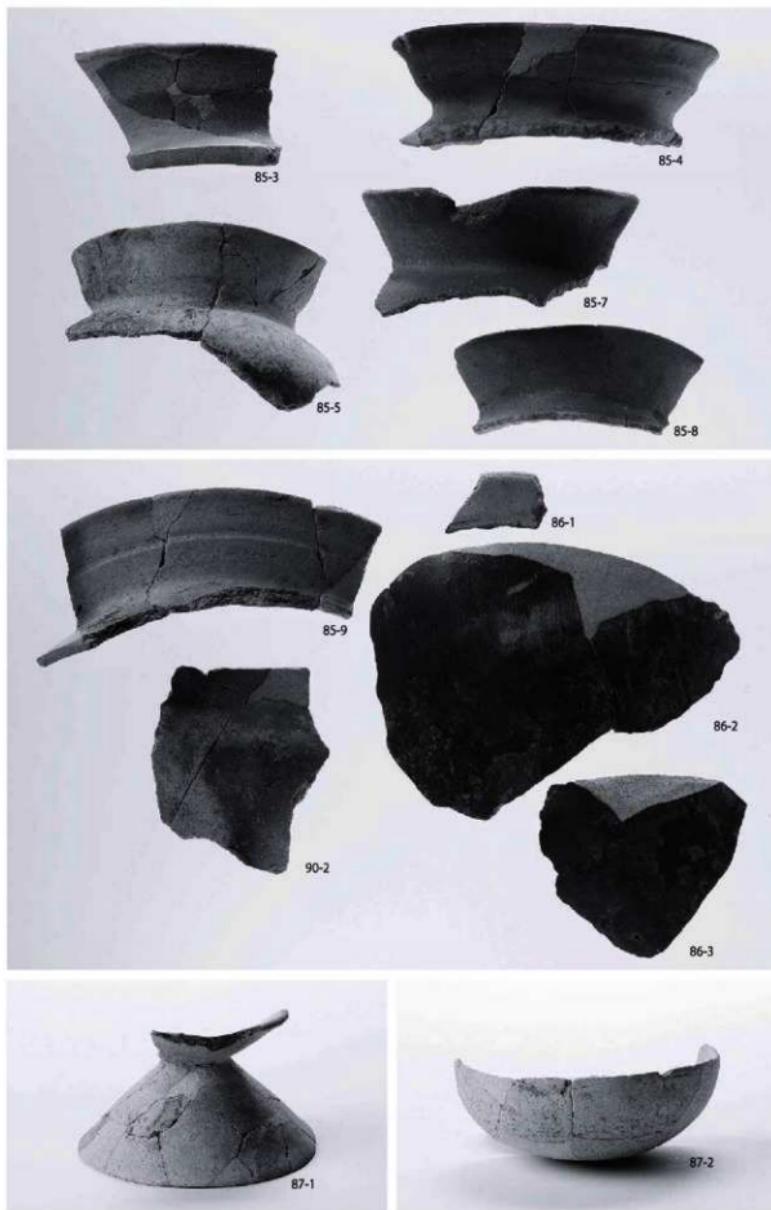


九景川遺跡V区出土遺物 (14)

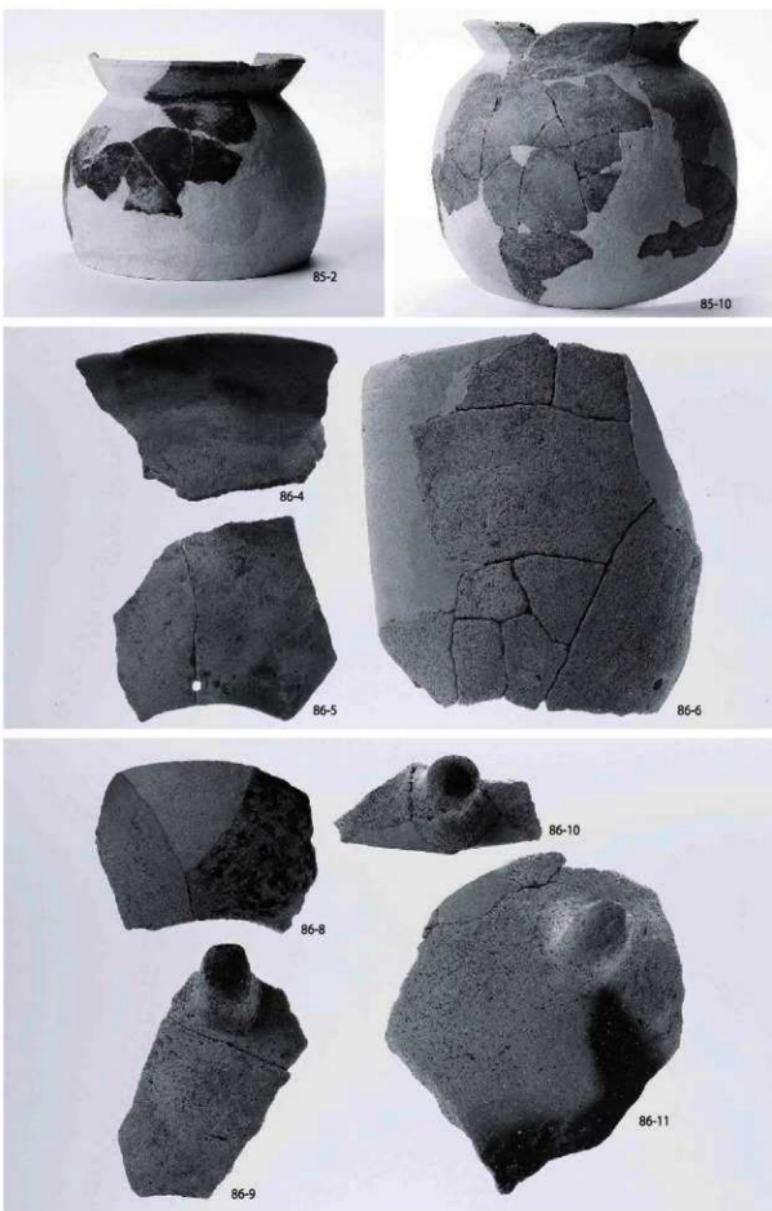


九景川遺跡V区出土遺物（15）

図版 50 九景川遺跡

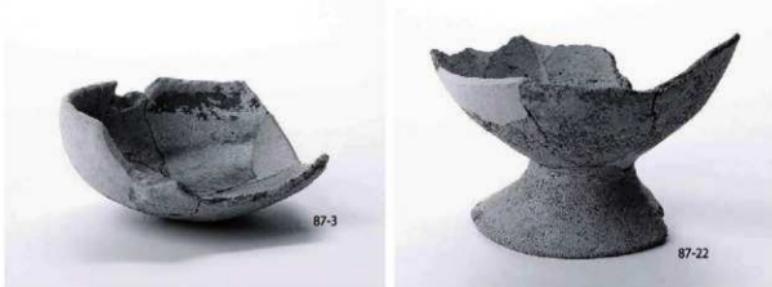
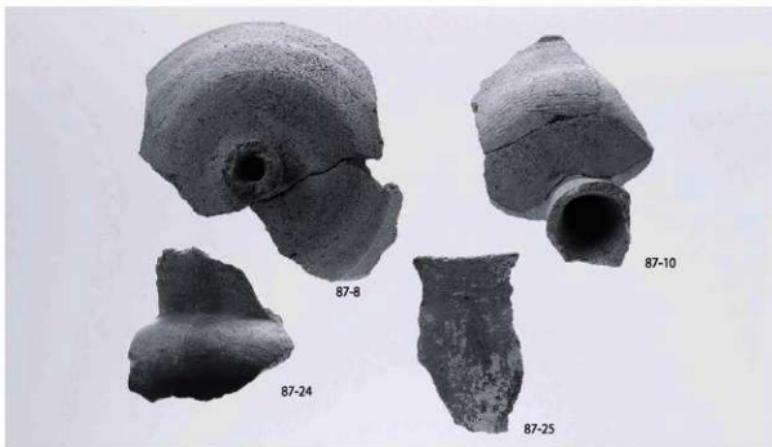
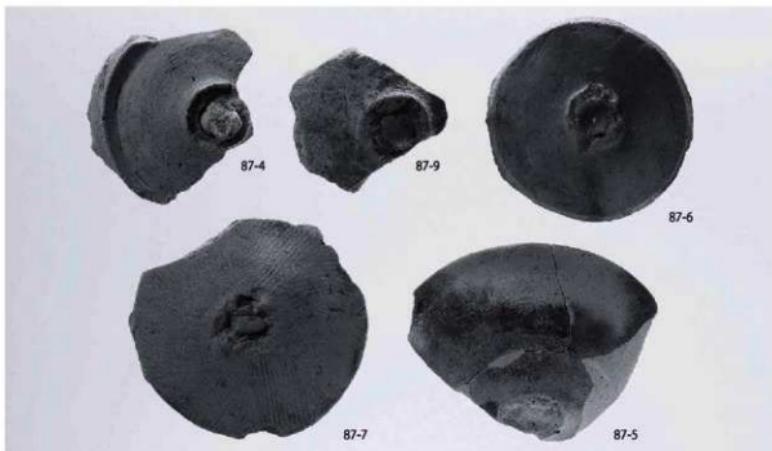


九景川遺跡V区出土遺物 (16)



九景川遺跡V区出土遺物（17）

図版 52 九景川遺跡



九景川遺跡V区出土遺物 (18)

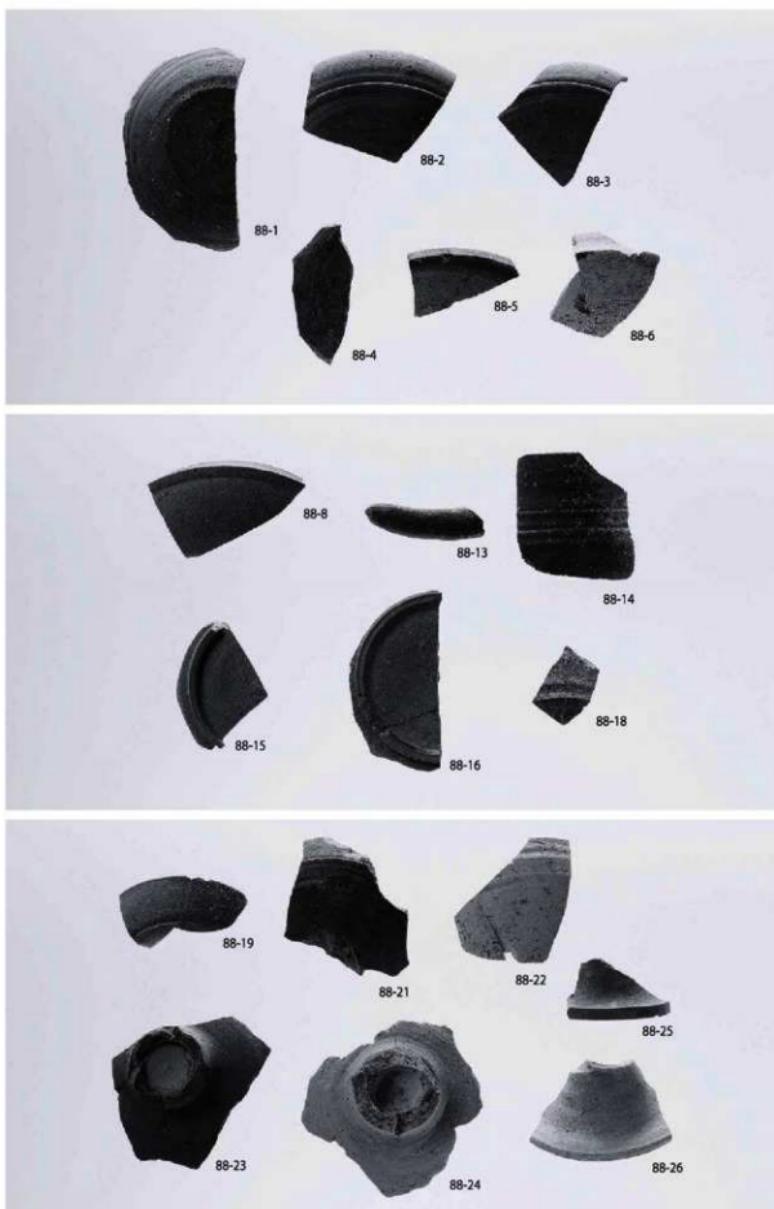


九景川遺跡 V区出土遺物 (19)

図版 54 九景川遺跡

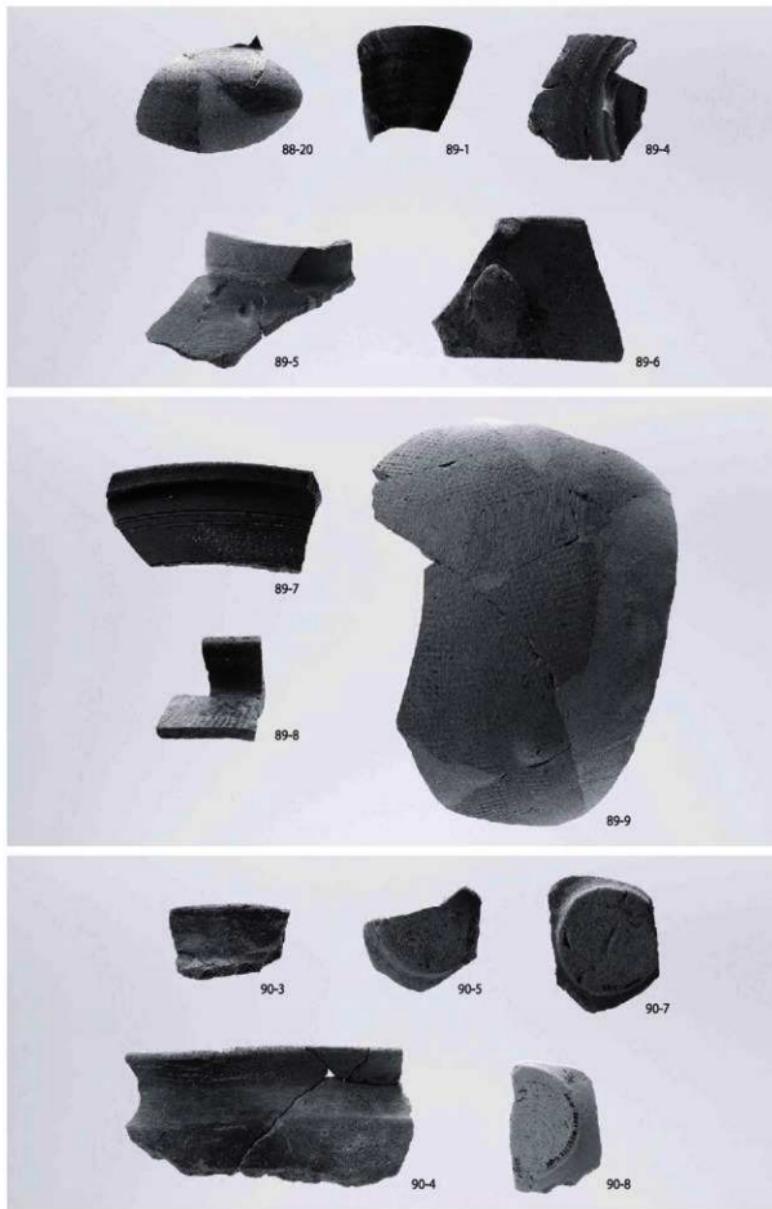


九景川遺跡V区出土遺物 (20)



九景川遺跡 V区出土遺物 (21)

図版 56 九景川遺跡

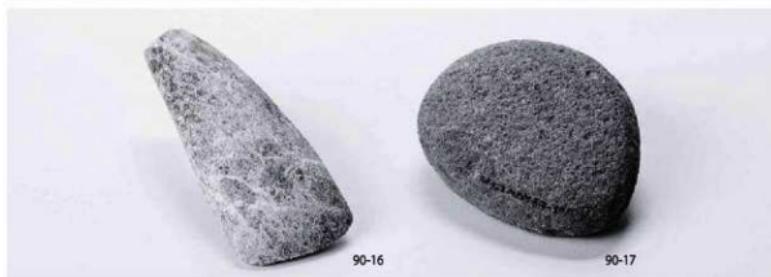
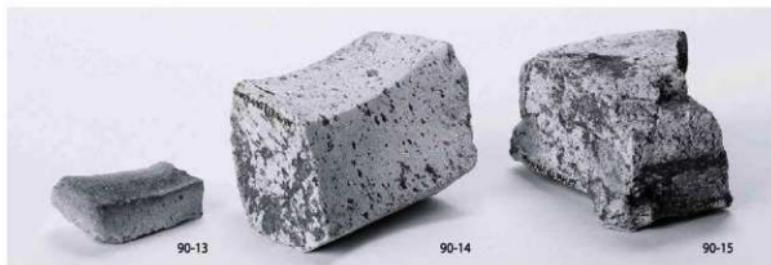


九景川遺跡V区出土遺物 (22)

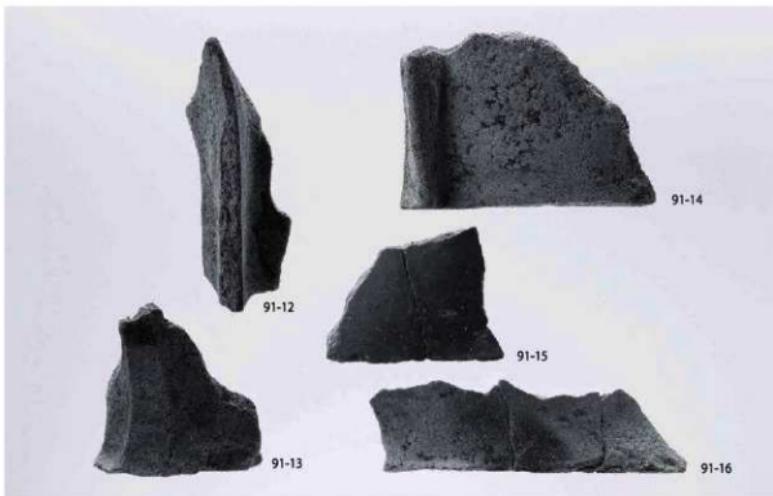
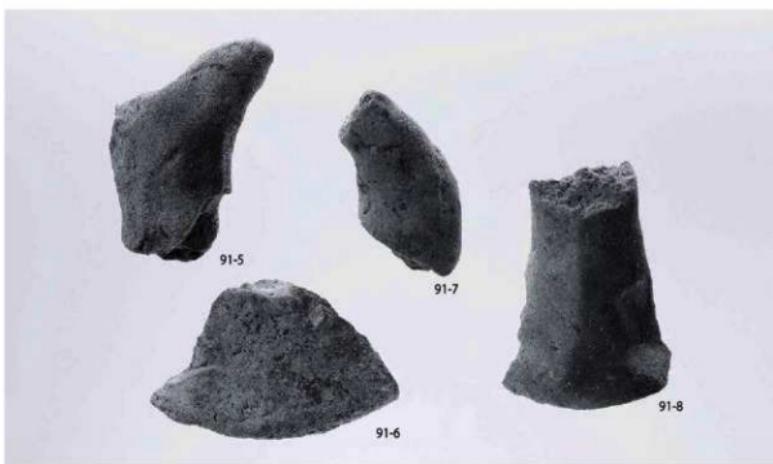


九景川遺跡 V区出土遺物 (23)

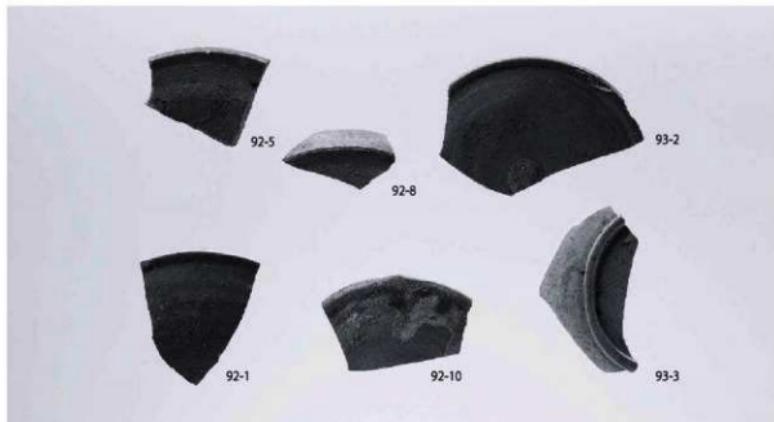
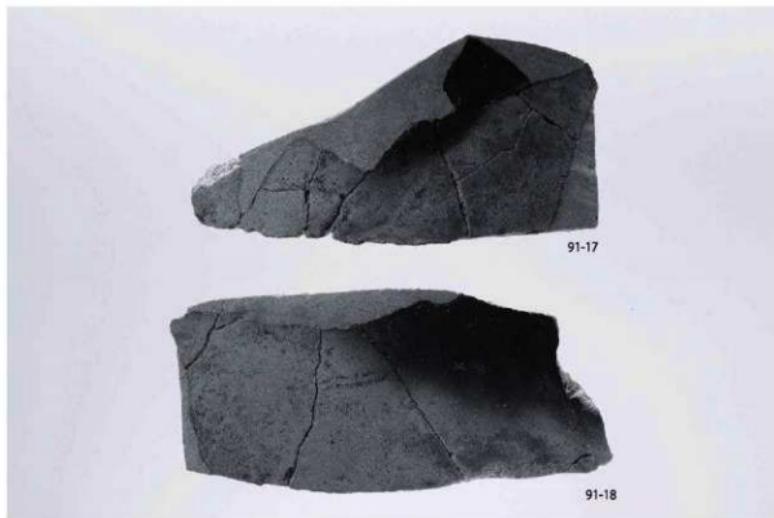
図版 58 九景川遺跡



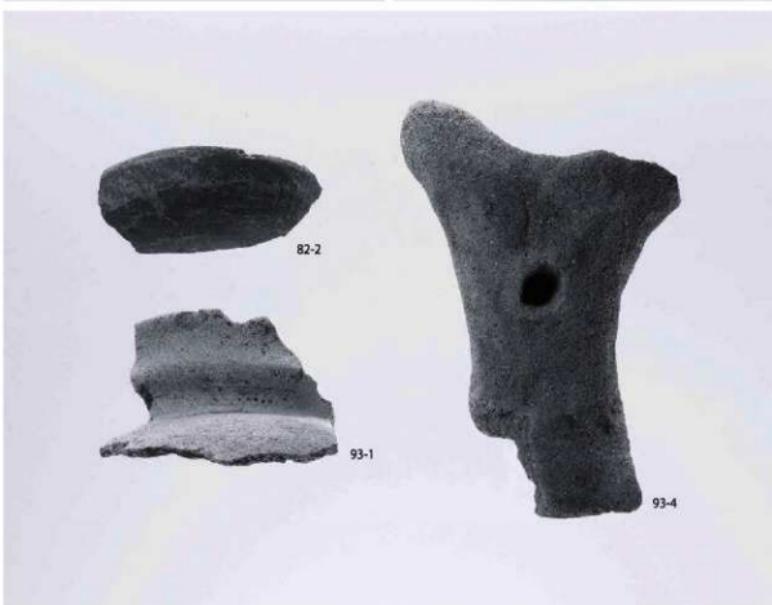
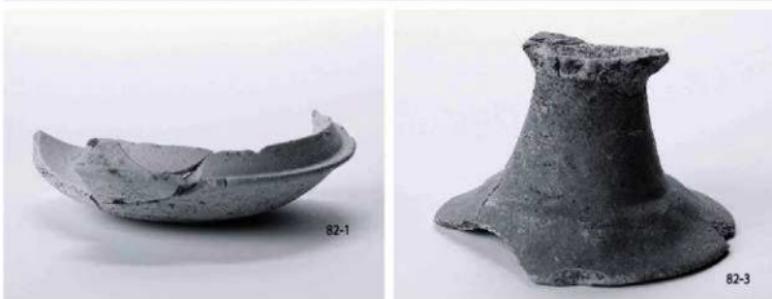
九景川遺跡V区出土遺物 (24)



九景川遺跡V区出土遺物（25）

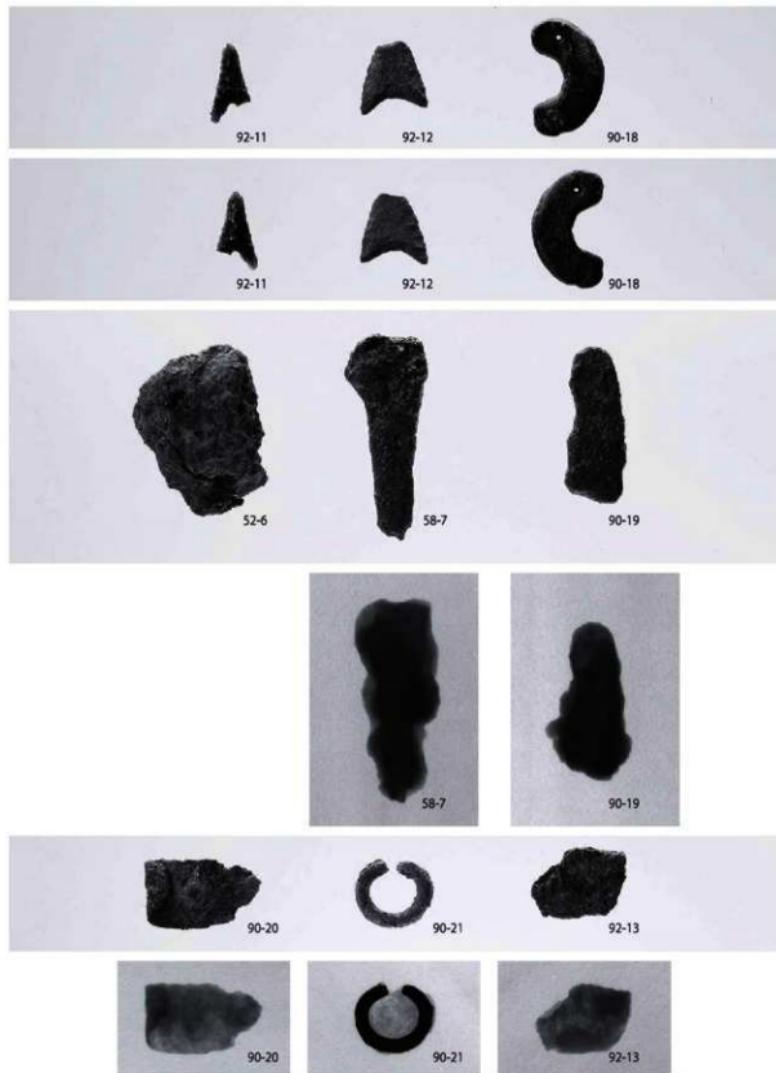


九景川遺跡V区出土遺物 (26)



九景川遺跡V区出土遺物（27）

図版 62 九景川遺跡



九景川遺跡V区出土遺物 (28)

## 報 告 書 抄 錄

## 印刷仕様

紙 質 表 紙 レザック四六判 175kg  
本 文 上質紙A判 57.5kg  
写真版 上質コート紙A判 70.5kg  
D T P Windows 7  
Adobe InDesignCS5.5 PhotoShopCS5.5 IllustratorCS5.5  
画像原稿 階調画像線数 175線(AMスクリーン)

### 玉泉寺裏遺跡（VI区・VII区）

### 九景川遺跡（V区）

一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書2

発 行 2017（平成 29）年 6 月

発行者 島根県教育委員会

編 集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒 690-0131 島根県松江市打出町 33 番地

電話 0852-36-8608

印 刷 有限会社 松本印刷







